

『源平盛衰記』における物語叙述の方法

井上 翠

『源平盛衰記』における物語叙述の方法

井上 翠

【目次】

はじめに	……1
第一部 『源平盛衰記』研究史	……5
戦前編	……5
戦後編	……13
第二部 『源平盛衰記』における物語叙述の方法	……28
第一章 西光の機能	……28
第二章 重複記事の分析	……58
第三章 巴の物語	……72
第四章 敦盛最期譚の可能性	……85
第五章 小宰相の入水	……100
第三部 『源平盛衰記』教材化論	……114
第一章 「大場早馬」から「勾踐夫差」への展開	……114
第二章 「橋合戦」から「季札劔」への展開	……127
おわりに	……137
初出一覧	……141

『源平盛衰記』における物語叙述の方法

井上 翠

はじめに

本論は『源平盛衰記』における物語叙述の方法と物語としての特質およびその教材化について論じたものである。多彩な『平家物語』諸本のなかで、『平家物語』の名を持たず、他本にはない多くの叙述を有して四十八巻に及ぶ『源平盛衰記』もまた、今日では『平家物語』の異本の一つとして位置づけられている。今日に至るまで、『源平盛衰記』に関してさまざまな角度から研究が進められ、他本とは異なる『源平盛衰記』の特長が指摘されている。しかし、国語教科書に使用されることも多い覚一本『平家物語』などに比べて、その物語の拡散性・分裂性が指摘されており、「諸本分類上、この盛衰記も『平家物語』の一形態に数えられはするものの、物語精神に関する限り、盛衰記はすでに物語から逸脱の歩みを踏み出したと評すべきであろう。盛衰記の評価には、物語評とは違った視座を必要とするものらしい」と評される(1)など、文学的评价についてはいまだ十分になされていない。本論では、『源平盛衰記』において物語がどのように展開してゆくかを分析し、『源平盛衰記』の物語叙述の方法と物語としての特質を考察するとともに、さまざまな資料を取り込んでいる『源平盛衰記』の特長を用いることによって、古文の授業から多岐にわたって展開することができる教材としての『源平盛衰記』の可能性を考察する。

第一部「『源平盛衰記』研究史」は、『源平盛衰記』に関する論考を戦前編と戦後編としてそれぞれ成立論と作品論に大別して捉えるものである。『源平盛衰記』は、『平家物語』とともに、近世史書においては史料として用いられていたが、その史料的価値に疑問が呈され、明治時代の半ば頃から文学として扱われることとなった。『平家物語』諸本の系統が考察され、『源平盛衰記』は延慶本『平家物語』や長門本『平家物語』とともに論じられるが、『平家物語』の叙事詩としての評価に比べて、『源平盛衰記』の文学的価値は低いものとされる傾向にある。一方で、知識的・学術的、あるいは注釈的・辞典的な性質や、殺伐・卑俗な面があるといった今日的な『源平盛衰記』評が戦前にもすでに見受けられる。戦後には、『源平盛衰記』の成立時期や背景について、他作品との関係や、成立圏などから研究が進められるとともに、『源平盛衰記』独自の叙述姿勢や、『平家物語』の世界とは異なる『源平盛衰記』の世界が指摘される。

文学となった後も『源平盛衰記』の研究は深められてきたが、『源平盛衰記』は知識豊富ではあるものの繁雑・冗長であり、整合性や求心性を欠くといった評言が散見され、また、他の諸本にはない多くの叙述を有する『源平盛衰記』は、故事説話など所謂傍系の叙述に注目してその成立や特徴が論じられることも多い。一方、本論第二部では、平家一門の栄枯盛衰や源平の争乱およびそれに関連した出来事を対象として『源平盛衰記』の物語叙述の方法と物語としての特質を考察する。

第二部第一章「西光の機能」は、『源平盛衰記』において他本とは異なる位置づけとなっている

る清水寺炎上や殿下乗合などの出来事について、西光に着目して読み解くものである。『平家物語』において、「平家の悪行のはじめ」とされるのは殿下乗合の報復として平清盛が藤原基房を襲撃させた出来事である。一方、『源平盛衰記』においては、殿下乗合は「然べき運の傾くべき符にや」として描き出され、また、その報復としての襲撃は「平家の悪行のはじめ」とされていない。『源平盛衰記』における治承三年政変までのこれらの出来事について、西光を結び目として捉えてゆく。さらに、『源平盛衰記』では、源行綱による鹿ヶ谷謀議の密告や殿下乗合、治承三年政変に関連する描写のなかに、『愚管抄』や『玉葉』など史実に近い箇所があることについて考察してゆく。

第二部第二章「重複記事の分析」は、『源平盛衰記』における行綱の密告、大場景親の早馬、一の谷の城戸口へ向かう平山季重の動向に見られる叙述の繰り返しに着目するものである。『源平盛衰記』を含め『平家物語』諸本に共通して、鹿ヶ谷謀議における酒宴の様子は詳細に描かれているが、『源平盛衰記』では、行綱の密告においても酒宴の様子が具体的に述べられている。また、大場早馬は『源平盛衰記』における重複記事として古くから指摘されている。さらに、『源平盛衰記』を含め『平家物語』諸本に共通して、一の谷の城戸口に至るまでの経緯を季重が語るが、『源平盛衰記』では、それに先立って季重の動向が具体的に描かれ、同内容が繰り返されている。これらの重複記事を分析し、『源平盛衰記』の物語叙述の方法を考察する。

第二部第三章「巴の物語」は、「木曾最期」における巴の物語の分析を通して、『源平盛衰記』の物語としての特質の一端を説明しようとするものである。「木曾最期」における巴について、『源平盛衰記』は他本にはない逸話を多く有している。本章では、『源平盛衰記』において巴が木曾義仲の「乳母子」で「妾」とされる点に着目して巴の物語を分析し、「木曾殿の乳母子」と名乗る巴が内部から物語を相対化し得ることを論じる。また、『源平盛衰記』との関係が指摘される能「巴」が映すものについて考察する。

第二部第四章「敦盛最期譚の可能性」は、敦盛最期譚の分析を通して、『源平盛衰記』の物語としての特質のさらなる説明を目指すものである。『平家物語』には「父子の物語」という一面があり、敦盛最期譚はいわばその変奏として、擬似的な「父子の物語」に数えられる。『源平盛衰記』の敦盛最期譚もまた「父子の物語」を描き出そうとするが、ある一点から「父子の物語」を逸脱する。さらに、『源平盛衰記』は、敦盛最期譚そのものを相対化する物語をも有していることを論じる。

第二部第五章「小宰相の入水」は、小宰相から平通盛に送られた歌と、乳母子の女房に応答しない小宰相の姿に着目するものである。入水を引き留めようとする乳母子の女房に対して小宰相が言葉を返さないのは『源平盛衰記』のみである。人物間のやりとりにおける齟齬は巴の物語や敦盛最期譚にも見られるものであり、そこから『源平盛衰記』が小宰相の入水をどのように描き出しているかを捉えてゆく。

第三部『源平盛衰記』教材化論』は、『源平盛衰記』の教材としての可能性を考察するものである。さまざまな資料を取り込んでいる『源平盛衰記』は、他の諸本にはない多くの故事説話を有しており、四十八巻に及ぶ膨大な叙述の要因となっている。第三部では、『源平盛衰記』における故事説話を用いることによって、古文の授業から漢文の授業へとつなげてゆく古文・漢文複合

教材の可能性を考察してゆく。

第三部第一章「大場早馬」から「勾踐夫差」への展開」は、『源平盛衰記』巻第十七「大場早馬」の後に見られる会稽山の故事説話「勾踐夫差」を用いて古文の授業から漢文の授業へとつなげてゆく国語の授業の展開について考察するものである。なお、『源平盛衰記』では、巻第二において会稽山の故事説話が見られ、それらを比較することによって、学習者は『源平盛衰記』という一作品のなかで同じ故事説話がどのように用いられているかを考えることができる。この会稽山の故事説話は、国語教科書に漢文の教材として掲載されている「臥薪嘗胆」と密接な関連があり、古文の授業から漢文の授業へとつなげてゆくことができるものとなっている。さらに、「大場早馬」から国語教科書に漢文の教材として掲載されている「荊軻伝」へと展開することもできることを論じる。

第三部第二章「橋合戦」から「季札劔」への展開」は、国語教科書に古文の教材として掲載されることのある『平家物語』『橋合戦』から『源平盛衰記』に見られる中国故事説話「季札劔」を用いて漢文の授業へとつなげてゆく国語の授業の展開について考察するものである。この故事説話は、国語教科書に漢文の教材として掲載されている「季札挂劔」と密接な関連があり、古文の授業から漢文の授業へとつなげてゆくことができるものとなっている。高等学校学習指導要領（平成30年告示）の第2章第1節国語において、第2款各科目の第2言語文化の2内容（2）アには、「我が国の言語文化の特質や我が国の文化と外国の文化との関係について理解すること。」とあり、また、古典の教材として国語教科書に掲載されることの多い『平家物語』の異本の一つである『源平盛衰記』という一作品のなかで中国故事説話を捉えることによって、国語の授業において古文とともに漢文を学習する意義について学習者の理解を深めることにも役立つであろう。

【注】

(1) 山下宏明 『平家物語』合戦談の叙法』『文學』第五十四巻第九号、一九八六・九。

本論における『平家物語』諸本の引用本文は以下に拠る。

- ・『源平盛衰記』―『源平盛衰記 慶長古活字版 第一冊』勉誠社、一九七七・一〇、『源平盛衰記 慶長古活字版 第二冊』勉誠社、一九七八・三、『源平盛衰記慶長古活字版 第三冊』勉誠社、一九七八・五、『源平盛衰記 慶長古活字版 第四冊』勉誠社、一九七八・六、『源平盛衰記 慶長古活字版 第五冊』勉誠社、一九七八・七。句読点・濁点等は私に付す。
- ・延慶本『平家物語』―『延慶本平家物語 本文篇上・下』勉誠社、一九九〇・六。
- ・長門本『平家物語』―『長門本 平家物語 一』勉誠出版、二〇〇四・六、『長門本 平家物語 四』勉誠出版、二〇〇六・六。
- ・覚一本『平家物語』―『平家物語(一)』岩波書店、一九九九・七、『平家物語(二)』岩波書店、一九九九・八、『平家物語(三)』岩波書店、一九九九・九、『平家物語(四)』岩波書店、一九九九・十。
- ・中院本『平家物語』―『校訂 中院本平家物語(下)』三弥井書店、二〇一一・三。
- ・『源平闘諍録』―『源平闘諍録(下)』講談社、二〇〇〇・三。
- ・京師本『平家物語』―『三弥井古典文庫 平家物語(下)』三弥井書店、二〇〇〇・四。
- ・城方本『平家物語』―『平家物語附承久記』國民文庫刊行會、一九一一・五。句読点等は私に付す。

第一部 『源平盛衰記』 研究史

一、はじめに

『平家物語』諸本は多彩である。『平家物語』の名を持たず、他の諸本にはない多くの叙述を有して四十八巻に及ぶ『源平盛衰記』もまた、今日では『平家物語』の異本の一つとして位置づけられている。成立から内容に至るまでその研究が深まりながら、なお検討すべき点の多い『源平盛衰記』は、どのように論じられてきたのであろうか。

星野恒氏は、明治二十三年、「平家物語源平盛衰記考」において、『平家物語』を「正面ノ史料ニ充ツベキ者ニ非ズ」と指摘した。そして『源平盛衰記』を、『平家物語』の「重修」とする(1)。さらに、明治三十一年には「平家物語源平盛衰記は誤謬多し」と題し、『源平盛衰記』は「潤飾附會」が過ぎることなどを指摘した上で、「従前之を信用して、専修史の料と爲し、朝紳将府の日録文書と混載せしゆへ、種々の訛舛と牴牾とを免れざるなり」と論じている(2)。『源平盛衰記』は、『平家物語』とともに、近世史書においては史料として用いられていたが、その史料価値に疑問が呈されたのであった。一方、芳賀矢一氏は、「源平盛衰記と太平記と」において、『源平盛衰記』は「一の史料たらんよりは寧ろ一の文學たるべき性質のもの」であり、「其短所たる史料の資格を失ふとも其長所たる文學の趣味は之か爲に益々發揮せられん」と述べた(3)。史料ではなく文學として、その意義を見出そうとしたのである。このようにして、『源平盛衰記』は、明治時代の半ば頃から文學として扱われることとなった。

二、戦前編

(一) 明治期から昭和戦前期における成立論

『源平盛衰記』の成立が論じられるとき、年代や作者と並んでその論点とされるのは、『平家物語』との関係である。先述のとおり、『源平盛衰記』を『平家物語』の「重修」とした星野恒氏は、『源平盛衰記』と角倉本『平家物語』(4)・長門本『平家物語』との関連に言及し、四十八巻という巻数は角倉本の冊数と同じであると指摘する(5)。また、明治三十一年の論考では、『源平盛衰記』を「平家最後の増訂本」としている(6)。

明治二十八年、小中村清矩氏「國史學の葉」は、『平家物語』と比較して、『源平盛衰記』は記事が多く、漢語を交えた文体であり、従来の物語体とは「品異なる」ため、『源平盛衰記』は『平家物語』より後に出来たものと見る(7)。そしてその成立を、「事實を考へんとして」、謡い物に作られた『平家物語』のみでは満足できない人々が多かったためと捉えている。明治二十九年の海野詮教氏「平語」「盛衰記」の著者」もまた、『平家物語』を『源平盛衰記』に先立つものとしている(8)。その理由として、『源平盛衰記』は、文体が平安朝から遠ざかり、室町以後のものに近いとされていること、章段名が長々しく、吟味して付けられたようであること、『平家物語』が一二言で記す事柄を『源平盛衰記』は一段落として書き加えていること、さらに、『平家物語』の灌頂巻と『源平盛衰記』の巻第四十八に着目して、『平家物語』の灌頂巻は後に追加したものと考えられ、『源平盛衰記』はこれを巻数に合併していることなどを挙げる。『平家物語』と『源平盛衰記』の

成立時期については、「一は慈鎮和尚の頃一は北條氏の末葉頃」と見ている。

雑誌『史學界』は、明治三十二年に『源平盛衰記』の解題を載せている(9)。そのなかで、『源平盛衰記』の性質を、平氏の盛衰と源氏が平氏に代わる有様を描いたものとし、『平家物語』を基に「東鑑」(10)によって源氏のことを入れて『源平盛衰記』としたと述べている。作者および成立時期については、『醍醐雜抄』(11)をふまえて、葉室時長が作ったものに源光行、吉田資経などが書き加えたものであり、承久の乱後、嘉祿の頃に出来たものと見る。なお、その成立を、「承久の大亂ありて(中略)世は平家なる北條の思ひの儘となりぬれば之を寓して」作つたものであり、「平相國の暴戾に由て如何に其子孫が終を全ふするを得ざりしか、壇浦に平家の一門國母、皇帝共に自裁ありしも承久には四帝の蒙塵公卿百司の降参なせしかば此等を見て大に感ずる所ありて」著したものと捉え、それゆえに曲筆するところが多く、事実でないことが多いとする。さらに、『源平盛衰記』の内容について、後に事実と顛れたことによつて前の事柄を想像して描く場合があると指摘している。赤堀又次郎氏もまた、明治三十七年の『平家物語選釋』総論において、『源平盛衰記』を「かの光行(12)などの筆にて、原作者の平家物語(13)をなほ補ひて、源頼朝擧兵の事蹟、和漢の故事などを加へたる中にも、源氏のことを補ひたるを以て、平家物語とのみ云ひては事たらねば源平盛衰記と改め題したる」と捉える(14)。その上で、平氏については衰えてゆく姿を詳しく描く一方、源氏については盛んになる姿のみを描き、実朝に至つて滅ぶことを載せていないのは、「鎌倉をはぐかりてなるべし」と見ている。また、巻第四十八「女院六道」に「後鳥羽院共名附奉る」という一文があることを指摘して、後嵯峨天皇即位後に後鳥羽院と改めたため、『源平盛衰記』は後嵯峨天皇の御代より後に出来たとする(15)。

星野氏が『源平盛衰記』を「平家最後の増訂本」とするのをはじめ、『平家物語』と『源平盛衰記』の先後については、『源平盛衰記』が『平家物語』の後とされている。文体や源氏に関する記事、巻第四十八の叙述などから『源平盛衰記』成立の背景が考察される一方で、『平家物語』諸本への言及については、星野氏が角倉本(延慶本)『平家物語』・長門本『平家物語』との関連をわずかに指摘するにとどまっている。諸本研究のなかで『源平盛衰記』を捉えたのは、山田孝雄氏『平家物語考』であった。

明治四十四年、山田孝雄氏は、『平家物語考』を著し、『平家物語』諸本を灌頂巻の有無によつて分類して解題を施している(16)。そのなかで、『源平盛衰記』は「第一門 灌頂巻を立てたるもの」に分類され、「古活字本」「片假名整版本」「繪入版本」「黒川古寫本」「御府古寫本」が解説、比較されている(17)。山田氏は、巻第四十八の詞章に前の数巻のなかの詞章と重複するものがあり、灌頂巻に該当する箇所にもそれらが見られることを指摘する。また、「黒川古寫本」巻第四十七までには各巻首に目次が置かれ、伊呂波をもつて「源平盛衰記某巻」と名付けられているが、巻第四十八にはこれらがなかったため、巻第四十七で全部終結するものであり、巻第四十八は、灌頂巻の文字こそないが、別巻、編外として、源平盛衰記本文以外として別に置いたものと見る。そしてこのように灌頂巻を特立して重複した記事を載せるのは、『源平盛衰記』の成立が「既に灌頂巻を特立せしむることは一種の傳説的權威を生じて動かすべからぬものたることとなりたる時代以後」(18)であるためと論じている。したがって『源平盛衰記』は、『平家物語』諸本や記録類によつて集成増補したものでありながら、全体の組織としては「一方本に準據したるもの」と

している(19)。また、山田氏は、流布本『平家物語』・中院本『平家物語』・長門本『平家物語』・延慶本『平家物語』と比較して、「傍系的説話」の数が『源平盛衰記』において最も増加していることを指摘する。その上で、流布本『平家物語』のようなものを主とし、これを増補した長門本『平家物語』と、八坂本『平家物語』のようなものを主とし、これを増補した延慶本『平家物語』の二流を、集成して取捨し、さらに増補を試みたものが『源平盛衰記』であるとす。なお、『源平盛衰記』では、主に源氏に関する事項について、「本系的説話」もまた増加しているが、これは延慶本『平家物語』や長門本『平家物語』にも見られる現象であり、これを『源平盛衰記』の特色とすることはできないと述べている。さらに、『源平盛衰記』の名称に最も適しているのは延慶本『平家物語』であるが、なお『平家物語』と称することから、『源平盛衰記』という名称は「諸平家物語異本中最も新しきもの」であり、室町時代の間初めて作られたものと見ている。広く『平家物語』諸本を研究した『平家物語考』は、大きな影響力を持つものであった。

五十嵐力氏は、明治四十五年の『新國文學史』において、『盛衰記』がまづ成つて『平家』は後に出たもの」と述べている(20)。『源平盛衰記』は史料が豊富であることを旨とし、広く網羅したものであるのに対して、『平家物語』は楽器にかけて歌う必要から非文学的な材料を捨て、文学的な部分を潤色したものであるとし、『源平盛衰記』は史料具備の目的で書かれたものと見ている。しかし、大正九年の「平家物語の研究」においては、『平家物語』の巻数について、「次第に材料を追加して(中略)遂に『盛衰記』の四十八冊となつた」としているほか、『平家物語』諸本の「文章の違ひ振」を考察して、「長門本や盛衰記が流布本の『平家』より後に出了事が明らか」と述べている(21)。すなわち『平家物語』と『源平盛衰記』の先後について、明治四十五年の『新國文學史』では『源平盛衰記』が『平家物語』の先とされていたが、大正九年の「平家物語の研究」では『源平盛衰記』が『平家物語』の後とされているのである。五十嵐氏は山田氏の研究に言及しており、このような先後に関する見解の変化は、山田氏の論考が影響を及ぼしたものと見られる。

それに対して、大正四年の藤岡作太郎氏『鎌倉室町時代文學史』は、『源平盛衰記』を編年体で事実の蒐集を主とするもの、「普通本」(22)を記事本末で文章の趣味を主とするものと捉え、「編年體より本末體は出づ」、「盛衰記の文を練つて普通本の文は成る」として、『源平盛衰記』または延慶本『平家物語』の類を先とし、「普通本」が後であることは明らかであるとする(23)。

『源平盛衰記』が先であるとする藤岡氏の論には、野村八良氏が従う一方、津田左右吉氏、尾上八郎氏、高橋貞一氏らが疑問を呈する。野村八良氏は、大正十一年、『鎌倉時代文學新論』において、藤岡氏に「適従する者なり」として、「文章上よりすれば、盛衰記の意義明白なるものを、流布本は濫に改竄して、却つて晦澁ならしめたる跡歴然」と論じている(24)。ただし精撰の著ではないため、『源平盛衰記』が『平家物語』諸本の根源とは認められないとし、『源平盛衰記』は、重複や矛盾に加えて、「記事の妄誕なるもの」も少なくないと指摘する。さらに、『源平盛衰記』は異説を最も多く載せているが、その諸説が諸説の折衷融合していないのは、後人が漸次加筆したためと見ている。なお、昭和七年の柿村重松氏「本朝文粹の文句と平家物語」もまた、『源平盛衰記』が先に成立し、それを改削潤色して『平家物語』が出来たとしている(25)。その理由として、まず、書名を挙げ、『源平盛衰記』は記録で、事実に近いものである一方、『平家物語』は小

説の類で、潤色されたものであるとする。つぎに、内容を挙げ、『源平盛衰記』は原文に近いものが多く、記事が資料の編纂のようである一方、『平家物語』は行文が一樣に平易であり、記事が取舍選択され、読物としてまとめられており、さらに、「第三の理由は（中略）文粹その他の文句の利用から観察しての事」として、「盛衰記や長門本の引句を通行本平家は改削して居る」部分や「通行本平家や長門本には盛衰記の原文に更に潤色を加へた」部分があると指摘している。

一方、津田左右吉氏は、大正四年、「平家物語と源平盛衰記との關係に就いて」において、藤岡氏の論に疑問を呈し、『平家物語』が先に出来たものであり、『源平盛衰記』はそれを増補したものとする（26）。『平家物語』では武士のことを叙する場合に彼らの間で使われていた口語が用いられることがあるが、『源平盛衰記』はそれを文語に直していると指摘して、『平家物語』の記者は実際に武人から聞いたものを記したが、『源平盛衰記』の作者はそれを机の上で書き直したと見ている。さらに、津田氏は、『源平盛衰記』の叙述について、「本筋の思想の聯絡が妨げられるほどに（中略）餘計なことを書き連ねるといふことは創作者の心理としてあるまじきこと」であり、「漢籍、特に佛書の註釋家が本文に多少關係のありさうな故事來歴を煩はしく引用説明するやうに、既にまとまってゐる書物をもとにしてそれを補ふ場合に於いて初めて爲し得らるゝこと」と述べている。そして『源平盛衰記』を「甚だしく知識的」と評し、「平家の事蹟によつて強く感動するよりは寧ろ知識的な好奇心を以て、遠き世の事として其れを視るやうになつた時代の産物」とする。『平家物語』は事蹟を伝える歴史としては不完全であり、『源平盛衰記』は知識上の満足を求めるには源氏の事蹟も記さなければならぬという要求によるものと捉えている。ただし増補は『源平盛衰記』以前にも行われ、それをさらに潤色して今の形としたときに『源平盛衰記』と命名されたとして、それを南北朝の頃と見る。「北條が仆れて足利が起つた時、源氏が平氏に代つたといふ思想が世に現はれて、源氏の名が新しい意義と勢力とを以て世人を動かした事實」から、『源平盛衰記』という書名にこのような世情の反映を看取することができる（27）。また、大正十五年には、『校註日本文學大系』の一冊として『源平盛衰記』が刊行され、その解題において、尾上八郎氏もまた藤岡氏の論に疑問を呈している（28）。尾上氏は、『源平盛衰記』は「流布本とともに、本末體のところもあり、編年體のところもあり、兩者實は雜出してゐる」ことなどを指摘し、『源平盛衰記』は流布本『平家物語』の後に成立したものとしている。

山田氏によつて『平家物語』諸本の系統が考察され、『源平盛衰記』は延慶本『平家物語』や長門本『平家物語』とともに論じられた。『平家物語』研究に大きな影響を及ぼした『平家物語考』であるが、『源平盛衰記』と『平家物語』の關係については、藤岡氏や野村氏などのように『源平盛衰記』を先とする論考も見られる。流布本『平家物語』との先後に就いて論点とされたのは、延慶本『平家物語』および長門本『平家物語』との關係であつた。

高木武氏は、昭和二年、「平家物語延慶本長門本源平盛衰記の關係について」において、延慶本『平家物語』が先出であり、これに長門本『平家物語』が続き、『源平盛衰記』は最も後出であると述べる（29）。さらに、昭和九年には、延慶本『平家物語』・長門本『平家物語』・『源平盛衰記』の關係、並びに、それらと『東関紀行』との關係を考察し、『源平盛衰記』について、その全篇の組織は一方系統本に準拠するものの、「八坂系統本・南都本・延慶本・長門本・その他の諸本を集めて補修大成した」ものであり、『平家物語』諸本のなかで最も後出であるとしている（30）。

そして昭和十三年、『日本精神と日本文學』の「鎌倉時代文學書誌」においては、『源平盛衰記』は『平家物語』の一異本でありながら、「平家の普通本とは著しく趣を異にし、今日に於ても、特殊の作品として獨立の地位を保つてゐる」として、『源平盛衰記』の項を設けて解説し、延慶本『平家物語』や長門本『平家物語』より後出としながら、その成立時期は吉野朝時代よりも以前であり、鎌倉時代の中期から末期までの間と見ている(31)。富倉二郎(富倉徳次郎)氏もまた、延慶本『平家物語』・長門本『平家物語』・『源平盛衰記』の關係を考察しており、『源平盛衰記』は、増補される前の「舊延慶本」が参照され、灌頂巻を特立した数種の増補本が増補集成されたものとする(32)。その上で、『源平盛衰記』について、「諸種の異本の集大成した増補本として、延慶本とは又別の意味で意義深き平家物語の異本」と評している。

昭和十八年、高橋貞一氏は、『平家物語諸本の研究』を著し、『平家物語』諸本を「一方流諸本」「八坂流諸本」「増補されたる諸本」の三部門に大別する(33)。そのなかで、『源平盛衰記』は「増補されたる諸本」に分類されている。高橋氏は、延慶本『平家物語』・長門本『平家物語』・『源平盛衰記』の記事内容を比較、考察して、その欠漏に注目し、『源平盛衰記』巻第四十七における「平家一族誅罰、六代最後等(巻末ノ記事)」の欠失について、ほかの記事では増補が多いにもかかわらず巻第四十七のみ記事の欠漏があるのは、さらに一卷あるべきであった可能性があるとしている。また、これらの成立過程について、「八坂流甲類本」(34)を基として増補し、南都本『平家物語』や南都異本『平家物語』などが現れ、延慶本『平家物語』と長門本『平家物語』の「共同根源」である本が現れたとする。そしてそれを基に史料を斟酌し、増補改訂されて延慶本『平家物語』・長門本『平家物語』・『源平盛衰記』の三本が現れたと述べている。なお、延慶本『平家物語』は、さらに『源平盛衰記』によって再び増補改訂されたとしている。その上で、藤岡氏の論に言及して、『平家物語』と『源平盛衰記』はいずれも編年体を基本として記事本末体のような叙事進行であり、『源平盛衰記』について、その記事の順序が『平家物語』と大きく変わらず、もとが八坂流系統本によって増補されたものであること考慮した場合、藤岡氏の論は「牽強附會の觀がある」とする。さらに、野村氏や高木氏、柿村氏の論(35)にも疑問を呈し、『平家物語』が『源平盛衰記』より後出である確実な論拠はなく、諸本の比較検討に従った場合、『源平盛衰記』の方が後出であると論じている。『源平盛衰記』の成立時期については、巻第三十七「白川關附子柴歌」の説話が『十訓抄』および『古今著聞集』に見られることを指摘して、「建長四年冬神無月十訓抄成立以後」で「延慶本の奥書たる延慶二年前」として、建長の末頃かそれに近い時代と見ている。

以上のように、明治期から昭和戦前期までの間、『源平盛衰記』の成立について、『平家物語』との關係を中心としてさまざまな論考が見られるが、『参考源平盛衰記』をはじめとして、明治期以前の諸説に拠るものも多く見受けられる。一方で、山田孝雄氏『平家物語考』および高橋貞一氏『平家物語諸本の研究』は、広く『平家物語』諸本を研究し、そのなかで『源平盛衰記』を捉えようとするものであった。また、津田左右吉氏は、『源平盛衰記』の叙述のありようからその成立を捉えているが、「本筋の思想の聯絡が妨げられるほどに(中略)餘計なことを書き連ねる」、「平家の事蹟によつて強く感動するよりは寧ろ知識的な好奇心を以て、遠き世の事として其れを視る」、「甚だしく知識的」といった評言は、『源平盛衰記』の作品論にもつながってゆくものである。

(二) 明治期から昭和戦前期における作品論

先述のとおり、史料ではなく文学として『源平盛衰記』の意義を見出そうとした芳賀矢一氏は、「盛衰記の世に出でたるは實治建長の間」(36)とした上で、『源平盛衰記』の作者はこの時代の人物であり、その文章が「勇壯活潑なる尚武の元素」と「凄凉悲哀なる佛教の元素」を含んで「富貴榮華の夢幻の如き」を叙述しているのは、この時代人心の反映であると評している(37)。文学として扱われることとなった『源平盛衰記』は、以後、どのように評価されてきたのであろうか。

明治二十八年、落合直文氏「宇治川の先陣」は、『源平盛衰記』巻第三十四「東國兵馬汰」以下を評釈する(38)。これは『源平盛衰記』本文の評釈として注目されるものである(39)が、そのなかで、落合氏は、「全篇を通讀するに、優美、凄慘、雄壯、文章の素として、一の備はらざるものなく、實に鎌倉時代の散文の精粹」と評している。さらに、「戦記文中おもしろきものおほかれど、盛衰記の右に出づるものはなからむ」と述べ、『源平盛衰記』を高く評価している。

明治四十年前後、『平家物語』は、叙事詩として評価されるようになる(40)。岩野泡鳴氏は、明治四十三年、「叙事詩としての『平家物語』」において、「佛教思想の國民的野史詩」、すなわち『平家物語』が歓迎されたため、『平家物語』に事実を補足した『源平盛衰記』も出来たとしている(41)。しかし、『源平盛衰記』は、音楽を離れた文体を継承したものであり、「専ら記實的」と評している。このように『源平盛衰記』は、『平家物語』と比較して、叙事詩としての高い評価を得られないものであった。

一方、大正四年、内海弘蔵氏は、『平家物語評釈』緒言において、『源平盛衰記』は「大仰といふべき筆づかひ」であると述べ、『源平盛衰記』の文章を、「通」や「もの知りぶり」を振り回したものと捉える(42)。ただし部分部分の叙述については恐ろしく上手いところがあり、舞台面を十分に飾り付け、それを大きく読者の前に展開するところが特に眼につくとして、「後世のことばでいへば、頗る芝居がかり」と評している。津田左右吉氏もまた部分の叙述に注目しており、大正六年、『文學に現はれたる我が國民思想の研究』において、『源平盛衰記』の興味は、「全体としての著想なり結構」よりはむしろ「一々の場面、一々の物語」にあると指摘する(43)。『源平盛衰記』は、「短篇の物語」に作者の手腕が見え、全体の筋はそのような挿話を継ぎ合わせる糸の役目を持つのみであると捉えている。また、「全體としての文學的價值は乏しい」としながらも、『源平盛衰記』に見られる豊富な物語や伝説はこの時代の思想を表すものであり、『源平盛衰記』は「畢竟國民傳説の一大寶庫」として、この点において「文學史上に重大なる位置を占め」るものと評価している。

先述のとおり、大正十五年には、『校註日本文學大系』の一冊として『源平盛衰記』が刊行され、その解題において尾上八郎氏が『源平盛衰記』の成立について論じているが、さらに尾上氏は、『源平盛衰記』に平安朝末期から起こった統一傾向、すなわち公卿道と武士道の統一・国土の統一・散文と韻文の統一・和と漢の言語的および思想的統一などを見出している(44)。そして天竺との思想的統一も見られ、それぞれの教えである神道・儒教・仏教もまた統一されているが、大部分を占めるのは仏教であるとして、『源平盛衰記』を「佛教の大説教」と評する。一方で、『平家物語』が吟誦用であるのに対して、『源平盛衰記』は読誦用であり、『平家物語』の詠歎的態度

に反して『源平盛衰記』は叙述的態度に止まっていると述べ、この点において「平家物語の下位に立つべき」ものであるとする。また、尾上氏は、『源平盛衰記』が「事に逢つては故事を教へる」ことを指摘して、特に武士道に関して力を注いでおり、武士道の教科書と見られるべきものと捉えている。このように『源平盛衰記』を武士道の教科書とする評価は、昭和戦前期に引き継がれてゆく。

高木武氏は、昭和八年、「平家物語と源平盛衰記」において、『源平盛衰記』の描写の態度について、平氏と同様に源氏に対しても同情を持ち、「王朝的優雅高尚なる趣致」だけでなく「殺伐な事、卑俗な事」などに対しても関心を持つてしているとする(45)。そして『源平盛衰記』は、むやみな増補改修によって、内容・形体ともに「雑駁不統一」に陥っており、行文についても『平家物語』ほどの迫力や情味、生気や光彩に乏しいとして、「文学作品としての價値は、よほど低」いとしながらも、増補された事柄が「諸本や諸記録を参考して集大成」したものであり、文脈や文義においては多くの破綻や矛盾が見られるにもかかわらず、「史實に合致する事項」も少なくないと指摘し、また、伝説や故事なども豊富に収めており、「一面に於ては、特殊な意義と趣とが存在」と述べている。さらに、昭和十五年の「源平盛衰記の一考察」では、『源平盛衰記』の書名のとおり、源平両氏の興亡盛衰を叙するところに重点を置き換えており、「質實剛健勇猛果敢なる男性的形相氣魄」が豊富になり、「純美なる感情の發動」と相俟って「理智的・意志的・道德的な色彩」が著しいと評している(46)。また、「傍系的事項の増補」も著しいが、これは一面においては「思想的傳說的要素を豊富にし、思索的信仰的な精神の發動を強化助成」しているとして、『源平盛衰記』は、「戦記物語作品として、特色のある一分野領有」するものであると論じている。

一方、昭和九年、玉井幸助氏「平家物語・源平盛衰記の研究」は、『源平盛衰記』が源氏に関する事柄や、本文中に引用された故事などに因んだ「枝葉にわたる記事」の増加によって、『平家物語』に見られる「文學的な中心生命」が『源平盛衰記』では破壊され、「徒らに事の詳しく材料の豊富なるを誇るもの」となっていると指摘する(47)。しかし、『源平盛衰記』は全体の結構から見れば文学として『平家物語』に及ばないとしながらも、その文には『平家物語』が及ぶことのできない長所があると述べ、それを「古拙とでも評すべきもの」、「素樸な中にどつしりと落ち着いた感じを與へる一種の姿態」としている。巻第十九「文覺頼朝對面白首」の一節はその特徴を最もよく發揮したものであり、「用語に少しの無駄がなく不足がなく、事の委曲を盡して而も冗長な嫌がなく、平板な中に力を藏し、眞面目な筆で滑稽を弄し」ているとして、「老練の文士ならでは決して書くことの出来ぬ名文」と評している。また、玉井氏は、「或本ニ云」などとして他本の説を挙げる「學究的な形態」が『源平盛衰記』を「文學的創作といふ形から引離して資料的編纂物といふ感じを起こさせる」と述べている。玉井氏のこの言は、史料の價値に疑問が呈されて文学となった後にも、記録・史料的と見なされる『源平盛衰記』の一側面を言い得たものである。

橋本實氏は、昭和十三年、「源平盛衰記の研究法」において、『源平盛衰記』の表現について、「事實の直寫と云ふよりも寧ろ、そこに顯現せる事象の眞を傳へんとする態度」によるものと見(48)。それゆえに事実とそぐわない箇所や誤謬を含むものであるが、時代の空氣を親しく呼吸した作者の息づかいが感じられ、その批判には生命のこもった時代性が感じられると評してい

る。そしてその真面目は、確実な史料としての価値にあるのではなく、精神や思想、あるいは感情の発露にあるとする。すなわち『源平盛衰記』の作者は「感興の湧くがまゝに端的に武士道精神の眞を啓示」し、「武士の精神はかくあるべしと、生命のこもった實例を以て示教し」ている点に、武士階級の人々だけでなく後世の人士を打つ真面目があると捉えている。『源平盛衰記』によって鎌倉武士の精神生活やそこに展開された武士道について理解することができ、それが『源平盛衰記』の作者の「精神的感奮の動機」であり、また、そこに作者の意図があり、『源平盛衰記』の真骨頂が見出されると述べている。次いで、昭和十四年の「源平盛衰記と時代思潮」においては、『源平盛衰記』の素材である源平の時代、そして『源平盛衰記』が著された鎌倉時代は、武士道が時代思潮の中核をなしているものとする(49)。その上で、『源平盛衰記』の作者が主に筆を用いているのは「當代武士道に關するもの」であるとして、『源平盛衰記』の作者は「鎌倉武士道の眞髓を把握闡明して、その眞を得た」と評している。さらに、同年の「源平盛衰記に現はれたる公家思想の一考察」においてもこれに言及し、『源平盛衰記』は、武士道の理解において重要な地位を占めるものであり、「武家文化や武士道を物語る貴重な文献として高く評價される」と述べている(50)。

同じ昭和十四年、熊谷孝氏は、「源平盛衰記論序章―藝術批評の基準にふれて―」において、これまでの『源平盛衰記』論に疑問を呈する(51)。熊谷氏は、『平家物語』諸本の存在にもかかわらず、その「増補訂正版」である『源平盛衰記』が一般に要求されるに至った事情を「歴史的必然的な關係のうちに求むべき」であると述べ、『源平盛衰記』を「冗漫」や「不透明」と評するのは、「外ならぬ現代に生きるわれわれの感情を基準とした言ひ分」であると指摘している。そして『平家物語』と『源平盛衰記』の優劣論を論外であるとして、問題の焦点はそれぞれの作品が果たした歴史的な役割の評価にあると論じている。熊谷氏は、『源平盛衰記』について、承久の乱を経て、「封建武士的生活體驗を深めつゝあつた時代」(52)が、古い型の『平家物語』には満たされず、文芸への道を開放された武士階層が複雑な技巧による作品構成には背を向けて素朴な技巧による文芸作品に享受の対象を求めたという現実の要請によるものと捉える。さらに、作品の表現、在り方を規定するのは享受者の生活内容であるとして、「享受者層の中堅分子たる武士は(中略)その獨立的なモラルを武士道にまで形式化した頼時執權時代の武士」と見ている。その上で、『源平盛衰記』の隨所に武士道精神を表す言葉が見出され、「構想的破綻の一因だなどと言はれる、夥しい故事の引例そのものが、武士道徳を強調しそれを裏づける如きもの」とする。『源平盛衰記』は、矛盾を露呈する作品であり、また、素朴な技巧によるものであるからこそ、武士文芸らしい性格の作品となり得たのであり、『平家物語』から『源平盛衰記』への展開は、「武士的生活體驗の深化に伴ふ必然的な變容の過程」、「武士文藝確立への過程」として見られるべきものであると論じている。

それに対して、桐原徳重氏は、同年の「源平盛衰記論」において、「盛衰記の表現がまづいと感ずるところの感じは、現代人の感じであつて(中略)盛衰記といふ形をとつたものが、當時において「一般に要求され」といふ意見」について、それを徹底させて行くと文学史を書くことができないと指摘する(53)。桐原氏は、『源平盛衰記』に見られる「人物や事件のくだくだしい説明」は、当時に近く、事件を知る読者にとって、「われわれより以上のくだくだしさといらだち

を感じた」と見る。さらに、『源平盛衰記』を武士文芸としての要請に応えたものであるとする意見に「賛成することはできない」として、『源平盛衰記』の「ペダンティックな説明」は「宮廷貴族的な或は幹部僧侶的なもの」とするなど、熊谷氏の論に反対する立場をとり、「あるイミでの辭典的な性質が盛衰記の本質」と捉えている。

一方、同年、森本治吉氏「源平盛衰記の文學性」は、源義経と源頼朝に関する記事の詳密さに注目する(54)。「源平盛衰記」において、義経に同情し、その苦難薄命の出世の道筋まで語ることは、平氏以外にも同情に値する人物が出現することになり、それは「モーティヴの分裂であり、聴衆(或は讀者)の注意の分散」であるとして、構想上からは失敗的処置であるとする。また、頼朝関係記事の増補によって、前半の中心人物である平清盛に対して、それに対立するような強さで後半に頼朝の印象が浮かび上がるが、それゆえに「起筆に説く「無常」の眞理が貫徹されてゐない」として、作品としての破綻であると指摘する。「義経と頼朝の合體した文學的勢力」は、「書中の平氏の勢力」に対して、『源平盛衰記』を「二つに分裂させる」ものであり、「文學作品としては、明かに、作者の失敗」と述べている(55)。

明治時代、文学となった『平家物語』は、やがて叙事詩として評価を受ける。しかし、『源平盛衰記』は、『平家物語』と比較して、その文學的価値が低いものとされる傾向にある。昭和十四年には第二次世界大戦が開始されるが、戦時下においては武士道精神が強調され、軍記物語はこれと結びつけて論じられる。『源平盛衰記』もまた、武士道の観点から評価されることとなる。一方で、諸本や諸記録の集大成で、知識的・術学的、あるいは注釈的・辞典的な性質があり、また、殺伐・卑俗な面があるといった今日的な『源平盛衰記』評がすでに見受けられる。

以上のように、明治期から昭和戦前期までの論考を成立論と作品論に大別して示したが、不可分な論考も多い。そして成立論・作品論いずれもその多くが『平家物語』との対比において論じられている。多彩な『平家物語』諸本の一つとして、また、そこから独立した一作品として、戦後にはさらなる研究が進められることとなる。

三、戦後編

(一) 戦後における成立論

『源平盛衰記』は、延慶本『平家物語』および長門本『平家物語』と併せて論じられることが多いが、戦後の幅広い研究のなかで、『源平盛衰記』を主とする論考を中心に取り上げることとする。

平田俊春氏は、昭和三十八年から昭和四十年までの論考において、『吾妻鏡』と覚一本『平家物語』そして『源平盛衰記』の記事の比較検討を行い、『吾妻鏡』と『源平盛衰記』の関係は、『吾妻鏡』と『平家物語』の関係より密接であると指摘する(56)。さらに、「増補本のもっとも古いもの」として『源平闘諍録』と長門本『平家物語』の記事を比較し、『源平闘諍録』が「原平家」に最も近いものであり、このような形から長門本『平家物語』や『源平盛衰記』などに分かれたと推定する。そして『源平盛衰記』は、「集大成本」であり、諸本による書き入れや書き加え、また、「説話の成長したもの」によって『平家物語』よりも原形が変じており、『吾妻鏡』の記事の書き入れもあるが、『吾妻鏡』に近いという根本は、『吾妻鏡』の資料を基として書いた原平家の面影を伝えている」と述べている。

一方、渥美かをる氏は、昭和四十年および昭和四十一年の論考において、延慶本『平家物語』や長門本『平家物語』には見られず、『源平盛衰記』のみに見られる天竺説話や仏典について検討し(57)、また、同じ昭和四十一年の「源平盛衰記における仏教―寺院縁起を主とする―」においては、『源平盛衰記』に見られる寺院縁起を検討して、『源平盛衰記』が経典で天台宗色を打ち出し、天竺説話の部分でも若干の天台色を見せていることを指摘して、『源平盛衰記』の編者は「天台宗の僧侶か、または法華経の護持者」であるとす(58)。渥美氏は、『源平盛衰記』について、一旦成立した後、「二真人の手で寺院縁起が加筆増補された」と捉えている。なお、昭和六十二年には、牧野和夫氏『源平盛衰記』の「南都」的傾向について―覚書―がある(59)が、源健一郎氏は、平成四年の論考(60)に続き、平成五年の「源平盛衰記(編集の場)についての一考察―建久御巡礼記との共通記事を端緒として―」において、『源平盛衰記』の「(編集の場)」に「南都の唱導及び安居院流唱導の(場)との近接」を見ている(61)。一方、辻本恭子氏は、平成十年から平成十四年の論考において、『源平盛衰記』の「北嶺的な一側面」、すなわち『源平盛衰記』の叡山文化への関心や叡山文化の『源平盛衰記』への影響を指摘している(62)。

昭和五十三年、武久堅氏は、延慶本『平家物語』・長門本『平家物語』・『源平盛衰記』の「侍り」という用語に注目する(63)。そのなかで、『源平盛衰記』は「四三三章のうち五分の二に相当する、実に一七〇余章に、各章数例から十数例に及ぶ「侍り」が使用されている」と指摘して、「平家物語の敬語の基本文体は、ここに到って、「候ふ」から「候ふ」と「侍り」の混淆体へと抜本的な改変を体験する」と捉えている。そして延慶本『平家物語』と長門本『平家物語』の最終加筆と考えられる本文が『源平盛衰記』に重なって見られる場合を除き、『源平盛衰記』における「侍り」はその殆どが会話文と手紙文に用いられているとして、「謡曲詞章における「候文体」の確立に代表されるような、集団の前での上演を考慮して「候」と「侍」の問題を考察するとき、盛衰記の会話文は、「語る」という機能から最も退却した文体、換言すれば読むという享受形態を志向する文体としてその美しさを発揮している」と述べ、『源平盛衰記』の筆者は「侍り」を「雅語として自らの文章の中に選び用いていた」と見る。

また、武久氏は、平成十二年の論考において、長門本『平家物語』と『源平盛衰記』にのみ共通する記事本文で、同文関係の依拠資料(『伊勢物語』『日吉山王利生記』『発心集』『今物語』の四作品五説話)と認められる本文がある部分のみを対象として、長門本『平家物語』および『源平盛衰記』の依拠資料との親疎遠近を検討し、外部に共通の同文関係がある部分を対象とした長門本『平家物語』と『源平盛衰記』の関係は、「親子関係」ではなく「兄弟関係」としている(64)。

『源平盛衰記』の出典に関する戦後の論考については、古くは塚原鉄雄氏が昭和三十年、『源平盛衰記』の本文を検討し、和歌を中心にその典拠を指摘している(65)。塚原氏は、『源平盛衰記』によって和歌が詠まれたのではなく、和歌を典拠として『源平盛衰記』の本文が作られたとして、『源平盛衰記』は「添削の筆が、南北朝の頃までも、まだ継続されていた」と見ている。

一方、渡辺貞麿氏は、昭和四十四年、「源平盛衰記と法然説話―盛衰記の成立をめぐる―」において、『源平盛衰記』は、「古徳伝、もしくはそれ以後の法然伝」によったものと指摘し、『源平盛衰記』の成立を「古徳伝の成立した一三〇一年以後」として、「盛衰記の成立が一三〇一年以後、延慶本成立の最下限が一三〇九年」である場合、「延慶本が盛衰記に先行する」と述べる(66)。

さらに、昭和五十二年、「源平盛衰記の成立―法然伝とのかかわりから―」においては、『源平盛衰記』の成立について、「その最上限は『古徳伝』成立の一三〇一年、その最下限は『九巻伝』成立の最下限一三三二年」としている（67）。

『源平盛衰記』は、他の諸本にはない多くの故事説話を有しているが、昭和四十六年、牛尾久美子氏『源平盛衰記』の中国故事説話について「は、延慶本『平家物語』や長門本『平家物語』には見られず、『源平盛衰記』のみに見られる中国故事説話の典拠を検討する（68）。さらに、その一つとして『唐鏡』を直接の典拠とすることから、『源平盛衰記』の成立は「少くとも一二六〇〜一二九六年以後」と見て、『源平盛衰記』が現存の形になったのは「南北朝頃にまで下る」とする。昭和六十一年、楊曉捷氏「源平盛衰記における中国故事説話についての研究」もまた、『源平盛衰記』に見られる中国故事説話に注目している（69）。『源平盛衰記』が『平家物語』を資料源に故事説話を取り入れたとし、その上で、『平家物語』は、盛衰記の成立の重要な資料源である一方、また盛衰記の、常に乗り越えようと努めていた存在でもあった。それは盛衰記の創作者の基本的姿勢であり、また、今日の盛衰記読解において、看過すべからざる基本的視点であるとする。また、『唐鏡』について、中国の史書を基に編纂し、中国各王朝の事績を順に述べることを本領とする一方、「稗史や伝説など通俗的な要素の強い話題をも拒ま」ず、『唐鏡』の作者は「視野の広いことを見せびらかすように、叙述の流れを裁断して、「一説」と断って、実に平然とそれを並べたてている」として、このような叙述の方法は「その置かれた中世の文芸的環境の底辺を彷彿させる」と述べる。さらに、それは「盛衰記のそれと相通じる」と指摘し、「このような『唐鏡』を資料源の一つとして意欲的に話題をもとめていた盛衰記の編者は、その叙述を十分体得したはず」であると論じている。

そして遠藤光正氏は、昭和六十一年の『源平盛衰記』に引用の漢籍の典拠（一）において、『源平盛衰記』の文体について、「和漢混淆文としての妙趣を發揮する流麗な『平家物語』と比較して、『漢文調の臭味を多分に蔵する』と述べ、その点では『太平記』の文体に近いとする。また、『源平盛衰記』に引用されている漢詩文を主体とした詩歌や和漢の故事成語、金言、さらに、傍系的な歴史的挿話や社寺縁起・由来談などについて、「文学作品的な価値よりも、史書として当時の武家社会における孝より忠を重んずる中世の道德教訓的な面と教養の一助としての古典と見た場合、この文章の潤色や技巧を凝らすために引用の漢語の故事成語や金言等は「読み本」として格好の表現形態」であるとして、平成四年の『源平盛衰記』に引用の漢籍の典拠（八）「まで、慶長古活字本に拠って『源平盛衰記』に引用されている漢籍の典拠を検討している（70）。その成果は、平成六年の『源平盛衰記』に載録の漢籍と引用章句の用法について」にまとめられ、そのなかで、遠藤氏は、「盛衰記の作者が文章の作成に当たって、この漢籍中に見える中国故事説話を始めとして、国書仏典に至るまで故事成語や金言佳句を引用しながら、その文章に於ける彼此の対象、誇張、比喩等の潤色に多大の影響を与えている」と述べている（71）。

また、昭和五十七年の黒田彰氏「源平盛衰記と和漢朗詠集永濟注―増補説話の資料―」は、『和漢朗詠集永濟注』が『源平盛衰記』の増補資料の一つであり、『源平盛衰記』が『和漢朗詠集永濟注』を用いるのは先例を論うときであると指摘する（72）。幼学、啓蒙書として中世に広く流布していた「四部の書」「三注」は、証左として引用されるに足る権威を帯びており、『源平盛衰記』

はそこに「引証の拠り所を求めた」と見ている。

なお、『源平盛衰記』諸本については、平成五年、池田敬子氏が静嘉堂文庫蔵写本・名古屋市蓬左文庫蔵写本・慶長古活字本・元和寛永古活字本・無刊記片仮名整版本の本文を比較検討している(73)。また、平成十七年、岡田三津子氏『源平盛衰記の基礎的研究』は、『源平盛衰記』本文についての詳細な調査研究を行い、慶長古活字本・成實堂本・静嘉堂本・蓬左本・早大書入本を古本系伝本とし、本文を検討してそれぞれの特徴を指摘する(74)。さらに、『源平盛衰記』の大きな特徴の一つである一字下げ記事について、昭和四十九年には、日比野和子氏がその殆どは「異本異説記事」であり、「三分の一近く」がほかの『平家物語』諸本に見られ、また、本文と相互に関連する箇所があることから『源平盛衰記』が成立当時に存在していたとして、「盛衰記では、他の平家物語諸本と比べて、著しく傍系的な記事が多い。その中で、出来るだけ読み易く、理解し易くと考え出されたのが、傍系的記事、注記の記事を低書する別記文形式であった」と見ている(75)が、岡田氏は、注記や一字下げ記事、章段目録などについても検討を行い、「本文とは別の次元で成立したはずの傍注は、現存テキストの成立した時点では本文と一体化して継承され」ており、「一字下げ記事や章段目録もまた同様に盛衰記本文を形成する」としている。このほか、『平家物語』の異本の断簡で本文が『源平盛衰記』に近似するものが多い長門切の研究や享受に関する研究、『源平盛衰記』の詳細な注釈など、近年ではさまざまな角度から幅広い研究が進んでいる(76)。

『源平盛衰記』は、和歌や故事説話、漢籍など、多くの資料を取り込んでいる。その成立の背景や年代について、他作品との関係や、成立圏、典拠などから考察されるときにも、楊曉捷氏の指摘にある「稗史や伝説など通俗的な要素の強い話題をも拒ま」ない『唐鏡』に通じる点や、遠藤光正氏の指摘にある「文章の潤色や技巧を凝らすために引用の漢語の故事成語や金言等は「読み本」として格好の表現形態」であり、「中国故事説話を始めとして、国書仏典に至るまで故事成語や金言佳句を引用しながら、その文章に於ける彼此の対象、誇張、比喻等の潤色に多大の影響を与えている」点など、『源平盛衰記』の叙述のありようについても言及されている。『源平盛衰記』の作品論では、その叙述のありようをどのように捉えるかについて論じられてゆく。

(二) 戦後における作品論

昭和二十八年、富倉徳次郎氏『源平盛衰記』と『平家物語』は、『源平盛衰記』の性格について、『平家物語』の諸伝本を材料として集成を試みたものとした上で、「その採擇について一つの批判力乃至良識を示し、文藝人というよりも研究者という態度で立ち向かった」と見る(77)。「源平盛衰記の史的正確さ」は、古伝本の改作ではなく採択の方法基準によるものとし、作者は『源平盛衰記』を史書としようとしたのではなく、『平家物語』の諸伝本の採択にあたって「可能な範囲で史的正確さを持つものを採擇する良識を持った」として、『源平盛衰記』は、書誌学的にはその成立が新しいにもかかわらず、一面では極めて古い『平家物語』の面影を伝えているとす。また、時とともに「極く限られた知識人の讀む物以上にはなり得ないもの」となったが、「大衆化された語り本に對して、一つの権威を持った一異本として特殊な意味で、認められていた」と捉えている。

山下宏明氏は、昭和四十七年、『平家物語研究序説』において、『源平盛衰記』が故実や故事、史料、広範囲にわたる唱導資料や伝承、語り物を集録することから、これらに通じ、関東方の動きについても客観視することができた有識者が「物語全体の構想を第二にして、諸資料を思うがままに撰取、比較、考証」したものとする(78)。昭和四十八年の「源平盛衰記と平家物語―平家物語研究史を展望しつつ―」においては、「平家物語を評価する基準を以て盛衰記の蕪雑さを指摘したのでは、盛衰記そのものをとらえきれない」として、『源平盛衰記』の「異常で〈きたなき〉世界、〈物狂ひ〉の世界」を指摘する(79)。そのような世界は、『平家物語』を支える集団的な想像力には溶け込まない「屈折した編者の目に由来する」ものであり、「個人的な意識内への屈折を見せがち」な『源平盛衰記』の描きようは、「編者自身の姿勢」と見ている。そして昭和四十九年の「源平盛衰記と太平記」においては、『源平盛衰記』の『平家物語』本来のありようからの離脱、「物語の世界に共感して行くのではなくて、その世界からは一步離れた、客観的な姿勢」、「平家物語の世界に共感するのを拒むような、編者のさめた意識」を指摘した上で、屈折した、研ぎ澄まされた意識の持ち主である『源平盛衰記』の編者には、『太平記』の作者のような社会に対する真摯な関心は望むべくもなかったとする(80)。また、池田敬子氏は、昭和五十年、『源平盛衰記』の編者や享受者にとって『平家物語』は「所与の世界」、「暗黙の了解事項」であったと述べ、増補とされる部分、『平家物語』とは異なる部分に『盛衰記』自身の論理」を見つけなければならぬとした上で、その一つに「やさし」と「異様」を挙げる(81)。『源平盛衰記』は、編者の「分裂未統一」によって個々の内容が「遠心力で飛び出してしまいそうな傾向」を持ち、「知識性・説話性が突出」しており、「その遠心力によって両極に分解されたかのような「やさし」の世界と「異様な」世界とがある」と捉えている。さらに、日比野和子氏は、昭和五十三年、『源平盛衰記』に見られる「とりどり」という表現に注目し、「盛衰記の異質の世界の提示」を指摘して、「盛衰記編者は、一つの現象を見る時、必ずその対極の世界をも見据えていた」と論じている(82)。

また、山下氏は、昭和五十六年の論考のなかで、『源平盛衰記』において平時子が平宗盛を唐笠法橋という僧の子供であったと語ることにについて、「宗盛をめぐる平家物語の読み方」、「読みかえとも言うべき物語の読み」があることを指摘する(83)。山下氏は、『平家物語』にはこのような読みかえをなさしめる面があり、「その思い切った読みを行う読み手」が「その読みを拡大して物語の再構成をはかった」ものが一異本としての『源平盛衰記』であるとしている。そして異本の成立について、それぞれの成立を支える作者圈の問題であるとともに、各伝承圏で行われた「物語の読みとり」が大きな契機であると述べている。

一方、大羽吉介氏は、昭和四十八年、「源平盛衰記における説話受容の一考察」、さらに同年の「源平盛衰記における説話受容とその方法」において、『源平盛衰記』は他の諸本と比較して説話末に作者自身の批評が多く、『源平盛衰記』独特の評論形態として同類譚を二つ並べた後に作者の批評を付け加える方法をとっており、作者の批評は平家没落の原因、経緯に多く充てられていると指摘する(84)。そして『源平盛衰記』では、説話が『平家物語』から離れて独立し、「説話物語と言いたくなるような個所も多く見られる」と述べている。

『源平盛衰記』に関する多くの論考があるのは松尾葦江氏である。たとえば昭和五十二年の論

考では、『源平盛衰記』の特性として「もの知り百科」という意図があり、治承寿永の内乱も知的興味の対象として綴られているとする(85)。また、それゆえに記録性の擬装や、細部の詳細な描写、解説や評論の挿入、劇的な構成や誇張した表現などの「時代小説としての方法」が用いられているとして、『源平盛衰記』の編者について、「終結した歴史に評註を加え、詳細な情報と描写によって補強しながらながめ直そうとする」と捉えている。昭和五十三年の論考では、覚一本『平家物語』と『源平盛衰記』の「抒情性の質的相違」を検討している(86)。そのなかで、『源平盛衰記』は、「叙事的な、知的な方法」が用いられ、「叙事と抒情とが、均質化しようとしている」として、素材や形式の面では「抒情的なるもの」に積極的な意欲を示しており、「素材と形式それ自体へのめりこみが、盛衰記の抒情を、覚一本のようなうごきあるものになかった原因」と見る。さらに、昭和五十六年の論考では、『源平盛衰記』の「饒舌さ」を、「詳細さ・具体性を以て叙述する」、「事件の全過程を呈示したかの如く描く」、「解説を加えたがる」、「反復を意図的に行う」と指摘する(87)。『源平盛衰記』は「事象を、合理的に」解釈し、享受者の理解や感動もまた「正しく」行われる」よう制約し、そのような「享受者に対する執拗な干渉のかたち」が『源平盛衰記』の「饒舌さ」であるとしている。そして『源平盛衰記』の作者にとつて『平家物語』は「すでに題材」であり、その成立について、先行本文の継承や改訂という形ではなく、『平家物語』そのものが「述作に際しての対象」という形で契機が考えられなければならないと述べている。

同じ昭和五十六年、砂川博氏は、『源平盛衰記』における記事の改変や加筆に一定の法則があるとして、「並列・並記の方法」や「連想を契機とする加筆」などを指摘している(88)。「並列・並記の方法」は、「説話語り(叙述)の方法に異質なものを二つ組み合わせ対置する対句的発想」、「他の諸本が一人の登場人物で済ませる所を、わざわざ今一人の人物を加え、複雑詳細な場面構成を図る手法」であり、「連想を契機とする加筆」は、『源平盛衰記』において「表現が一つの趣向を生み出す契機」となっているとみる。松尾氏は、平成四年の論考において、「レトリックとしての説話」として、『源平盛衰記』の先例説話は、レトリックと同様に「連想の飛躍を楽しみ、細部に亘る内容の対応を意図していない」場合があることなどを指摘し、レトリックそのものも『源平盛衰記』成立の契機であるとして、「すでに知られているストーリーを、いかにこれまでとは異った魅力を以て語るか。レトリックもまた、それ自体文学創造の一つの目的であり、推進力たり得る」と述べる(89)。また、説話部分について、物語の主筋を解説し、物語の背景や雰囲気構築することによって、解釈を方向付けるものであり、『源平盛衰記』を形成する方法の一つなどとしている。さらに、「本系的叙述の説話性」として、「暴露性」、「現象に意味を賦与して語ろうとする」点、「巷説、衆庶の想像力によるかのような無名性を装って事実らしさを保証しようとする」点を『源平盛衰記』の「説話的発想」と指摘し、『源平盛衰記』が説話を文学的方法の一つとして使いこなそうとしたと捉える。『太平記』と比較して、『源平盛衰記』は「既知の『平家物語』を異化しながら、享受者を魅きつけ得る方法として説話を利用している」と見ている。

美濃部重克氏は、昭和五十八年、『源平盛衰記』の解釈原理(二)において、『源平盛衰記』は「盛者必衰の認識を觀念のエーテルとして、物語全体に透明な仕方で浸透させることから一歩進めて、それを平家と成親一門の悲劇の上に集約的に顕示しようとしている」と述べ、この両者の盛衰について、「非分の望み故の吒天の修法にその原因を求め、またその運命を盛者必衰の具現で

あると説明することによって、両者の奇妙な相似性を暗示」している（90）。そして『平家物語』諸本のなかで「稗史的性格を最も顕著に持つ本」である『源平盛衰記』は、「吒天信仰のコードを平家の盛衰の運命を解釈する新たな原理として、赤裸な人間感情と現世的欲望の織りなす稗史的物語を『平家物語』の内に開示しようとしている」と捉えている。一方、平成九年の『源平盛衰記』の成り立ち」においては、『源平盛衰記』は「他の伝本以上に『平家物語』の世界を対象化し、その世界に新たな解釈を加え、かつ新たなレベルにおいての時空の形成を目指すテキストトとして、伝承的生成のうちの過程的な姿からもっとも遠い所に至ったテキスト」であるとして、「源平時代の歴史と事件・出来事を人間一般の場に引き付ける解釈」によって、また、「現場再現の志向性が資料を利用したものであれ描写にそれを委ねたものであれリアリティの再構築を目指すもの」であることによって、『源平盛衰記』は『平家物語』の世界を歴史的時空としての個別性から脱却した一般化の方向性をもっとも著しく示すテキスト」であると論じている（91）。

昭和六十年、榊原千鶴氏『源平盛衰記』の一視点」は、『白氏文集』、中でも「新楽府」「長恨歌」の鑑戒詩をもつてする評」に注目する（92）。『源平盛衰記』には、歴史的な事件が人間の欲望によって織りなされたとする認識と人間性の暗い面への興味があるとして、『源平盛衰記』の作者の興味は一般的な人間理解に向けられていると捉え、そこに「事件の背景として、人間性の負の要因を見るような目」を見ている。さらに、それは「事件と人間とを相即不離のものとして平家の出来事を捉えようとする歴史と人間への興味」であると述べ、『平家物語』における出来事を介して、乱世に生きる人々に「人間理解のための教訓をなさんとする姿勢」を読み取ることができるとしている。平成三年の『源平盛衰記』の一性格——「政道」をめぐって——」においては、「政道」に注目して『源平盛衰記』の政治意識を考察し、「鑑戒的一面」を指摘する（93）。『源平盛衰記』の「鑑戒的性格」は、「過去の出来事の諸相に普遍性を認め、歴史はくり返す」という認識によって生み出されたものであり、それゆえに『源平盛衰記』は、『平家物語』が対象とした個々の出来事を「ことわざに収斂することで普遍化」し、「政道」に関わる記述に「教訓的要素」を盛り込むことによって、後の世に役立つことを期したと見ている。

また、平成五年の『源平盛衰記』の頼朝」では、頼朝像の造形から『源平盛衰記』の歴史叙述について考察している（94）。『源平盛衰記』は「清盛と頼朝を相似の存在として捉えようと試みている」と指摘し、「平家という王法を蔑する者の滅亡に至る過程を描き、同時にその新たな再現者として頼朝を位置づけ」る構成に、「源平の有様を盛衰の具現と認識し、それを表現する歴史叙述の方法を模索」した『源平盛衰記』の独自性が認められるとしている。一方、鈴木彰氏は、平成十年の論考において、『源平盛衰記』の文覚形象を支える力が「頼朝の位置付けという課題と連動して生じたもの」であるとし（95）、平成十三年の論考においては、『源平盛衰記』は、「後白河院の権威との関係性の中でそれを凌ぐ頼朝の地位」を示し、六代助命話に「頼朝の行く末の不安定さを示唆する文脈を意図的に織り込んでい」と見る（96）。また、羽原彩氏は、平成十二年、『源平盛衰記』の高倉宮・源頼政拳兵事件が「頼朝拳兵へと続く「源平」の争いという枠組み」に沿って叙述されているなどと指摘し（97）、設定した枠組みに沿って叙述を進めるのが『源平盛衰記』の叙述方法であるとする（98）。さらに、平成十五年、『源平盛衰記』では頼朝拳兵譚を「義家を起点とする（源氏の物語）」の中に組み込んでいく」として、このような叙述は「八幡太

郎義家を源氏の正統性の起源として意識する風潮を映し出したもの」と捉え(99)、「南北朝期、つまり足利政権草創期において、義家から頼朝、尊氏という血統が強く意識されていた」として、『源平盛衰記』の挙兵譚はそれに近い認識があると述べている(100)。

このほか、源健一郎氏は、平成三年の論考において、語り本系『平家物語』が「状況の切迫などを表す文学的方法として年代的な形式を取り入れている」のに対し、『源平盛衰記』は「叙述の全編に、年代記的な構成を性格として有する」と指摘して、『源平盛衰記』の叙述構成に「編年体に対する緊密な構成意識と、史実に準ずる叙述姿勢」があるとする(101)。さらに、平成六年の論考においては、『源平盛衰記』では「都とは異質な場のそれぞれに固有の時間の流れ」が与えられ、「多元的な時間叙述の方法」が用いられているとして、『源平盛衰記』は都の時間を基底とした「多元的な時間叙述の構造」を有すると見ている(102)。

『源平盛衰記』について、諸本や諸記録の集大成であり、知識的・術学的、あるいは注釈的・辞典的な性質や、殺伐・卑俗な面があるといった指摘は戦前にも見られたが、戦後においてはさらに研究が深められ、異常・異様な世界への関心や饒舌さの所以、教訓的な性質などとともに、『平家物語』とは異なるありようの解明が進められ、『平家物語』を読みかえ、異化し、異質の世界を提示する『源平盛衰記』の特質が論じられている。

四、おわりに

『源平盛衰記』はどのように論じられてきたのか。『平家物語』とともに、近世史書においては史料として用いられていたが、その史料的価値に疑問が呈され、明治時代の半ば頃から『源平盛衰記』は文学として扱われることとなった。『平家物語』との先後や『源平盛衰記』成立の背景が検討されるなかで、『平家物語』諸本の系統が考察され、『源平盛衰記』は延慶本『平家物語』や長門本『平家物語』とともに論じられる。一方、『平家物語』の叙事詩としての評価と比較して、『源平盛衰記』の文学的価値は低いものとされる傾向にあり、その叙述のありようについては、戦時下に武士道精神と結びつけて評価されるほか、部分部分の叙述以外は、全体として否定的な評言が見受けられる。戦後には、『源平盛衰記』の成立時期や背景とともに、多くの資料を取り込んでいく『源平盛衰記』の典故に関する研究などが進められている。また、『源平盛衰記』の叙述のありようをどのように捉えるかについて考察され、『源平盛衰記』独自の叙述姿勢や、『平家物語』の世界とは異なり、溶け合うことのない『源平盛衰記』の世界が指摘されている。

このように文学となった後も『源平盛衰記』の研究は深められてきたが、和歌や漢籍、史料や文書、伝承、異説、故事説話といったさまざまな資料を取り込む『源平盛衰記』は、知識豊富ではあるものの繁雑・冗長であり、散漫で、ときに逸脱し、整合性や求心性を欠くといった評言が散見され、文学作品としては高い評価を与え難いものとされる。また、他の諸本にはない多くの叙述を有する『源平盛衰記』は、故事説話など所謂傍系の叙述に注目してその成立や特徴が論じられることも多い。しかし、多くの資料を取り込みながら、『源平盛衰記』は本系の叙述をどのように描き出しているかということこそ最も考察されなければいけない課題ではないか。ここで言う本系の叙述とは、平家一門の栄枯盛衰や源平の争乱およびそれに関連した出来事、すなわち『平家物語』諸本の多くに描かれている物語的現在の出来事である。敢えて言うならば、『源平盛衰記』

は『平家物語』をどう描くのかということである。

以上のような問題意識から、本論第二部では、本系の叙述について、『源平盛衰記』において物語がどのように展開してゆくかを分析し、『源平盛衰記』の物語叙述の方法と物語としての特質を考察する。

【注】

(1) 星野恒 「平家物語源平盛衰記考」『史學會雜誌』第五号、一八九〇・四。

(2) 星野恒 「平家物語源平盛衰記は誤謬多し」『史學雜誌』第九編第一号、一八九八・一。

(3) 芳賀矢一 「源平盛衰記と太平記と」『國文學』第二十七、一八九〇・一〇。

(4) 山田孝雄 『平家物語考』(後掲注(16)に同じ)は、この角倉本『平家物語』を、延慶本『平家物語』の一つ「朽木本 内閣文庫藏 全四十八冊」とする。

(5) 前掲注(1)に同じ。

(6) 前掲注(2)に同じ。

(7) 小中村清矩 「國史學の葉」『國學院雜誌』第一卷第五、一八九五・三。

(8) 海野詮教 『平語』『盛衰記』の著者」『早稲田文學』第二十四号、一八九六・一一。

(9) 『史學界』第一卷第五号、一八九九・六。

(10) 菅茶山『筆のすさび』は、『源平盛衰記』を「平家物語と東鑑とをあはせ作りたるもの」としている(引用本文は『新日本古典文学大系99 仁齋日札 たはれ草 不尽言 無可有郷』(岩波書店、二〇〇〇・三)に拠る)。

(11) 『醍醐雜抄』には、以下のような叙述がある。

或平家双紙奥書云。當時命世之盲法師了義坊之説云。平家物語中山中納言顯時子息左衛門佐盛隆。其子民部權小輔時長作之。(中略)此時長前作平家廿四卷之本。籠伊勢大神宮。是佐渡院御時也。順德帝是也。後嵯峨院御在位之時。吉大貳入道輔常作之。平家物語民部少輔時長書之。合戰之事依無才學。源光行誂之。十二卷平家資經卿書之。

(引用本文は『群書類従 第二十五輯 雑部』塙保己一編(続群書類従完成会、一九三三・五)に拠る。)

(12) 前掲注(11)参照。

(13) 赤堀氏は、「原作者の平家物語は今の十二巻の普通本などよりは詳なるものにてありし」と見ている。

(14) 赤堀又次郎 『平家物語選釋』、早稲田大学出版部、一九〇四。

(15) なお、後藤丹治氏は、「盛衰記を後嵯峨天皇の御代以後のものとして看做された赤堀氏の考は、決して間違つてはゐない」と述べ、論拠を加えている(後藤丹治「平家物語著述年代考(一)」『史學雜誌』第五十二編第十号、一九四一・一〇)。

(16) 山田孝雄 『平家物語考』、国語調査委員会編、一九二一・一一。

- (17) このほか、『源平盛衰記』伝本の研究には、『通俗日本全史 第3巻 源平盛衰記 上』(早稲田大学出版部、一九二一・一一)の付録「源平盛衰記の版本及び寫本」がある。種村宗八氏によって、「慶長古活字本」「片假名本」「黒川本」「松井本」の概要と体裁が示されている。種村氏は、『源平盛衰記』に「良版本なき」一方、古写本では「黒川本」と「松井本」を「古傳の良書」とする。さらに、「慶長本は版本中の最良書」としながらも、古写本と対照すると「尠からざる脱句、誤植、誤讀ある」ほか、「片假名本」は「更に幾多の誤脱を加へ」、「註解文は悉く本文に混同」し、「全部の擬漢文が殆ど全く誤讀せられ」ていることを指摘する。
- (18) 山田氏は、灌頂卷特立を『平家物語』成立当初のものではないと見る。
- (19) なお、大正四年には、『源平盛衰記』を「平曲の分派たる一方流の本の異本たるにすぎず。即ち、平家物語と對立すべきものにあらずして八坂流の本と對立すべき平家の一異本に止まる」としている(山田孝雄・高木武『校定平家物語』、東京寶文館、一九一五・六)。
- (20) 五十嵐力『新國文學史』、博文館、一九二一・四。
- (21) 五十嵐力『平家物語の研究』『早稲田文學』第百七十九号、一九二〇・一〇。
- (22) 藤岡氏は、「普通本」を「延慶、長門、南都の三本以外の平家物語の諸本」としている。
- (23) 藤岡作太郎『鎌倉室町時代文學史』、大倉書店、一九一五・五。
- (24) 野村八良『鎌倉時代文學新論』、明治書院、一九二二・一一。
- (25) 柿村重松「本朝文粹の文句と平家物語」『松井博士古稀記念論文集』、吉田彌平編、目黒書店、一九三二・二。
- (26) 津田左右吉「平家物語と源平盛衰記との關係に就いて」『史學雜誌』第二十六編第七号、一九一五・七。
- (27) なお、後藤氏は、津田氏の論を考察して、『源平盛衰記』成立時期の論拠に疑問を呈している(後藤丹治「平家物語著述年代考(二)」『史學雜誌』第五十二編第十号、一九四一・一一)。
- (28) 『校註日本文學大系 第十五巻 源平盛衰記 上巻』国民図書、一九二六・四。
- (29) 高木武「平家物語延慶本長門本源平盛衰記の關係について」『東亞の光』第二十二巻、一九二七・八。
- (30) 高木武「東關紀行と平家物語延慶本長門本源平盛衰記との關係」『國語・國文』第四巻第四号・第四巻第六号、一九三四・四・一九三四・六。
- (31) 高木武『日本精神と日本文學』、富山房、一九三八・五。
- (32) 富倉二郎「延慶本平家物語考―長門本及び源平盛衰記との關係―」『文學』第二巻第三号、一九三四・三。
- (33) 高橋貞一『平家物語諸本の研究』富山房、一九四三・八。
- (34) 「八坂流諸本」は、甲類・乙類・丙類・丁類に分類されている。
- (35) 前掲注(25)、(32)、(26)に同じ。
- (36) 土肥経平『湯土問答』は、『源平盛衰記』を「寶治二年三年建長元年此三ヶ年ノ中ニ書キシモノ」とする(引用は、『少年必讀日本文庫』第6編、岸上操編、博文館、一八九一・

一一に拠る)。

- (37) 前掲注(3)に同じ。
- (38) 落合直文「宇治川の先陣」『國學院雜誌』第一卷第九、一八九五・九。
- (39) なお、『國學院雜誌』第六卷第一(一九〇〇・一)以降に、松井簡治氏による『源平盛衰記』本文の評釈がある。
- (40) 生田弘治「國民的叙事詩としての平家物語」(『帝國文學』第十二卷第三―五号、一九〇六・三―五)など。
- (41) 岩野泡鳴「叙事詩としての『平家物語』」『文章世界』、一九一〇・一一。
- (42) 内海弘蔵『平家物語評釈』、明治書院、一九一五・九。
- (43) 津田左右吉『文學に現はれたる我が國民思想の研究』洛陽堂、一九一七・一。
- (44) 前掲注(28)に同じ。
- (45) 高木武「平家物語と源平盛衰記」『國語と國文學』第十卷第十号、一九三三・一〇。
- (46) 高木武「源平盛衰記の一考察」『歴史と國文學』第二十二卷第五号、一九四〇・五。
- (47) 玉井幸助「平家物語・源平盛衰記の研究」『日本文學講座』第二卷、一九三四・八。
- (48) 橋本實「源平盛衰記の研究法」『古典研究』臨時増刊、一九三八・一〇。
- (49) 橋本實「源平盛衰記と時代思潮」『古典研究』第四卷第五号、一九三九・五。なお、この号は「特輯 源平盛衰記」とされ、このほか、野村八良「源平盛衰記に就いて」などが載る。
- (50) 橋本實「源平盛衰記に現はれたる公家思想の一考察」『古典研究』第四卷第十一号、一九三九・一一。なお、この号は「源平盛衰記特輯號」とされている。
- (51) 熊谷孝「源平盛衰記論序章―藝術批評の基準にふれて―」『古典研究』第四卷第六号、一九三九・六。
- (52) 熊谷氏は、『湯土問答』をふまえ、『源平盛衰記』の成立時期を宝治元年以後建長元年以前、少なくとも後嵯峨帝以後と見ている。
- (53) 桐原徳重「源平盛衰記論」『古典研究』第四卷第十一号、一九三九・一一。
- (54) 森本治吉「源平盛衰記の文學性」『古典研究』第四卷第十一号、一九三九・一一。
- (55) 森本氏は、このような「源氏尊重意識」を、十二巻の流布本形から『源平盛衰記』に発展するまでに要した「數十年或は百餘年」の歳月が民衆の感情にもたらした「平氏への共鳴同情の褪色」と「源氏への共鳴尊敬」によるものとする。「鎌倉の人々は、源氏の興した武家政治により、頼朝の開いた鎌倉を中心に支配され、而して比較的善政に恵まれて源平の争亂時とは事變つた生活を送つた」ため、「民衆の間に、源氏への感謝が芽生え、頼朝への人氣が生れ」たと見ている。ただしこれは「現實の源氏勢力の伸長に自然に押進められた無意識的増補」に過ぎないとしている。
- (56) 平田俊春「吾妻鏡と平家物語及び源平盛衰記との關係(上)」『防衛大学校紀要』第八輯、一九六三・一二、同「吾妻鏡と平家物語及び源平盛衰記との關係(中)」『防衛大学校紀要』第十輯、一九六五・三、同「吾妻鏡と平家物語及び源平盛衰記との關係(下)」『防衛大学校紀要』第十一輯、一九六五・九。

- (57) 渥美かをる「源平盛衰記における天竺説話と仏典(上)」『愛知県立女子大学愛知県立女子短期大学紀要』第十六輯、一九六五・一二、同「源平盛衰記における天竺説話と仏典(下)」『愛知県立女子大学説林』14、一九六六・一。
- (58) 渥美かをる「源平盛衰記における仏教―寺院縁起を主とする―」『仏教文学研究 第4集』法蔵館、一九六六・六。
- (59) 牧野和夫『源平盛衰記』の「南都」的傾向について―覚書『東横国文学』十九号、一九八七・三。
- (60) 源健一郎「源平盛衰記と建久御巡礼記―卷二十四「南都合戦焼失」の興福寺関係記事を中心に―」『日本文藝研究』第四十四卷第三号、一九九二・一〇。
- (61) 源健一郎「源平盛衰記(編集の場)についての一考察―建久御巡礼記との共通記事を端緒として―」『日本文藝研究』第四十五卷第二号、一九九三・七。
- (62) 辻本恭子『源平盛衰記』の赤青童子「日本文藝研究」第五十一卷第二号、一九九九・九、三、同『源平盛衰記』の赤青童子「日本文藝研究」第五十一卷第二号、一九九九・九、同『源平盛衰記』における日吉山王の働き―平家を追放する神―」『日本文藝研究』第五十三卷第三号、二〇〇一・一二、同『源平盛衰記』と叡山文化圏―赤青童子・雨宝童子がつなぐ経正竹生島参詣記事と師長熱田社参詣記事―」『軍記物語の窓』第2集、和泉書院、二〇〇二・一二。このほか、『源平盛衰記』の白山関係記事「『日本文藝研究』第五十五卷第四号、二〇〇四・三」などの論考もある。
- (63) 武久堅「平家物語読み本系諸本の成立過程―延慶本・長門本から源平盛衰記へ―」『国語と国文学』55―1、一九七八・一。
- (64) 武久堅「長門本平家物語と源平盛衰記の関係」『長門本平家物語の総合的研究 第三巻 論究篇』麻原美子・大井善壽編、勉誠出版、二〇〇〇・二。
- (65) 塚原鉄雄「源平盛衰記の出典」『解釈』第一巻第四号、一九五五・八。
- (66) 渡辺貞麿「源平盛衰記と法然説話―盛衰記の成立をめぐって―」『大谷學報』第48巻第3号、一九六九・一。
- (67) 渡辺貞麿「源平盛衰記の成立―法然伝とのかかわりから―」『文芸論叢』8、一九七七・三。このほか、『平家』その増補の背後にあるもの―特に『盛衰記』と法然伝との関係から―」『文芸論叢』14、一九八〇・三、『盛衰記』甘糟往生譚の背景―骨で語られるはなし」『伝承の古層』水原一編、桜楓社、一九九一・五)などの論考もある。
- (68) 牛尾久美子『源平盛衰記』の中国故事説話について」『国文目白』第十号、一九七一・三。
- (69) 楊曉捷「源平盛衰記における中国故事説話についての研究」『國語國文』第五十五巻第十号、一九八六・一〇。
- (70) 遠藤光正『源平盛衰記』に引用の漢籍の典拠(一)「『東洋研究』第77号、一九八六・一、同『源平盛衰記』に引用の漢籍の典拠(二)「『東洋研究』第80号、一九八六・七、同『源平盛衰記』に引用の漢籍の典拠(三)「『東洋研究』第85号、一九八八・一、同『源平盛衰記』に引用の漢籍の典拠(四)「『東洋研究』第87号、一九八八・三、同『源

- 平盛衰記』に引用の漢籍の典拠(五)、『東洋研究』第91号、一九八九・三、同『源平盛衰記』に引用の漢籍の典拠(六)、『東洋研究』第94号、一九九〇・二、同『源平盛衰記』に引用の漢籍の典拠(七)、『東洋研究』第96号、一九九〇・九、同『源平盛衰記』に引用の漢籍の典拠(八)、『東洋研究』第104号、一九九二・九。
- (71) 遠藤光正『源平盛衰記』に載録の漢籍と引用章句の用法について『東洋研究』第110号、一九九四・二。
- (72) 黒田彰「源平盛衰記と和漢朗詠集永濟注―増補説話の資料―」『説話文学研究』第17号、一九八二・六。なお、黒田氏は、「源平盛衰記難語考―正盛蔵人五位の家に仕え―」(『講座平安文学論究』第10輯、風間書房、一九九四・一二)、「源平盛衰記難語考―人知れぬ大内山の山守は―」(『和歌文学論集』7、風間書房、一九九五・三)、「千木の片殺神さびて―源平盛衰記難語考―」(『國文學』73、一九九五・一二)、「源平盛衰記難語考―唐船には軍將の乗りたる体―」(『軍記物語の窓』第1集、和泉書院、一九九七・一二)といった『源平盛衰記』に見られる語句の解釈に関する論考などもある。
- (73) 池田敬子「『源平盛衰記』諸本の基礎的考察」『中研所報』第26巻第2号、一九九三・七。早稲田大学図書館蔵の無刊記片仮名整版本に書入れの形で残る黒川本についても参照している。
- (74) 岡田三津子『源平盛衰記の基礎的研究』和泉書院、二〇〇五・二。
- (75) 日比野和子「源平盛衰記に関する一考察―別記文について―」『名古屋大学軍記物語研究会会報』第2号、一九七四・二。
- (76) 『文化現象としての源平盛衰記』松尾葦江編、笠間書院、二〇一五・五、早川厚一他『源平盛衰記』全釈』『名古屋学院大学論集 人文・自然科学篇』第四十二巻第二号く、二〇〇六・一くなど。
- (77) 富倉徳次郎『源平盛衰記』と『平家物語』『文學』第二十一巻第二号、一九五三・二。
- (78) 山下宏明『平家物語研究序説』明治書院、一九七二・三。
- (79) 山下宏明「源平盛衰記と平家物語―平家物語研究史を展望しつつ―」『文學』第四十一巻第五号、一九七三・五。
- (80) 山下宏明「源平盛衰記と太平記」『文學』第四十二巻第十二号、一九七四・十二。
- (81) 『日本古典文学史の基礎知識』秋山虔・神保五弥・佐竹昭宏編、有斐閣、一九七五・二。
- (82) 日比野和子「源平盛衰記の性格―とりどり―という表現をめぐって―」『名古屋大学国語国文学』43、一九七八・一二。
- (83) 山下宏明「平家物語論のために―物語と人物像―」『日本文学』第三十巻第九号、一九八一・九。このほか、「源平盛衰記の語り」(『國學院雑誌』第一〇三巻第五号、二〇〇二・五)などの論考もある。
- (84) 大羽吉介「源平盛衰記における説話受容の一考察」『論輯』1、一九七三・二、同「源平盛衰記における説話受容とその方法」『国文学論考』第9号、一九七三・三。このほか、「源平盛衰記と十訓抄について」(『馬淵和夫博士退官記念説話文学論集』馬淵和夫博士退官記念説話文学論集刊行会編、一九八一・七)などの論考もある。

- (85) 松尾葦江「源平盛衰記素描―その意図と方法―」『國語と國文學』第五十四卷第五号、一九七七・五。
- (86) 松尾葦江「平家物語の抒情性をめぐって―源平盛衰記の方法・序説―」『國文』第四十九号、一九七八・七。
- (87) 松尾葦江「源平盛衰記の方法―その饒舌さをめぐって―」『東京女学館短期大学紀要』3、一九八一・二。なお、昭和五十七年の論考においても、『源平盛衰記』は「治承寿永の内乱と、平家物語と、二重の素材を擁して述作された作品」であり、「平家物語」という手段が自立した作品そのものが、契機であり素材」であるとして、「盛衰記はいわば再話活動が創作活動であるような生成の過程を経ていると言つてよい。すでに述作された題材を、再び著述する―それはまず第一に、理解しようとする試みであった。次に、異なる理解を提出する試みともなり、或いは一つの理解を確定し、限定する試みにもなった。前者は内容的に改作し、後者は主として修辭的・編集的に改変していく作業に関連する」と異本の発生を捉えている(松尾葦江「源平盛衰記の叙事の様相その一―清盛像から―」『東京女学館短期大学紀要』4、一九八二・二)。
- (88) 砂川博「源平盛衰記の方法と説話(上)」『文學』第四十九卷第六号、一九八一・六、同「源平盛衰記の方法と説話(下)」『文學』第四十九卷第七号、一九八一・七。
- (89) 松尾葦江「源平盛衰記と説話―方法としての説話―」『説話論集第2集 説話と軍記物語』清文堂出版、一九九二・四。
- (90) 美濃部重克『源平盛衰記』の解釈原理(一)『伝承文学研究』29、一九八三・八。
- (91) 美濃部重克『源平盛衰記』の成り立ち『軍記文学研究叢書5 平家物語の生成』山下宏明編、汲古書院、一九九七・六。
- (92) 榊原千鶴『源平盛衰記』の一視点『南山国文論集』第九号、一九八五・三。
- (93) 榊原千鶴『源平盛衰記』の一性格―「政道」をめぐって―『日本文学』第四十卷第一号、一九九一・一。
- (94) 榊原千鶴『源平盛衰記』の頼朝『日本文学』第四十二卷第六号、一九九三・六。
- (95) 鈴木彰『源平盛衰記』の文覚―頼朝像形象との関わりから―『国文学研究』125、一九九八・六。
- (96) 鈴木彰『源平盛衰記』における頼朝の地位―編集姿勢と拳兵譚からの脈絡をめぐって―『軍記と語り物』第二十七号、二〇〇一・三。
- (97) 羽原彩『源平盛衰記』高倉宮・頼政拳兵事件叙述の一方法『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第四五輯第三分冊、二〇〇〇・二。
- (98) 羽原彩『源平盛衰記』頼朝拳兵譚叙述の一方法『国文学研究』131、二〇〇〇・六。
- (99) 羽原彩『源平盛衰記』頼朝拳兵譚における義家叙述の機能―頼朝に連なる〈過去〉―『国文学研究』140、二〇〇三・六。
- (100) 羽原彩「義家から頼朝、そして尊氏へ―源氏系譜の認識と『源平盛衰記』―」『古典遺産』53、二〇〇三・九。
- (101) 源健一郎「源平盛衰記の年代記的性格―鹿谷事件発端部に至る叙述の検討を通して―」

『人文論究』41(3)、一九九一・一一。
(102) 源健一郎 『源平盛衰記』における時間叙述の方法―その多元的構造について― 『日本文芸学』31、一九九四・一一。

【参考文献】 大津雄一 『平家物語』とロマン主義 『軍記と語り物』第四十三号、二〇〇七・三、
同 『戦時下の『平家物語』』 『國語と國文學』第八十五卷第十一号、二〇〇八・一一。

第二部 『源平盛衰記』における物語叙述の方法

第一章 西光の機能

一、はじめに

『平家物語』において、「平家の悪行のはじめ」とされるのは、殿下乗合の報復として平清盛が藤原基房を襲撃させた出来事である。たとえば延慶本『平家物語』では、「代ノ乱ケル根元ハ」として殿下乗合を描き出し（延慶本『平家物語』第一本「近習之人々平家ヲ嫉妬事」）、その報復としての襲撃を「是ゾ平家ノ悪行ノ始ナル」と位置づけている（延慶本『平家物語』第一本「平家殿下ニ恥見セ奉ル事」）。覚一本『平家物語』においても、「世の乱れそめる根本は」として殿下乗合が描かれ、その報復を「これこそ平家の悪行のはじめなれ」としている（覚一本『平家物語』巻第一「殿下乗合」）。

しかし、『源平盛衰記』では、殿下乗合などいくつかの出来事が他本とは異なる位置づけとなっている。『源平盛衰記』において、殿下乗合は「然べき運の傾くべき符にや」として描き出され、また、その報復としての襲撃は「平家の悪行のはじめ」とされていない。『源平盛衰記』では、「二代后」の前に該当する位置に、平基盛の郎等が藤原基実の御隨身等を打擲する出来事が見られ、この出来事を「平家ノ乱行ノ初」とする（『源平盛衰記』巻第二「基盛打殿下御隨身」）。さらに、清水寺焼失の後、後白河院が六波羅に御幸するが、清盛は見参しなかったとされ、この無礼を「平家ノ狼藉ノ二度也」としている（『源平盛衰記』巻第二「清水寺縁起」）。本章では、『源平盛衰記』において他本とは異なる位置づけとなっている清水寺炎上や殿下乗合さらには治承三年政変といった出来事について、西光に着目して読み解いてゆく。

二、猿楽の様子

『源平盛衰記』では、源行綱による鹿ヶ谷謀議の密告のなかで、酒宴における出来事や人々の言動が具体的に語られている。次章（1）で指摘するとおり、その内容は、行綱が受け取った白布については言及しないよう、『源平盛衰記』において二回描かれている鹿ヶ谷での謀議の場面を切りつないで表現されている。

『平家物語』諸本に共通して、酒宴の場では猿楽が行われるが、『源平盛衰記』における行綱の密告では、その猿楽についてもまた具体的に語られている。

折節一村雨シテ、山下風ノ風烈ク吹侍シニ、庭ニ張立置タル傘共ノフカルニ、馬共驚驛
踊、蹈合食合ナンドスルヲ見テ、末座ノ人共ノ立騒、直垂ノ袖ニ瓶子ヲ係テ引倒シ、其頸ヲ
打折テ侍シヲ、座席静テ後、①大納言殿、アヽ事ノ始ニ平氏倒タリト宣シカバ、満座咲壺ノ
會ニテ侍キ。是コソ浅間敷事云タリト存ゼシニ、申モ口恐シク侍レ共、②西光法師、「倒レタル
ル瓶子ノ頸ヲバ取テ、大路ヲ可渡」ト申ヲ、③康頼ツト立テ、「當職ノ檢非違使ニ侍」トテ、

烏帽子懸ヲ以テ瓶子ノ頸ヲ貫捧テ、一時舞テ、廣縁ヲ三度持廻シテ、獄門ノ木ニ懸ト申テ縁ノ柱ニ結附テ侍シ事、身ノ毛堅テ浅間敷コソ侍シカ。④何ノ弓矢取ト云事ナク、當時一旦ノ君ノ御糸惜ミニ誇テ、西光ガ我一人ト事行シテ申振舞シ事、下刻上之至也ト不思議ニ存シ侍キ。

〔『源平盛衰記』卷第五「行綱中言」〕

他本における行綱の密告では具体的に語られない猿楽の様子が、『源平盛衰記』においてはその切っ掛けから人々の言動まで細かく表現されている。一方、酒宴の場面での猿楽の様子は、以下のとおりである。『源平盛衰記』のほか、読み本系からは延慶本『平家物語』、語り本系からは寛一本『平家物語』を引用する。

庭ニハ用意ニ持タリケル傘ヲアマタ張立タリ。山下ノ風ニ笠共吹レテ倒ケレバ、引立々々置タル馬共驚テ散々ニ驛躡、食合踏合シケレバ、舍人雑色馬ヲシヅメント庭上々々下へ返テ狼藉也。酒宴ノ人々モ少々座ヲ立ケルニ、瓶子ヲ直垂ノ袖ニ懸テ、頸ヲゾ引折テケル。⑤大納言見之、「戯呼事ノ始ニ平氏倒侍リヌ」ト被申タリ。面々咲壺ノ會也。⑥康頼突立テ、「大方近代アマリニ平氏多シテ持醉タルニ、既ニ倒亡ヌ。倒レタル平氏項ヲバ取ニ不如」トテ、是ヲ差上テ一時舞タリ。サテ取タル首ヲバ可懸也トテ、大路ヲ渡スト云テ廣縁ヲ三度廻シ、獄門ノ樗木ニ係ト名テ大床ノ柱ニ烏帽子懸ニツラヌキテ結付ケタリ。

〔『源平盛衰記』卷第四「鹿谷酒宴」〕

其比静憲法印ト申ケル人ハ、故少納言入道信西ガ子息也。万事思知テ振舞人ニテ有ケレバ、平相国モ殊ニ用テ、世中ノ事共時々云合セラレケリ。法皇ノ御気色モヨクテ、蓮花王院執行ニモナサレナドシテ、天下ノ御政常ニ被仰合ケルニ、「サテモ此事ハイカゞ有ベキ」ト、法皇仰ノ有ケレバ、「此事奴力々々不可有ト覚候。今ハ人多承候ヌ。何ガシ候ベキ。只今天下ノ大事出来候ナムズ。我君ハ天照大神七十二代、太上法皇ノ尊号ニテ御坐候トイヘドモ、王法ノ代末ニ成リ、清盛又朝家ニ盛也。其ト申ハ君ノ御恩ナラズト云事ナシ。然而朝敵ヲ平ル事度々也。サレバ何ヲ以、清盛ヲバ失ハセ給候ベキ」ト、無所憚被申ケレバ、成親卿気色替テ立レケルガ、御前ナル瓶子ヲ狩衣ノ袖ニ係テ倒シタリケルヲ、法皇、「アレハ何ニ」ト仰有ケレバ、「不取敢平氏スデニ倒レテ候」ト、被申タリケレバ、法皇御エツボニ入セヲハシマシテ、「康頼参テ当弁仕レ」ト仰アリシカバ、康頼ガ能ナレバ、ツイ立テ、「凡近來ハ平氏ガ余リ多候テ、モテエヒテ候」ト申タリケレバ、成親卿、「サテ其ヲバイカゞスベキ」ト被申。康頼、「ソレヲバ頸ヲ取ニハ不如」トテ、瓶子ノ頸ヲ取テ入ニケリ。法皇モ興ニ入セ給テ、着座ノ人々モエミマゲテゾ咲ハレケル。静憲法印バカリゾ、浅猿ト思テ、物モ宣ハズ、声ヲモ被出ザリケル。

〔延慶本『平家物語』第一本「成親卿人々語テ鹿谷ニ寄会事」〕

或時、法皇も御幸なる。故少納言入道信西が子息静憲法印御供仕る。其夜の酒宴に、此由を静憲法印に仰あはせられければ、「あなあさまし、人あまた承候ぬ。唯今もれ聞えて、天

下の大事に及候なんず」と、大にさわぎ申ければ、新大納言けしきかはりて、ざつと立たれるが、御前に候ける瓶子を、狩衣の袖にかけて、引倒されたりけるを、法皇、「あれはいかに」と仰ければ、大納言立帰て、「平氏倒れ候ぬ」と申ぞされける。法皇多つばにいらせおはしまして、「者どもも参ッて猿楽つかまつれ」と仰ければ、平判官康頼参りて、「あら、あまりに平氏のおほう候に、もて酔て候」と申。俊寛僧都、「さてそれをばいかゞ仕らむずる」と申されければ、西光法師、「頸をとるにしかじ」とて、瓶子のくびをとつてぞ入にける。浄憲法印あまりのあさましさに、つやく物も申されず。

(寛一本『平家物語』巻第一「鹿谷」)

延慶本『平家物語』や寛一本『平家物語』では、猿楽が行われる切つ掛けとして、静憲の発言に色を変えた藤原成親が立った際に瓶子を袖に掛けて倒したとされている。一方、『源平盛衰記』では、静憲の諫言によって後白河院がこの酒宴に参加しておらず、したがって静憲もこの場にいらないため、猿楽が行われる切つ掛けは延慶本『平家物語』や寛一本『平家物語』とは異なっている(2)。『源平盛衰記』では、風に吹かれて倒れた傘に驚いた馬をしずめようと人々が立ち騒いでいるなかで瓶子が倒れたとされ、誰が瓶子を袖に掛けたのか明らかではない。このような猿楽の切つ掛けは、行綱の密告においても同様に語られている。だがそれに続く猿楽での人々の言動について、行綱の密告で語られる内容は、酒宴の場面とは異なっている。

まず「戯呼事ノ始ニ平氏倒侍リヌ」という成親の発言(傍線部④)は、行綱の密告においても「アゝ事ノ始ニ平氏倒タリ」とあり(傍線部①)、酒宴の場面とほぼ一致する。なお、成親の発言について、延慶本『平家物語』や寛一本『平家物語』では、後白河院の「アレハ何ニ」という言葉を受けて成親が「平氏スデニ倒レテ候」と述べたものとなっている。さらに、延慶本『平家物語』では、後白河院の「康頼参テ当弁仕レ」という言葉を受けて、平康頼が「凡近来ハ平氏ガ余リ多候テ、モテエヒテ候」と述べ、成親の「サテ其ヲバイカズベキ」という言葉を受けて康頼が「ソレヲバ頸ヲ取ニハ不如」としている。寛一本『平家物語』では、後白河院が「者ども参ッて猿楽つかまつれ」として、康頼が「あら、あまりに平氏のおほう候に、もて酔て候」と述べ、俊寛が「さてそれをばいかゞ仕らむずる」として、西光が「頸をとるにしかじ」と、鹿ヶ谷謀議における主要な人物が登場する展開となっている。

一方、『源平盛衰記』では、先述のとおり、この酒宴に後白河院が参加していないため、成親や康頼の言動は自発的なものとなっている。康頼は「突立テ、大方近代アマリニ平氏多シテ持醉タルニ、既ニ倒亡ヌ。倒レタル平氏項ヲバ取ニ不如」トテ、是ヲ差上テ一時舞タリ。サテ取タル首ヲバ可懸也トテ、大路ヲ渡スト云テ廣縁ヲ三度廻シ、獄門ノ樗木ニ係ト名テ大床ノ柱ニ烏帽子懸ニツラヌキテ結付ケタリ」とされ(傍線部⑥)、『源平盛衰記』における酒宴の場面では、この振舞がすべて康頼のものとして描かれている。しかし、行綱の密告では、「西光法師、「倒レタル瓶子ノ頸ヲバ取テ、大路ヲ可渡」ト申ヲ、康頼ツト立テ、「當職ノ檢非違使ニ侍」トテ、烏帽子懸ヲ以テ瓶子ノ頸ヲ貫捧テ、一時舞テ、廣縁ヲ三度持廻シテ、獄門ノ木ニ懸ト申テ縁ノ柱ニ結附テ侍シ」とされ、西光の「倒レタル瓶子ノ頸ヲバ取テ、大路ヲ可渡」という言葉(傍線部②)を受けて康頼が動いている(傍線部③)。「一時舞テ、廣縁ヲ三度持廻シテ、獄門ノ木ニ懸ト申テ縁ノ柱ニ

「結附テ」と、酒宴の場面に近似した描写が見られながら、酒宴の場面においてはすべて康頼の自発的な振舞とされていたものが、行綱の密告においては西光の発言を受けて行われたものとされているのである。この西光の発言は、覚一本『平家物語』における「頸をとるにしかじ」という西光の発言に類似したものであるが、先述のとおり、覚一本『平家物語』では鹿ヶ谷謀議における主要な人物が登場しているのに対して、『源平盛衰記』における行綱の密告では西光のみが付加されている。行綱はこれを「申モ口恐シク侍レ共」と前置きして語り、さらに「何ノ弓矢取ト云事ナク、當時一旦ノ君ノ御糸惜ミニ誇テ、西光ガ我一人ト事行シテ申振舞シ事、下刻上之至也ト不思議ニ存シ侍キ」と西光を批判して結んでいる（傍線部④）。

だが『源平盛衰記』では、酒宴の場面における猿楽で西光の言動が見られないだけでなく、二回描かれている鹿ヶ谷での謀議の場面のいずれにおいても、西光の名前は見られない。西光の名前が現れるのは、『源平盛衰記』における二回目の謀議の場面の末尾であり、物語は西光の子息で加賀の目代である藤原師経が涌泉寺を焼き討ちし、白山さらには比叡山を巻き込む騒動へとつながってゆく。『平家物語』諸本に共通して、山門と対立し、後白河院に讒奏する西光が描き出される一方、成親の平家打倒は滞留する。

四月十四日ニ大衆ナヲ可下洛之由聞エケレバ、夜中ニ主上腰輿ニ召テ、院御所法住寺殿へ行幸、内大臣重盛以下ノ人々直衣ニ矢負テ、供奉セラル。軍兵御輿ノ前後ニ打圍テ雲霞ノ如也。中宮ハ、御車ニテ行啓、禁中何トナク周章騒、男女東西ニ走迷ヘリ。關白以下大臣公卿殿上ノ侍臣皆馳參ケリ。「聖斷遅々ノ間、衆徒多矢ニアタリ、神人殺害ニ及上ハ、神輿ノ殘四社ヲ奉振下、七社ノ神殿、三塔ノ佛閣一字モ不殘焼払、山野ニ交ルベシ。悲哉西光一人ガ姦邪ニ依テ、忽ニ圓融十乗ノ教法ヲ亡ン事ヲ」ト、三千衆徒僉議スト聞エケレバ、當山ノ上綱ヲ召テ、可有御成敗之旨、依被仰下、十五日勅定を披露ノ為ニ、僧綱等登山シケルヲ、衆徒瞋ヲ成テ、水飲ニ下向テ追帰ス。僧綱色ヲ失テ逃下。

（『源平盛衰記』巻第四「山王垂跡」）

安元三年五月五日、明雲僧正被止公請之上、藏人ヲ遣テ、被召返御本尊。其上使廳ノ使ヲ以テ、今度奉振下神輿、大衆ノ張本ヲ被召ケリ。加賀國ニハ座主ノ御房領アリ。師高國務之刻、是ヲ停廢ノ間、其宿意ニ依テ、門徒ノ大衆ヲ語ヒ訴訟ヲ致。既ニ朝家ノ及御大事之由、西光法師父子讒奏之間、法皇大ニ逆鱗有テ、殊ニ重科ヲ行ベキ由被思召ケリ。

（『源平盛衰記』巻第五「座主流罪」）

座主ノ流罪ノ事、人々諫申ケレ共、西光法師ガ無實ノ讒奏ニ依テ、カク被行ケリ。今夜都ヲ出奉ラント宣旨稠シカリケレバ、追立ノ檢非違使、白河、高島ノ御坊ニ參テ、責申ケリ。座主ハ白河ノ御所ヲ出給テ、粟田口ノ邊、一切經ノ別所へ出サセ給ケリ。大衆聞之、西光法師父子ガ名ヲ書テ、根本中堂ニ御座ス、金毘羅大將ノ御足ノ下ニ踏奉テ、「十二神將、七千夜叉、東西満山護法聖衆、山王七社、兩所三聖、時刻ヲ廻サズ召捕リ給へ」ト、呪咀シケルコソ懼シケレ。

（『源平盛衰記』巻第五「山門奏狀」）

サテモ一行ノ相シ申サルゝ如ク、楊貴妃ハ安祿山ガ為ニスカシ出サレテ、馬嵬ノ野邊ニ露ト伴テ消給フ。皇帝ハ后ノ遺ヲ悲テ、方士ヲ以テ蓬萊宮ヲ尋ラル。玉ノ簪シ金鈿刀ヲ被返送、イトゞ歎ニ臥給ヒ、思死ニゾ失給フ。去バ、頭密兼學浄行持律ノ天台座主讒シ申ス西光モイカゞト覺テオボツカナシ。(『源平盛衰記』卷第五「一行流罪」)

山門大衆等流罪ノ座主ヲ奉取留之由、法皇聞食テ不安思召レケル上ニ、西光法師内々申ケルハ、「山法師ノ昔ヨリ猥キ沙汰仕ル事ハ今ニ始ヌ事ナレ共、今度ノ狼藉ハ先代未聞ノ事ニ侍リ。下トシテ猥キヲ、上トシテ緩ニ御沙汰アラバ、世ハ世ニテモ侍ルマジ。能々可有御誠」トゾ奏シケル。只今我身ノ亡ヲモ不知、山王権現ノ神慮ニモ不憚、加様ニ申テイトゞ宸襟ヲ惱シ奉ル。讒臣乱国、妬婦破家トモ云。叢蘭欲茂秋風破之、王者欲明讒臣隱之トモイヘリ。誠哉此事。(『源平盛衰記』卷第五「山門落書」)

『源平盛衰記』においても、後白河院に讒奏する西光の姿が繰り返し描き出されている(引用本文波線部)。このような展開のなかで、行綱の密告が行われる。行綱の密告は、以下のように始まっている。

行綱申ケルハ、「院中ノ人々兵具ヲ調ヘ軍兵ヲ集ラルゝ事ハ、知召レ候ヤラン」ト申ス。入道、「其事ニヤ、⑦西光法師ガ依讒奏、山門ノ大衆ヲ可被責ト聞ユ。サマデノ御企有ベシ共覺ズ」トイト事モナゲニ宣フ。(『源平盛衰記』卷第五「行綱中言」)

行綱近々ト指寄テ、小音ニナリテサヽヤキ申ケルハ、「イト忍テ可申事候テ、昼ハ人目ノツヽマシサニ、態ト夜ニマギレテ参テ候。院中ノ人々兵具ヲトヽノヘ、軍兵ヲ召集ラルゝ事ヲバ、知食レテ候ヤラム」ト申ケレバ、「イサ、ソレハ山ノ大衆ヲ可被責トコソ承レ」ト、イト事モナゲニ宣ケレバ、(延慶本『平家物語』第一末「多田蔵人行綱仲言ノ事」)

「昼は人目のしげう候間、夜にまぎれて参ッて候。この程院中の人々の兵具をとゝのへ、軍兵を召され候をば、何とかきこしめされ候」。「それは、山攻らるべしとこそ聞け」と、いと事もなげにぞの給ひける。(覚一本『平家物語』卷第二「西光被斬」)

行綱に「院中ノ人々兵具ヲ調ヘ軍兵ヲ集ラルゝ事ハ、知召レ候ヤラン」と問われた清盛は、「山門ノ大衆ヲ可被責ト聞ユ」と答える。この点は延慶本『平家物語』や覚一本『平家物語』も同様であるが、『源平盛衰記』では、「西光法師ガ依讒奏」としている(傍線部⑦)。これまでの展開に沿う言葉であるが、西光の讒奏によってこのような事態となっていると清盛が捉えていることを明確にしている。そして『源平盛衰記』では、先述のとおり、行綱が具体的に語る猿楽の様子をなかで、西光の言動が強く押し出されている。「何ノ弓矢取ト云事ナク、當時一旦ノ君ノ御糸惜ミニ誇テ、西光ガ我一人ト事行シテ申振舞シ事、下刻上之至也ト不思議ニ存シ侍キ」という批判は、猿楽での振舞にとどまるものではなく、座主流罪に至るこれまでの振舞に対するも

のと言えよう。行綱の密告は成親の謀を暴露するものでありながら、『源平盛衰記』においては清盛と西光の対決の場を導くものとなっている。

三、清盛との対決

その清盛と西光の対決は、『源平盛衰記』においてどのように描き出されているであろうか。他本では、まず清盛は後白河院に使者を立てている。たとえば延慶本『平家物語』では、「近習二侯者共ノ恣ニ朝恩ニ誇ル余ニ、世ヲ乱ラムト仕ル由承候ヘバ尋沙汰仕ルベシ」（延慶本『平家物語』第一末「大政入道院御所へ使ヲ進ル事」という清盛からの使者に、後白河院は「分明ノ御返事ナカリケリ。「此事コソエ御心得ナケレ。コハ何事ゾ」ト計仰アリ」（延慶本『平家物語』第一末「大政入道院御所へ使ヲ進ル事」とされ、清盛は「ヨモ御返事アラジ。何ニトカハ仰有ベキ。ハヤ君モ知セ給タリケリ。行綱ハ実ヲ云ケリ」（延慶本『平家物語』第一末「大政入道院御所へ使ヲ進ル事」として、成親が呼び出されて押し籠められ、さらに人々が捕らえられてゆくなかで、西光が捕縛される場面が描かれている。また、覚一本『平家物語』では、後白河院の不分明な反応を受けて人々が捕らえられてゆき、成親が呼び出されて押し籠められ、さらに俊寛や康頼なども捕縛された後、西光が捕縛される場面が続いてゆく。

一方、『源平盛衰記』では、他本とは異なり、福原で行綱の密告が行われている。これは『愚管抄』と同様である(3)が、そのため『源平盛衰記』においては密告を受けた清盛が上洛して西八条の邸に入り、人々を捕縛してゆく。人々の捕縛は後白河院に使者を立てる前日の夜から始まっており、翌日の未明に「近ク被召仕之輩、恣ニ朝恩ニ誇、刺謀叛ヲ巧世ヲ乱ベキヨシ承間、尋沙汰仕ルベキ」（『源平盛衰記』巻第五「成親以下被召捕」と使者を立てている。そして「分明ノ御返事ナシ。只此事コソ御意得ナケレ、コハ何事ゾト計仰ケレ」（『源平盛衰記』巻第五「成親以下被召捕」という後白河院の反応に、「入道、「去社ヨモ御返事アラジ。行綱ハ實ヲ云ケリ。法皇モ知食タルニコソ」トテ、此輩ヲ召誡ケリ。其中ニ西光法師ヲ召取テ、大庭ニ引居タリ」（『源平盛衰記』巻第五「成親已下被召捕事」とされている。すなわち『源平盛衰記』では、後白河院の反応を受けてただちに清盛と西光の対決の場に入ってゆくのである。成親が呼び出される前に、西光の捕縛の場面が描かれることなく、清盛との対決が始まるのである(4)。

なお、『平家物語』諸本に共通して、後白河院の不分明な反応を受け、清盛は後白河院も知っているからこそ曖昧な返事しかできないのであろうと捉えている。この後、成経が捕らえられる場面において、後白河院が先の清盛からの使者に言及しているが、延慶本『平家物語』では、「是等ガ内々謀リシ事漏レニケルヨナ」「今朝相国ノ使ノ有ツルニ、事出ヌトハ思食ツ」（延慶本『平家物語』第一末「丹波少将成経西八条へ被召事」とされ、また、覚一本『平家物語』では、「けさの入道相国が使に、はや御心得あり。あは、これらが内とはかりし事の洩れにけるよ」（覚一本『平家物語』巻第二「少将乞請」とされており、後白河院は今朝の使者で事を察していたことが判る(5)。だが『源平盛衰記』では、「今朝ノ相國ガ使モ不得御意ツルニ、此等カ内々計シ事ノ漏ニケルヨ」（『源平盛衰記』巻第六「丹波少将被召捕」として、後白河院はこのときはじめて事を察したとされており、今朝の時点では清盛からの使者が何を伝えているのか理解できなかったため先のような反応であったことが判る。このような認識のズレは、先述の

とおり、『源平盛衰記』では静憲の諫言によって後白河院が鹿ヶ谷での酒宴に参加していないことに関連していると言えよう。そして『源平盛衰記』では、清盛が後白河院の反応を誤解したなかで事が進んでいたことになる。

さて、清盛と西光の対決は、以下のように始まる。延慶本『平家物語』や覚一本『平家物語』においても、先述のような捕縛の場面が描かれた後、西光が尋問や拷問を受ける場面が見られるため、その箇所とあわせて引用する。

相國ハ素絹ノ衣ヲ着、尻切ハキ、長念珠後手ニ取テ、聖柄ノ刀サシ、中門ノ縁ニ立テ、

⑧西光法師ヲ一時睨デ嗔聲ニテ、⑨「無云甲斐下臈ノ過分ニ成上、朝恩ニ誇ル餘、無誤天台座主奉流罪、剩入道ヲ亡サント申行ケル條ハイカニ、アラ希怪ヤ希怪ヤ、凶也々々、スハ、ヤ山王之冥罰ハ蒙ヌルハ」ト宣ケリ。（『源平盛衰記』巻第五「成親以下被召捕」）

入道ハ、長絹ノ直垂ニ、黒糸威ノ腹巻ニ、金作ノ大刀、カモメ尻ニハキナシテ、上ウラナシフミチギリテ、スノコノ辺ニタヽレタリ。其気色益ナゲニゾミヘラレケル。サテ西光ヲニラマヘテ宣ケルハ、「イカニ己程ノヤツハ入道ヲバ傾ケムトハスルゾ。元ヨリ下臈ノ過分シツルハカヽルゾトヨ。アレ程ノ奴原ヲ召上テ、ナサルマジキ官職ヲナシタビテ召仕ハセ給之間、エオヤコ共ニ過分ノ振舞スル者哉トミシニ合セテ、罪モオハセヌ天台座主讒シ奉テ、遠流ニ申行テ、天下ノ大事引出シテ、剩へ此事二根元与力ノ者ト聞置タリ。其子細具ニ申セ」ト宣ケレバ、
（延慶本『平家物語』第一末「西光法師擲取事」）

入道相国大床に立ッテ、「入道かたぶけうどするやつがなれるすがたよ。しやつこゝへひきよせよ」とて、縁のきはにひきよせさせ、物はきながら、しやつつらをむずくとぞ踏まられる。「本よりおのれらがやうなる下臈のはてを、君の召しつかはせ給ひて、なさるまじき官職をなしたび、父子共に過分のふるまひすると見しにあはせて、あやまたぬ天台の座主流罪に申おこなひ、天下の大事ひき出いて、剩此一門ほろぼすべき謀反にくみしてンげるやつなり。ありのまゝに申せ」とこそその給ひけれ。

（覚一本『平家物語』巻第二「西光被斬」）

延慶本『平家物語』では、この場面の前に「重俊ガ奉ニテ事ノ発ヲ尋ラレケレバ、初ハ大ニアラガヒ申テ、我身ニアヤマラヌ由ヲ陳ジケレバ、入道大ニ腹ヲ立テ、乱形ニカケテ打セタメテ問ケレバ、有事無事落ニケリ。白状カヽセテ判セサセテ入道ニ奉ル。入道是ヲ見給テ、「西光取テ参レ」ト宣ケレバ」（延慶本『平家物語』第一末「西光法師擲取事」）とあり、西光はすでに白状しているが、『平家物語』諸本に共通して、清盛は、西光が過分の振舞をし、讒奏して天台座主を流罪としたこと、平氏を滅ぼそうとしたことを糾問している。これに対する西光の反駁は、以下のとおりである。

西光ハ天性死生不知ノ不當仁ニテ、⑩入道ヲハタト睨返シテ、⑪「西光全ク謀叛ノ企ヲ不

存、此耻ニアフ事運ノ窮ニアリ。但耳ニ留事アリ。侍程ノ者ガ、靱負尉ニモナリ、受領檢非違使ニ至ラン事、何カ過分ナルベキ。始タル事ニ非ズ。去テカク宣和入道ハ、イカニ王孫トコソ名乗給ヘドモ、昔ノ事ハ見ネバ知ズ。御邊ノ父忠盛ハ、正シク殿上ノ交ヲ嫌レシ人ゾカシ。其嫡子ニオハセシカバ、十四五マデハ叙爵ヲダニモ不賜、シカモ継母ニハ値タリ、難過カリケレバコソ、中御門藤中納言家成卿ノ播磨守ニテオハセシ時、受領ノ鞭ヲ取、朝夕ニ賞ノ直垂ニ繩絃ノ足駄ハキテ通給シカバ、京童部ハ高平太ト云テ咲シヅカシ。其ヲ耻シトヤ思給ケン、扇ニテ顔ヲ隠シ、骨ノ中ヨリ鼻ヲ出シテ、閑道ヲ通給シカバ、又童部ガ先ヲ切テ、高平太殿ガ扇ニテ鼻ヲ挟ミタルゾヤトテ、後ニハ鼻平太々々トコソイハレ給シカ。去ドモ故刑部卿殿近江國水海船木ノ奥ニテ、海賊廿人ヲ被擲進タリシ勲功ノ賞ニ依テ、保延ノ比カトヨ、御邊十八歟九歟ニテ、四位ノ兵衛佐ニ成給タリシヲコソ、人々トシト申シガ、其ガ

⑫今太政大臣ニ成タルヲコソ下臈ノ過分トハ申ベキ。此條ハ争カ諍給ベキト⑬高聲ニ門外マデ聞エヨト云タリケレバ、

(『源平盛衰記』卷第五「成親以下被召捕」)

西光元ヨリサルゲノ者ナリケレバ、少モ色モ変ゼズ、ワルビレタル気色モナクテ、アザ咲テ、「イデ後言セム」トテ申ケルハ、⑭「院中ニ被召仕身ニテ候ヘバ、執事別当、新大納言殿ノ院宣トテ被催候シ事ニ、与セズトハ、争カ申候ベキ。与シテ候キ。但耳ニ止ル御詞ヲモツカハセ給者哉。他人ノ前ハシラズ、西光ガ前ニテハ、過分ノ御詞ヲバ、エコソツカハセ給マジケレ。見ザリシ事カ、殿ハ故刑部卿殿ノ嫡子ニテ渡ラセ給シカドモ、十四五才マデハ叙爵ヲダニモシ給ハズ、冠ヲダニモ給ラセ給ハデ、継母ノ池ノ尼公ノアハレミテ、藤中納言家成卿ノ許ヘ時々申ヨリ給シ時ハ、「アハ、六波羅ノフカスミノ高平太ノ通ルハ」トコソ京童部ハ指ヲ指シテ申シカ。其後、故卿殿、海賊の張本卅余人擲メ出レタリシ勲功ノ賞ニ、去ジ保延ノ比カトヨ、御年十七カ八カノ程ニテ四位シテ、四位ノ兵衛佐ニ成給タリシヲコソ、ユヽシキ事哉ト、世以テ傾キ申シカ。同王孫ト云ナガラ、数代久成下テ、⑮殿上ノ交リヲダニモ嫌レテ、闇打ニセラレムトシ給シ人ノ子ニテ、今忝モ即闕ノ官ヲ奪取リテ、大政大臣ニ成上リテ、剩ヘ天下ヲ我マヽニ思給ヘリ。是ヲコソ過分トハ申ベケレ。侍品ノ者ノ受領、檢非違使、靱負尉ニナル事ハ傍例ナキニ非ズ。ナニカハ過分ナルベキ。入道コソ過分ヨ。くゝト、居長高ニナリテ、詞モタガハズ散々ニ申ケレバ、

(延慶本『平家物語』第一末「西光法師擲取事」)

西光もとよりすぐれたる大剛の者なりければ、ちツとも色も変ぜず、わるびれたる気いきもなし。あなほりあざわらつて申けるは、「さもさうず。入道殿こそ過分の事をばの給へ。他人の前は知らず、西光が聞かんとところに、さやうの事をば、えこそその給ふまじけれ。⑯院中に召しつかはるゝ身なれば、執事の別当成親卿の院宣とてもよほされし事にくみせずとは申べき様なし。それはくみしたり。但耳にとゞまる事をもの給ふ物かな。御辺は、故刑部卿忠盛の子でおはせしかども、十四五までは出仕もし給はず。故中御門藤中納言家成卿の辺に立ち入給しをば、京童部は高平太とこそ言ひしか。保延の比、大將軍承り、海賊の張本卅余人からめ進ぜられし勲賞に四品して四位の兵衛佐と申ししをだに、過分とこそ時の人とは申

あはれしか。⑰殿上のまじはりをだにきはれし人の子で、太政大臣までなりあがつたるや過分なるらむ。侍品の者の受領・檢非違使になる事、先例・傍例なきにあらず。なじかは過分なるべき」と、はゞかる所もなう申ければ、(覺一本『平家物語』卷第二「西光被斬」)

『源平盛衰記』における西光の反駁で他本と大きく異なっているのは、西光は「西光全ク謀叛ノ企ヲ不存、此耻ニアフ事運ノ窮ニアリ」と(傍線部⑪)、謀叛に与したことを認めない点である。延慶本『平家物語』では、先述のとおり、西光はすでに拷問され白状しており、さらに覺一本『平家物語』と同様に「院中ニ被召仕身ニテ候ヘバ、執事別当、新大納言殿ノ院宣トテ被催候シ事ニ、与セズトハ、争カ申候ベキ。与シテ候キ」と認めている(傍線部⑭・覺一本『平家物語』では傍線部⑯)。だが『源平盛衰記』では、清盛の前で西光が関与を認めることはない。

「西光法師ヲ一時睨」む清盛(傍線部⑧)に対して、西光も「入道ヲハタト睨返シ」(傍線部⑩)、「無云甲斐下臈ノ過分ニ成上」という清盛の発言(傍線部⑨)に対して、西光は「今太政大臣ニ成タルヲコソ下臈ノ過分トハ申ベキ」と(傍線部⑫)、同じ「下臈ノ過分」という言葉を繰り返して反駁する。他本においては、西光は謀叛に与したことを認めながら、「過分」という清盛の発言については反論する形となっている(延慶本『平家物語』では傍線部⑮・覺一本『平家物語』では傍線部⑰)が、関与を認めない『源平盛衰記』においては、「過分」であるのは清盛の方ではないかという反問に焦点が当てられ、『源平盛衰記』を含め『平家物語』諸本において物語の幕開けとなる「殿上ノ交ヲ嫌レシ人」の子がいま太政大臣にまで上り詰めた来歴を「高聲ニ門外マデ聞エヨト」語る(傍線部⑬)。そしてこの「清盛は過分である」という言葉は、西光がはじめて登場する場面で語られていたものであり、そのときの西光の発言は、『源平盛衰記』における清水寺炎上や殿下乗合といった出来事の他本とは異なる位置づけにつながるものとなっている。

反駁された清盛と西光の対決は、以下のように続いている。

入道餘ニ腹ヲ立テ為方ナカリケレバ、⑱縁ノ上ニテ三踊四躍々給フ。猶腹ヲ居兼テ、⑲大庭ニ飛下、西光ガ類ヲ蹴タリ、蹈タリシ給ケレ共、西光ハ口ハ少モ減ズ、「去テ其ハ左ハ無しシ事カ。彼ハ有シ事ゾカシ。哀足手ダニモ安穩ナラバ、報答申シテン」ト云ケレバ、入道、「如何様ニモ謀叛ノ次第委ク相尋テ後、シヤ口割テ誠ヨ」ト宣ケレバ、松浦太郎高俊、拷木ニ懸テ打セタメ、事ノ興ヲ尋ケリ。⑳始ハ大ニ不知ト云ケレ共、惡口ハ吐ヌ、不落トテモ非可有、人ガ云タレバコソ入道殿モ是程ハ知給タルラメ、去バイハント思ツ、一休ヨ語ラン」ト云ケレバ、拷木ヨリ下シテ、硯紙取寄テ聞之。西光有ノ儘ニゾ云ケル。「執事別當新大納言殿、院宣トテ催レシカバ、院中ニ被召使身トシテ不叶ト申ベキニアラネバ、平家一門打失テ、西光モ世ニアラント思テ與シテ侍キ。院宣ノ趣キ誰カ可奉背」トテ、始ヨリ終マデ白状四五枚ニ記シテ、判形セサセテ後、高俊、西光法師ガ頭ヲ蹈テ口ヲ割キ、重テ誠置テゲリ。(『源平盛衰記』卷第五「成親以下被召捕」)

入道余ニ怒テ物モ宣ハズ。暫アリテ、「西光メ左右ナク首切ナ。能々サヒナメ」と宣ケレ

バ、重俊カ郎等ツトヨリテ、フトキシモトヲ以テ七十五度ノ考訊ヲ加タリ。西光心ハ武カリケレドモ、①本ヨリ問損セラレタル上、枳身ニシミテ術ナカリケレバ、残ナク落ニケリ。白状四五枚ニ被記タリ。（延慶本『平家物語』第一末「西光法師擲取事」）

入道あまりにいかって物もの給はず。しばしあつて、「しやつが頸、さうなうきるな。よくくくいましめよ」とぞの給ひける。松浦太郎重俊承つて、足手をはさみ、さまぐにいためとふ。②もとよりあらがひ申さぬうへ、糺問はきびしかりけり、残りなうこそ申けれ。白状四五枚に記せられ、やがて、「しやつが口をさけ」とて、口をさかれ、五条西朱雀にしてさられにけり。（覚一本『平家物語』巻第二「西光被斬」）

他本では、西光の反駁に清盛は「余ニ怒テ物モ宣ハズ」とされるが、『源平盛衰記』では、腹を立てた清盛が「縁ノ上ニテ三踊四躍」し（傍線部⑱）、さらに「大庭ニ飛下、西光ガ類ヲ蹴タリ、蹈タリ」する（傍線部⑲）姿が描かれる（6）。『源平盛衰記』では、後白河院の反応を受けてただちに始まる清盛と西光の対決の冒頭において、「西光法師ヲ召取テ、大庭ニ引居タリ。相國ハ素絹ノ衣ヲ着、尻切ハキ、長念珠後手ニ取テ、聖柄ノ刀サシ、中門ノ縁ニ立テ」（『源平盛衰記』巻第五「成親已下被召捕事」と、大庭に引き据えられた西光と中門の縁に立つ清盛の姿が描かれている。西光の反問に、清盛はその縁から西光の居る大庭に飛び下りたのである。「鼻平太」といった過去まで抉り出し、「過分」であるのは清盛の方ではないかという西光の反問が、一段高い中門の縁に立っていた清盛を西光の居る大庭まで引き下ろしたと言えよう。

一方、西光は「去テ其ハ左ハ無リシ事カ。彼ハ有シ事ゾカシ。哀足手ダニモ安穩ナラバ、報答申シテン」と引くことなく、拷問を受ける。先述のとおり、『源平盛衰記』において、清盛の前では西光は謀叛に与したことを認めないため、この後、はじめて関与を認めることになる。延慶本『平家物語』や覚一本『平家物語』では、「本ヨリ問損セラレタル上、枳身ニシミテ術ナカリケレバ、残ナク落ニケリ」と（傍線部⑳・覚一本『平家物語』では傍線部㉑）、すでに清盛の前で関与を認めているうゑに厳しい拷問によって残らず白状したとされるのに対し、『源平盛衰記』では、「始ハ大ニ不知ト云ケレ共、悪口ハ吐ヌ、不落トテモ非可有、人ガ云タレバコソ入道殿モ是程ハ知給タルラメ、去バイハント思ツ、休ヨ語ラン」ト云ケレバ」と（傍線部㉒）、厳しい拷問によって白状したのではなく、悪口を吐いたため宥められることはないであろうこと、そして誰かが密告したからこそ清盛がこれほど知っているのであろうと考えたことによって白状することにしたとされている。

なお、延慶本『平家物語』や覚一本『平家物語』では、この後、すでに呼び出されて押し籠められていた成親のもとに清盛が向かうが、先述のとおり、『源平盛衰記』では、この後、成親が呼び出される場面が描かれている。すなわち『源平盛衰記』では、西光がすべて白状した後、そのようなことになっているとは知らない成親が西八条に到着するのである。

西光が斬られ、西光の子息たちも討たれた後、以下のように評されている。

西光師高父子共ニ、法皇ノ切者ニテ世ヲバ世トモ思ハズ、人ヲモ人共セザリシ餘ニ、白山

妙理権現ノ神田講田没倒シ、涌泉寺ノ坊舎聖教焼拂、末社ノ神輿登山日吉御輿及入洛、其上
頭密之法燈智行先達ニ御座シ、天台座主種々ニ奉譏奏シカバ也。人ノ歎神ノ恨三千ノ咒咀モ
不空、十二神將ノ冥罰モ掲焉ニシテ一門終ニ亡ヌルコソ無慙ナレ。左見ツル事ヨト云者ハ多
ケレ共、ホムル人コソ無リケレ。大方ハ女ト下臈トハ賢キ様ナレ共、思慮浅キ者也。西光モ
本ハ田舎ノ夫童ナレバ、無下ノ下臈ゾカシ。去共一旦賢々敷心様也ケレバ、一天ノ君ニ奉被
召仕、忝ク龍顔ニ近ヅキ進セシカバ、果報ヤ盡ケン其心大ニ奢ツ、其官其職ニアラネド
モ、天下ノ事共執行、ヨシナキ謀叛ニ與シツ、我身モ加様ニ失ニケリ。不在其位不謀其政
ト云事アリ、^{②③}相構テ人ハ身ノ程ノ分ヲ相計テ可振舞トゾ申合ケル。

〔『源平盛衰記』卷第六「西光父子亡」〕

西光父子切者ニテ、世ヲ世トモ思ハズ、人ヲ人トモセザリシ余ニヤ、指モヤム事ナクオハ
スル人ノ、アヤマチ給ハヌヲサへ、サマ^レノ譏奏シ奉リケレバ、山王大師ノ神罰冥罰立所ニ
蒙テ、時尅ヲ廻サズカ^レ目ニアヘリ。「サミツル事ヨ^レトゾ、人々申アヘリシ。大方
ハ女ト下臈トハサカ^レシキ様ナレドモ、思慮ナキ者也。西光モ下臈ノ終ナリシガ、サバカ
リノ君ニ召仕レマヒラセテ、果報ヤ尽タリケム、天下ノ大事引出シテ、我身モカク成ヌ。浅
猿カリケル事共也。」(延慶本『平家物語』第一末「師高尾張国ニテ被誅事」)

これらは言ふかひなき物の秀て、いろふまじき事にいろひ、あやまたぬ天台座主流罪に申
おこなひ、果報や尽きにけん、山王大師の神罰・冥罰を立ちどころにかうぶつて、かゝる目
にあへりけり。
(覚一本『平家物語』卷二「西光被斬」)

『源平盛衰記』では、「世ヲバ世トモ思ハズ、人ヲモ人共セザリシ餘ニ」「天台座主種々ニ奉譏
奏シカバ」「冥罰」「果報ヤ盡ケン」といった延慶本『平家物語』や覚一本『平家物語』に類似し
た評言のなかで、その末尾に「相構テ人ハ身ノ程ノ分ヲ相計テ可振舞トゾ申合ケル」とある(傍
線部^{②③})。「身ノ程ノ分ヲ相計テ可振舞」とは、正に西光が「過分」であったことを批判している
が、先述のとおり、その西光が「過分」と批判した人物こそ清盛であり、特に『源平盛衰記』で
は、清盛と西光の対決において、「過分」であるのは清盛の方ではないかという反問に焦点が当
てられ、その反問によつて清盛は西光の居る場所まで引き下ろされていた。西光は「過分」な振
舞をしてついに亡びたが、それは反転して清盛にも向けられるものと言えよう。

四、清水寺炎上

西光がはじめて登場するのは、延暦寺と興福寺の対立である額打論に続く清水寺炎上に関連し
た場面である。山門の大衆は、会稽の恥を雪^{ごう}と興福寺の末寺である清水寺を焼き払うため下
洛したが、当初、それは「巷説一ニ非ズ、或ハ清水寺へ押寄テ可焼拂トモ云、或ハ上皇大衆ニ仰
テ、事を南都ノ會憤ニヨセテ、平相國清盛ヲ可被誅由聞エケリ」(『源平盛衰記』卷第二「山僧
焼清水寺」とされた。そのため、たとえば延慶本『平家物語』では、「上皇大ニ驚キ思食テ、
忿ギ六波羅へ御幸ナル。平中納言清盛モ大ニ畏リ驚カレケリ」(延慶本『平家物語』第一本「山

門大衆清水寺へ寄テ焼事」とされ、清水寺が焼き払われた後、「法皇還御成ニケリ。右兵衛督重盛モ、御送ニ被参」（延慶本『平家物語』第一本「山門大衆清水寺へ寄テ焼事」と、後白河院が急いで六波羅に御幸し、清盛の追討ではなく清水寺の焼討が行われた後、還御している。寛一本『平家物語』も同様である。一方、『源平盛衰記』では、清水寺焼失の後、後白河院が六波羅に御幸する（7）。

左衛門督重盛卿ハ、「當家追討ノ披露一定僻事ニコソ、參テ御氣色伺ハン」トテ、院參シ給ケル程ニ、上皇ハ又閭巷ノ説ヲ為被謝仰六波羅へ御幸アリ。左衛門督公光卿、治部光隆卿供奉セラレタリ。重盛卿道ニテ參會給ヒ、御供申テ奉入。②4平中納言清盛ハ、用心ノ為ニヤ所勞ト稱シテ見參ニ入ラザリケレバ、空ク還御有ケリ。河陽之蒐春秋猶忌之トイヘリ。忽ニ君臣ノ道ヲ忘テ、今上下ノ礼ヲ背ケレ共、君トシテ其罪ヲ責ルニアタハズ、臣トシテ其咎ヲ恐ルヽ事ナシ。朝家ノ耻武將ノ驕リ只此事ニアリ。是又②5平家ノ狼藉ノ第二度也。

（『源平盛衰記』卷第二「清水寺縁起」）

清水寺焼失の後、重盛が「當家追討ノ披露一定僻事ニコソ、參テ御氣色伺ハン」と院參する途中で、「閭巷ノ説ヲ為被謝仰」六波羅へ向かつていた後白河院に参り会い、「御供申テ奉入」とされる。だが「平中納言清盛ハ、用心ノ為ニヤ所勞ト稱シテ見參ニ入ラザリケレバ、空ク還御有ケリ」として（傍線部②4）、清盛は所勞と称して見參せず、後白河院はむなしく還御したとされている（8）。そして『源平盛衰記』では、この出来事を「平家ノ狼藉ノ第二度也」としている（傍線部②5）。他本において、「平家の悪行のはじめ」とされるのは、殿下乗合の報復として清盛が藤原基房を襲撃させた出来事である。しかし、『源平盛衰記』においては、清水寺炎上以前に、以下のような場面がある。

去五月廿二日ニ、殿下參内シ給ケルニ、清盛卿ノ二男遠江守基盛ガ車ヲ門外ニ立タリケルヲ御隨身ヤリノケト責ケレ共、牛飼童不承引シテ悪口シケレバ、御隨身等弓ヲ以テ打タリケル程ニ、基盛ガ郎等太刀ヲ拔、御隨身等ヲ取籠テ散々ニ打伏ケレバ、陣ノ内外騒動シケリ。是ゾ②6平家ノ乱行ノ初トハ聞エシ。（『源平盛衰記』卷第二「基盛打殿下御隨身」）

『源平盛衰記』では、「二代后」の前に該当する位置に、平基盛の郎等が藤原基実の御隨身等を打擲する出来事が見られる。この位置は、延慶本『平家物語』などにおいて、「義王義女之事」が置かれる箇所であるが、『源平盛衰記』においては、「祇王祇女」は卷第十七「福原京」の後に置かれており、この位置には、他本には見られない「日向太郎通良懸頸」および「基盛打殿下御隨身」が置かれている（9）。この出来事は、基実が参内した際、門外にあった基盛の車を退けるように御隨身が命じたが、牛飼童は従わず悪口したため、御隨身等が弓で打擲したところ、基盛の郎等が太刀を抜き、御隨身等を取り籠めて打擲したとされるものであり、『平家物語』諸本における殿下乗合にも類似した出来事である。『源平盛衰記』では、この出来事を「平家ノ乱行ノ初」とし（傍線部②6）、清水寺焼失の後、六波羅に御幸した後白河院に見参しなかつ

た清盛の無礼を「平家ノ狼藉ノ第二度也」として、他本とは異なる位置づけをしている。そしてそれを非難する人物として、西光がはじめて登場するのである。

『平家物語』諸本に共通して、後白河院は還御の後、流言について言及する。

一院ハ六波羅ヨリ還御ノ後、疎又近臣按察使入道資賢ヲ始テ、人々御前ニ候ハレケルニ、仰ノ有ケルハ、「平家追討トハ何者カ云出シケルヤラン。加様ノ事ハ浮説ナレ共、世ノ大事ニ及ブ也」ト被仰ケレバ、諸人口ヲ閉テ物申事ナシ。西光法師折節御前近ク候ケルガ、

⑲「天ニ口ナシ、人代テイヘリ。驕テ無礼レバ是天罰ノ徴ナリ。清盛以外ニ過分也。亡ビん瑞相ニヤ」ト申ケレバ、人々聞之、壁ニ耳アリトテ拔足シテ退出スル族モ有ケリ。

(『源平盛衰記』巻第二「清水寺縁起」)

法皇還御ノ後、ウトカラ又近習者共、御前ニ候ケル中ニ、按察使入道資賢モ候ハレケリ。法皇、「サルニテモ不思議ノ事云出ツル者哉。何ナル者ノ云出ツラム」ト仰有ケレバ、西光法師が候ケルガ、⑳『天ニ口ナシ。人ヲ以テイハセヨ』トテ、以ノ外ニ平家過分ニ成行ケバ、天道ノ御計ニテ」ト申ケレバ、「此事由ナシ。『壁ニ耳アリ』ト云。オソロシク」トゾ、人々申ケル。

(延慶本『平家物語』第一本「山門大衆清水寺へ寄テ焼事」)

一院還御の後、御前にうとからぬ近習者達、あまた候はれけるに、「さても不思議の事を申出したるものかな。露もおぼしめしよらぬものを」と仰ければ、院中のきりものに西光法師といふものあり。境節御前ちかう候けるが、「㉑「天に口なし、人をもつて言はせよ」と申。平家以外に過分に候あひだ、天の御ばからひにや」とぞ申ける。人く、「此事よしなし、壁に耳あり。おそろしく」とぞ申あはれける。

(覚一本『平家物語』巻第一「清水寺炎上」)

延慶本『平家物語』では、山門の大衆の下落について、後白河院が平家追討を大衆に命じたためとされたことを、後白河院自身は「サルニテモ不思議ノ事云出ツル者哉」としている。覚一本『平家物語』も同様である。西光はそれに対して、「天ニ口ナシ。人ヲ以テイハセヨ」トテ、以ノ外ニ平家過分ニ成行ケバ、天道ノ御計ニテ」と(傍線部㉑・覚一本『平家物語』では傍線部㉑)、平家が以ての外に「過分」であるゆえに、天の計らいによってそのような流言が飛んだと述べている。

『源平盛衰記』においても、後白河院は「平家追討トハ何者カ云出シケルヤラン」と述べ、自身の命によるものではないとしている。さらに後白河院の「加様ノ事ハ浮説ナレ共、世ノ大事ニ及ブ也」という発言(10)に、人々が口を閉じるなか、西光が「天ニ口ナシ、人代テイヘリ。驕テ無礼レバ是天罰ノ徴ナリ。清盛以外ニ過分也。亡ビん瑞相ニヤ」と語っている(傍線部

㉑)。「天ニ口ナシ、人代テイヘリ」という言葉は、他本と同様である。だが留意すべき点は、それに続く「驕テ無礼レバ是天罰ノ徴ナリ。清盛以外ニ過分也。亡ビん瑞相ニヤ」という発言である。西光は平家追討の流言を「天罰ノ徴」と捉え、その理由を「驕テ無礼レバ」としている。

先述のとおり、『源平盛衰記』では、ここに至るまでにすでに「平家ノ乱行ノ初」とされる、基盛の郎等が基実の御隨身等を打擲した出来事と、いまむなしく還御した後白河院に対する「平家ノ狼藉ノ二度」、すなわち六波羅に御幸した後白河院に見参しなかつた清盛の無礼が描き出されておき、西光の発言は『源平盛衰記』におけるこのような他本とは異なる位置づけにつながるものとなっている。

また、他本において平家が以ての外に「過分」とされている(11)箇所が、『源平盛衰記』においては「清盛以外ニ過分也」と、清盛が以ての外に「過分」であるとされている。先述のとおり、『源平盛衰記』では、その後の清盛と西光の対決において、「過分」であるのは清盛の方ではないかという反問に焦点が当てられる。そしてその反問によって清盛は西光の居る場所まで引き下ろされ、「過分」な振舞をして亡びた西光に対する「相構テ人ハ身ノ程ノ分ヲ相計テ可振舞」という評言は反転して清盛にも向けられるものである。最終的に清盛とのそのような対決が待つ西光が、物語にはじめて登場する場面において、「清盛は過分である」と語るのである。さらに、ここで西光は「亡ビン瑞相ニヤ」と語っている。基盛の郎等が基実の御隨身等を打擲した出来事を「平家の乱行の初」とする『源平盛衰記』では、殿下乗合の報復として清盛が基房を襲撃させた出来事を「平家の悪行のはじめ」とせず、また、「代ノ乱ケル根元」「世の乱れそめける根本」とせずに、殿下乗合を「然ベキ運ノ傾ベキ符シニヤ」として描き出す。西光の「亡ビン瑞相ニヤ」という発言は、『源平盛衰記』における殿下乗合の他本とは異なる位置づけにつながるものとなっているのである。

五、殿下乗合

『源平盛衰記』では、殿下乗合の位置づけだけでなく、その描写もまた他本とは異なるものとなっている。

其中③④然ベキ運ノ傾ベキ符シニヤ、同二年七月三日、③①法勝寺へ御幸アリケレバ、當時ノ攝祿基房公号松殿參給ケリ。③②還御ノ後、殿下三條京極ヲ過給ケルニ、③③三條面二女房ノ車アリ。夕陽ノ影ニ車ノ中透テ曇ナク見透、烏帽子著タル者乗タリケリ。居飼御厩ノ舍人等、車ヨリ下ベキ由責ケルニ、③④聞入ズシテヤリ過ントシケルヲ、狼藉也トテ、前ノ簾、並ニ下スタレヲ切落タリケルニ、葛ノ袴ヲ著タル男アリ。③⑤車ヲ馳テ逃ケルヲ、追懸テ散々ニ打ケリ。車六角京極ノ小家ニヤリ入ニケリ。件ノ男ハ太政入道ノ孫、越前守資盛也ケリ。③⑥彼人笛ヲ習ハントテ、式部大輔雅盛ガ家ニ行タリケルガ、帰ケル間參會ニケリ。資盛帰テ父小松殿ニシカ申ケレバ、「御出ニ參會テ車ヨリ下ザリケルコソ尾籠ナレ。梅檀樹ハ二葉ヨリ芳クシテ四十里ノ伊蘭林ヲ翻シ、頻伽鳥ハ卵ノ中ニアレドモ、其聲諸鳥ニ勝タリトイヘリ。幼稚ト云ハ五六歳ノ時也。汝十歳ニ餘レリ。争礼儀ヲ存ザラン。人ニ上下ノ品アリ、官ニ浅深ノ法アリ。政ハ横ナキヲ基トシ、礼ハ敬ノミヲ以テ本トセリ。傍輩猶以敬ベシ、況於攝政家ヲヤ。加様ノ事ニコソ世ノ大事モ引出セ、供シタル侍共ガ、物ニ心得ネバコソ、係狼藉ヲモ現ジ、無礼ノ目ニモ合」トテ、大ニシカリ被教訓ケリ。③⑦殿下ノ御供ノ者モ平将ノ孫トモ知ズ、資盛ガ供ノ者モ殿下ノ御車トモ不知ケルニヤ、係事出来レリ。殿下此事ヲ聞給テ、居飼

御厩舎人等、平大納言重盛ノ許へ被召渡ケリ。其上藏人右少辨兼光ヲ御使トシテ、事ノ由ヲ被謝仰ケレバ、大納言大ニ畏申サレテ、居飼舎人等ヲバ則返進タリケレドモ、ナホ居飼御舎人各三人、檢非違使基廣ニ預給。御隨身四人、御厩ニ下サレケル。内ニ府生秦兼清、政所ニ下サル。彼兼清ハ制止ヲ加ヘタリケルニ依テ、被行輕罪ケリ。前駟七人追却セラレケルニ、入道孫ニ子細ヲ問ケレバ、資盛有ノ儘ニ申。入道安カラズ思、大ニ嗔テ宣ケルハ、「縦攝政關白ニオハス共、淨海ガ孫トイハン者ニハ、ナドカ一度ノ可無芳心。家貞必資盛ガ耻ヲ雪ゲ」トゾイハレケル。

(『源平盛衰記』卷第三「資盛乘會狼藉」)

代ノ乱ケル根元ハ、去嘉応二年十月十六日ニ、小松内大臣重盛公二男、新三位中将資盛、越前守タリシ時、^{③⑧}蓮台野ニ出テ小鷹狩ヲセラレケルニ、小侍ニ三十騎バカリ打ムレテ、ハヒタカアマタスヘサセテ、鶉、雲雀追立テ、終日カリ暮サレケリ。折節雪ハハダレニ降タリ、枯野ノ景気面白カリケレバ、^{③⑨}夕日山ノ端ニ傾テ、京極ヲ下リニ被帰ケリ。其時ハ松殿基房撰祿ニテ御座ケルガ、院御所、法住寺殿ヨリ、中御門東洞院ノ御所へ還御成ケルニ、六角京極ニテ殿下ノ御出ニ、資盛鼻ヅキニ参リ会レタリ。^{④⑩}越前守、誇リ勇テ代ヲ世トモセザリケル上、召具タル侍共、皆十六七ノ若者ニテ、礼儀骨法ヲ弁タル者ノ一人モ無リケレバ、殿下ノ御出トモ云ハズ、一切下馬ノ礼儀モ無リケレバ、前駟、御隨身、頻リニ是ヲイラツ。「何者ゾ、御出ノ成ルニ、洛中ニテ馬ニ乗ル程ノ者ノ下馬仕ラザルハ。速カニ罷留テ下リ候へ」ト申ケレドモ、^{④⑪}更ニ耳ニ不聞入、ケチラシテ通りケリ。闇キ程ニテハアリ、^{④⑫}御共ノ人々モツヤクノ入道ノ孫トモ不知ケレバ、資盛朝臣以下馬ヨリ引落、散々ニセラレニケリ。匍々六波羅へ逃帰リ、「此事、穴賢コ披露スナ」ト警メラレケレドモ、隠レ無リケリ。入道ノ最愛ノ孫ニテハヲハシケリ、大ニ怒テ、「設ヒ殿下ナリトモ、争カ入道ガアタリヲバ憚リ思給ハザルベキ。少キ者ニ左右無恥辱ヲ与ヘテヲハスルコソ、遺恨ノ次第ナレ。此事、思知セ申サデハ、エコソ有マジケレ。カゝル事ヨリ人ニハアナヅラルゝゾ。殿下ヲ怨奉バヤ」ト宣ケレバ、

(延慶本『平家物語』第一本「近習之人々平家を嫉妬事」「平家殿下に恥見セ奉ル事」)

世の乱れそめける根本は、去じ嘉応二年十月十六日、小松殿の次男、新三位中将資盛卿、其時はいまだ越前守として十三になられけるが、^{④⑬}雪ははだれに降ツたりけり、枯野のけしき、誠に面白かりければ、わかき侍ども卅騎ばかり召し具して、蓮台野や紫野・右近馬場にうち出て、鷹どもあまたすゑさせ、うづら・雲雀をおツたてく、終日にかり暮し、^{④⑭}薄暮に及で六波羅へこそ帰られけれ。其時の御撰祿は、松殿にてましくけるが、中御門東洞院の御所より、御参内ありけり。郁芳門より入御あるべきにて、東洞院を南へ、大炊御門を西へ御出なる。資盛朝臣、大炊御門猪熊にて、殿下の御出に鼻づきに参りあふ。御供の人々、「なに者ぞ、狼藉なり。御出のなるに、のりものよりおり候へく」といらでけれ共、^{④⑮}余にほこりいさみ、世を世ともせざりけるうへ、召し具したる侍ども、皆廿より内のわか者どもなり。礼儀骨法弁へたる者一人もなし。殿下の御出ともいはず、一切下馬の礼儀にも及ばず、かけやぶツて通らむとするあひだ、^{④⑯}つやくノ入道の孫ともしらず、ま

た少くは知たれ共、そら知らずして、資盛朝臣をはじめとして、侍ども皆馬よりとつて引落し、頗る恥辱に及けり。資盛朝臣、はふく六波羅へおはして、祖父の相国禅門に、此由うつたへ申されければ、入道大にかつて、「たとひ殿下なりとも、浄海があたりをば、憚り給ふべきに、をさなきものに、左右なく恥辱を与へられけるこそ、遺恨の次第なれ。かゝる事よりして、人にはあざむかるゝぞ。此事思知らせてまつらでは、えこそあるまじけれ。殿下を恨奉らばや」との給へば、
(覚一本『平家物語』巻第一「殿下乗合」)

『源平盛衰記』では、殿下乗合を「運ノ傾ベキ符シ」と位置づける(傍線部⑩)ほか、その描写についても延慶本『平家物語』や覚一本『平家物語』とは異なるものとなっている。『源平盛衰記』における殿下乗合の描写は、『玉葉』に類似したものである。『玉葉』の記事は、以下のとおりである(12)。

今日④⑦法勝寺御八講初也、有御幸、撰政被参法勝寺之間、④⑧於途中越前守資盛重盛卿嫡男、④⑨乗女車相逢、而撰政舍人・居飼等打破彼車、事及恥辱云々、撰政帰家之後、以右少弁兼光為使、相具舍人・居飼等、遣重盛卿之許、任法可被勘当云々、互相返上云々、

(『玉葉』嘉応二年七月三日条)

人々云、乗逢事、大納言殊鬱云々、仍撰政上臆隨身并前駆七人勘当、隨身被下厩政所等云々、又舍人・居飼給檢非違使云々、
(『玉葉』嘉応二年七月五日条)

曾我良成氏は、「殿下乗合事件に関する部分では『源平盛衰記』は諸本のなかで一番史実に近い記述をしている」と指摘している(13)が、留意すべき点は、史実に近い描写が用いられながら、『源平盛衰記』において「然ベキ運ノ傾ベキ符シニヤ」とされる殿下乗合がどのように描き出されているかということである。

延慶本『平家物語』では、「小松内大臣重盛公二男、新三位中将資盛、越前守タリシ時、蓮台野ニ出テ小鷹狩ヲセラレケルニ」と始まり、「其時ハ松殿基房撰禄ニテ御座ケルガ」として、まづ資盛側の描写、つぎに基房側の描写と、視点を切り替える形で描かれている。覚一本『平家物語』も同様である。一方、『源平盛衰記』では、「法勝寺へ御幸アリケレバ、當時ノ攝禄基房公号松殿参給ケリ。還御ノ後、殿下三條京極ヲ過給ケルニ、三條面ニ女房ノ車アリ」と始まっている。「法勝寺へ御幸アリケレバ、當時ノ攝禄基房公号松殿参給ケリ」(傍線部⑪)のは、『玉葉』の「法勝寺御八講初也、有御幸、撰政被参法勝寺之間」(傍線部⑫)に近似しているが、『源平盛衰記』では「女房ノ車」に乗る人物が資盛であることが「車六角京極ノ小家ニヤリ入ニケリ」に至るまで明らかにされず、一貫して基房側の視点から描かれている。

延慶本『平家物語』や覚一本『平家物語』では傍線部⑬・覚一本『平家物語』では傍線部⑭、その乗りつたとされ(延慶本『平家物語』では傍線部⑮・覚一本『平家物語』では傍線部⑯)、その乗り物は馬であるが、『源平盛衰記』では、「笛ヲ習ハントテ、式部大輔雅盛ガ家ニ行タリケルガ、帰ケル間」とされ(傍線部⑰)、その乗り物は「女房ノ車」である。これは『玉葉』の「女車」

(傍線部④)と同様であるが、基房が行き会ったこの「女房ノ車」に夕日が当たり、「車ノ中透テ曇ナク見透」いたことによって、そこに乗っているのは「烏帽子著タル者」、すなわち男であることが判明する(傍線部③)。延慶本『平家物語』や覚一本『平家物語』においても、「夕日山ノ端ニ傾テ」「薄暮に及で」とあり(延慶本『平家物語』では傍線部③・覚一本『平家物語』では傍線部④)、夕方に起こった出来事とされているが、『源平盛衰記』においては、その夕方という時間設定によって、「女房ノ車」に乗っている人物が男であることが露わになり、大事に発展してゆくのである。「法勝寺へ御幸アリケレバ、當時ノ攝祿基房公号松殿参給ケリ」として『玉葉』の記事に近似しながら、『玉葉』では「於途中」の出来事とされる(傍線部④)一方、『源平盛衰記』では「還御ノ後」の出来事とされる(傍線部②)のは、このような展開のためであろう。

また、『源平盛衰記』では、下車の礼をとるよう命じられるが、資盛は「聞入ズシテヤリ過ント」する(傍線部③)。下車の礼をとらない点で資盛に非はあるが、延慶本『平家物語』や覚一本『平家物語』における「誇リ勇テ代ヲ世トモセザリケル上、召具タル侍共、皆十六七ノ若者ニテ、礼儀骨法ヲ弁タル者ノ一人モ無リケレバ、殿下ノ御出トモ云ハズ、一切下馬ノ礼儀モ無リケレバ」「更ニ耳ニ不聞入、ケチラシテ通りケリ」(傍線部④①・覚一本『平家物語』では傍線部④②)のような攻撃的な行為はなく、「車ヲ馳テ逃ケル」資盛を、「追懸テ散々ニ打ケリ」とされている(傍線部⑤)。さらに、延慶本『平家物語』では「御共ノ人々モツヤクノ入道ノ孫トモ不知ケレバ、資盛朝臣以下馬ヨリ引落、散々ニセラレニケリ」とされ(傍線部④)、覚一本『平家物語』では「つやくノ入道の孫ともしらず、また少とは知たれ共、そら知らずして、資盛朝臣をはじめとして、侍ども皆馬よりとつて引落し、頗る恥辱に及けり」とされる(傍線部④)が、『源平盛衰記』では「殿下ノ御供ノ者モ平将ノ孫トモ不知、資盛ガ供ノ者モ殿下ノ御車トモ不知ケルニヤ」として(傍線部⑦)、資盛側の攻撃性は低いものとなっている。先述のとおり、延慶本『平家物語』や覚一本『平家物語』において資盛は狩りに行った帰りであったとされるのに対し、『源平盛衰記』においては笛を習いに行つた帰りであったとされる点も同様であろう。そして『源平盛衰記』では、『玉葉』と同様に、基房の居飼や舍人、隨身や前駆の処分が行われた。そこに清盛が現れ、報復を命じる。すなわち『源平盛衰記』では、重盛と基房の間で解決が図られたにもかかわらず、清盛は報復として基房を襲撃させたことになる。

『源平盛衰記』において「運ノ傾ベキ符シ」と位置づけられる殿下乗合の末尾は、以下のとおりである。

攝政殿角事ニ合セ給ケレバ、廿五日ニ院ノ殿上ニテ、御元服ノ定アリ。サテ有ベキナラネバ、攝政殿ハ十二月九日兼宣旨ヲ蒙ラセ給テ、十四日ニ太政大臣ニナラセ給フ。十七日ニハ御悦申アリ。此ハ明年御元服ノ加冠ノ料也。⑤平家ノ一類以外ニ苦咲テゾ見エケル。

(『源平盛衰記』巻第三「殿下事會」)

殿下カク事ニアハセ給ケレバ、廿五日、院ノ殿上ニテゾ、御元服ノ定ハ有ケル。サリトテサテ有ベキナラネバ、攝政殿ハ十二月九日、兼テ宣旨蒙セ給テ、十四日ニ太政大臣ニナラセ

給。是ハ明年御元服ノ加冠ノ料也。同十七日御拝賀アリ。⑤ユ、シクニガリテゾ有ケル。

(延慶本『平家物語』第一本「藏人大夫高範出家之事」)

是によつて、主上御元服の御さだめ、其日はのびさせ給ぬ。同廿五日、院の殿上にてぞ、御元服のさだめはありける。摂政殿、さてもわたらせ給べきならねば、同十二月九日、兼宣旨をかうぶり、十四日、太政大臣にあがらせ給ふ。やがて同十七日、慶申ありしかども、⑥世中は猶にがくしうぞみえし。

(寛一本『平家物語』巻第一「鹿谷」)

報復として基房が襲撃されたことよつて高倉天皇の元服定は延引して行われ、高倉天皇の元服・加冠のため基房は太政大臣となった。その昇任の慶申が行われたが、延慶本『平家物語』では「ユ、シクニガリテゾ有ケル」(傍線部⑤)、寛一本『平家物語』では「世中はなほにがにがしうぞみえし」とされる(傍線部⑥)。一方、『源平盛衰記』では「平家ノ一類以外ニ苦咲テゾ見エケル」とされている(傍線部⑦)。『源平盛衰記』において、「然ベキ運ノ傾ベキ符シニヤ」とされる殿下乗合は、基房の昇任を苦笑いする平家一門の姿で閉じられているのである。

六、西光と静憲

『源平盛衰記』では、治承三年政変に際して基房が後白河院のもとに院参し、殿下乗合に言及する場面が見られる。

去程ニ同十四日、太政入道福原ヨリ數千騎ノ軍兵ヲ相具シテ上洛、何ト聞分タル事ハナカリ侍ケレ共、京中貴賤上下東西ニ走り迷テ物騒シ。或ハ朝家ヲ可奉怨トモ聞エケリ。或ハ公卿殿上人ヲ流シ失ベシトモ私語ケリ。其口サマハ、當時ノ關白松殿ヒソカニ⑧院参シテ奏申サレケルハ、「清盛入道ガ上洛ハ基房事ニ逢ベキ由、内々ツゲ知スル事侍リ。⑨其故ハ、去嘉應ニ、小松ノ資盛ガ乗會ノ事ニ、入道憤テ無ナルベキニテ侍リケルヲ、父ヲ内府ガ様々ニ教訓シ申ケルニ依テ、事故ナク罷過候ケリ。悪キ事ヲ制シ諫侍リシ内府ハ薨ジ侍リヌ。今ハ憚ル處ナク、其遺恨ヲムクハントニテ候也。イカガ仕リ侍ルベキ。朝夕ニ拝シ進スル君ニモ奉別、住ナレシ都ヲ出サレテ、知ザル旅ニサスラハン事コソ心ウク思侍レ。御前ニ參ゼン事モ是ヲ最後ト存ズレバ」トテ、ハラノト泣給ヒ袖ヲ顔ニアテ給ヘバ、法皇モ叡慮モノウゲニテ、「臣下何ノ咎有テカサホドノ罪ニ行ナハルベキ。去バ朕トテモ安穩ナルベシトモ不覺」トテ、又龍眼ヨリ御涙ヲ落サセ給フ。關白殿此御有様ヲ見進ラセ不堪思召ケレバ出給ヌ。

(『源平盛衰記』巻第十一「大地震」)

十四日、大相国禅門、数千ノ軍兵ヲ相具テ福原ヨリ上リ給トテ、京中ナニト聞別タル事ハナケレドモ、何ナル事ノ有ムズルヤラムトテ、高モ賤モサワギケル程ニ、入道朝家ヲ可奉恨之由、披露ヲナス。上下万人、コハイカニトアキレ迷ヘリ。關白殿モ内々被聞食事ヤ有ケム、⑩御参内アツテ、「入道相国入洛ノ事ハ、偏ニ基房ヲ可滅結構ト承候。イカナル目ヲカ見候ハムズラム」トテ、ヨニ御心細ゲニ奏セサセ給ヘバ、主上モ以外ニ叡慮ヲ驚サセオハシ

マス。「大臣ノイカナル目ヲモ見ラレムハ、偏ニ丸ガ身上ニテコソアラメ」トテ、御涙グマセ給ゾカタジケナキ。(延慶本『平家物語』第二本「太政入道朝家ヲ可奉恨之由事」)

同十四日、相国禅門、此日ごろ福原におはしけるが、何とかおもひなられたりけむ、数千騎の軍兵をたなびいて、都へ入り給ふ由聞えしかば、京中何と聞わきたる事はなけれ共、上下恐れをのゝく。何もの申し出したりけるやらん、「入道相国、朝家を恨み奉るべし」と披露をなす。関白殿内ときこしめさるゝ旨や有けん、急ぎ^{⑤⑥}御参内あつて、「今度相国禅門入洛の事は、ひとへに基房亡すべき結構にて候也。いかなる目に逢べきにて候やらん」と奏せさせ給へば、主上大におどろかせ給て、「そこにいかなる目にもあはむは、ひとへにたゞわがあふにてこそあらんずらめ」とて、御涙を流させ給ふぞ忝き。

(覚一本『平家物語』卷第三「法印問答」)

清盛が数千騎の軍兵を率いて福原から上洛し、京中は騒ぎとなる。その際、他本では、基房が参内し、高倉天皇に「入道相国入洛ノ事ハ、偏ニ基房ヲ可滅結構ト承候」と語っている(傍線部^{⑤⑥}・覚一本『平家物語』では傍線部^{⑤⑥})。一方、『源平盛衰記』では、基房が院参し、後白河院に「清盛入道ガ上洛ハ基房事ニ逢ベキ由、内々ツゲ知スル事侍リ」と語る(傍線部^{⑤⑥})。さらに基房は「其故ハ、去嘉應ニ、小松ノ資盛ガ乗會ノ事ニ、入道憤テ無ナルベキニテ侍リケルヲ、父ヲ内府ガ様々ニ教訓シ申ケルニ依テ、事故ナク罷過候ケリ。悪キ事ヲ制シ諫侍リシ内府ハ薨ジ侍リス。今ハ憚ル處ナク、其遺恨ヲムクハントニテ候也」と(傍線部^{⑤⑥})、殿下乗合に言及し、重盛亡きいま清盛がその遺恨を晴らそうとしていると語るのである。

その治承三年政変に際して後白河院からの使者として清盛のもとに向かった人物が静憲である。清盛と対面した静憲の発言のなかに、以下のような箇所がある。

貞観政要ノ裏書ニ思合ル事アリ。仙源雖澄、烏浴濁流トテ、仙宮ヨリ流出ル河ハ仙人集テ仙葉ヲ洗ス、グ故ニ、下流ヲ汲者マデモ必長命也。而ヲ其河ノ中間ニ、陰山ノ鳥其流ヲアブル時、水還テ毒ト変ズトイヘリ。其様ニ法皇ノ政徳ハ仙宮ノ水ノ如ク、萬庶ヲ哀テ其源ヲ澄シ御座セドモ、執申人下流ヲ濁シテ、入道殿ニ惡様ニ申入タリト覺侍リ。努々御恨アルマジキ御事ナリ。但何様ニモ院中ノ御奉公ヲ思召止ラン事能々御思慮有ベキ也。世ノ為御為ニツラク、愚案ヲ廻スニ、明王為一人不枉其法、日月為一物不暗其明ト云文アリ。通三ノ主明一ノ君爭御徳政ニ私ヲ存御座ベキナレドモ、智者千慮有一失、愚者千慮有一徳ト申事モ侍バ、タトヒ叡慮御アヤマリ有テ千萬ニ一ツ人望ニ背、法ニ相違スル事侍バ、臣下ノ御身トシテハ何度モ我御アヤマリナキ旨ヲ陳ジ可被申。是忠臣ノ法也。君雖不為君、臣以不可不為臣トイヘリ。其二小賢キ申状恐ナル事ニテハ候ヘドモ、法皇ハ君ナリ、入道殿ハ臣也。下トシテ上ヲ奉恨、臣下トシテ悩君給ハン事、只仁義ヲ忘レ給ノミニアラズ、恐クハ天地ノ御トガメ不可遁給。世ヲ不遁家ヲ不捨シテ居位貪禄ナガラ、御出仕ヲ停止シ給ハン事、天地ノ御意計難。尚モ能々御計ヒアラバ且神明モ納受ヲタレ御家門繁昌ノ基ニテ侍ルベシ。

(『源平盛衰記』卷第十一「静憲入道問答」)

この静憲がはじめて登場するのは、鹿ヶ谷謀議の場面である。ただし『源平盛衰記』では、先述のとおり、静憲が後白河院に対し、参加しないよう諫言する。

新大納言成親卿ハ、日比内々相語輩偷ニ催集テ、鹿谷ニ衆會シ、一日酒宴シテ軍ノ評定アリ。法皇モ忍テ御幸有ベカリケルガ、故少納言入道信西ノ子息、静憲法印ヲ召テ、此事を被仰含ケリ。法印ハ、「努々不可思食寄御事也。伏羲神農ノ聖人タル、猶瓊樹根ヲ別ニシ、軒轅虞舜ノ明王タル、又玉牀種ヲ分ツ、夏殷周晋春ノ花、芬馥氣種々ニ含、梁陳隋唐ノ秋月、清光區ニ朗也。夫天下ヲ治事如此。況ヤ君ハ忝モ地神五代ノ御苗裔ヲ受サセ御座シテ、人皇億歳ノ寶祚ヲ蹈給ヘリ。逆臣背キ奉ラバ、忽ニ天罰ヲ蒙テ、兵略ヲ廻ラカサズト云共、自滅亡セン事疑アラジ。日月為一物不暗其明明王為一人不曲其法ト云事侍リ。成親卿一人ガ勸ニヨツテ、萬人悩乱ノ災ヲ致サン事、豈天地ノ心ニ叶ハンヤ。全政道有徳ノ基ニ非ズ。コハ浅増キ御企也」ト、大ニ諫申ケレバ、法皇ノ御幸ハ無リケリ。

（『源平盛衰記』巻第四「鹿谷酒宴静憲止御幸」）

『源平盛衰記』において、鹿ヶ谷謀議に関して後白河院に諫言する静憲の言葉は、治承三年政変に際して清盛と対面し語ったものに類似しており、同様の静憲の姿が描かれていると言えよう（14）。

静憲の諫言によって後白河院が参加しなかったことは、行綱の密告においても語られている。それについて語られる箇所は、以下のとおりである。

何ノ弓矢取ト云事ナク、當時一旦ノ君ノ御糸惜ミニ誇テ、西光ガ我一人ト事行シテ申振舞シ事、下刻上之至也ト不思議ニ存シ侍キ。法皇ノ御幸モ成ベキニテ候ケルヲ、静憲法印ノ様々コハ浅猿キ御事也、天下ノ大事只今出来ナン、イカニ人勸申トテモ、國土ノ主トシテ争カ一天ノ煩ヲ引出シ御坐スベキナンド、諫申ケルニ依テ、御幸ハ止ラセ給ヌトゾ私語申候シ。

（『源平盛衰記』巻第五「行綱中言」）

『源平盛衰記』では、行綱の密告において、「何ノ弓矢取ト云事ナク、當時一旦ノ君ノ御糸惜ミニ誇テ、西光ガ我一人ト事行シテ申振舞シ事、下刻上之至也ト不思議ニ存シ侍キ」という西光に対する批判に続いて、「法皇ノ御幸モ成ベキニテ候ケルヲ、静憲法印ノ様々コハ浅猿キ御事也、天下ノ大事只今出来ナン、イカニ人勸申トテモ、國土ノ主トシテ争カ一天ノ煩ヲ引出シ御坐スベキナンド、諫申ケルニ依テ、御幸ハ止ラセ給ヌ」と語られている。先述のとおり、西光に対する批判は、猿楽での振舞にとどまるものではなく、讒奏して座主流罪に至るこれまでの振舞に対するものであり、後白河院に讒言する西光の姿と、後白河院に諫言する静憲の姿がここに並べられている。そしてこの二人は、西光は鹿ヶ谷謀議に関連して、静憲は治承三年政変に際して、いずれも清盛と対峙した人物である。さらに『源平盛衰記』では、清盛と対峙する西光と静憲には、対照性が見出されるのである。

『源平盛衰記』において、後白河院からの使者として西八条に向かった静憲が清盛と対面した

場面は、以下のように描かれている。

法印ハ我モ四十二人ノ罪過ノ内ニ入タルヨシ、内々聞ニ、^⑤新大納言ノ様ニ引張ナドセンズルニヤト心迷シケレバ、足振テ縁ノ上へ昇リ煩給ヘリ。震々中門ノ廊ニ御座ケレ共ウツ、心ナシ。入道大ニ嗔レル躰ニテ、爰ニテ対面セラレタリ。宣ケルハ、「ヤ、法印御房、御邊ハ物ニ心得給テ、成親卿ガ謀叛ノ時、鹿谷ノ御幸ヲモ申止ラレタリシト承レバ、呼返奉テ申候ゾ、

〔『源平盛衰記』卷第十一「静憲入道問答」〕

清盛と静憲の問答の冒頭において、清盛は「御邊ハ物ニ心得給テ、成親卿ガ謀叛ノ時、鹿谷ノ御幸ヲモ申止ラレタリシト承レバ、呼返奉テ申候ゾ」と述べ、静憲が鹿ケ谷謀議に関して後白河院に諫言したことに言及しているが、呼び返された静憲は「新大納言ノ様ニ引張ナドセンズルニヤト心迷シケレバ、足振テ縁ノ上へ昇リ煩給ヘリ。震々中門ノ廊ニ御座ケレ共ウツ、心ナシ」とされている（傍線部^⑤）。いずれの諸本においても、静憲は一旦退出した後に呼び返されているが、静憲が呼び返された際のこのような描写は、他本には見られないものである。静憲は「新大納言ノ様ニ引張ナドセンズルニヤ」と鹿ケ谷謀議が明るみに出た際のことを思い出しながら、足を震わせて中門の縁に上ったとされているが、静憲が上ったこの中門の縁こそ『源平盛衰記』における清盛と西光の対決の舞台であった。先述のとおり、『源平盛衰記』では、大庭に引き据えられた西光と中門の縁に立つ清盛の姿が描かれ、「過分」であるのは清盛の方ではないかという西光の反問が、一段高い中門の縁に立っていた清盛を西光の居る大庭まで引き下ろしていた。静憲はその中門の縁に上り、清盛と対峙するのである。この場所は西八条の邸であるが、治承三年政変では、清盛が福原から上洛し、事が起こる。そして『源平盛衰記』では、先述のとおり、行綱の密告は福原で行われており、清盛が上洛して西八条の邸に入り、人々を捕縛してゆく。これは他本とは異なり、『愚管抄』と同様であるが、『源平盛衰記』においては、鹿ケ谷謀議が明るみに出た際と治承三年政変の際のいずれも、清盛が福原から上洛し京中の騒ぎとなって事が起こるという同じ展開となるのである。

また、鹿ケ谷謀議が明るみに出て人々が捕縛された後、重盛が後白河院の幽閉を止めた烽火の沙汰の末尾は、以下のとおりである。

内大臣モ此意ヲ得給ケルニヤ、今度事無トテ後日ノ催シニ、悠々ヲ不存トハ仰セケルニコソ。實ニ君ノ為ニハ忠勤アリ、父ノ為ニハ孝道ヲ存ズ。臣以不為臣不可有、子以不為子不可有ト宣ヘル、文宣王ノ言ニ不相違ゾアリケル。法皇聞召テ、「今ニ不始事ト云ナガラ、怨ヲバ恩ヲ以テ被報ヌ、返々モ重盛ガ心ノ中コソハヅカシケレ。勁松彰於歳寒貞臣見於國危ト云ヘリ。耻シクモ憑シクモ思食臣也。南無天照太神、正八幡宮、春日、日吉の神明、願ハ小松内府ヨリ先立テ、朕ガ命ヲ召給ヘ」トテ、龍眼ヨリ御涙ヲ流サセ給ケルゾ忝ナキ。東方朔ガ詞ニ、水至清無魚、人至察無友ト云ヘリ。嘉應ノ相撲ノ節會ニ、大将ニテ右ノ片屋ニ事行シ給ケルニ、見物ノ中ニ立タリケル人ノ申ケルハ、「果報冥加コソ目出クテ、近衛大将ニ至リ給フトモ、容儀心操サヘ人ニ勝レ給ケル難有サヨ。但^⑥此國ハ小國ナリ、内大臣ハ大果報ノ

人也。末代ニ相應セズシテトク失給フベキニヤ」ト申タリケルガ、露タガハザリケルコソ不
思議ナレ。〔『源平盛衰記』卷第六「幽王褒姒烽火」〕

内大臣夷ニハサセル事モ聞出サレザリケレドモ、父ノ入道ヲ諫申サレツル詞ニ随テ、我身
ニ勢付歟、付又歟ノ程ヲモシリ、且ハ又父ト軍ヲセムトニハ非ズ、父ノ謀叛ノ心ヲヤ思宥給
トノ謀ナルベシ。内大臣ノ存知之旨、文宣公ノ宣ケルニ違ハズ。君ノ為ニハ忠アリ、父ノ為
ニハ孝アリ。哀、ユヽシカリケル人カナ。法皇此事ヲ聞召テ、「今ニ始メ又事ナレドモ、重
盛ガ心ノ中コソ恥シケレ。讎ヲバ以恩報ゼヨト云文アリ。丸ハハヤ讎ヲバ恩ニテ報ゼラレニ
ケリ」ト仰アリケルトゾ聞ヘシ。

（延慶本『平家物語』第一末「重盛軍兵被集事付周幽王事」）

実にはさせる事をも聞き出されざりけれども、父をいさめ申されつる詞にしたがひ、我身
に勢のつくかつかぬかの程をも知り、又父子軍をせんとはあらね共、かうして入道相国の
謀反の心をもや、やはらげ給ふとの策也。

「君君たらずと云とも、臣もつて臣たらずンばあるべからず。父父たらずと云ふ共、子も
つて子たらずンば有べからず。君のためには忠あつて、父のためには孝あり」と、文宣王の
の給ひけるにたがはず。君も此よしきこしめして、「今にはじめぬ事なれ共、内府が心のう
ちこそはづかしけれ。怨をば恩をもつて報ぜられたり」とぞ仰ける。「果報こそめでたう
て、大臣の大將にいたらめ、容儀体はい人に勝れ、才智・才学さへ世に超えたるべしやは」
とぞ、時の人と感じあはれける。「国に諫る臣あれば、其国必ずやすく、家に諫る子あれ
ば、其家必ずたゞし」と言へり。上古にも末代にもありがたかりし大臣也。

（覚一本『平家物語』卷第二「烽火之沙汰」）

いずれの諸本においても重盛が称えられているが、『源平盛衰記』では、重盛が早世すること
がその末尾に示されている（傍線部^⑤）。ここで重盛の早世が示されることは、此度は重盛によ
つて後白河院の幽閉が止められたが、重盛亡き後は後白河院の幽閉が止められないこと、すなわ
ち重盛亡き後、治承三年政変において、後白河院の幽閉が行われることを示唆すると言えよう。
『源平盛衰記』においては、先述のとおり、基房が殿下乗合に言及し、重盛亡きいま清盛がその
遺恨を晴らそうとしてしていると語ることとあわせて、これまでの出来事が結びつく形で治承三年政
変が描かれている。

七、治承三年政変

清盛と静憲の問答が終わり、静憲が退出した後、以下のような場面が見られる。

⑤ 法印ハ穴イチジルシキ人ノ心ヤ、今朝ノ對面ノ遅サ無興サノ有様ニ唯今ノ泣様、送礼ノ
躰、説法シスマシタリト咲クゾ思ハレケル。法印出給ケレバ入道モ内ニ入給ヌ。サテ人々申
ケルハ、「聞ツルニ合テアハレサカノシキ人カナ。是程ニ入道ノ泣口説給ハンニハ、我等

ナラバ院中ノ有事無事吐テラシテ追從シテコソ出ベキニ、還テ様々奉教訓、一々ノ返答文々句々面白サレツル者カナ。⑥入道殿ノ日比ノ御憤コトノ外ニ蕩テコソ見エ給ツレ。三分ガ二ハ今ノ案ニテコソ御座ラメドモ、時ニ臨テ然ベクモ申ツゞケ給タレバ、⑥邪雲モ少晴給又ラント覺ルニゾ目出ケレ」ト悦人多カリケリ。肥後守貞能ガ、「道理也。去バ社中ニ僧俗多キ中ニ撰レテ御使ニモ立ラレメ」トテ褒タリケリ。

或本文云、君王治國、忠臣扶君、舩能載棹、々能遣舩ト也。此言思合ラレテ哀也。「静憲法印忠臣トシテヨク君ヲ奉扶事コソ神妙ナレ」ト口々ニコソ感ジケレ。

〔源平盛衰記〕卷第十一「静憲入道問答」

或本文云、「君王治國、忠臣扶君。舩能載棹、々能遣舩」ト云ヘリ。此言思ヒ合セラレテ哀也。「静憲法印忠臣トシテ、能ク君ヲ扶奉リ給ヒヌル事ニコソ神妙ナレ」トテ、口々ニ皆感ジアヘリ。肥後守貞能是ヲ見テ、「穴怖シヤ。入道殿ノアレ程ニ怒リ給テ宣ハムニハ、我等ナラバ、院ノ御所ニ有事、無事、コトヨシ事、申散シテ出ナマシ。少モサワガ又景氣ニテ、返事打シテ被立事ヨ」ト、季貞已下ノ者共是ヲ聞テ、「サレバコソ、院中ニ人々其ノ数多シト云ドモ、其中ニ僧ナレドモエラバレテ、御使ニモ立ラレメ」トゾ、各申ケル。

〔延慶本『平家物語』第二本「院ヨリ入道ノ許へ静憲法印被遣事」〕

いくらも並みぬたる人と、「あなおそろし。入道のあれ程いかり給へるに、ちツとも恐れず返事うちして立たるゝ事よ」とて、法印をほめぬ人こそなかりけれ。

〔覺一本『平家物語』卷第三「法印問答」〕

いずれの諸本においても静憲が称えられているが、『源平盛衰記』では、静憲自身が「説法シスマシタリ」と笑みを漏らしている（傍線部⑨）ほか、清盛と静憲の問答を聞いていた人々が「入道殿ノ日比ノ御憤コトノ外ニ蕩テコソ見エ給ツレ」「邪雲モ少晴給又ラント覺ル」と述べている（傍線部⑩・⑪）。これは『玉葉』の「昨日以法印静賢為御使、両度被陳子細云々、其後頗事似和氣」（『玉葉』治承三年十一月十六日条）（15）に類似したものであり、『源平盛衰記』においては、静憲との問答によって清盛の憤りが和らいだであるうと捉えられたとされている。さらに、清盛のもとから退出した後の静憲の行動は、以下のように描かれている。

牛飼車ヲ遣出シテ、「御所へ仕り候ベキカ、清水ノ御坊へカ」ト申セバ、⑫法印ハ、「夜已ニ深更也。御所ハ定テ御寝ゾ御座アルラン。早旦ニ可参」ト仰ケレバ、小路キリニ東山ヘゾ遣テ行。雲井ニ照ス月影ハ、寒行霜ニ隈モナク、鴨ノ川原ニ鳴千鳥、瀬々ノ波ニゾマガヒケル。五更ノ空モ黎明ニ、⑬清水ノ坊ニ入給フ。

〔源平盛衰記〕卷第十一「金剛力士兄弟」

サテモ法印帰参シテ、太政入道ノ御返事ノ様、委ク奏セラレケレバ、誠ニ入道ノ恨申ス所一事トシテ僻事ナク、⑭道理至極シテ被思食ケレバ、法皇更ニ被仰遣リタル御事モナクシ

テ、「コハイカゞセムズル。猶々モ法印誘テミヨ」トゾ、仰事アリケル。

〔延慶本『平家物語』第二本「院ヨリ入道ノ許へ静憲法印被遣事」〕

法印御所へ参ッて、此由奏聞せられければ、^{⑥⑤}法皇も道理至極して仰下さるゝ方もなし。

〔覚一本『平家物語』卷第三「大臣流罪」〕

延慶本『平家物語』や覚一本『平家物語』では、静憲は後白河院のもとに向かい、清盛との問答を報告する。後白河院は「道理至極シテ被思食ケレバ、法皇更ニ被仰遣リタル御事モナクシテ」とされ（傍線部^{⑥④}・覚一本『平家物語』では傍線部^{⑥⑤}）、延慶本『平家物語』ではさらに「誠ニ入道ノ恨申ス所一事トシテ僻事ナク」、「コハイカゞセムズル。猶々モ法印誘テミヨ」という後白河院の反応が描かれている。一方、『源平盛衰記』では、牛飼が静憲に「御所へ仕り候ベキカ、清水ノ御坊ヘカ」と尋ねるが、静憲は「夜已ニ深更也。御所ハ定テ御寝ゾ御座アルラシ。早且ニ可参」と述べており（傍線部^{⑥②}）、後白河院のもとに向かわず、清水の坊に入っている（傍線部^{⑥③}）。だが『源平盛衰記』では、この後、静憲が後白河院のもとに向かう場面は見られず、したがって清盛の主張が「道理至極」であるゆえに返す言葉もない後白河院の姿も描かれることはない。そして治承三年政変が起こるのである。

治承三年十一月十五日、^{⑥⑥}入道奉恨朝家由聞エシカ共、静憲法印院宣ノ御使ニテ、様々會釋申ケレバ、事ノ外ニクツロギ給タリ。上下大ニ悦デ、今ハサシモヤハト人々思被申ケル、
二、四十二人ノ官職ヲ止テ、被追籠。ソノ内、参議皇太后宮權大夫兼右兵衛督藤原光能卿、大藏卿右京大夫兼伊豫守高階泰経朝臣、藏人右少辨兼中宮權大進藤原基親朝臣、以上三官被止。按察使大納言資賢卿、中納言師家卿、右近衛權少将兼讚岐權守資時朝臣、大皇太后宮權少進兼備中守藤原光憲朝臣、已上被止二官。上卿ハ藤原大納言實國、職事左少辨行隆、別當平大納言時忠トゾ聞エシ。〔源平盛衰記』卷第十二「大臣以下流罪」〕

十六日、^{⑥⑦}入道朝家ヲ可奉恨之由シ聞ヘケレドモ、サシモノ事ヤハ可有ト被思食ケルホド
二、関白殿御子息、中納言師家ヲ奉始テ、大政大臣師長公、按察大納言資賢已下ノ卿相雲客、上下北面ノ輩ニ至マデ、都合四十二人、官ヲ止テ追籠ラル。其内、参議皇后宮權大夫藏人頭兼右近衛督、藤原光能卿、大藏卿右京大夫伊与守、高階泰経朝臣、藏人左少弁兼權大進、藤原基親朝臣、已上三官三職共ニ被止。按察大納言資賢卿、中納言中将師家卿、右近衛權少将兼讚岐權守資時朝臣、皇太后宮權少進兼備中守、藤原光憲朝臣、已上二官ヲ被止。
〔延慶本『平家物語』第二本「入道卿相雲客四十余人解官事」〕

同十六日、^{⑥⑧}入道相国、此日ごろ思立給へる事なれば、関白殿を始め奉て、太政大臣已下の公卿・殿上人四十三人が官職をとめて追籠らる。

〔覚一本『平家物語』卷第三「大臣流罪」〕

治承三年政変について、延慶本『平家物語』では、「入道朝家ヲ可奉恨之由シ聞ヘケレドモ、サシモノ事ヤハ可有ト被思食ケルホドニ」（傍線部⑥）、実行されたとしている。先述のとおり、延慶本『平家物語』では、「誠ニ入道ノ恨申ス所一事トシテ僻事ナク、道理至極シテ被思食ケレバ、法皇更ニ被仰遣リタル御事モナクシテ、「コハイカゞセムズル。猶々モ法印誘テミヨ」トゾ、仰事アリケル」とされており、そうは言っても「サシモノ事ヤハ可有」と思っていたところ、実行されたという展開となっている。また、覚一本『平家物語』では、「入道相国、此日ころ思立給へる事なれば」として（傍線部⑧）、実行されており、清盛の主張について「法皇も道理至極して仰下さるゝ方もなし」とされていたように、はたして実行されたという展開となっている。一方、『源平盛衰記』では、「入道奉恨朝家由聞エシカ共、静憲法印院宣ノ御使ニテ、様々會釋申ケレバ、事ノ外ニクツロギ給タリ。上下大ニ悦デ、今ハサシモヤハト人々思被申ケルニ」（傍線部⑩）、実行されたという展開となっている。先述のとおり、『源平盛衰記』では、『玉葉』の記事に類似して、静憲との問答によって清盛の憤りが和らいだと捉えられており、さらに、静憲が後白河院のもとに向かう場面は見られず、清盛の主張が「道理至極」であるという後白河院の姿も描かれていない。清盛の憤りは静憲によって和らげられ、人々は喜んで「今ハサシモヤハ」と思っていたにもかかわらず、実行されたのである。このような捉え方は、鳥羽殿に幽閉された後白河院のもとへ向かうため静憲が清盛を訪ねた際にも見られるものである。

静憲法印入道ノ許へ行向テ被申ケルハ、^⑨「法皇ヲ鳥羽ノ御所ニ移シ入オハスナルハ、何如ナル御答ノ御座候ヤラン。一日承シ御憤ノ未ハレサセ給ハヌニヤ。一人モ不付進ト承バ、想像進テ心苦ク覺侍ルニ、蒙御免參テ御徒然ヲモ慰メ進バヤ」ト被申タリ。此法印ハウルハシキ人、濁レル世ヲモ澄シ事アヤマルマジキ者ナレバ、何カ苦カラント被免ケリ。法印悦デ宿坊ヘモ帰ラズ、ヤガテ鳥羽殿ヘ參給ヘリ。

〔源平盛衰記〕卷第十二「静憲鳥羽殿參事」

静憲法印ハ、此度ハ御使ノ儀ニテハナクテ、私ニ思切タル気色ニテ、大政入道ノ許へ行向テ申ケルハ、「法皇鳥羽殿ニ渡ラセ給ガ、一人モ付マヒラセヌヨシ承候ガ、心苦ク覺候。然ベクハ御免サレヲ蒙ム」ト、泣々被申ケレバ、法印ウルハシキ人の事アヤマツマジキニテ有ケレバ、ユルサレテケリ。手ヲ合悦テ、忿鳥羽殿ヘ被參タリケレバ、

（延慶本『平家物語』第二本「静憲法印法皇ノ御許ニ詣事」）

静憲法印、入道相国の西八条の亭にゆいて、「法皇の鳥羽殿へ御幸なつて候なるに、御前に人一人も候はぬ由承るが、余にあさましう覺え候。何かは苦し候べき、静憲ばかりは御ゆるされ候へかし。参り候はん」と申されければ、「とう／＼。御房は事あやまつまじき人なれば」とてゆるされけり。法印、鳥羽殿へ参つて、門前にて車よりおり、門の内へさし入給へば、

（覚一本『平家物語』卷第三「法皇被流」）

静憲は後白河院のもとに参る許しを請うが、『源平盛衰記』においては、このとき静憲が「法

皇ヲ鳥羽ノ御所ニ移シ入オハスナルハ、何如ナル御咎ノ御座候ヤラン。一日承シ御憤ノ未ハレサセ給ハヌヤ」と述べている(傍線部⁶⁹)。これは延慶本『平家物語』や覚一本『平家物語』には見られないものであり、『源平盛衰記』では、治承三年政変もまた他本とは異なる位置づけとなっている。

八、おわりに

『平家物語』における鹿谷事件について、梶原正昭氏は、「新大納言成親・西光法師らによって企てられたこの事件は、周知のごとく、奢る平家に対する最初の転覆計画として、失敗はしたが、その後のはげしい反平家的気運の誘い水となったという点で重大な意義を担う出来事であり、それだけにこのような大きなとりあげられ方がなされた」としながら、「陰謀そのものとはさして関係もなさそうな、加賀白山の騷擾事件に端を発した山門強訴の記述をその中に中絶的に含み込んでいて、構成上やや緊密さを欠くかの印象を与えている。すなわちこれを実際内容の上から見ると、陰謀の謀議の有様がつぶさに描かれた“鹿の谷”の章から、その企てが露顕して一味の一斉逮捕となる「西光被斬」までの間に、「鶉川合戦」「願立」「御興振」「内裏炎上」「座主流」「一行阿闍梨」の数章が挿入されていて、陰謀事件を物語る視点が、いつしか院の序対山門の抗争の叙述の方に移しかえられている」と指摘する。

その上で、白山事件は「その本質においては本来国領であるべき土地の帰属をめぐるの国衛対衆徒の争いであり、その根底にある対立がたまたま些細なききっかけによって表面に出、このような大事に発展したと考えられる性格のもの」であり、『平家物語』における白山事件の扱い方は「その叙述態度が史実に忠実ではなく、いちじるしく公平さを欠き客観性に乏しく、「作者の態度は衆徒側にきわめて好意的」である一方、「国司や目代、ことには彼らの父で院の寵臣としてこの事件に辣腕を振う西光法師といった人物には、『平家物語』をはじめからはげしい憎悪を抱いており、その憎悪の感情をあえてかくそうともしていない」とする。さらに、「鹿の谷陰謀に対する『平家物語』の描き方が、きわめて悪意にみちたものとなっている」と述べ、それは「この陰謀の首謀者であった人々、とりわけその事実上の首魁とも目される西光法師が、とりもなおさず白山事件の院側における有力な反対勢力であって、終始衆徒らの訴訟を圧迫しつづけて来たからに他ならず、それへのはげしい怒りが、おのづとここに陰謀そのものへの白眼視となつて現われたのではないか」として、「鹿の谷陰謀の叙述への白山紛争の描写の混入は、一見挿入的で構成上の破綻のごとく見えるが、作者の心情においては相互に関連する重大な意味をもつ出来事であり、むしろ意識的に構成されたものと考えるべきものである」と論じている(16)。

梶原氏は、「二つの事件は、構成上からみると、そこに登場する人物の関係において結びついており、しかもその結合のかなめとなっているのが西光法師であった」と指摘している(17)が、『源平盛衰記』では、行綱の密告において二つの事件が統合されていると言えよう。そしてそれは成親の謀を暴露しながら、清盛と西光の対決の場を導いている。

五十嵐力氏は、「『平家物語』の趣味」の一つを「平家全體の中心根本味と同じ質の物語を積み重ね積み重ねて、その中心根本の味を深くし、厚くし、高くし、大いにしたことである。妓王、俊寛、成親、西光、攝政基房、比叡の座主、木曾義仲等の、大いに榮えて忽ちに衰へた小さ

き榮枯盛衰の挿話を前置として、最後に日本六十餘州に蟠踞した奢る平家の倒壊を高調子に寫した事である」と述べ、平氏の榮枯盛衰に重なる小さき榮枯盛衰の物語の一つに西光を挙げる（18）。その上で、五十嵐氏は、清盛と西光を「亂暴で品位の乏しい嫌ひはあるが、積極的活動性に富み、満身負けじ魂で張り切った二人の壯漢」と捉え、二人の対決は「男性的なる兩雄の正面衝突」であり、「力と力との衝突を痛快に描いた點に於いて軍記中比類なき名文」と評しており（19）、梶原氏もまた「強烈な個性と個性のぶつかり合いは壯絶で、さながら合戦記における一騎打ちの勝負を見る趣きがある」と述べている（20）。その清盛と西光の対決において、『源平盛衰記』では、「過分」であるのは清盛の方ではないかという西光の反問から、「過分」であるゆえに亡びた西光に対する批判は反転して清盛にも向けられるとともに、『源平盛衰記』における清水寺炎上や殿下乗合といった出来事の他本とは異なる位置づけにつながってゆく。さらに、後白河院に讒言する西光と後白河院に諫言する静憲は、いずれも清盛と対峙する人物として対照性が見出され、これまでの出来事が結びつく形で治承三年政変が描かれている。『源平盛衰記』では、西光を結び目として平氏が驕り滅びゆく物語が捉えられるのである。

また、『源平盛衰記』では、『愚管抄』や『玉葉』など史実に近い描写が用いられているが、単に史実に合わせた記事となっているだけでなく、そこから殿下乗合や治承三年政変の他本とは異なる展開が生まれており、その点において、史料の取り込みもまた『源平盛衰記』の物語叙述の方法の一つとなっていると言えよう。

【注】

- (1) 本論第二部第二章「重複記事の分析」。
- (2) なお、四都合戦状態では、酒宴の場の後白河院も静憲も見られないが、猿樂が行われる切っ掛けとして瓶子が倒れた経緯については示されていない。
- (3) 『愚管抄』の内容は、以下のとおりである（引用本文は『日本古典文学大系86 愚管抄』（岩波書店、一九六七・一）に拠る）。

東山邊ニ鹿谷ト云所ニ靜賢法印トテ、法勝寺ノ前執行、信西ガ子ノ法師アリケルハ、蓮華王院ノ執行ニテ深クメシツカヒケル。萬ノ事思ヒ知テ引イリツヽ、マコトノ人ニテアリケレバ、コレヲ又院モ平相國モ用テ、物ナド云アハセケルガ、イサヽカ山莊ヲ造リタリケル所ヘ、御幸ノナリヽシケル。コノ閑所ニテ御幸ノ次ニ、成親・西光・俊寛ナド聚リテ、ヤウヽノ議ヲシケルト云事ノ聞エケル。コレハ一定ノ説ハ知ネドモ、滿仲ガ末孫に多田藏人行綱ト云シ者ヲ召テ、「用意シテ候ヘ」トテ白シルシノ料ニ、宇治布三十段タビタリケルヲ持テ、平相國ハ世ノ事シオホセタリト思ヒテ出家シテ、攝津國ノ福原ト云所ニ常ニハアリケル。ソレヘモテ行テ、「カヽル事コソ候ヘ」ト告ケレバ、ソノ返事ヲバイハデ、布バカリヲバトリテツボニテ焼捨テ後、京ニ上リテ安元三年六月二日カトヨ、西光法師ヲヨビトリテ、八條ノ堂ニテヤ行ニカケテヒシヽト問ケレバ、皆オチニケリ。白状カヽセテ判セサセテ、ヤガテ朱雀ノ大路ニ

引イデ、頸切テケリ。コノ日ハ座主明雲ガ方大衆西坂本マデクダリテ、カクマカリ下リテ侍ルヨシ云タリケリ。世ノ中ノ人アキレマドヒタルコトニテ侍キ。コノ西光ガ頸切ル前ノ日、成親ノ大納言ヲバヨビテ、盛俊ト云チカラアル郎従、盛國ガ子ニテアリキ、ソレシテイダキテ打フセテ、ヒキシバリテ部屋ニ押籠テケリ。

(『愚管抄』巻第五「高倉」)

- (4) 西光↓成親という捕縛の順序は、『玉葉』と同様である。早川厚一氏は、「行綱密告の件を無前提に事実とは見なせない」と述べ、『玉葉』の記事を検討して、「西光の捕縛は成親の捕縛より先に行われたらしい」とし、「山門攻めを余儀なくされた清盛は、この窮地を脱するため、先ず、院の寵臣であり、山門事件に深くかかわる西光を、「年来の間積む所の凶悪の事」「明雲を配流し、及び万人を法皇に讒邪す」という容疑で逮捕し、厳しく拷問にかけたところ、意外にも鹿谷事件の謀議を白状したというような可能性はなからうか」としている(早川厚一『平家物語を読むー成立の謎をさぐるー』和泉書院、二〇〇〇・三)。『源平盛衰記』では、西光が白状した後、成親が呼び出されており、『玉葉』から読み取られるこのような経緯にも通じる展開となっている。なお、長門本『平家物語』における捕縛の順序もまた西光↓成親であり、西光は成親が呼び出される前に尋問され、拷問を受けている。ただし長門本『平家物語』では、行綱の密告を受けた清盛は、まず白河院に使者を立て、不分明な反応を受けて人々が捕らえられてゆくなかで、西光が捕縛される場面が描かれた後、尋問が行われている。また、長門本『平家物語』における西光の捕縛、尋問や拷問の描写は、延慶本『平家物語』に近似している。

- (5) 覚一本『平家物語』では、清盛からの使者を受けて「御前へ参ッて此由奏聞しければ、法皇、「あは、これらが内とはかりし事の洩れにけるよ」とおぼしめすにあさまし」(覚一本『平家物語』巻第二「西光被斬」)とされており、使者に返事をする場面ですでに後白河院が事を察していることが判る。

- (6) なお、長門本『平家物語』では、「入道あまりにいかりて、物ものたまはず。しはらくありて、はらをすへかねて、つとあゆみよりて、尻きれはきながら、西光かつらを、ひたくとけて」(長門本『平家物語』巻第二「西光法師被召取事」とされる。また、覚一本『平家物語』では、尋問する前に清盛が西光を「縁のきはにひきよせさせ、物はきながら、しやツつらをむずくとぞ踏」んでいる(覚一本『平家物語』巻第二「西光被斬」)。

- (7) 早川厚一氏は、『顕広王記』の記事を検討して、「山の大衆が清水寺に火を懸けた後、後白河院は、六波羅に御幸した」と指摘している(早川厚一『平家物語を読むー成立の謎をさぐるー』和泉書院、二〇〇〇・三)。

- (8) 「平中納言清盛ハ、用心ノ為ニヤ所勞ト稱シテ見參ニ入ラザリケレ」とする『源平盛衰記』では、他本において清盛の発言とされる「サテモ一院ノ御幸コソ恐レ覺ユレ」(『源平盛衰記』巻第二「清水寺縁起」)を重盛の発言としている。

- (9) なお、「日向太郎通良懸頸」の内容は、以下のとおりである。

平治元年ノ比、肥前國住人日向太郎通良、野心ヲ挟テ朝威ヲ傾ケンストスル聞アリシ

カバ、可追討之由、清盛朝臣ニ被仰下。勅命ヲ蒙テ、筑後守家貞ヲ召テ申含ム。家貞西府ニ下向シテ通良ガ城ニ押寄テ度々ノ合戦ニ及ブ。城モ究竟ノ城也、主モ勇者也ケレバ、輒ク落ザリケレ共、月ヲ隔、日ヲ重テハ、官兵ハ雲ノ如ニ集リケレバ、賊徒ハ霧ノ如クニ散ケリ。永暦元年四月ニ通良以下ノ黨類三百三十五人討取之由、家貞ガ許ヨリ交名ヲ注シテ申上タレバ、清盛朝臣事ノ由ヲ奏聞ス。同キ五月十五日、鳥羽殿ニ御幸有。通良并子息通秀親良以下ノ首七、御棧敷ノ前ヲ渡サシテ被御覽。清盛朝臣御前ニ候セリ。御隨身ヲ以テ名字ヲ御尋アリ。家貞馬上ニテ名謁ス。事ノ躰優々敷ゾ見ヘケル。家貞甲ヲ著シテ、郎等二百余騎ヲ相具シテ渡ル。容兒美麗ニシテ、進退見ツベカリケレバ、「今日ノ見物只家貞ニ有」トゾ上下稱シアヘリケル。七條川原ニテ檢非違使通良等ガ首ヲ請取テ、大路ヲ渡シテ、獄門ノ木ニ懸ケリ。同六月三日、先小除目ヲコナハル。平頼盛朝臣、從四位上ニ叙ス。舎兄清盛朝臣、鎮西ノ住人通良ヲ追討ノ賞トゾ聞ヘシ。同廿日太宰大貳清盛朝臣正三位ニ叙ス。勲功ノ賞ニ依テ忽ニ越階ス。

- (10) 他本には見られないこの発言は、「思召寄仰ス旨ノ聊モアレバコソ、平家追討ト云事モ洩聞ユラメナレバ、御幸有トテモ不可被打解」(『源平盛衰記』巻第二「清水寺縁起」)と語る清盛に対する、重盛の「加様ノ事ニコソ人ノ心ツキテ、實ナキ事ニ惡キ事ヲモ思出ス事ニ候」(『源平盛衰記』巻第二「清水寺縁起」)という発言に対応するものとなっている。清盛と重盛の発言は延慶本『平家物語』や寛一本『平家物語』にも見られるものであるが、『源平盛衰記』では、清水寺焼失の後、「參テ御氣色伺ハン」と院參する重盛が「閭巷ノ説ヲ為被謝仰」六波羅へ向かつていた後白河院に参り会う場面とあわせて重盛と後白河院が重なり合う展開となっている。

- (11) 長門本『平家物語』では、西光は「『天に口なし。人をもていはせよ』とて、六波羅辺、もてのほかに過分になり行は、天道の御罰にや」(長門本『平家物語』巻第一「清水寺炎上事」と述べているが、「過分」であるのを「清盛」とするのは『源平盛衰記』のみである。

- (12) 引用本文は『圖書寮叢刊 九条家本 玉葉 一』(明治書院、一九九四・三)に拠る。

- (13) 曾我良成「『源平盛衰記』の史実性―殿下乗合事件の平重盛像再考―」『文化現象としての源平盛衰記』松尾葦江編、笠間書院、二〇一五・五。

- (14) 日下力氏は、『平家物語』における成親事件話群のなかに「『保元』『平治』の記事を想起させる記述が他出する」ことを指摘し、『保元物語』および『平治物語』から『平家物語』への影響が想像されるとしている(日下力「『平家物語』と『保元物語』『平治物語』―成親事件話群の考察―」『国文学研究』第七十八集、一九八二・一〇)。早川厚一氏は、「平家物語の鹿谷事件の歴史叙述の背景には、日下力が指摘するように、平治物語の存在を想定すべきであろう」とし、「日下の指摘したこと以外にも、両作品に登場する人物配置の近似度も注目される」とする。早川氏は、信西と静憲の対比をその一つとし、「両作品で、信西父子が、共に後白河院に諫言を呈する役回りで描かれている」としている(早川厚一『平家物語を読む―成立の謎をさぐる―』和泉書院、二一〇

〇〇・三)が、『源平盛衰記』において、鹿ヶ谷謀議に関して後白河院に諫言する静憲の言葉は、『平治物語』において、後白河院に諫言する信西の言葉にも類似したものとなっている(引用本文は『新日本古典文学大系43 保元物語 平治物語 承久記』(岩波書店、一九九二・七)に拠る)。

上皇、信西におほせられけるは、「信頼が大将にをのぞみをかけたるはいかに。かならずしも重代の清華の家にあらざれども、時によつてなざるゝこともありけるとぞつたへきく」とおほせられければ、信西、心におもひけるは、「すはこの世は損じぬるは」となげかしくおもひ、申けるは、「信頼などが大将になり候なば、たれ人かのぞみ申さで候べき。君の御まつりごとは、司召をおみてさきとす。叙位・除目にひがこと出できたり候ぬれば、上、天聞にそむき、下、人のそしりをうけて、世のみだれとなる。その例、漢家本朝に比類すくなからず。さればにや、阿古丸の大納言宗通卿を、白河院、大将になさんとおぼしめされしかども、寛治の聖主、御ゆるしなかりき。故中御門藤中納言家成卿を、旧院、「大納言になさばや」とおほせられしか共、「諸大夫の大納言になる事は、たえてひさしく候。中納言にいたり候だにも罪に候物を」と、諸卿、いさめ申しかば、おぼしめしとまりぬ。せめての御こゝろざしにや、年のはじめの勅書の上書に、「中御門新大納言殿へ」とあそばされたりけるを、拝見して、「まことの大員・大将になりたらんよりも、なを過ぎたる面目かな。御こゝろざしのほどのかたじけなきよ」とて、老の涙をもよほしけるとこそ、承候へ。古は、大納言、なをもつて執しおぼしめし、臣もいるかせにせじとこそいさめ申しか。いはんや近衛大将をや。三公には列すれども、大将をへざる臣のみあり。執柄の息、英才のともがらも、此職をもつて先途とす。信頼などが身をもつて大将をけがさば、いよくおごりをきはめて、謀逆の臣となり、天のために滅され候はんことは、いかでか不便におぼしめさでは候べき」といさめ申けれども、君はげにもと思召たる御気色もなし。

〔『平治物語』卷之一「信頼・信西不快の事」〕

- (15) 引用本文は『圖書寮叢刊 九条家本 玉葉 六』(明治書院、二〇〇〇・四)に拠る。
- (16) 梶原正昭『『平家物語』の一考察―“鹿の谷”と白山事件―』『早稲田大学教育学部学術研究 人文・社会・自然』10、一九六一・一一。
- (17) 前掲注(16)に同じ。
- (18) 五十嵐力「軍記物語評釋」『早稲田大学文学講義』第69回6、早稲田大学出版部、一九三一・四―一九三二・九。
- (19) 前掲注(18)に同じ。
- (20) 梶原正昭『鹿の谷事件 平家物語鑑賞』武蔵野書院、一九九七・七。

第二章 重複記事の分析

一、はじめに

『源平盛衰記』は、『平家物語』の一異本として位置づけられながら、他の諸本にはない多くの叙述を有して四十八巻にも及んでいる。この叙述量の多さが『源平盛衰記』の特徴であり、独自性を担うものと言える。本章では、そこに一定の方法を見出すことによって、膨大な叙述を読み解く一端となるよう試みたい。

津田左右吉氏は、『源平盛衰記』における叙述を以下のように評している(1)。

盛衰記は甚だしく知識的である。事柄を詳しく述べようとする。故事来歴をうるさく説明する。感傷的な文字を平家よりも誇張した筆で管々しく書き連ねてあるにも拘はらず、全體として讀者に與へる効果は感情を動かすよりは却つて知識を與へることである。

『源平盛衰記』の叙述は、知識豊富ではあるものの繁雜・冗長であり、文学作品としては高い評価を与え難いとされる。また、山下宏明氏は以下のように指摘する(2)。

人物や場面を描いても、梶原の戯画化、重盛の芝居がかりともいえる大げさな嘆き方、有王を島に迎えた俊寛の心理描写など、小説的な抑揚と深化が見られる。ただ、全体の筋を通して見る場合、構成単位である個々の話の潤色・おもしろさに流されていることは否定できないところ(後略)。

山下氏が「小説的な抑揚と深化が見られる」とするように、『源平盛衰記』には、戯画化や強調など読み物としての面白さがある。ただし、それは「構成単位である個々の話」にとどまるものであり、『源平盛衰記』全体の評価にとっては概してマイナスに作用してきたと考えられる。

松尾葦江氏は『源平盛衰記』を「饒舌」であるとして、叙述の様相を以下のようにとらえる(3)。(引用者注—源平盛衰記は饒舌であり、それは)享受者に対する執拗な干渉のかたちなのである。しかし、饒舌さはまた饒舌さを必要とする。拡散する話題やイメージを、一定の方向に、或いは一定の範囲内に限定するためには、解説や修飾をせねばならなくなるからだ。かくて総体を捕捉し伝達するのに、情報量を増やすという方法によるならば、それに付随して叙述はさらに増大せざるを得ない。こうして構築された盛衰記の世界では、享受者は絶えざる指示に拘束されながら進んで行くことになる。

このように『源平盛衰記』の膨大な叙述は、饒舌あるいは散漫で、ときに逸脱し、構想力に欠けるといった評言が散見される。しかし一方で、以下のような指摘も見出される。

まず、津田氏は『源平盛衰記』が「似たことを重ねて物語を複雑にする」と見ている(4)。その一例として挙げられるのは、佐々木高綱と梶原景季の早馬である。高綱と景季による宇治川先陣争いの後、『源平盛衰記』では、双方の早馬が一陣の報告に鎌倉へと向かう。早馬は、はじめ景季側が先行するが途中で高綱側に追い抜かれるという、両者の渡河と同じ流れとなっている。すなわち、先陣争いの動きが重ねられているのである。さらに、平清盛が化鳥を捕る逸話は源頼政の鶴退治から生まれたとするなど、『源平盛衰記』は「一つ型ができると、どれもくそれを踏襲する」と述べている(5)。

また、松尾氏は「盛衰記自身の中での複製、再話の作業が行われたらしいことが想像できる」としている(6)。「源平盛衰記」に描かれる平通盛討死の場面は、石橋合戦における佐奈田与一討死と類似するが、松尾氏は両記事が「同じ趣向を繰返し用いている」として(7)、通盛討死が与一討死を「コピーした」とする(8)。

これらの指摘は、『源平盛衰記』の叙述に型があることを示すものであり、枠組みを繰り返して利用する方法と言える。一方、本章においては、叙述自体を繰り返す方法に着目する。一見、重複とも捉えられるが、単純に叙述が繰り返されるのではなく、これを基にして独自の物語世界が増幅されている。本章では、源行綱による鹿ヶ谷謀議の密告、大場景親の早馬、一の谷の城戸口へ向かう平山季重の動向を通して、『源平盛衰記』における物語叙述の方法を考察する。

二、行綱の密告

平氏打倒を掲げた藤原成親は、鹿ヶ谷の山荘において酒宴を行う。

鹿谷ニハ軍ノ評定ノ爲ニ、人々多集テ一日酒盛シケリ。多田藏人ガ前ニ杯ノ有ケルニ、新大納言、青侍ヲ招テ私語給ヘリ。青侍マカリ立テ、程ナク長櫃一合縁ノ上ノ昇居タリ。尋常ナル白布五十端取出シテ藏人ガ前ニ積置セテ、大納言曰ケルハ、「日比談義申侍ツル事、大將軍ニハ一向ニ奉憑。其弓袋ノ料ニ進スル也。今一度候バヤ」トゾ強タリケル。①藏人居直リ畏テ、三度吞テ布ニ手打係テ押除タレバ、郎等ヨツテ取之。其後押マハシク得タリ指タリスル程ニ、既ニ晩ニ及ブ。庭ニハ用意ニ持タリケル傘ヲアマタ張立タリ。山下ノ風ニ笠共吹レテ倒ケレバ、引立々々置タル馬共驚テ散々ニ蹕踊、食合踏合シケレバ、舍人雑色馬ヲシヅメント庭上々ヲ下へ返テ狼藉也。酒宴ノ人々モ少々座ヲ立ケルニ、瓶子ヲ直垂ノ袖ニ懸テ、頸ゾ引折テケル。大納言見之、「戯呼事ノ始ニ平氏倒侍リヌ」ト被申タリ。面々咲壺ノ會也。康頼突立テ、「大方近代アマリニ平氏多シテ持酔タルニ、既ニ倒亡ヌ。倒レタル平氏項ヲバ取ニ不如」トテ、是ヲ差上テ一時舞タリ。サテ取タル首ヲバ可懸也トテ、大路ヲ渡スト云テ廣縁ヲ三度廻シ、獄門ノ樗木ニ係ト名テ大床ノ柱ニ烏帽子懸ニツラヌキテ結付ケタリ。

〔『源平盛衰記』巻第四「鹿谷酒宴」〕

『平家物語』諸本に共通して、酒宴の様子は詳細に描かれている。ここに同席していた源行綱は、のちに平清盛に謀議を密告する(9)。

行綱居寄テ私語ケルハ、「(中略)當座ニハ、新大納言家父子、近江中將入道殿、法勝寺執行法印、平判官康頼、西光法師ゾ候キ。②行綱酒三度タベテ後、大納言宣シハ、「平家ハ悪行法ニ過テ、動スレバ奉嘲朝家之間、可追討之由、被下院宣タリ。但源平兩氏ハ、昔ヨリ朝家前後之將軍トシテ、逆臣ヲ誅戮シテ、所蒙異賞也。サレバ今度ノ合戦ニハ御邊ヲ憑。可有其意」ト被仰聞、コハ浅間敷事カナ、イカゞ返答申ベキト存ゼシカドモ、左程ノ座席ニテ、而モ院宣ト仰ラレンニ、争カ叶ジトハ可申ナレバ、「左モ右モ勅定ニコソ」ト申侍シ程ニ、折節一村雨シテ、山下風ノ風烈ク吹侍シニ、庭ニ張立置タル傘共ノフカルヽニ、馬共驚蹕踊、

踏合食合ナンドスルヲ見テ、末座ノ人共ノ立騒、直垂ノ袖ニ瓶子ヲ係テ引倒シ、其頸ヲ打折テ侍シヲ、座席静テ後、大納言殿、アヽ事ノ始ニ平氏倒タリト宣シカバ、満座咲壺ノ會ニテ侍キ。是コソ浅間敷事云タリト存ゼシニ、申モ口恐シク侍レ共、西光法師、「倒レタル瓶子ノ頸ヲバ取テ、大路ヲ可渡」ト申ヲ、康頼ツト立テ、「當職ノ檢非違使ニ侍」トテ、烏帽子懸ヲ以テ瓶子ノ頸ヲ貫捧テ、一時舞テ、廣縁ヲ三度持廻シテ、獄門ノ木ニ懸ト申テ縁ノ柱ニ結附テ侍シ事、身ノ毛堅テ浅間敷コソ侍シカ。何ノ弓矢取ト云事ナク、當時一旦ノ君ノ御糸惜ミニ誇テ、西光ガ我一人ト事行シテ申振舞シ事、下刻上之至也ト不思議ニ存シ侍キ。(中略E)トテ、人ノ能言云タリシヲバ我カ申タルニナシ、我惡口吐タリシヲバ人ノ云タルニナシ、

③ 殆有シ事ヨリモ過テハ云タリケレ共、五十端ノ白布ヲバ一端モ語ザリケリ。
(『源平盛衰記』卷第五「行綱中言」)

日来月来、新大納言ヲ始トシテ、俊寛ガ鹿谷ノ山庄ニテヨリアヒノ内儀支度シケル事、「其レハトコソ申候シカ、カクコソ申候シカ」ト、人ノ吉事云タルヲバ我申タリト云、我惡口シタリシヲバ人ノ申タルニ語リナシ、五十端ノ布ノ事ヲバ一端モ云出サズ、有ノマヽニハ指過テ、ヤウノサマノ事共取付テ細ク申ケレバ、

(延慶本『平家物語』第一末「多田藏人行綱仲言ノ事」)

比較対照として、延慶本『平家物語』における該当箇所をあわせて示したが、行綱の密告は、延慶本『平家物語』で「其レハトコソ申候シカ、カクコソ申候シカ」とされているように、他の諸本においては内容が簡略化されている(10)。一方、『源平盛衰記』では、酒宴での出来事や人々の言動が具体的に述べられている(11)。ただし、酒宴の様子がそのまま繰り返されているのではなく、行綱が密告する内容には一部異なった箇所がある。

まず、行綱の密告には、傍線部②「行綱酒三度タベテ後、大納言宣シハ、平家ハ悪行法ニ過テ、動スレバ奉嘲朝家之間、可追討之由、被下院宣タリ。但源平兩氏ハ、昔ヨリ朝家前後之將軍トシテ、逆臣ヲ誅戮シテ、所蒙異賞也。サレバ今度ノ合戦ニハ御邊ヲ憑」とあり、酒を三度口にした後、成親に加勢を頼まれたと述べている。しかし、酒宴において行綱が酒を三度口にした場面を見ると、「藏人居直リ畏テ、三度吞テ布ニ手打係テ押除タレバ、郎等ヨツテ取之」とあり(傍線部①)、成親が差し出した布を行綱が受け取っている。布とは「尋常ナル白布五十端」であるが、行綱の密告は「五十端ノ白布ヲバ一端モ語ザリケリ」とされるものである(傍線部③)。よって、密告では布を受け取る部分に言及せず、代わりに成親の発言が接続していると考えられる。

『源平盛衰記』においては、二度にわたって鹿ヶ谷酒宴が描かれている(12)。瓶子から平氏が倒れたとするのは二度目の酒宴での出来事であり、一度目には以下のような場面が見られる。

新大納言成親卿ハ、實定ノ大將ニ成給ヌルニ付テ、是モ平家ノ計也ト思ハレケレバ平家ヲ亡サント謀叛ヲ、疎人モ入ヌ所ニテ兵具ヲ調ヘ軍兵ヲ集ラレ、サルベキ者共相語ヒ、此營ノ外他事無リケル中ニ、多田行綱ヲ招テ様々酒ヲ勸テ、金造太刀一振引出物ニ賜。酒宴取ヒソメテ大納言行綱ガ膝近居ヨリテ、耳ニ口ヲ差寄テ私語事ハ、「成親不思議院宣ヲ下賜レリ。其

故ハ、平家朝恩ノ下ニ居ナガラ朝家ヲ蔑ニシ、一門國務ヲ執行國主蔑如ス。悪行年ヲ重狼藉日ニ競リ。依之彼一類ヲ可追討之由仰ヲ承トイヘ共、且ハ存知ノ様ニ成親サセル武藝ノ器ニアラズ、尤猶豫スベキヲ、君モ大ニ鬱思召ハコソ如此ハ被仰下ラメ。非可奉返院宣、サレバ一方ノ大將ニハ奉深憑。御邊又源氏ノ藻事也。争力執心モナカラン。平家亡メル者ナラバ、日本ノ大將軍共成給ヘカシ。其條奏申サンニ子細ヤハ有ベキト語ケレバ、行綱争カイナト云ヘキナレバ、醉ノマギレニ「深ク憑給ヘ承侍ヌ」ト領掌シテ立ニケリ。

〔『源平盛衰記』卷第三「成親謀叛」〕

ここで「大納言行綱ガ膝近居ヨリテ、耳ニロヲ差寄テ私語事ハ」として述べられる成親の発言は、平氏は朝家を蔑ろにして悪行を重ねているため、追討の院宣が下され、源氏である行綱に加勢を頼みたいという内容である。これは、行綱の密告において「酒三度タベテ後」に続く成親の発言と類似している。すなわち『源平盛衰記』では、二度にわたる酒宴での出来事が切りつながれて、「五十端ノ白布ヲバ一端モ語ることなく密告がなされるのである。

また、同席していた人々の言動について、密告の内容を酒宴の様子と比較すると、前章で指摘したとおり、西光の発言が加わっている。行綱の密告は「殆有シ事ヨリモ過テハ云タリケレ」とされるものである（傍線部③）。西光に対しては「何ノ弓矢取ト云事ナク、當時一旦ノ君ノ御糸惜ミニ誇テ、西光ガ我一人ト事行シテ申振舞シ事、下刻上之至也ト不思議ニ存シ侍キ」という批判も見られ、密告が「殆有シ事ヨリモ過テ」いる具体例として西光が挙げられよう。

『源平盛衰記』では、行綱の密告において鹿ヶ谷酒宴の様子が繰り返され、それを基に「殆有シ事ヨリモ過テハ云タリケレ共、五十端ノ白布ヲバ一端モ語ザリケリ」という密告とはどのようなものであったのかが具体的に提示されるのである。

三、大場早馬

大場早馬は、『源平盛衰記』における重複記事として、最も多く言及されてきたと言えるものであろう（13）。卷第十七「大場早馬」には、大場景親の早馬によって、源頼朝が挙兵したことが平氏に伝えられる記事がある。このときの早馬の内容は、以下のとおりである。

伊豆國流人前右兵衛権佐源頼朝、④一院ノ院宣、高倉宮令肯在ト称シ、同國目代平家ノ侍和泉判官平兼隆ガ八牧ノ館ニ押寄テ、兼隆家人等夜討ニシ、館ニ火懸テ焼拂フ。同廿日、北條四郎時政ガ一類ヲ引卒シ、相摸ノ土肥ヘ打越テ、土肥土屋置崎ヲ招キ、三百餘騎ノ兵ヲ相具シ、石橋ト云所ニ引籠。景親武藏相摸ニ平家ニ志アル輩ヲ催集テ、三千餘騎ニテ、同廿三日ニ石橋城ニ押寄。源氏禦戦トイヘ共、大勢ニ打落サレテ、兵衛佐杉山ニ逃籠テ、不知行方。同廿四日ニ相摸國由井小坪ニテ、平家ノ御方ニ武藏國住人畠山庄司重能ガ子息次郎重忠、五百餘騎ニテ、兵衛佐ノ方人相摸國住人三浦大介義明ガ子共、三百餘騎、責戦トイヘドモ、重忠三浦ニ戦負テ、武藏國ヘ引退。同廿六日ニ武藏國住人江戸太郎重長、河越小太郎重頼ヲ大将トシ、黨ニハ金子村山々口篠黨兒玉横山野與黨綴喜等ヲ始トシ、二千餘騎、相摸ノ三浦城ヲ責。三浦ノ一族絹笠ノ城ニ籠テ、一日一夜戦テ、矢種盡テ船ニ乗、安房國ヘ渡畢ヌ。又

⑤國々ノ兵共内々ハ源氏ニ心ヲ通スト承ル。御用心アルベシ

〔源平盛衰記〕卷第十七「大場早馬」

この早馬は延慶本『平家物語』や長門本『平家物語』にも見られるものであり、『源平盛衰記』では、この後、卷第十八から東国における頼朝の動向や合戦の様子が描かれてゆく。しかし、『源平盛衰記』では、卷第二十二「大場早馬立」において、再び景親の早馬が示される。

伊豆國流人右兵衛佐頼朝、⑥称有院宣忽興謀叛、去八月十七日之夜、卒三十餘騎之勢押寄八牧之館、誅戮和泉判官平兼隆、放火烧失畢。此定自國衙被注進坎。同廿二日、搆城郭於當國石橋山、引卒三百餘騎之凶賊、楯籠干彼城之間、景親相催三千餘騎之軍兵、同廿三日、自午時及入夜、責戰之處、頼朝不堪而、廿四日暁天、落退彼城、不知行方。但或説云、掘穴被埋タリト。或説云、懷石入水。⑦巷説多端、慥雖不見其頸、滅亡之條勿論歟

〔源平盛衰記〕卷第二十二「大場早馬立」

これは東国の合戦や頼朝の敗走に続くものであり、その報告として位置しているものと言えるが、延慶本『平家物語』や長門本『平家物語』には見られないものである。いずれの早馬も景親から平氏に頼朝の挙兵を伝えるものであり、一見、記事の重出と思われるが、卷第二十二「大場早馬立」の早馬は、頼朝に関する情報を主としている。卷第二十二「大場早馬立」では、頼朝について「巷説多端、慥雖不見其頸、滅亡之條勿論歟」とする（傍線部⑦）。そして、これに対して「太政入道ヨリ始テ一門ノ人々大ニ悦テ、景親等ニ勸賞沙汰アリ」〔源平盛衰記〕卷第二十二「大場早馬立」とされている。一方、卷第十七「大場早馬」では、末尾に「國々ノ兵共内々ハ源氏ニ心ヲ通スト承ル。御用心アルベシ」とあり（傍線部⑤）、これに対する反応は「平家ノ一門此事ヲ聞、コハイカニト騒アヘリ」〔源平盛衰記〕卷第十七「大場早馬」とされており、同じ早馬でありながら対照的なものとなっている。さらに、留意すべき点は、卷第二十二「大場早馬立」の早馬には、続報とも言うべきものが見られるのである。

平家重恩ノ者モシハ縁者境界、サスガ東國ニモ多カリケレバ、飛脚櫛ノ齒ヲ継テ、六波羅へ申上ケルハ、⑧兵衛佐頼朝石橋ニテ被討之由、雖有披露、其條無實也。遁出杉山、渡安房國、相具シ北條佐々木三浦黨類、越干上総下総、召從弘經胤經已下之大名小名、既及三萬人千餘騎。其外、伊豆駿河甲斐信濃同心之間、其勢如雲霞。適有背輩、忽ニ依加誅罰、上下甲乙皆以歸伏。但源平未定之前勇士猶豫之刻、急差下討手、可被鎮凶徒歟ト申タリ。

〔源平盛衰記〕卷第二十二「俵藤太將門中違」

その後、「兵衛佐頼朝石橋ニテ被討之由、雖有披露、其條無實也」（傍線部⑧）、すなわち、頼朝が討たれたとの情報は間違いであって、「其勢如雲霞」、「上下甲乙皆以歸伏」という飛脚が来るのである。これは延慶本『平家物語』や長門本『平家物語』には見られないものである。この飛脚が伝える内容は、卷第十七「大場早馬」の「國々ノ兵共内々ハ源氏ニ心ヲ通ス」に通じており、ま

た、これに対する反応として「京中六波羅ノ騒動斜ナラズ」(『源平盛衰記』巻第二十二「俵藤太将門中違」)とされ、同様に巻第十七「大場早馬」の「平家ノ一門此事ヲ聞、コハイカニト騒アヘリ」という反応に一致している。すなわち、巻第二十二では、巻第十七「大場早馬」の早馬に相当するものが「大場早馬立」の早馬と「俵藤太将門中違」の飛脚に分けて提示されているのである。そのなかで、早馬が伝えるのは頼朝の挙兵というよりもむしろ頼朝の挙兵および滅亡であろう。それが後の飛脚によって誤報と伝えられることで、平氏一門の喜びから騒動へと転換し、劇的な展開になっている。巻第二十二「大場早馬立」では、早馬の情報が頼朝に集中しているのも、そのためではないであろうか。また、巻第二十二「大場早馬立」の前に、頼朝がすの明神に参拝し、詠歌したところ宝殿から返されたこと、さらにさまざまな夢想があったことが示され、頼朝は「本意トゲヌ」(『源平盛衰記』巻第二十二「佐殿漕会三浦」)とされている。そして、「大場早馬立」の早馬と「俵藤太将門中違」の飛脚の間には、頼朝が千葉介胤経や上総介弘経を招く記事があり、ここでも頼朝は弘経に「本意遂給ヒナン」(『源平盛衰記』巻第二十二「千葉足利催促」)と述べられている。頼朝に吉兆がある一方で、平氏には頼朝滅亡の誤報が届き、頼朝にさらなる賞賛がなされる時、ようやく平氏にその生存と増強が知らされるといふ展開にもなっているのである。なお、頼朝滅亡の情報については、先行する記事にも見出される。土屋宗遠は、足柄山で子息の義清と行き会う。そこで、義清が以下のように述べている。

佐殿謀叛ト披露ノ間、平家ハ一旦ノ主、源氏ハ重代ノ君、其上土屋殿モ御伴ト承ル。旁急ギ下ラント存ジ、京ヲバ三騎ニテ出タリシカ共、路ニテ聞エ侍リシハ、佐殿モ罡崎殿モ與一殿モ石橋ノ軍ニ討レ給ヌト申シ間、ヨロヅアヂキナクテ、二騎ノ者ニハ暇ヲタビ、我身一人國ニ下リ

(『源平盛衰記』巻第二十二「宗遠値小次郎」)

京を出て頼朝のもとに向かった義清は、その道中で、頼朝が「石橋ノ軍ニ討レ給ヌ」と聞いている。すなわち、頼朝が討たれたという情報が流れていたとされているのである。これは延慶本『平家物語』や長門本『平家物語』にも見られるものであり、このような叙述をふまえ、『源平盛衰記』では、巻第二十二「大場早馬立」において、「或説云、掘穴被埋タリト。或説云、懐石入水。巷説多端」と情報の錯綜を示しながらも「滅亡之條勿論歟」とされるのではないであろうか。

また、巻第十七「大場早馬」では、頼朝は「二院ノ院宣、高倉宮令肯在ト称シ」ている(傍線部④)が、巻第二十二「大場早馬立」では、「称有院宣」とされている(傍線部⑥)。延慶本『平家物語』や長門本『平家物語』の早馬は、院宣・令旨としている。これについて、先行する巻第二十「八牧夜討」に関連する記事が見出される。平兼隆の八牧の館に軍勢を向かわせた頼朝のもとに、加藤景廉が参上する。この景廉に対して、頼朝は以下のように述べている。

高倉宮ヨリ平家追討ノ令肯ヲ給リシカトモ、宮既亡ヌレバ、サテ過ル處ニ、一院院宣ヲ給テ平家ヲ可誅也。先兼隆ヲ討トテ、北條ト佐々木等ヲ遣シヌ。

(『源平盛衰記』巻第二十「八牧夜討」)

頼朝は、平家追討の令旨を得たものの高倉宮が滅びてしまったところに、後白河院の院宣を得たとしている。そこで院宣を掲げて挙兵したのであり、この後に位置する巻第二十二「大場早馬立」の早馬には、高倉宮の令旨ではなく後白河院の院宣が挙げられるのではないであろうか。さらに、頼朝は八昨夜討の後、勢を集めるために「院宣ノ案ニ佐殿ノ施行書ヲ副ヘテ、方々ハ觸遣ハ」(『源平盛衰記』巻第二十「佐殿大場勢汰」)し、石橋合戦では、北條時政が「早彼(引用者注―平家)一門ヲ追討シテ可奉休逆鱗由、太上法皇ノ院宣被下タリ。錦ノ袋ニ納テ、御旗ノ頭ニ挾ミ給ヘリ」(『源平盛衰記』巻第二十「石橋合戦」)と述べ、和田義盛は畠山重忠への返事のなかで「平家ノ一門ヲ追討シテ天下ノ亂逆ヲ鎮ベキ由、院宣ヲ兵衛佐殿ニ被下」(『源平盛衰記』巻第二十一「小坪合戦」)とするなど、頼朝が院宣を得たことは巻第二十二「大場早馬立」までに度々提示されている(14)。それによって、頼朝が院宣を持っていることはより明確化し、「大場早馬立」では「称有院宣」とされるのであろう。

大場早馬は、『源平盛衰記』における重複記事として古くから指摘されているが、それは単なる記事の重出や編年体の構成にとどまらないものである。巻第二十二における『源平盛衰記』独自の早馬は、頼朝の情報に特化し、先行する記事をふまえた上で、続報とも言うべき飛脚を伴うことによって、その後に続いてゆく源平の戦いの始まりとして劇的な展開をもたらす叙述となっている。

四、季重の動向

一の谷合戦を前にして、熊谷直実父子と平山季重はそれぞれ先陣を志して城戸口へと向かう。『平家物語』諸本(15)において、この記事は、直実父子の動向に沿って描かれている。一方、季重の動向は、先に到着していた直実父子に対して、遅れて到着した季重がその経緯を語るることによって詳らかにされる。季重は、城戸口に至るまでの経緯を以下のように語っている。

A 平山熊谷ニ語ケルハ、「打籠ノ軍ハ剛臆見エズ、如何ニモ追手ニテ鏑金顯サント思テ、子時ニ山ノ手ヲ忍出タリツレバ、寅時ニハ爰へ來リ付ベカリツルヲ、小手向ニテ成田來テ申様、御邊ハ追手へ向給歟、誰モマカルゾ打列給へ。只一人敵ノ中へ打入タリ共、證人ナキ所ニテ死タラバ、ナニトモナキ徒事、犬死トハ左様ノ事也。御方ノツゞキタラン時ニ先ヲ懸命ヲ捨テコソ我モ人モ高名ニテ、子孫ニ勲功モアランズレ。闇討ニ射殺サレテハ且ハ嗚呼ノ事、卯ノ始ノ矢合トイへ共、イカニモ辰ノ始ニゾアランズル。是非軍ハ夜ノ凌晨、暫此ニテ馬勞リ後陣ヲ待給へ。家正モ休ムト云ツレバ、ゲニモサリト思テ、暫峠ニ下居テ、腹帶クツログ甲脱デ、人宿ニ休程ニ共ニ休。暫タメラヒテ、成田甲打着馬ニ乗、坂ヲ上先ニスム時ニ、我ヲタバカルニヤ、悪キ事也。其義ナラバ劣マジト言ヲ懸テ、馬ニ乗一鞭アテ、追並、鎧ノ鼻ニテ成田ガ馬ヲ一摺スラセテ先立ツレバ、馬ヲ所望シツル間、悪ケレ共道ニ馬ヲ繫セテ先立タリ。彼ハ谷河ヲ下ニ、西ノ尾ヲ北へ廻ツレバ、今二十町ハサガリヌラン、

〔『源平盛衰記』巻第三十七「平山同所來」〕

平山申ケルハ、「季重モ今ハトウニヨスベカリツルヲ、成田五郎ニスカサレテ、今マデ和殿

ニサガリタルゾ。成田ガ云ツルハ、『先ヲ係ルト云ハ、大勢ヲ後ニアテ、コソ係ル事ナレ。只一騎係入タラバ、百ニ一命ヲ生タリトモ、誰ヲカ証人ニ立ベキ。後陣ノ勢ヲ待』ト云時ニ、ゲニモト思テ、シバラク引ヘテ待所ニ、ヤガテ成田前ヲノブル間、『君ヘ季重ヲ置ダスヤ。其義ナラバ馬ノ尻ニハツクマジキ物ヲ。ワ君ガ馬ハヨワキ物ヲ』ト云テ、弓手ニスラセテ一鞭アテ、アユマセツレバ、二三段計サガリツルトゾ見ツル。今十四五町ばかりハサガリツラム。

（延慶本『平家物語』第五本「源氏三草山并一谷追落事」）

比較対照として、延慶本『平家物語』における該当箇所をあわせて示したが、このような季重の発言は『平家物語』諸本に共通して見られるものである（16）。いずれも、先陣を志して出立した季重が成田五郎に謀られたため、後れを取ったことが明かされている。

しかし、『源平盛衰記』ではこれに先立って、直実父子の動向に続く形で、季重の動向もまた具体的に描かれている。すなわち『源平盛衰記』においては、同内容が繰り返されるのである。

B （引用者注―直実父子は）カク寄テ一軍シタリケレ共、夜ハ猶深シ、城戸口ハ不開、御方モ未續ネバ、死ル命ハ何モ同事ナレ共、暗闇ニ證人モナク死ニタランハ正躰ナシト思ケレバ、明ルヲ遅シト待居タリ。

⑨平山モ熊谷ガ心ニ少モ不違、先陣ヲ心ニ懸テ、三草ノ閑道ニカ、リテ浦ノ手ニ打出テ、後陣ヲ待テ城戸口ヲ破ラント思ヒ、アレコソ浦へ出ル道ヨト云ケル計ヲ聞、大勢ヲバ弓手ニ見ナシ、三草ノ山ヲ打過、尾一ツ越テ須磨ノ浦指テウツ程ニ、先立テ武者一人歩セ行。「アレハ誰ゾ」ト問ケレバ、景重ト答。成田五郎ニテゾ有ケル。成田思ヒケルハ、平山ガ馬ハ聞ユル逸物也。我馬ハ弱ケレバ打ツレテ先陣蒐事叶フマジ。タバカリ返サント思テ、馬ノ鼻ヲ引返シテ平山ニ云ケルハ、「高名ハ大手搦手ニ依マジ。聞ガ如キハ平家ノ大勢、ナホ三草小野原越ニ向テ、兩方ヨリ指合せ、源氏ヲ中ニ取籠テ洩ジト支度スル也。誠ニ取籠ナバユ、シキ大事也。其上大勢ノ中ヲ忍出テ先ヲ蒐タリトモ、誰カハ證人ニ立ベキ。後陣ノ勢ヲ相待テ先陣ヲコソ蒐ベケレ」ト云ケレバ、ゲニモサルベシトテ、暫ク休居タレバ、成田白地ナルヤウニモテナシテ、甲ノ緒ヲシメテ進行。平山ハ、我ヲタバカルニコソト思テ、馬ニ打乗鞭ニ鑑ヲ合テ行ケレバ、成田今ハ叶ハジト思ヒテヘラ又體ニモテナシ、「誠ハ家正馬弱テ、如何ニモ御邊ニ先セラレヌト思ツレバ、タバカラントテ申タリ。強カラン乗替一匹タベ、命生タラバ後ノ證人ニモシ給ヘカシ」ト云ケレドモ、平山耳ニモ不聞入、成田ヲ弓手ニ見成テ打チ通りケルガ、遙カニ延テ思ケルハ、成田ガ馬ヲ乞ツレ共、アマリノ惡サニ返事イハザリツル事情ナシ。見合タラバ取テ乗カシトテ、宿鶴毛ナル馬ノ五臟太ナルガ七寸ニ餘タルニ鞍置キタルヲ、道ノ耳ナル木ニ繫附テゾ通りケル。

（『源平盛衰記』卷第三十七「平山同所來」）

先に到着した直実父子は名乗り馳せ回るが、城戸口は開かない。「明ルヲ遅シト待居タリ」としてその動きが一旦停止すると、場面は季重に転じている。先陣を志して出立した季重が成田五郎（17）に謀られた経緯が詳述されており、季重の発言（A）と重なる内容である。

ここで「平山モ熊谷ガ心ニ少モ不違、先陣ヲ心ニ懸テ」と導入されている（傍線部⑨）ように、

『源平盛衰記』では、季重が直実と並列的に描かれている。他の諸本においては城戸口到着後に本人の口から語られるにすぎない季重の動向が、直実父子の動向に続いて示されることによって、先陣争いをする両者が並び立つ叙述となっているのである。さらに、単に季重の動向が繰り返されるだけでなく、これを基にして『源平盛衰記』独自の趣向が施されている。

以下は、城戸口において直実父子と季重が合流するまでの叙述である。

C 熊谷暫シ休テ小次郎ニ云ケルハ、「實ヤ⑩平山モ打コミノ軍ヲバ不好、小手向ニ音ノシツルハ、一定爰ヘ來ランズル、城戸口開事アラバ相構テ先蒐ラルナ」ト云教ユ。平山ハ成田ヲバ打捨テ、山ノ細道分行ハ、暗サハ暗シ、⑪サシウツブキノ見ケレバ、薄氷ヲ踏破テ馬ノ通ル跡アリ。既ニ熊谷ニ先懸ラレヌヨト本意ナクテ、イトゞ馬ヲゾ早メケル。其日ノ装束ニハ、重目結ノ直垂ニ赤威ノ鎧著テ二引量ノ纒ヲ懸テ、目油毛ノ馬ニコソ乗タリケレ。熊谷ハ西ノ城戸口濱ノ際ニ引ヘテ、誰カハ先ヲハ蒐ベキ。早城戸口ヲ開ケカシトゾ相待ケル。後ノ方ニ馬ノ足ヲト人影ノスル様ニ覺ケレバ、雲透ニ是ヲ見ニ、武者ニ騎馳來レリ。近付ヲ見レバ平山也。案ニ不違ト思テ、「イカニ平山殿歟」。季重、「問ハ誰ゾ、熊谷殿歟」。「直実」ト名乗合、共ニ一所ニ寄合タリ。

（『源平盛衰記』卷第三十七「平山同所來」）

熊谷又申ケルハ、「平山ハ九郎御曹司ノ御共ニテ山ヲバヨモ落サジ。浜ノ手ニコソ心ヲバ係ツレ。アワレ、今ツゞクラム物ヲ」ト、父子云合テ立タリケル処ニ、云モハテネバ、ハマノ方ヨリ平山ノ武者所、ハタ指相具テ二騎出來タリ。平山ハ三重目結ノ直垂ニ、赤革威ノ冑ニ、三枚甲ニ薄紅ノホロカケテ、目糟毛ト云馬ニゾ乗タリケル。旗指ハ黒糸威ノ鎧ニ、三枚甲ヲゾキタリケル。熊谷平山ヲミテ、「アレハ平山殿ノオワスルカ」ト問ケレバ、季重ノ名乗テ木戸口ヘセメヨリケレバ、「サレバコソ」トゾ申ケル。

（延慶本『平家物語』第五本「源氏三草山并一谷追落事」）

CはBに続く箇所であるが、Bの末尾で成田五郎を追い抜いて馬を進める季重から一転して、「熊谷暫シ休テ小次郎ニ云ケルハ」と城戸口が開くのを待つ直実父子の描写となっている。しかし、すぐに「平山ハ成田ヲバ打捨テ」と場面は季重に転換する。そしてまた「熊谷ハ西ノ城戸口濱ノ際ニ引ヘテ」と直実に転じ、「武者ニ騎馳來レリ。近付ヲ見レバ平山也」として季重の合流に至っている。このような叙述は、延慶本『平家物語』をはじめ、他の諸本には見られない。『源平盛衰記』では、先陣を争う両者が交互に場面を換えながら、対照的に描かれているのである。

また、『源平盛衰記』においては、直実と季重それぞれが城戸口へ向かう道すがら、間接的に接触している。まず、直実父子側には以下のような場面が見られる。

D 主従三騎打連テ、播磨大道ノ渚ト志テ下ケルニ、小峠坂ノ人宿リニ人アマタ音シケリ。忍聞ケレバ平山ト成田ト也。此等モ大手ヘ行ニヤト心得テ、物具裹ミ轡トラヘ、峠ノ下七八段打下シ、深く忍テ通ケリ。其後ハイトゞウシロイブセク覺テ、鞭ニ鐙ヲ合セケレバ寅ノ終ニ一ノ城戸口ヘ馳付タリ。

（『源平盛衰記』卷第三十六「熊谷向大手」）

直実父子は「平山ト成田」の音を聞き、「此等モ大手へ行ニヤト心得テ」いる。すなわち、Bに描かれる、季重が成田五郎に声を掛けられているその脇を、直実父子が「深ク忍テ通」っているのである。さらに、この出来事は、C傍線部⑩「平山モ打コミノ軍ヲバ不好、小手向ニ音ノシツルハ、一定爰へ來ランズル」と直実が子息の直家に語るなかでも言及されている。

一方、季重側には、C傍線部⑪「サシウツブキく見ケレバ、薄氷ヲ踏破テ馬ノ通ル跡アリ。既ニ熊谷ニ先懸ラレヌヨト本意ナクテ」とある(18)。成田五郎を追い抜いた季重は、馬の通った跡を見つけると直実を思い浮かべ、先を越されたことを悟っている。『源平盛衰記』における直実と季重は接近しており、互いの動向に接し合っているのである。

Dにおいて、季重は直実父子に追い抜かれている。よって、『源平盛衰記』では、途中まで季重が先行していたと考えられる。直実父子が出立する場面は、以下のように描かれている(19)。

E (引用者注―直実は)「潜ニ此手ヲバ出テ、音ニ聞エル播磨大道ノ渚ニ下テ、一谷ノ木戸口へ先陣ニ寄バヤト思ハイカゞ有ベキ、矢合ハ卯刻也、今ハ寅ノ始ニモナルラント覺ユ、サモアラバ急ガン」ト云。小次郎ハ「直家モ存處ニテ候、平山ガ山ノ案内者タテヒシメキ候ヒツル音モセズ、ヨニ奇ク覺候。其上此殿ハ、郎等ニ先陣懸サスル事オハシマサズ、自一陣ヲ懸給フ時ニ、此殿ニツレタラン侍共ノ先陣ツトメテ高名スル事ハ難有覺候、疾々急給へ」ト勸ム。熊谷ハ子ナガラモアノ年齢ニハシタナク思モノ哉ト思。「サラバ小次郎同心ゾ」トテ、搦手ヲバ密ニ出テ、渚々ノ篝火ヲ注トシテ、大手ヘトテ下ケルカ、⑫内々平山ガ陣ヲ見セケレバ、人ナシト云。サレバコソ平山モ大手ヲ志テ、一陣ヲ蒐ト思ニコソ、忿々トテ、旗指具シテ親子三騎、坂ヲ下ニ歩セタリ。 (『源平盛衰記』卷第三十六「熊谷向大手」)

(引用者注―直実は)「イザウレ小次郎、西方ヨリ播磨路ヘヲリテ、一谷ニ先セム。卯時ノ矢合ナレバ、只今ハ寅ノ始ニテゾ有ラム」トテ、打出ムトシケルガ、「アワレ平山ハ先ヲ心ニカケタルト見物ヲ。平山ハ先ニヤ此山ヲ出ヌラム」ト思テ、人ヲ遣テ平山ガ在所ヲ見セケルニ、使返テ申ケルハ、「平山殿ノ御方ニハ、只今馬ノハミ物シテ、タヒゲニ候フモ、御又シハマイリテ候ゲニテ、御物具メシ候カト覺テ、御鎧ノ草摺ノ音ノカスカニ聞ヘ候。御乗馬トオボシクテ、鞍置テ轡計ハジシテ、舍人引ヘテ候。物具メシ候ガ、平山殿ノ御音ト覺シクテ、『八幡大菩薩モ御覽ゼヨ。今日ノ軍ノマツ先セムズル物ヲ』ト宣」ト申ケレバ、熊谷サレバコソト思テ、小二郎直家、旗指共ニ三騎相具シテ、播磨路ノ渚ニ心ヲカケテ打出ムトスル所ニ、 (延慶本『平家物語』第五本「源氏三草山并一谷追落事」)

直実は出立にあたって、季重もまた先陣を志しているのではないかと考え、様子を探らせている。延慶本『平家物語』では、鎧の草摺の音や馬・舍人の姿、季重らしき人物の声があったとされ、直実父子が出立するときには季重はまだ出立していない、あるいは今にも出立しようとしていると言える。しかし、『源平盛衰記』では、「内々平山ガ陣ヲ見セケレバ、人ナシト云」とされており(傍線部⑫)、季重はすでに出立している可能性がある。

これに関連して、『源平盛衰記』における直実父子と季重の動向には、他の諸本より多く時刻が

配されている。時刻の配置（引用本文破線部）を抽出すると、以下のようなになる。

『源平盛衰記』

直実父子の立時時刻

今ハ寅ノ始ニテゾ有ラム

直実父子の城戸口到着時刻

寅ノ終ニ一ノ城戸口へ馳付タリ

季重の立時時刻

子時ニ山ノ手ヲ忍出タリツレバ

季重の城戸口到着予定時刻

寅時ニハ爰へ來リ付ベカリツル

〈延慶本『平家物語』〉

只今ハ寅ノ始ニモナルラン

卯剋計ニ、一谷ノ西ノ木戸口へ寄テミレバ（20）

今ハトウニヨスベカリツル

まず、直実父子の立時時刻について、直実が直家に先陣を志すことを持ちかける際、ともに「寅ノ始」と述べている。次に、城戸口到着時刻は、延慶本では「卯剋」であるが、『源平盛衰記』では「寅ノ終」とされる。そして、季重が遅れて到着した際、延慶本『平家物語』で「今ハトウニヨスベカリツル」とされているように、他の諸本では具体的な時刻に触れていない。一方、『源平盛衰記』では、「子時ニ山ノ手ヲ忍出タリツレバ、寅時ニハ爰へ來リ付ベカリツル」と述べている。

よって、『源平盛衰記』において、季重の立時は子時であり、直実が先陣を志したのは寅のはじめであるため、E傍線部⑫「内々平山ガ陣ヲ見セケレバ、人ナシト云」、このときすでに季重は出立していたことがわかる。また、直実父子に先んじて出立した季重は、寅時には城戸口に到着しているはずであった。しかし成田五郎に謀られ、その脇を直実父子がぐり抜けて（D）、寅の終わりに到着している。すなわち、季重が予定通りに進んでいた場合、直実父子よりわずかに早く着くはずだったのである。このように『源平盛衰記』では、両者の先陣争いが文字通り一刻を争うものとなっている。

『源平盛衰記』においては、一の谷の城戸口へ向かう季重の動向が繰り返され、城戸口到着後に本人の口から語られるだけでなく、直実父子の動向に続いて示されることよって、先陣を争う両者が並立している。さらに、これを基にして、両者が交互に対照的に提示される叙述、間接的に接触して意識し合う様子、時刻の配置といった独自の趣向が施され、先陣争いがより拮抗し緊迫したものとして際立っているのである。

五、おわりに

本章において着目した叙述の繰り返しは、一見、『源平盛衰記』の冗長さを示すものとも捉えられる。しかし、そこに描き出される内容は単なる重複にとどまらず、独自の趣向が施されることよって物語世界を増幅させている。このように見た場合、『源平盛衰記』の多様な記事の叙述に

どのような方法が用いられているのかという観点から再考ができるのではないであろうか。

なお、本章で取り上げた平山季重と熊谷直実は、城戸口が開くと交互に入れ替えて戦い、後には一陣二陣を争うこととなる。すなわち、城戸口に至るまでの動向が交互に提示され、両者が並立して先陣を競い合うのは、一二の駆けが波及したものと考えられる。この点では、佐々木高綱と梶原景季による早馬の描かれ方とも通じており、複数の方法が組み合わされていると言える。

『源平盛衰記』は、史料や文書、伝承、故事説話といった多くの資料を取り込んでいるが、それがいわば『源平盛衰記』外側からの増補であるのに対して、叙述の繰り返しや型・枠組みの利便は、『源平盛衰記』内側からの増補と言えよう。換言すれば、『源平盛衰記』は自家培養によって物語を生み出している。

『源平盛衰記』の叙述は過剰なものとなされ、否定的な評価となりがちである。しかし、叙述量の多さ自体が他諸本との差異であり特徴であるため、それを看過したままに、『源平盛衰記』の理解はなし得ないのではないであろうか。本章は、そこに一定の方法を見出すことで、膨大な叙述を読み解く一端となるよう試みたものである。

【注】

(1) 津田左右吉「平家物語と源平盛衰記との關係に就いて」『史学雑誌』第二十六編第七号、一九一五・七。

(2) 山下宏明『平家物語研究序説』、明治書院、一九七二・三。

(3) 松尾葦江「源平盛衰記の方法―その饒舌さをめぐって―」『東京女学館短期大学紀要』3、一九八一・二。

(4) 前掲注(1)に同じ。

(5) 前掲注(1)に同じ。

(6) 松尾葦江、説話論集第2集『説話と軍記物語』説話と文学の会編、清文堂出版、一九九二・四。

(7) 松尾葦江「東国のいくさ語り―頼朝旗拳話群を中心に―」『伝承文学研究』37、一九八九・二。

(8) 前掲注(6)に同じ。

(9) なお、中略箇所はそれぞれ以下のとおりである。

一、其義ニハ侍ラズトヨ、御一門ノ事ニ候、假令バ新大納言殿、使ヲ以テ可申事アリ、可立寄ト承シ間、如御錠山門事ト存候テ、中御門ノ宿所へ罷向之處ニ、行綱見來ラバ鹿ノ谷へ可参トゾ仰也ト申間、則打越テ見廻シ侍レバ、馬車其數立並タリ、分入ミレバ酒宴ノ座席也。人々目ニ懸テ其へくト申ニ付テ著座ス。ヤガテ酒ヲスム、

〔『源平盛衰記』巻第五「行綱中言」〕

二、法皇ノ御幸モ成へキニテ候ケルヲ、静憲法印ノ様々コハ浅猿キ御事也。天下ノ大事只今出來ナン。イカニ人勸申トテモ、國土ノ主トシテ争カ一天ノ煩ヲ引出シ御坐

スベキナンド諫申ケルニ依テ、御幸ハ止ラセ給ヌトゾ私語申候シ。ヤガテ鹿谷究竟ノ城也トテ、其二テ兵具ヲ可調ト承キ。加様ノ事人傳ニ被聞召ナバ、誤ナキ行綱マデモ御勘當後恐シク候ヘバ、内々告知セ進スル也

『源平盛衰記』巻第五「行綱中言」

(10) 参考として、覚一本『平家物語』における該当箇所は、以下のとおりである。

俊寛がとふるまうて、康頼がかう申して、西光がと申て、なんどいふ事共、はじめよりありのまゝにはさし過て言ひ散し、(覚一本『平家物語』巻第二「西光被斬」)

(11) 松尾葦江氏は、行綱の発言が酒宴の描写と「ほぼ同じ密度で述べられている」として、「直接話法によって鹿谷陰謀の場面を反復し、清盛の怒りが煽り立てられてゆくのに必要な過程をそのまま描」き、「はじめ行綱自身に対して極度の警戒を示していた清盛がすっかり彼の言に乗ぜられて、激怒するまでの時間が何ら要約されることなく綴られ」たものとする(前掲注(3)に同じ)。

(12) 源健一郎氏は、『源平盛衰記』における鹿ヶ谷謀議の分置を年代記的性格から見ている(源健一郎「源平盛衰記の年代記的性格―鹿谷事件発端部に至る叙述の検討を通して―」『人文論究』41(3)、一九九一・一二)。

(13) たとえば、古くは菅茶山が「大庭が早打の一段に、東鏡をとり入て、東国の軍を詳にせしなり。然ども本の早打の処をも其まゝにおきたれば、二重になりし」と述べている(菅茶山「筆のすさび」巻之四 平家物語盛衰記、新日本古典文学大系99『仁斎日札・たはれ草・不尽言・無可有郷』岩波書店、二〇〇〇・三)。松尾葦江氏は、『源平盛衰記』は大場早馬によって「旗挙話群の大部分をちょうど額縁で囲ったようにはさみつけて、整理している」、「東国記事の大部分―編年体では溯った部分を、額縁形式で括ったわけである」とする(松尾葦江「東国のいくさ語り―頼朝旗挙話群を中心に―」『伝承文学研究』37、一九八九・一二)。また、源健一郎氏は、『源平盛衰記』の時間叙述が多元的な構造をとるとし、この中で時間の収束をもたらす地理的移動として二度の早馬の機能をとらえている(源健一郎「『源平盛衰記』における時間叙述の方法―その多元的構造について―」『日本文芸学』31、一九九四・一二)。

(14) 頼朝と院宣の関係について、羽原彩氏は、「院宣という中央の権威を付加することによって頼朝の立場は上昇させられ、平氏と相対化して位置付けられるに至っている」とする(羽原彩「『源平盛衰記』頼朝挙兵譚叙述の一方」『国文学研究』131、二〇〇〇・六)。また、羽原氏は、「但源平未定之前勇士猶豫之刻、急差下討手、可被鎮凶徒歟」などの叙述から、「盛衰記は、軍勢を取り込もうという意識を平氏・源氏の両方に設定し、その動きを追っていく」とし、さらに、富士川合戦に至るまでの描写を受けて、「両者の動きは、軍勢が集まる源氏と集まらない平氏というように対照的に記される。これは、源平の軍勢を対比的に示し、両者の動きを一对のものとして叙述しようとする盛衰記の姿勢の表れと見ることができよう」と述べている。

(15) 本章において、主として検討に使用したテキストは、『源平盛衰記』・延慶本『平家物語』・長門本『平家物語』・覚一本『平家物語』である。

(16) 参考として、覚一本『平家物語』における該当箇所は、以下のとおりである。

「季重もやがてつゞいてよすべかりつるを、成田五郎にたばかられて、いままで遅としたる也。成田が死なば一所で死なうどちぎるあひだ、さらばとてうちつれよするあひだ、「いたう、平山殿、さきかけばやりなしたまひそ。先をかくるといふは、御方の勢をうしろにおいてかけたればこそ、高名・不覚も人に知らるれ。只一騎大勢の申かけ入ッて討たれたらんは、なんの詮かあらんずるぞ」とせいする間、げにもと思ひ、小坂のあるをさきにうちのぼせ、馬のかしらをくだりさまにひッ立てて、御方の勢をまつところに、成田もつゞいて出できたり。うち並べていくさのやうをも言ひあはせんずるかと思ひたれば、さはなくて、季重をばすげなげにうち見て、やがてつツとはせ抜いてとほるあひだ、あッばれ、此ものはたばかつて、先かけうどしけるよと思ひ、五六段ばかりさきだつたるを、あれが馬は我馬よりはよわげなる物をと目をかけ、一もみもうで追ッついて、「まさなうも、季重ほどの物をばたばかりたまふものかな」と言ひかけ、うちすててよせつれば、はるかにさがりぬらん。よもうしろかげをも見たらじ」とぞ、言ひける。

(17) 成田五郎について、Aでは「家正」とされるが、Bでは「景重」「家正」と二様に記されている。延慶本をはじめ多くの諸本では「成田五郎」とするのみであるが、中院本『平家物語』には「なりた五郎かけしけ」が見出される。

からめての大將軍、九郎御さうし義経に、あひしたかふ人々たれくそ、(中略)なりた五郎かけしけ、(中院本『平家物語』第九「一のたにかせん」の事)さてこそ熊谷、ひら山は、一ちん二ちんをあらそひけれ、夜あけて後、なりた五郎かけしけ、しらはたさして、三十きはかりにていてきたり、(中院本『平家物語』第九「一のたにかせん」の事)

(18) 『源平闘諍録』には、以下のような叙述がある。ただし、直実父子が季重の動向に接する場面は見られない。

平山一の谷を打ち下り、下早に打つて行く程に、夜も深け方に成りにけり。二月六日の夜なれば、余寒も未だ余波有り。馬の跡凹みにたりければ、薄氷の、馬二三匹の跡と覺しくて、歩み破つてぞ通りたる。平山此れを見て、「安からぬ。熊替前に行きにけり」と思ひて、下早にこそ忿ぎけれ。

(19) 物語の展開順は、E↓D↓B↓C↓Aである。『源平闘諍録』卷八下「一の谷・生田の森の合戦の事」

(20) 思ノ如ニ播磨路ノ渚ニ打出テ、七日ノ卯剋計ニ、一谷ノ西ノ木戸口ヘ寄テミレバ、城墩ノ構様、誠ニオビタヽシ。(延慶本『平家物語』第五本「源氏三草山并一谷追落事」)

第三章 巴の物語

一、はじめに

『源平盛衰記』は、『平家物語』諸本の一つに数えられている。だが覚一本『平家物語』などに比べて、その物語の拡散性・分裂性が指摘されており、山下宏明氏は、「諸本分類上、この盛衰記も『平家物語』の一形態に数えられはするものの、物語精神に関する限り、盛衰記はすでに物語から逸脱の歩みを踏み出したと評すべきであろう。盛衰記の評価には、物語評とは違った視座を必要とするものらしい」と述べている(1)。今日に至るまで、『源平盛衰記』に関してさまざまな角度から研究が進められ、他本とは異なる『源平盛衰記』の特長も指摘されているが、文学的評価についてはいまだ十分になされていない。本章は、「木曾最期」における巴の物語の分析を通して、『源平盛衰記』の物語としての特質の一端を解明しようとするものである(2)。

「木曾最期」における巴について、『源平盛衰記』は他本にはない逸話を多く有している。たとえば、巴と畠山重忠が戦う場面や、二度装束を変える巴の描写、巴の最後の戦の様子、木曾義仲と別れる際のやりとり、巴の後などである。

『源平盛衰記』における巴について、水原一氏は、義仲の最期を人々に語り伝える「報道者」としての役割を指摘する(3)。また、細川涼一氏は、後日談として巴が和田義盛のもとで朝比奈義秀を産んだとする『源平盛衰記』を、「女性の血筋による大力の継承に対する信仰が典型的に表された」とし(4)、源健一郎氏は、『源平盛衰記』の巴には妾としての女性性と大力をもつ男性性があり、「弔う女」と「産む女」として、「中世という武士の家からの要請に、もっとも敏感に反応したのが盛衰記」としている(5)。一方、濱中修氏は、「おなり神」信仰という視点から、『源平盛衰記』の巴に宗教的な性格が付与され、義仲を守護する存在となっていると指摘している(6)。本章では、『源平盛衰記』において巴が義仲の「乳母子」で「妾」とされる点に着目して巴の物語を分析し、「木曾殿の乳母子」と名乗る巴が内部から物語を相対化し得ることを論じる。それは、「女なれば」と巴に離脱を命じ、乳母子である今井兼平と「一所の死」を遂げようとする、覚一本『平家物語』を中心とした「木曾最期」を相対化する視点でもある。

二、「女ニハ非ズ」

『源平盛衰記』における巴の物語は、三つに分けることができる。

- ① 畠山重忠との戦い
- ② 木曾義仲との別れ
- ③ 信濃へ下り、のちに関東へ

まず、①畠山重忠との戦いは、『源平盛衰記』のみに見られるものである。『源平盛衰記』の場合、この重忠との戦いが巴の登場場面となっている。

畠山ハ九郎義經ト院御所ニ候ヒケルガ、木曾漏ヤシヌラン覺束ナシトテ、三條河原ノ西ノ端マデ打出タリ。(中略)其中ニA木曾方ヨリ萌黄糸威ノ鎧ニ射残シタリケル鷹羽征矢負テ、滋籐弓真中取、苜毛馬ノ太ク逞キニ、小キ巴摺タル鞍置テ乗タリケル武者一陣ニ進テ戦ケルガ、射モ強ク切モ強ク、馳合々々責ケルニ、指モ名高キ畠山、河原ヘサト引テ出。畠山半澤六郎ヲ招テ、「イカニ成清、重忠十七ノ年小坪ノ軍ニ會初テ、度々ノ戦ニ合タレ共、是程軍立ノケハシキ事ニ不合。木曾ノ内ニハ今井、樋口、楯、根井、此等コソ四天王ト聞ニ、是ハ今井樋口ニモナシ。サテ何ナル者ヤラン」ト問ケレバ、

〔『源平盛衰記』卷第三十五「巴關東下向」〕

源義経とともにいた院の御所から離れ、義仲一行と戦う重忠の前に「萌黄糸威ノ鎧ニ射残シタリケル鷹羽征矢負テ、滋籐弓真中取、苜毛馬ノ太ク逞キニ、小キ巴摺タル鞍置テ乗タリケル武者」が現れる。その強さは「指モ名高キ畠山、河原ヘサト引テ出」程である(傍線部A)。「源平盛衰記」でも勇猛さが際立つ重忠をして「是程軍立ノケハシキ事ニ不合」と言わしめる武者として、巴が登場する。だがこのとき重忠はこの武者を巴と判らず、半沢成清に「何ナル者ヤラン」と問うている。

成清、「アレハ木曾ノ御乳母ニ中三権頭ガ女巴ト云女也。ツヨ弓ノ手タリ荒馬乗ノ上手、B乳母子ナガラ妾シテ、内ニハ童ヲ仕フ様ニモテナシ軍ニハ一方ノ大將軍シテ更ニ不覺ノ名ヲ不取。今井樋口ト兄弟ニテ、怖シキ者ニテ候」ト申。

〔『源平盛衰記』卷第三十五「巴關東下向」〕

「ツヨ弓」「荒馬乗」といった『平家物語』諸本に共通する巴の姿が語られているが、留意すべき点は、巴が義仲の「乳母子ナガラ妾」とされる点である(傍線部B)。巴を義仲の「乳母子」とすることも、また「妾」とすることも、『源平盛衰記』のみに見られるものである。この「乳母子」で「妾」という点が、巴の物語の鍵となる。

成清の話聞いた重忠は、つぎのように逡巡している。

畠山、「サテハイカダ有ベキ。C女ニ追立ラレタルモ云カヒナシ。又責寄テ女ト軍セン程ニ、不覺シテハ永代ノ疵。多者共中ニ、巴女ニ合ケルコソ不祥ナレ。但D木曾ノ妾トイヘバ懐キゾ。重忠今日ノ得分ニ巴ニ組ンテ虜ニセン。返セ者共」トテ

〔『源平盛衰記』卷第三十五「巴關東下向」〕

重忠は、「女ニ追立ラレタルモ」も、また「責寄テ女ト軍セン程ニ、不覺シテ」もというためらいを見せ(傍線部C)、結局「木曾ノ妾トイヘバ懐キゾ」として巴と組む決断をする(傍線部D)。この一連の重忠の考えは、いずれも巴が「女」であることに起因するものである。

畠山巴強チニ近ク廻合。是ハ得タル便宜ト思、馬ヲ早メテ馳寄テ、巴女ガ弓手ノ鎧ノ袖

ニ取付タリ。巴叶ハジトヤ思ケン、乗タル馬ハ春風トテ信濃第一ノツヨ馬也。一鞭アテ、アフリタレバ、胄ノ袖フツト引切テ二段計ゾ延ニケル。畠山、E「是ハ女ニハ非ズ、鬼神ノ振舞ニコソ。加様ノ者ニ箭一ツヲモ射籠レテ永代ノ耻ヲ不可残。引ニ過タル事ナシ」トテ、河原ヲ西ヘ引退キ、院御所ヘゾ歸参ケル。

(『源平盛衰記』卷第三十五「巴關東下向」)

重忠が巴の鎧の袖に取り付くと、巴は馬に一鞭あて、袖を切つて逃げ延びる。巴の大力ぶりが見て取れる場面である(7)が、これを見た重忠は「是ハ女ニハ非ズ、鬼神ノ振舞ニコソ」と述べ(傍線部E)、院の御所へ帰つてゆく。「鬼神」は人間ばなれした力を持つものの形容で、『源平盛衰記』では、鶴越の坂落としの際に馬を担いで降りた重忠が「只今カヽル振舞、人倫ニハ非ズ、誠ニ鬼神ノ所為」(『源平盛衰記』卷第三十七「義経落鶴越」)と評されるが、ここではその重忠をして「鬼神」と言わしめる反転した構図となっている。さらに巴が「女」であることを軸に考えを巡らせていた重忠が「女ニハ非ズ」「鬼神」と捉え直して引き退いてゆくことは、「女」という枠組みを超えた巴のありようを、その登場場面において端的に示している。

三、「木曾殿ノ乳母子」

つぎに、②木曾義仲との別れは、諸本によってその場面が明確に描かれるものとならないものがある。たとえば『源平盛衰記』と同じ読み本系に属する延慶本『平家物語』では、都を追われた義仲一行の主従七騎のうちの一騎に巴を挙げ、武者二人を左右の脇にはさんで一締め倒すという勇猛さを描き出しながら、義仲一行が兼平と再会して戦を続けるうちに、「軀絵ハ落ヤシヌラム、被打シヌラム、行方ヲ不知ナリニケリ」(延慶本『平家物語』第五本「義仲都落ル事付義仲被討事」とされている。また、同じく読み本系に属する長門本『平家物語』では、兼平と再会する前に「此ともゑは、いかゝ思けん、あふ坂よりうせにけり」(長門本『平家物語』卷第十六「義仲最後合戦事同頸渡事」と姿を消している。一方、『源平盛衰記』や覚一本『平家物語』では、義仲の命によって巴が離脱している。

覚一本『平家物語』では、都を追われた主従七騎のうちに巴がおり、兼平と再会して戦を続けるが、一行はついに主従五騎となる。

五騎が内まで巴は討たれざりけり。木曾殿、F「おのれはとうく、女なれば、いづちへもゆけ。我は打死にせんと思ふなり。もし人手にかゝらば、自害をせんずれば、木曾殿の最後のいくさに、女を具せられたりけりなぞ言はれん事もしかるべからず」とのたまひけれども、なほ落ちもゆかざりけるが、あまりに言はれ奉て、「あッばれ、よからうかたきがな。G最後のいくさして見せ奉らん」とてひかへたるところに、武蔵国に聞こえたる大ぢから、恩田の八郎師重、卅騎ばかりで出できたり。巴その中へかけ入、恩田の八郎におし並べてむずととつてひき落し、わがのツたる鞍の前輪におしつけて、ちツともはたらかさず、H頸ねぢきつてすててンげり。其後、物具脱ぎ捨て、東国の方へ落ぞゆく。

(覚一本『平家物語』卷第九「木曾最期」)

主従五騎となったとき、義仲は巴に「おのれはとうく、女なれば、いづちへもゆけ」と命じており(傍線部F)、義仲の「打死にせん」「もし人手にかゝらば、自害をせん」という覚悟と、「木曾殿の最後のいくさに、女を具せられたりけりなど言はれん事もしかるべからず」という理由が語られる。「女」として巴は離脱を命じられるのである。これに対して巴は、「最後のいくさして見せ奉らん」と敵を討つてみせ(傍線部G)、落ち行く。なお、このときの敵の首は捨てられている(傍線部H)。

一方、『源平盛衰記』では、重忠らとの戦いを経て義仲一行は主従七騎となるが、いまだ兼平とは再会していない。ここでふたたび巴の装束描写がなされる。

巴ハI都ヲ出ケル時ハ、紺村紅ニ千鳥ノ冑直垂ヲ着タリケルガ、關寺合戦ニハ、紫隔子ヲ織付タル直垂ニ、菊閉滋クシテ、蒨黄絲威ノ腹巻ニ袖付テ、五枚甲ノ緒ヲシメ、三尺五寸ノ太刀ニ、二十四指タル真羽ノ矢ノ射残タルヲ負、重籐ノ弓ニセキ弦カケ、連錢鞞毛ノ馬ニ金覆輪ノ鞍置テゾ乗タリケル。七騎ガ先陣ニ進テ打ケルガ、何トカ思ケン、J甲ヲ脱、長ニ餘ル黒髪ヲ後ヘサト打越シテ、額ニ天冠ヲ當テ、白打出ノ笠ヲキテ、眉目モ形モ優也ケリ。歳ハ廿八トカヤ。

(『源平盛衰記』卷第三十五「巴關東下向」)

関寺合戦のときには、巴は都を出たときとは装束を変えていることが示されている(傍線部I)。その上で、七騎の先陣に進む巴は「甲ヲ脱、長ニ餘ル黒髪ヲ後ヘサト打越シテ、額ニ天冠ヲ當テ、白打出ノ笠ヲキテ」いる(傍線部J)。「天冠」を当てることについては宗教性の付与(8)や芸能的性格の象徴(9)といった指摘があり、また、「白打出ノ笠」については男性性の象徴と指摘されている(10)が、留意すべき点は、「長ニ餘ル黒髪ヲ後ヘサト打越シテ」という点である。「長ニ餘ル黒髪」は女性の象徴であり、巴の美しさを表してもいるが、この髪がこのあと物語を大きく動かす切っ掛けとなるのである。

爰ニ遠江國住人内田三郎家吉ト名乗テ、三十五騎ノ勢ニテ巴女ニ行逢タリ。内田敵ヲ見テ、
「天晴武者ノ形氣哉。但K女カ童カオボツカナシ」トゾ問ケル。I郎等能々見テ、「女也」ト答。

(『源平盛衰記』卷第三十五「巴關東下向」)

巴の姿を見た内田家吉は「天晴武者ノ形氣哉」と称えるが、「女カ童カオボツカナシ」とする(傍線部K)(11)。さらに家吉の郎等は、その姿をよくよく見た上で「女也」と答えている(傍線部L)。『平家物語』諸本では武士に従って戦う童がしばしば見られるが、このときの巴の姿は、一見して女とも童とも捉えられるものではなく、「女カ童カ」という状態にある(12)。家吉は武勇の誉れ高い巴を前に「イカニスベキ」と思い煩うが、「女雖強、百人ガ力ニヨモ過ジ」として郎等らとともに巴を捕えようとする。しかし、「女程ノ者ニ組トテ兎角計ヲ出シケルヨト殊ニ後陣ニ引ヘタル甲斐ノ一條ノ思ハン事コソ耻シケレ」と思い返し、ただ一騎で巴に向かう。

内田只一人駒ヲ早メテ進ム処ニ、巴是ヲ見テ先敵ヲ讚タリケリ。「天晴武者ノ貞哉。東國ニハ、小山、宇都宮カ。千葉、足利歟。三浦、鎌倉カ。オボツカナ誰人ゾ。角間ハ、M木曾殿ノ乳母子ニ、中三権頭兼遠ガ女ニ、巴トイフ女也。N主ノ遺ノ惜ケレバ、向後ヲ見ントテ御伴ニ侍」ト云。「鎌倉殿ノ仰ヲ蒙リ、勢多ノ手ノ先陣ニ参ルハ、遠江國住人内田三郎家吉」ト名乗テ進ケリ。
(『源平盛衰記』卷第三十五「巴關東下向」)

ここで初めて巴の名乗りが見られ、巴自身が「木曾殿ノ乳母子」と名乗っている(傍線部M)。先述のとおり、「乳母子」で「妾」という点が巴の物語の鍵となるのだが、巴は自身の名乗りのはじめに「木曾殿ノ乳母子」を挙げ、「主ノ遺ノ惜ケレバ、向後ヲ見ントテ御伴ニ侍」と語っている(傍線部N)。「平家物語」諸本において、義仲の「向後ヲ見ン」とする「乳母子」は兼平であり、義仲と再会した際に兼平は「御ゆくへのおぼつかなきに、これまでまゐッテ候」(覚一本『平家物語』卷第九「木曾最期」)と語る。さらに延慶本『平家物語』や覚一本『平家物語』では、兼平と再会するまでに義仲が「今井がゆくへを聞かばや」(覚一本『平家物語』卷第九「河原合戦」)と兼平を思う姿も繰り返し描き出されている。だが『源平盛衰記』では、兼平の登場は巴が離脱した後であり、巴が離脱するまでは兼平に言及されることすらない。すなわち『源平盛衰記』では二人の「乳母子」が入れ替わるように登場するのだが、そこに対照的な二人の「乳母子」の物語が浮かび上がるのである。

四、義仲との別れ

巴の姿を見た家吉が「天晴武者ノ形氣哉」と称えたことに呼応するように、巴は「天晴武者ノ貞哉」と述べている。ここから巴と家吉の戦いは、ある瞬間まで均衡が保たれた状態が続く。

内田ガ弓ヲ引ザレバ、女モ矢ヲバ不射ケリ。互ニ情ヲ立タレバ、内田太刀ヲ拔ザレバ、女モ太刀ニ手ヲ懸ズ。主ハ急タリ、馬ハ早リタリ。巴内田馬ノ頭ヲ押並、鎧トノ蹴合スルカトスル程ニ寄合、互ニ音ヲ揚、鎧ノ袖ヲ引違、「エタリヤヲウ」トゾ組タリケル。聞ル沛艾ノ名馬ナレ共、大力カ組合タレバ、二疋ノ馬ハ中ニ留テ働ズ。

(『源平盛衰記』卷第三十五「巴關東下向」)

巴と家吉は、互いに情を立て弓を引かず太刀を抜かず、馬を並べて組み合っても互いの力が拮抗して「二疋ノ馬ハ中ニ留テ働ズ」という状態になる。ところが家吉のある振舞によってこの均衡が崩れ、物語も大きく動き出す。

内田勝負ヲ人ニ見セント思ケルニヤ、弓箭ヲ後へ指廻シ、O女ガ黒髪三匝ニカラマヘテ、腰刀ヲ拔出シ、中ニテ首ヲカントス。女是ヲ見テ、「汝ハ内田三郎左衛門トコソ名乗ツレ、正ナキ今ノ振舞哉。内田ニハアラズ、其手ノ郎等カ」ト問ケレバ、内田、「我身コソ大將ヨ。郎等ニハ非ズ。行跡何ニ」ト申ハ、女答テ云、「女ニ組程ノ男ガ中ニテ刀ヲ抜キ目ニ見スル様ヤハ有ベキ。軍ハ敵ニ依テ振舞ヘシ。故實モ知ヌ内田哉」トテ拳ヲ握リ、刀持タル

臀ノカヽリヲシタヽカニ打。餘リニ強ク被打テ、把ル刀ヲ被打落、「ヤヲレ家吉ヨ、日本一ト聞エタル木曾ノ山里ニ住タル者也。我ヲ軍ノ師ト憑メ」トテ、P弓手ノ肘ヲ指出シ、甲真顔取詰テ、鞍ノ前輪ニ攻付ケツヽ、内甲ニ手ヲ入テ、七寸五分ノ腰刀ヲ拔出シ、引キアヲノケテ首ヲ搔。刀モ究竟ノ刀也、水ヲ搔ヨリモ尚安シ。馬ニ乗直リ、一障泥アヲリタレバ、身質ハ下ヘゾ落ニケル。（『源平盛衰記』卷第三十五「巴關東下向」）

家吉は弓矢を後ろへ差し回し、「女ガ黒髪三匝ニカラマヘテ、腰刀ヲ拔出シ、中ニテ首ヲカヽント」する（傍線部O）。先述のとおり、このとき巴は「長ニ餘ル黒髪ヲ後ヘサト打越シテ」いた。家吉はこれを利用したのである。だが首を搔こうとした家吉の振舞を巴は「正ナキ今ノ振舞哉」と批判し、たちどころにその首を搔く（傍線部P）。戦いに先立って巴が「長ニ餘ル黒髪ヲ後ヘサト打越シ」た姿となっていたことが、このような家吉の振舞に繋がり、それが両者の均衡を崩して、家吉の首を搔くことに繋がる。さらにここで巴が搔いた家吉の首が、このあと義仲との別れにまで繋がるのである。

Q首ヲ持チ、木曾殿ニ見セ奉レバ、「穴無慙ヤ。是ハ八箇國ニ聞シ男、美男ノ剛者ニテ在ツル者ヲ。被討ケルコソ無慙ナレ。R是モ運盡ヌレバ、汝ニ討レヌ。義仲モ運盡タレバ、何者ノ手ニ懸、アヘナク大死センズラン。S日來ハ何共思ハヌ薄金ガ、肩ヲ引テ思フ也。T我討レテ後ニ、木曾コソ幾程命ヲ生ントテ、最後ニ女ニ先陣懸サセタリトイハン事コソ辱シケレ。汝ニハ暇ヲ給。疾々落下」トゾ宣ケル。（『源平盛衰記』卷第三十五「巴關東下向」）

『源平盛衰記』では、巴は首を捨てず義仲に見せ（傍線部Q）、その首を見た義仲は「是モ運盡ヌレバ、汝ニ討レヌ。義仲モ運盡タレバ、何者ノ手ニ懸、アヘナク大死センズラン」と述べている（傍線部R）。義仲は家吉の討死を「運盡ヌレバ」と捉え、「義仲モ運盡タレバ」とそこに自身の姿を重ねるのである。そのとき義仲から出る言葉が「日來ハ何共思ハヌ薄金ガ、肩ヲ引テ思フ也」である（傍線部S）。この言葉は、『源平盛衰記』を含め『平家物語』諸本に共通して、最終的に主従二騎となった義仲が乳母子・兼平に対して語る言葉である。『源平盛衰記』では兼平に先んじて巴に同じ言葉を語ることになり、その遠心性を示してもいるが、もう一人の「乳母子」巴に対してこの言葉がどのように用いられているかという点に留意すべきである。義仲は巴に討たれた家吉に自身の姿を重ね、眼前に迫る死を感じたとき、「日來ハ何共思ハヌ」鎧が「肩ヲ引」くように思われたのである。

そしてこれが巴と義仲の別れに繋がる。巴が見せた敵の首に自身の死を見た義仲は、「我討レテ後ニ、木曾コソ幾程命ヲ生ントテ、最後ニ女ニ先陣懸サセタリトイハン事コソ辱シケレ」と巴に離脱を命じるのである（傍線部T）。覚一本『平家物語』と同様に、「女」として巴は離脱を命じられている。

巴申ケルハ、「我幼少ノ時ヨリ君ノ御内ニ召仕レ進テ、野ノ末山ノ奥マデモ一ツ道ニト思切侍。今懸ル仰ヲ承ルコソ心ウケレ。U君ノイカニモ成給ハン處ニテ、首ヲ一所ニ並ベン」

ト搔詢キ云ケレバ、

(『源平盛衰記』卷第三十五「巴關東下向」)

「女」として離脱を命じる義仲に、巴は「君ノイカニモ成給ハン處ニテ、首ヲ一所ニ並ベン」と述べ(傍線部U)、義仲と「一所の死」を望む。『平家物語』諸本において、義仲がともに「一所の死」を遂げようとする人物は乳母子・兼平であり、義仲が兼平と「一所で死なん」(覚一本『平家物語』卷第九「木曾最期」)とする姿が繰り返し描き出されているが、『源平盛衰記』において、「女」として離脱を命じられた巴は、「乳母子」として義仲と「一所の死」を望むのである(13)。しかし、巴に対する義仲の言葉は、兼平のときとは対照的なものであった。

木曾、「誠サコソハ思ラメ共、我、去年ノ春、信濃國ヲ出シ時、妻子ヲ捨置、又再不見シテ、永キ別ノ道ニ入ン事コソ悲ケレ。去バ無ラン跡マデモ、此事ヲ知ラセテ、後ノ世ヲ弔バヤト思ヘハ、V最後ノ伴ヨリモ可然ト存也。疾々忍ビ落テ、信濃ヘ下リ、此有様ヲ人々ニ語レ。敵モ手繁見ユ。早々ト宣ケレバ、巴、遣ハ様々惜ケレ共、W随主命、落ツル涙ヲ拭ツ、上ノ山ヘゾ忍ケル。(『源平盛衰記』卷第三十五「巴關東下向」)

「首ヲ一所ニ並ベン」とする巴に、義仲は信濃に捨て置いてきた妻子に自身の最期の有様を語れと命じる。義仲はこれを「最後ノ伴ヨリモ可然」と述べ(傍線部V)、巴はこれを「主命」として義仲のそばを離れている(傍線部W)。「乳母子」として「一所の死」を望む巴は、「最後ノ伴ヨリモ可然」という主命に従い、ついに離脱を受け入れるのである。覚一本『平家物語』では、離脱を命じられた巴が「最後のいくさして見せ奉らん」と敵を討ち、その首を捨てて落ち行くが、『源平盛衰記』では、巴が討った家吉の首を義仲に見せ、それが離脱の命に繋がるため、結果的に家吉との戦いが巴の最後の戦となった(14)。

巴は、主従七騎となった義仲一行の先陣に進み、「木曾殿ノ乳母子」と名乗って見事な戦いをしてみせた。だが巴に討たれた敵の首を見た義仲は、「女」として巴に離脱を命じる。また、離脱を命じる理由について、義仲は、覚一本『平家物語』では「木曾殿の最後のいくさに、女を具せられたりけりな言はれん事もしかるべからず」と述べるが、『源平盛衰記』では「我討レテ後ニ、木曾コソ幾程命ヲ生ントテ、最後ニ女ニ先陣懸サセタリトイハン事コソ辱シケレ」と述べている(傍線部T)。すなわち『源平盛衰記』では、最後に女性に先陣を駆けさせたと言われることを恥とするのだが、このとき巴は正に主従七騎の先陣に進んでいた。ここに、義仲の「乳母子」としての振舞を見せる巴と、その巴を「女」として捉える義仲のズレが浮き彫りになる。

また、家吉がからげた「長ニ餘ル黒髪」、両者の均衡を崩して家吉の首を搔くことに繋がる切っ掛けとなった「長ニ餘ル黒髪」は女性の象徴である。さらに家吉との戦いでは、巴に対して「女」という呼称が用いられている(引用本文波線部)。両者の戦いは「内田」と「女」の戦いとして描き出されるのである。だがその巴の戦いぶりは、家吉の振舞を批判し(15)、「我ヲ軍ノ師ト憑メ」と述べ、たちどころに首を搔くという、家吉を圧倒するものであった。巴を義仲の「乳母子ナガラ妾」とする『源平盛衰記』では、その相克の中に巴の物語が立ち現れるのであ

る。

五、姿を変えてゆく巴

又粟津ノ軍終後、物具脱捨、小袖装束シテ信濃へ下り、女房公達ニ角ト語り、互ニ袖ヲソ絞ケル。
(『源平盛衰記』卷第三十五「巴關東下向」)

義仲のそばを離れた巴は、「粟津ノ軍終後」、物具を脱ぎ、小袖装束をして(傍線部X)、主命のとおり信濃へ下る。巴が離脱を命じられたのは関寺の合戦のときであり、『源平盛衰記』ではこのあと義仲が兼平と再会して最後の戦をする。その終わりは、義仲の最期を見た兼平が「主ノ御伴ニ」自害し、「兼平自害シテ後ハ、粟津ノ軍モ無リケリ」(『源平盛衰記』卷第三十五「粟津合戦」)で締めくくられている。「一所の死」を遂げることがかなわなかった巴は、義仲が乳母子・兼平と最期を迎えてから、物具すなわち武者姿を脱ぎ捨て、小袖すなわち女性の姿となったのである。

『源平盛衰記』における巴の物語は、①畠山重忠との戦い、②木曾義仲との別れ、③信濃へ下り、のちに関東への二つに分けることができるが、それぞれの場面で巴は姿を変えてゆく。まず、「萌黄糸威ノ鎧ニ射残シタリケル鷹羽征矢負テ、滋籐弓真中取、芦毛馬ノ太ク逞キニ、小キ巴摺タル鞍置テ乗タリケル武者」として重忠の前に現れる。その鎧の袖に重忠が取り付くと、巴は馬に一鞭あてて袖を引き切り、「是ハ女ニハ非ズ、鬼神ノ振舞ニコソ」と言わしめている。つぎに、義仲との別れに繋がる関寺合戦のときには、先述のとおり、都を出たときとは装束を変えていることが示され、さらに「甲ヲ脱、長ニ餘ル黒髪ヲ後ヘサト打越シテ、額ニ天冠ヲ當テ、白打出ノ笠ヲキテ」いた。その姿を見た家吉は「女力童力オボツカナシ」と述べており、このときの巴の姿は一見して女とも童とも捉えられない、あわいの状態にある。それと重なるようにして、物語は「乳母子」と「妾」の間を進んでゆく。巴は「木曾殿ノ乳母子」と名乗って見事な戦いぶりを見せるが、その戦いは「内田」と「女」の戦いとして描き出され、義仲は巴を「女」と捉えている。そして「乳母子」として「一所の死」を遂げる相手を失ったとき、巴はふたたび装束を変え、女性の姿となる。『源平盛衰記』では、巴の姿とともに物語が移り変わってゆくのである。

六、義仲の最期

『平家物語』諸本では、都を追われた義仲一行のうちに巴がおり、兼平と再会する(16)。一方、『源平盛衰記』では、先述のとおり、巴が離脱するまでは兼平に言及されることすらなく、巴が離脱した後、入れ替わるようにして兼平が登場する。

義仲ハ關山關寺打過テ、南ヲ指テ行程ニ、粟津濱ニテ行會ヌ。木曾云ケルハ、「都ニテイカニモ成ベカリツルニ、今一度互ニ相見トテ、多ノ敵ニ後ヲ見セ、是マデ來レリ」ト語テ涙グミケリ。今井モ、「勢多ニテイカニモ成ベウ候ヒツレ共、御向後ノオボツカナク侍テ、是マデ遁参タリ」ト
(『源平盛衰記』卷第三十五「粟津合戦」)

「都ニテイカニモ成ベカリツルニ、今一度互ニ相見トテ、多ノ敵ニ後ヲ見セ、是マデ來レリ」という義仲に、「勢多ニテイカニモ成ベウ候ヒツレ共、御向後ノオボツカナク侍テ、是マデ遁参タリ」と兼平は応じる。巴のときは対照的に、義仲と兼平の言葉は重なり合っている。兼平と再会した義仲は軍勢を増し、一条忠頼や源範頼らとの戦いを続けるが、ついに主従二騎となる。

粟津ノ軍ノ終ニハ、心ハ猛ク思ヘ共、運ノ極メノ悲サハ、主従二騎ニ成ニケリ。増テ中有ノ旅ノ空、獨行ナル道ナレバ、想像コソ哀ナレ。木曾殿、鎧踏張弓杖衝テ、今井ニ宣ケルハ、
Y 「日來ハ何ト思ハヌ薄金ガ、ナドヤラン重ク覺ル也」ト宣ヘバ、

〔『源平盛衰記』卷第三十五「粟津合戦」〕

ここで、ふたたび「日來ハ何ト思ハヌ薄金ガ、ナドヤラン重ク覺ル也」という言葉が語られる(傍線部Y)。巴に討たれた家吉に自身の姿を重ね、眼前に迫る死を感じたとき、義仲は「日來ハ何共思ハヌ」鎧が「肩ヲ引」くように思われた。兼平と主従二騎となったとき、義仲はその重さをふたたび感じるようになる。だが「乳母子」として「一所の死」を望む巴に離脱を命じたのは反対に、此度は義仲が乳母子・兼平と「一所の死」を望む。

兼平、「何條去事侍ベキ、日來ニ金モサラズ、別ニ重キ物ヲモ付ズ、御年三十七御身盛也。御方ニ勢ノナケレバ臆シ給ニヤ。兼平一人ヲバ餘ノ者千騎萬騎トモ思召候ベシ。終ニ可死物故ニ、ワルビレ見エ給フナ。アノ向ノ岡ニ見ル一村ノ松ノ下ニ立寄給テ、心閑ニ念佛申テ御自害候ヘ(中略)ト泣々涙ヲ押ヘ詢ケレバ、木曾ハ遺ヲ惜ツ、乙「都ニテイカニモ成ベカリツレ共、此マデ落キツルハ汝ト一所ニテ死ント也。何迄モ同枕ニ討死セント思也」ト宣ヘバ、

〔『源平盛衰記』卷第三十五「粟津合戦」〕

自害を勧める兼平に、義仲は「都ニテイカニモ成ベカリツレ共、此マデ落キツルハ汝ト一所ニテ死ント也。何迄モ同枕ニ討死セント思也」と述べ(傍線部乙)、兼平と「一所の死」を望む。その姿は、離脱を命じる義仲に、巴が「君ノイカニモ成給ハン處ニテ、首ヲ一所ニ並ベン」と述べ、義仲と「一所の死」を望む姿と反転して重なる。義仲の最期において、兼平とは対照的なもう一人の「乳母子」巴の物語がふたたび浮かび上がるのである。

七、能「巴」が映すもの

巴を義仲の「乳母子ナガラ妾」とする『源平盛衰記』では、その相克の中に巴の物語が立ち現れる。それは、主・義仲が「一所の死」を望み、「主ノ御伴ニ」自害した乳母子・兼平とは対照的なもう一人の「乳母子」の物語である。

ここで、能「巴」に目を向けておきたい。能「巴」は、『平家物語』諸本、特に『源平盛衰記』との関係が指摘されており、伊藤正義氏は、「能《巴》の本説としての平家物語は、『源平盛衰記』である可能性が高い」としている(17)。たとえば、義仲が巴に「これなる守小袖を、木曾に届けよ」と命じる点や、巴が「上帯切り、物の具心静かに脱ぎ置き、梨打ち烏帽子同じく、かし

ここに脱ぎ捨て、御小袖を引き被き」木曾に落ちて行く点などである(18)。

しかし、能「巴」において、後シテの巴の霊が語る義仲の最期は、『源平盛衰記』を含め『平家物語』諸本とは異なるものとなっている。義仲が馬を「薄氷の深田」に入れてしまう場面は『平家物語』「木曾最期」に見られるものであるが、『平家物語』諸本に共通して、このあとに続くのは、義仲が兼平の行方を見ようと振り返り、その内甲を敵に射られるという場面である。だが巴の霊が語る内容は、それとは異なる。巴は義仲を乗替の馬に乗せ、松原で「はや御自害候へ」と促す。さらに「巴も供」と言うが、義仲はそれを拒み、「守小袖を、木曾に届けよ」と命じる。御前を立った巴が大勢の敵と戦い戻って見ると、義仲はすでに自害し、松の根元に伏していたとされるのである。

『平家物語』諸本において、義仲に松原での自害を促すのは兼平である(19)。一方、能「巴」では兼平が全く登場せず、代わりに巴がその役割を担う。乳母子・兼平の役割を、巴が演じるのである。また、義仲の自害は、『平家物語』「木曾最期」ではついに果たせなかった。しかし、能「巴」において、巴の霊が語る義仲の最期では、巴は義仲を薄氷の深田から助け出し、松原に御供して、義仲は自害を果たすのである。『源平盛衰記』において、兼平とは対照的なもう一人の「乳母子」巴が成し遂げられなかったことが、能「巴」において果たされていると言えよう(20)。

だが能「巴」においても、巴は義仲と「一所の死」を遂げることはできなかった。「巴も供」と言う巴に、義仲は「守小袖を、木曾に届けよ」と命じる。このとき義仲は「この旨を、背かば主従三世の機縁絶え果て、長く不孝」と述べている。先述のとおり、『源平盛衰記』では、信濃にいる妻子に最期の有様を語れと命じ、義仲はこれを「最後ノ伴ヨリモ可然」と述べ、巴はこれを「主命」として離脱を受け入れている。覚一本『平家物語』では、「いづちへもゆけ」と命じられるが、『源平盛衰記』や能「巴」では、巴に「主命」が与えられ、巴はそれを携えて発つのである。

八、おわりに

巴について、高木信氏は覚一本『平家物語』を中心に論じている(21)が、この論考に関して、神田龍身氏は、「氏からするといたって評判の悪い読本系のテキストに『源平盛衰記』がある。確かに『源平盛衰記』では義仲の「鎧が今日は重うなったるぞや」は巴に対しての発言となっており、これではすべてがぶち壊しである。が、それにしても読本には読本ならではの様々な可能性が孕まれているのではないのか」と述べている(22)。

兼平に先んじて、巴に「日来ハ何共思ハヌ薄金ガ、肩ヲ引テ思フ也」と語る『源平盛衰記』のテクストは、どう読むことができるのか。本章では、「乳母子ナガラ妾」とされる巴の物語の分析を通して検討した。松尾葦江氏は、『源平盛衰記』に「コピー」の方法が用いられていると指摘している(23)。義仲が巴に「日来ハ何共思ハヌ薄金ガ、肩ヲ引テ思フ也」と語るのもまた兼平に語る言葉のコピーである。しかし、もう一人の「乳母子」巴の物語は、兼平の物語のコピーにとどまることなく、義仲と兼平の物語を相対化するものとなっている。

『源平盛衰記』は、一字下げ記事に多くの故事説話や異説を有しており、そこに『源平盛衰記』の「相対的な複数の視点」(24)や「相対化の語り」(25)があることが指摘されている。故

事説話や異説は、いわば外部から物語を相対化するものであるが、『源平盛衰記』における巴の視点は、物語を内部から相対化するものと言えよう。

『平家物語』の世界を対象化し、遠心性をもって新たな物語を生み出す『源平盛衰記』テクストは、覚一本『平家物語』を中心とした『平家物語』の世界に対して、ときにそれを相対化する新たな物語世界をひらいている。それは『源平盛衰記』の物語としての特質の一つであり、『平家物語』の世界のさらなる広がりを示してもいる。

【注】

- (1) 山下宏明 『平家物語』合戦談の叙法 『文學』第五十四卷第九号、一九八六・九。
- (2) なお、次章・次々章は、敦盛最期譚および小宰相の入水の分析を通して、本章に続いて『源平盛衰記』の物語としての特質のさらなる解明を目指すものである(本論第二部第四章「敦盛最期譚の可能性」、本論第二部第五章「小宰相の入水」)。
- (3) 水原一 「義仲説話の形成」 『平家物語の形成』加藤中道館、一九七一・五。
- (4) 細川涼一 『平家物語の女たち』講談社、一九九八・一〇。
- (5) 源健一郎 「巴に求められたもの―源平盛衰記の女武者像」 『国文学解釈と鑑賞』第70巻3号、二〇〇五・三。
- (6) 濱中修 「巴の神話学―『源平盛衰記』を中心に―」 『国士館人文学』二〇一一・三。
- (7) 源健一郎氏は、「―引」と呼ばれる力比べについて、「平家諸本が鍔を掴みちぎった景清を大力として引き立てるのに対して、盛衰記は、鍔をちぎり棄てて逃げ延びた宗行の方を」「大力として賞賛し」といると指摘し、巴と重忠の「鎧ノ袖引」も「巴の大力振りを強調する挿話として認めてよい」とする(前掲注(5)に同じ)。
- (8) 前掲注(6)に同じ。
- (9) 前掲注(5)に同じ。
- (10) 前掲注(5)に同じ。
- (11) 「オボツカナシ」は底本では「穴(あなかんむり)」に「倉」。
- (12) なお、『源平闘諍録』では、「紺村濃の直垂に、唐綾摺の鎧、白星の甲を着て、長輻輪の太刀を帯いたりけり。大中黒の箭頭高に取つて付け、重藤の弓の真中取つて、葦毛の馬にぞ乗つたりける」という武者姿の巴に組もうとする敵が「女が世も鬚非じ。鬚の無からんを伴絵と思ふべし」と述べて「内釜に目を懸けて見廻す」場面がある(『源平闘諍録』巻第八之上「木曾、瀬田にて討たる事」)。武者姿のときは一見して男女を判別できず、髭の有無によって女武者・巴を見分けている。
- (13) 男女が一所での死を遂げようとする場合もあるが、巴は「首を一所に並べん」と述べており、兼平と同様に武士の乳母子としての「一所の死」を望んでいたと考えられる。
- (14) 他本では、中院本『平家物語』において、巴が「むさしの国の住人、御たの八郎ためしけ」と戦った後に義仲から離脱を命じられているが、巴は「御たかくひ、しやねちきつ

てそすてたりける」と敵の首を捨てており、離脱の命との因果関係も見られない(中院本『平家物語』第九「さゝ木宇治川わたりの事」)。

(15) 源健一郎氏は、「巴の怒りの矛先は、内田がいくさの「故実」に反したことに向いている」ことに注目して、「内田の過誤を的確に指摘した巴は、「故実」に通じた理想の武士ということになる」と指摘している(前掲注(5)に同じ)。

(16) ただし先述のとおり、長門本『平家物語』では、兼平と再会する前に巴は姿を消している(本章「三、「木曾殿ノ乳母子」」参照)。

(17) 伊藤正義『謡曲雑記』和泉書院、一九八九・四。

(18) 引用本文は『新編日本古典文学全集58 謡曲集①』(小学館、一九九七・五)に拠る。

(19) 本章「六、義仲の最期」参照。

(20) なお、能「巴」には、巴の霊が語る義仲との別れとは内容の異なる語り間がある。

アイの所の者が語る巴と義仲の別れは、義仲が巴に「故郷へ帰り、この有様をねんごろに語るならば、最期の供には勝るべき」と言う点、巴の最後の戦の敵が「遠江の住人、内田の三郎」である点など、『源平盛衰記』と類似する点が見られる一方で、義仲が「汝は女なれば、いづかたへも疾く落ち行き候へ」「木曾が最後まで女を召し連れたるなどと、人の言はんずるところもはばかりなれば」と離脱を命じる点、離脱を命じられた巴が「あはれよからん敵もがな、最後の戦をして、木曾殿に見せ奉らん」とし、「むずと組み、わが鞍の前輪に押し付け、少しも動かさず」敵の首を切る点は、覚一本『平家物語』などに類似する。また、その後、巴は「行方知れずなりたる」とされている。

所の者によって語られるのは、『源平盛衰記』との類似点を見せながらも、「女なれば」と離脱を命じられ、義仲の最期に付き添うことがかなわず、去ってゆく巴の姿である(引用本文は前掲注(17)に同じ)。

(21) 高木信『平家物語・装置としての古典』春風社、二〇〇八・四。なお、梶原正昭氏は、兼平と「一所の死」がかなわなかった義仲について、「もしふり仰いだその一瞬、まなかいの中に今井の姿をとらえつつ、額を射ぬかれて死んだとするならば、たとえ場所は隔たっていたとしても、心はひとつに結ばれ、「一所の死」の願いは果たされたといつてよい」と述べ、離脱を命じられた巴については、「巴をその死のまきぞえにしたくない」と思った義仲の「巴に対する深い愛情」を読み取っている(梶原正昭『鑑賞日本の古典11 平家物語』尚学図書、一九八二・六)が、高木氏は、「木曾最期」が「木曾義仲と巴という美女(義仲の愛人とされる)の、そして義仲と義仲の乳母子である今井四郎兼平のへ人間愛のドラマとして読まれてきた」とし、そのような読みを批判して、「享受者たちはたしかに「一般に」、義仲の巴に対する「愛情」を読みとるのだが、テキストは本当にそのように構造化されているだろうか」と指摘する。高木氏は、「『平家物語』が描き出す関係が、へ美しくもなくへ人間愛的でもないのに、へ美しい人間愛を享受者が読みとってしまったならば、なぜそのようなへ解釈が成立してしまうのかを反省的に考察せねばならない」と述べ、「そのような作業を経ずしてへ戦場から女性を去らせる男性が、つねにすでにへ愛を女性に対してもっていると考えてしまう”常識”は、まさ

に男性的思考⇨指向⇨嗜好から創りだされた幻想でしかない」と指摘して、巴が戦場から離脱させられることに「女性であるがゆえに巴をへ男たちの戦場⇨から排除する姿勢」を見ている。

『源平盛衰記』では、「木曾殿ノ乳母子」と名乗って見事な戦いをしてみせた巴に、義仲は「女」として離脱を命じ、それに対して巴はなおも「乳母子」として「一所の死」を望む。「乳母子」であろうとする巴と、その巴に「女」として離脱を命じる義仲のズレが浮き彫りになる『源平盛衰記』では、巴の視点から義仲が相対化されるとともに、「へ男たちの戦場⇨から排除」される巴の姿がより鮮明に浮かび上がり、「義仲の巴に対する「愛情」を読みとる」ような「木曾最期」の読みを相対化するものとしても機能する。

また、大津雄一氏は、「一所の死」が「融合的愛」の「究極の形態である」として、「木曾最期」を「典型的なそして優れて良質な融合的愛の物語」と見る（大津雄一『軍記と王権のイデオロギー』翰林書房、二〇〇五・三）。大津氏は、「へ一所の死の物語⇨⇨融合的愛の物語⇨は遍在する馴染み深い⇨物語⇨」であり、「木曾最期」は「凡庸な物語」であるとともに、「義仲と兼平の物語は、人は死に際しても名誉を重んじるべきだと教えつつ、「融合的愛」の尊さを教育する。死を前にしてまでも相手を求め続ける無償の愛は、確かに美しい。しかし、それは極めて依存的な愛の形態であり、不健全でもある」と述べ、「木曾最期」の凡庸さと危うさを指摘している。

『源平盛衰記』では、「乳母子」として「一所の死」を望む巴に離脱を命じた一方で、義仲は乳母子・兼平と「一所の死」を望む。「一所の死」を遂げることがかなわなかったもう一人の「乳母子」巴の物語は、義仲と兼平の物語を軋ませる。それが「へ一所の死の物語⇨⇨融合的愛の物語⇨」を対象化させ、その危うさに気づかせる契機となり得るのではないか。

(22) 神田龍身「書評 高木信著『平家物語 装置としての古典』」『物語研究』9、二〇〇九・三。

(23) 松尾葦江「源平盛衰記と説話」説話論集第2集『説話と軍記物語』説話と文学の会編、清文堂出版、一九九二・四など。

(24) 松尾葦江「源平盛衰記素描―その意図と方法―」『國語と國文學』第五十四巻五号、一九七七・五。

(25) 山下宏明「源平盛衰記の語り」『國學院雜誌』第一〇三巻第五号、二〇〇二・五。

第四章 敦盛最期譚の可能性

一、「父子の物語」

『平家物語』に「父子の物語」という一面があることはすでに指摘されている。高橋秀樹氏は、「深くて哀しい父と息子の絆」として『平家物語』が描く親子関係を論じ、「平家物語が描く親子は父と息子ばかりで、母子の話や父娘の話はあまり出てこない」として、「(親子)」という面から見たならば、平家物語は父と息子の〈孝〉と〈情愛〉の物語として読むことが出来よう」と述べている(一)。

たとえば藤原成経は、鹿ヶ谷謀議が発覚して捕らえられたとき、同様に捕らえられた父・成親を案じて「誠に御恩をもつて、しばしの命もいき候はんずる事は、しかるべう候へ共、命のをしう候も、ちゝを今一度見ばやと思ふため也。大納言がきられ候はんにおいては、成経とてもかひなき命をいきて何にかはし候べき。たゞ一所でいかにもなる様に申てたばせ給ふべうや候らん」と平教盛に語り、しばらくの間は安心であろうと聞くと「泣く／＼手を合てぞ悦ばれける」姿が描かれる(覚一本『平家物語』巻第二「少将乞請」)。成親と成経は別々に配流され、成親は配流先で殺されるが、のちに赦免された成経はその帰路に父の墓に立ち寄り、生きている人に話すかのようにして「この世にわたらせ給ふをも見まゐらせて候ばこそ、命のながきかひもあらめ。是まではいそがれつれども、いまより後はいそぐべし共おぼえず」と泣く泣く語る(覚一本『平家物語』巻第三「少将都帰」)。

また、子・高倉院に先立たれた後白河院は、「とにかくにかこつ方なき御涙のみぞすゝみける」姿が描かれ、「悲しみの至て悲しきは、老て後子におくれたるよりも悲しきはなし。恨の至つて恨しきは、若して親に先立つよりもうらめしきはなし」という先言を思い知る(覚一本『平家物語』巻第六「小督」)。

妹尾兼康は、子・小太郎宗康をうち捨てて落ち延びるが、「千万の敵にむかッて軍するは、四方はれておぼゆるが、今度は小太郎を捨ててゆけばにや、一向前がくらうて見えぬぞ」と取って返す。一所の死を遂げようと言う父に対し、宗康は「我ゆゑに御命をうしなひまゐらせむ事、五逆罪にや候はんずらむ。たゞとう／＼のびさせ給へ」と述べるが、ついに兼康は宗康の首を打ち落とし、討死する(覚一本『平家物語』巻第八「瀬尾最期」)。

そして平宗盛・清宗父子は、宗盛が壇ノ浦で海に落とされるとすぐに右衛門督清宗も飛び込み、宗盛が「右衛門督沈まばわれも沈まん。たすかり給はば、われもたすからむ」と思う一方、清宗もまた「ちゝ沈み給はば、われも沈まん。たすかり給はば、我もたすからん」と思う姿が描かれる(覚一本『平家物語』巻第十一「能登殿最期」)。父子は生け捕りにされるが、斬首されるとき、宗盛は「右衛門督はいづくに候やらん。手をとりくんでもをはり、たとひ頸は落つとも、むくろはひとつ席に臥さんとこそ思つるに、いきながらわかれぬる事こそかなしけれ。十七年が間、一日片時もはなるゝ事なし。海底にし沈まで、うき名を流すも、あれゆゑなり」と泣く。「右衛門督もすでにか」が最期の言葉であった。清宗は「大臣殿の最後いかゞおはしましつる」と問い、立派な最期であったと聞くと、涙を流し悦んで「今は思ふ事なし。さらばとう」と言つて斬首され

る(覚一本『平家物語』巻第十一「大臣殿被斬」)。

このように「父子の物語」は身分や立場を問わず繰り返し語られ、「まことの契は親子のなかにぞありける。子をば人の持つべかりける物哉」という教盛の感慨(覚一本『平家物語』巻第二「少将乞請」)がこだまする。そのなかで、敦盛最期譚はいわばその変奏として、擬似的な「父子の物語」に数えられる。

大津雄一氏は、『平家物語』が「多くの物語の中で、「はなれがたい」という家族への深い愛を、繰り返し肯定し、それを執拗に前景化してきた」と指摘し、その具体例に「熊谷直実の直家への思い(巻九・一二之懸)、あるいは平敦盛に対する擬似的な親の思い(同・敦盛最期)」を挙げている(2)。また、平藤幸氏は、敦盛最期譚について論じるなかで、「この有名な場面は、無常観へと向かう直実の心裏の深刻度を最大限に付度する意味で言えば、直実の擬似的な子殺しである、ということになるのではないだろうか。しかしこの子殺しも、もとより戦場での偶発であり、父直実の発心遁世によって贖われる点でまた、やや異質の父子の情愛譚なのである」と述べている(3)。

敦盛最期譚は、平家公達の最期譚、熊谷直実の発心譚、管絃譚といった面を併せ持つが、本来は武者として敵対する二人に、擬似的な「父子の物語」を見るのは、平敦盛が直実の子・直家と同年であり、また、直実が敦盛の父・経盛の悲嘆を思いやり、苦悩する様子に、『平家物語』で繰り返し語られてきた父子の姿を見るためである。

梶原正昭氏は、直実の人間像には「功名にはやる田舎武士としての側面」と「父子愛の念に厚い古つわものとしての横顔」という二つの性格が付与されていると指摘する(4)。敦盛との邂逅に先立って、直実は我が子を気づかう父としての姿を見せている(5)。功名にはやる武者とその敵との出会いが、子への愛に厚い父とその子と同じ年頃の若者との出会いであったとき、この物語が「父子の物語」へと舵を切るのは必然であろうか。

『源平盛衰記』の敦盛最期譚もまた、この「父子の物語」を描き出そうとする。ところが、ある一点から「父子の物語」を逸脱してしまうのである。『源平盛衰記』は、『平家物語』読み本系諸本の一つに数えられ、他本には見られない豊富で多彩な記事を有するが、その冗長さや繁雑さから、語り本系諸本の一つである覚一本『平家物語』などと比較して文学的評価はいまだ十分になされていない。本章は、『源平盛衰記』の敦盛最期譚の分析を通して、覚一本を中心とした敦盛最期譚の読みを相対化する『源平盛衰記』テキストのありようを見、『源平盛衰記』の物語としての特質のさらなる解明を目指すものである。

二、二つの視点

敦盛最期譚は、以下のように始まる。『源平盛衰記』のほか、読み本からは延慶本『平家物語』、語り本からは覚一本『平家物語』を並記する。

同経盛末子ニ無官大夫敦盛ハ、紺地錦直垂ニ、萌黄匂ノ鎧ニ、白星ノ甲著テ、滋藤弓ニ十
八指タル護田尾ノ矢、鶉気ノ馬ニ乗給、只一騎新中納言ノ乗給ヌル舟ヲ志テ、一町計遊セテ、
浮又沉又漂給フ。武藏國住人熊谷次郎直實ハ、「哀ヨキ敵ニ組バヤ」ト渚ニ立テ東西同居タル
處ニ是ヲ見付テ、馬ヲ海ニサブト打入、「大將軍トコソ奉見。マサナクモ海ヘハ入セ給フ者哉。

返給へやく。角申ハ日本第一ノ剛者、熊谷次郎直實」ト云ケレバ、敦盛何トカ思ハレケン、馬ノ鼻ヲ引返シ、渚へ向テゾ游セタル。

〔『源平盛衰記』卷第三十八「經俊敦盛經正師盛已下頸共懸一谷」〕

赤地ノ錦ノ鎧直垂ニ、赤威ノ鎧ニ白星ノ甲着テ、重藤ノ弓ニ切府矢負テ、金作ノ大刀ハイテ、サビツキゲノ馬ニ黄伏輪ノ鞍置テ、厚房ノ鞆懸テ乗タリケル武者一人、中納言ニツゞイテ打入テヲヨガセタリ。一町計ヲヨガセテ、ウキヌシヅミヌタゞヨイタリ。熊谷二郎直実、渚ニ打立テ此ヲミテ、「アレハ大將軍トコソミ進候へ。マサナウも候御後スガタカナ。返合給ヤ」トヨバイケレバ、イカゞ思給ケム、汀へムケテゾヲヨガセケル。

〔延慶本『平家物語』第五本「敦盛被討給事付敦盛頸八嶋へ送事」〕

いくさやぶれにければ、熊谷次郎直実、「平家の君達、たすけ舟に乗らんと汀の方へぞ落ちたまふらむ。あッばれよからう大將軍にくまばや」とて、磯の方へあゆまするところに、ねりぬきに鶴ぬうたる直垂に、萌黄匂の鎧着て、鍬形うったる甲の緒しめ、こがねづくりの太刀をはき、切斑の矢負ひ、しげどうの弓持ッて、連銭茸毛なる馬に黄覆輪の鞍置いて乗ッたる武者一騎、沖なる舟に目をかけて、海へざッとうちいれ、五六段ばかりおよがせたるを、熊谷、「あれは大將軍とこそ見まゐらせ候へ。まさなうも敵にうるを見せさせたまふものかな。かへさせ給へ」と、扇をあげてまねきければ、招かれて、とッてかへす。

〔覚一本『平家物語』卷第九「敦盛最期」〕

敦盛最期譚の冒頭について、まず、覚一本『平家物語』は、直実の描写から始まる。直実は、「よからう大將軍にくまばや」と、馬を歩ませていた。その直実の目に、一人の武者の姿が映る。この武者こそ敦盛であるが、それは明かされないまま、装束描写に続き、沖にある舟を目指して馬を海に入れて泳がせる様子が描かれている。正体不明のこの武者に、直実が「あれは大將軍とこそ見まゐらせ候へ。まさなうも敵にうるを見せさせたまふものかな。かへさせ給へ」と呼びかけることから、物語は始まる。覚一本『平家物語』では、直実に寄り添った視点で描かれている。

つぎに、延慶本『平家物語』は、ある武者の装束描写から始まっている。その武者が馬を海に入れて泳がせている様子を、直実が渚から見ている。この武者が敦盛であることは、やはりこの時点では明かされておらず、正体不明の武者を直実が見つけるという点、覚一本『平家物語』と同様に、直実に寄り添った形である。

『源平盛衰記』もまた装束描写から始まるが、冒頭に「同經盛末子ニ無官大夫敦盛ハ」とあり、この武者が敦盛であることが明らかにされている。敦盛は「新中納言ノ乗給ヌル舟ヲ志テ」馬を泳がせている。一方、直実は「哀ヨキ敵ニ組バヤ」と周囲をうかがっていた。そこに敦盛を見つけて、「大將軍トコソ奉見。マサナクモ海へハ入セ給フ者哉。返給へやく」と呼びかけるのである。すなわち、『源平盛衰記』では、まず敦盛側の描写、つぎに直実側の描写と、視点を切り替える形で双方が描かれるのである。このように、『源平盛衰記』では敦盛と直実の双方に視線を及ぼすこ

とによって、両者の隔たりが浮き彫りになってゆく。

三、「誰ノ御子ニテ渡ラセ給フゾ」

沖にある舟を指して馬を海に入れて泳がせていた敦盛は、それを見つけた直実に呼びかけられ、海から引き返してくる。やがて直実が敦盛を組み伏せ、首をとろうとしてその顔を見る場面は、以下のように描かれている。

熊谷ハ腰ノ刀ヲ拔出シ、既ニ頸ヲカゝントテ内甲ヲ見ケレバ、十五六バカリノ若上臈、薄氣壯ニ金黒也、ニコト笑テ見エ給フ。熊谷ハ、「穴無慙ヤ、弓矢取身ハ何ヤラン、是程若ク敵キ上臈ニ、イヅコニ刀ヲ立ベキゾ」ト心弱ゾ思ケル。A「抑誰ノ御子ニテ渡ラセ給フゾ」ト問ケレバ、「只トク切」トゾ宣ケル。

〔『源平盛衰記』巻第三十八「経俊敦盛経正師盛已下頸共懸一谷」〕

熊谷腰刀ヲヌイテ、内甲ヲカゝムトテミタレバ、十五六計ナル若人ノ色白ミメウツクシクシテ、薄氣装シテ、カネ黒也。鮮娟タル両髪ハ秋ノ蝉ノ羽ヲ並べ、苑転タル双蛾ハ遠山ノ色ニマガヘリナムド云モ、カクヤト覺テ哀也。穴糸惜ヤト心弱ク覺テ、A「抑君ハ誰人ノ御子ニテ渡セ給ゾ」ト問ニ、「只、トクキレ」ト答タリ。

〔延慶本『平家物語』第五本「敦盛被討給事付敦盛頸八嶋へ送事」〕

とっておさへて頸をかゝんと甲をおしあふのけて見れば、年十六七ばかりなるが、うす化粧して、かねぐる也。我子の小次郎がよはひ程にて、容顔まことに美麗也ければ、いづくに刀を立べしともおぼえず。A「抑いかなる人にてましく候ふぞ。名のらせ給へ、たすけまぬらせん」と申せば、「汝はたそ」ととひ給ふ。「物、そのもので候はねども、武蔵国住人、熊谷次郎直実」となのり申。「さては、なんちにあうては、なるまじいぞ。なんちがためにはよい敵ぞ。名のらずとも頸をとつて人にとへ。見知らうずるぞ」とぞのたまひける。

〔寛一本『平家物語』巻第九「敦盛最期」〕

顔を見て心弱くなった直実は、敦盛に名を尋ねる。その言葉が傍線部Aである。『源平盛衰記』は「誰ノ御子ニテ渡ラセ給フゾ」、延慶本『平家物語』は「君ハ誰人ノ御子ニテ渡セ給ゾ」である。このとき、直実は「誰か」ではなく「誰の子か」と問うのである。この時点で、すでに直実は敦盛を「子」として、父の位置から見ている。そして「誰の子か」という問いが潜在的に示すのは、直実が真に名を尋ねる相手は、敦盛の父・経盛だということである。言い換えれば、直実にとって、組み伏せた人物は「敦盛」ではなく「経盛の子」なのである。これは、『源平盛衰記』や延慶本『平家物語』において、直実が経盛に敦盛の首を送る場面が見られることに関連するものである。このとき直実は経盛に敦盛の首とともに書状を送り、経盛はそれに返事を送っている。すなわち、『源平盛衰記』や延慶本『平家物語』では、直実と経盛の、敵味方を超えた、子を思う父同士のコミュニケーションが描かれるのである。直実が同じ位置に立ち心を通い合わせる相手は経盛であ

り、子を思う父の物語であると言えよう(6)。

なお、覚一本『平家物語』は「いかなる人にてましく候ふぞ」として、「誰の子か」ではなく「誰か」と問うている。しかし、名を尋ねる前に「我子の小次郎がよはひ程にて」(波線部)とあり、すでに敦盛に我が子・小次郎直家を重ねていて、やはり直実は敦盛に「子」を見ていることがわかる。

四、幼く若き敦盛と父としての直実

さて、海から引き返した敦盛が直実に組み伏せられるまでは、以下のような経過を辿っている。

馬ノ足立程ニ成ケレバ、弓矢ヲバ抛捨テ、太刀ヲ抜額ニアテ、ヲメキテ上給ケルヲ、熊谷待受テ上モタテズ、水鞆サト蹴サセツ、馬トノヲ馳並テ取組、浪打際ニトウト落、上ニ成下ナリ、二度三度ハコロビタリケレ共、B大夫ハ幼若也、熊谷ハ古兵也ケレバ、遂ニ上ニ成、左右ノ膝ヲ以テ胄ノ袖ヲムズト押タレバ、大夫少モハタラキ給ハズ。

(『源平盛衰記』卷第三十八「經俊敦盛經正師盛已下頸共懸一谷」)

馬ノ足立ホドニナリケレバ、弓矢ヲナゲステ、大刀ヲ抜テ額ニアテ、ヲメイテハセアガリタリ。熊谷待ウケタル事ナレバ、上モタテズ、馬ノ上ニテ引組テ、浪打ギハへ落ニケリ。上ニナリ下ニナリ、三ハナレ四ハナレクミタリケレドモ、ツイニ熊谷上ニナリヌ。左右ノ膝ヲ以テ鎧ノ左右ノ袖ヲムズトヲサヘタリケレバ、少モハタラカズ。

(延慶本『平家物語』第五本「敦盛被討給事付敦盛頸八嶋へ送事」)

汀にうちあがらんとするところに、おし並べてむずとくんでどうど落ち、

(覚一本『平家物語』卷第九「敦盛最期」)

組み合つた敦盛と直実は馬から落ち、ついに直実が敦盛を組み伏せる。『源平盛衰記』は、敦盛が組み伏せられた理由を「大夫ハ幼若也、熊谷ハ古兵也ケレバ」としている(傍線部B)。これは他本には見られないものである。『源平盛衰記』では、敦盛には初めから「幼若」が刻印されているのである。

敦盛が「幼若」であるという表現は、直実が敦盛を討つことをためらう場面にも見られる。

「穴心ウノ御事ヤ。偕ハ小次郎ト同年ニヤ。實ニ左程ゾ御座ラン。岩木ヲワケヌ心ニモ、子ノ悲ハ類ナシ、況ヤ是程ワリナク敵キ人ヲ奉失テ、父母ノモダエユガレ給ハン事ノ哀サヨ。中ニモ小次郎ト同年ニ成給ナル糸惜サヨ。奉助バヤ。又御心モ猛人ニテオハシケリ。日本第一ノ剛者ト名乗ニ、落武者ノ身トシテ、C此年ノ若ニ返合給ヘルモ、大將軍ト覺タリ。是ハ公軍也、穴惜ヤ如何セン」ト思ヒ煩テ、

(『源平盛衰記』卷第三十八「經俊敦盛經正師盛已下頸共懸一谷」)

敦盛の年齢が我が子と同じであると知った直実は、敦盛の父母に思いをさせ、助けたいと考える。ここで、「日本第一ノ剛者」と名乗った直実に返し合わせた敦盛を称えているが、そこには「此年ノ若ニ」という思いが入り込んでいる（傍線部C）。直実が敦盛の首をとる場面も同様である。

目ヲ塞ギ齒ヲクヒアハセテ涙ヲ流シ、其頸ヲ搔落ス。無慙ト云モ愚也。敦盛不恐死不降心、
D 雖為幼齡之人、頗非凡庸之類ケリ。

〔『源平盛衰記』卷第三十八「經俊敦盛經正師盛已下頸共懸一谷」〕

最終的に、直実は敦盛の助命を断念して首をとる。ここでも敦盛は称えられているが、「雖為幼齡之人」とある（傍線部D）。いずれの場面も『源平盛衰記』のみに見られるものであり、敦盛を武者として称えながら、そこには「幼さ」「若さ」という「子」に連なる語が刻まれている。「誰ノ御子ニテ渡ラセ給フゾ」という問いと「幼若」という表現が、敦盛を「父子の物語」における「子」の位置に押し込めるのである。『源平盛衰記』は他本にもまして「父子の物語」への傾斜を強め、直実は「父」としての姿をさらに強めてゆく。

熊谷ハ笛ト頸トヲ手ニ捧、子息ノ小次郎ガ許ニ行、「是ヲ見ヨ、修理大夫殿ノ御子ニ、無官大夫敦盛トテ、生年十六ト名乗給ツルヲ、E 奉助バヤト思ツレ共、汝等ガ弓矢ノ末ヲ顧テ、角憂目ヲ見ル悲サヨ。縦直實世ニナキ者ト成タリトモ、穴賢奉後世吊」ト云含。

〔『源平盛衰記』卷第三十八「經俊敦盛經正師盛已下頸共懸一谷」〕

『源平盛衰記』では、敦盛を討った後、直実が直家のもとへ向かう。この場面は『源平盛衰記』のみに見られるものである。そこで語られるのは、「奉助バヤト思ツレ共、汝等ガ弓矢ノ末ヲ顧テ、角憂目ヲ見ル悲サ」である（傍線部E）。父として子・直家の将来を思うがために、子のような敦盛を討つという憂き目を見たと言っているのである。

経盛に敦盛の首を送るに際しても、同様の悲しみが語られている（傍線部F）。

熊谷次郎直實ハ、敦盛ノ頸ヲバ取タレ共、嬉敷事ヲバ忘テ、只悲ミノ涙ヲ流シ、冑ノ袖ヲ濡ケリ。「情事ノ有様ヲ案スルニ、愚ナル禽獸鳥類マデモ、子ヲ思道ハ志深シ。F 焰ノ中ニ身ヲ亡シ、矢サキニ當テ命ヲ失事モ、子ヲ思情ニ有。人倫争憐マザラン。弓矢取身トテ、ナニヤラン子孫ノ後ヲ思ツ、他人ノ命ヲ奪ラン。蜻蛉ノ有力無カノ身ヲ以テ、ナニ思ベキ世ノ末ヲ、是程ニ少ク蔽キ上臈ヲ失歎給フラン、父母ノ心中コソ絲惜ケレ。縦勲功之賞ニハ不預共、此頸遺物返送、今一度替レル兒ヲモ奉見バヤ」ト思ヒケレバ、

〔『源平盛衰記』卷第三十八「熊谷送敦盛頸」〕

直実の憂き目といえば、「あはれ、弓矢とる身ほど口惜かりけるものはなし。武芸の家に生れずは、何とてかゝる憂き目をば見るべき」（覚一本『平家物語』巻第九「敦盛最期」）という武者ゆえに見た憂き目が思い起こされるが、『源平盛衰記』ではさらに直家のため、子孫のためという思い

が前面にあらわれ、父ゆえの悲しみが際立つ。『源平盛衰記』では他本にもまして敦盛は「父子の物語」における「子」として、直実は「父」として描かれているのである。

五、「存ズル肯」の意味

ところで、覚一本『平家物語』では、名を尋ねた直実に最期まで敦盛が名乗ることはなかった。一方、『源平盛衰記』や延慶本『平家物語』では、名乗らない敦盛に対して直実が名を尋ねた理由を明かす。

「奉斬テ雑人ノ中ニ棄置進センモ無便侍リ、ウキフシモ知又東國ノ夷下臈ニ逢テ、名乗マジト被思召カ、ソレモ理ニ侍レ共、G存ズル肯有テ申也」ト云。大夫思ハレケルハ、「名乗タリ共不名乗トモ非可通。但H存ズル肯トハ勲功ノ賞ヲ申サン為ニコソ有ラメ。I組モ切ルモ先世ノ契、讐ヲバ恩テ報也。サアラバ名乗ン」ト思ヒツ、J「存ル肯ノ有ナレバ聞スルゾ。是ハ故太政入道ノ弟ニ、修理大夫経盛ト云人ノ末ノ子、イマダ無官ナレバ無官大夫敦盛トテ、生年十六ニ成也」ト宣ケリ。

（『源平盛衰記』卷第三十八「経俊敦盛経正師盛已下頸共懸一谷」）

直実又申ケルハ、「君ヲ雑人ノ中ニ置進候ワム事ノイタワシサニ、G御名ヲ備ニ承テ、必ズ御孝養申ベシ。其故ハ兵衛佐殿ノ仰ニ、『能敵打テ進タラム者ニハ、千町ノ御恩有ベシ』ト候キ。彼所領即君ヨリ給タリト存ジ候ベシ。是ハ武蔵国住人、熊谷二郎直実ト申者ニテ候」ト申ケレバ、I「イツノナジミ、イツノ対面トモナキニ、是程ニ思ラムコソ難有ケレ。又名乗テモ討レナムズ、ナノラデモウタレムズ。トテモ討ベキ身ナレバ、又カヤウニ云モ疎ナラズ」ト思ワレケレバ、「我ハ大政入道ノ弟、修理ノ大夫経盛ノ末子、大夫敦盛トテ生年十六歳ニナルゾ。早切レ」トゾ宣ケル。

（延慶本『平家物語』第五本「敦盛被討給事付敦盛頸八嶋へ送事」）

延慶本『平家物語』は、供養のために名を尋ねたとする（傍線部G）。それを聞いた敦盛は、「イツノナジミ、イツノ対面トモナキニ、是程ニ思ラムコソ難有ケレ」と感じて名乗っている（傍線部I）。

一方、『源平盛衰記』は「存ズル肯有テ申也」（7）とするのみで、名を尋ねる理由を明示しない（傍線部G）。そしてそれを聞いた敦盛は、「存ズル肯」を「勲功ノ賞ヲ申サン為」と解釈している（傍線部H）。『源平盛衰記』では、直実の言う「存ズル肯」の具体的な内容はついに明らかにされない。だが直実が名を尋ねた理由を「存ズル肯」と表現したことで、敦盛はそれを、敵の首の名を明確にすることによって直実が自身の勲功をたしかなものにしようとしているのだと理解したのである。その結果、「讐ヲバ恩テ報也」という思いで（傍線部I）、「存ル肯ノ有ナレバ聞スルゾ」と言つて（傍線部J）名乗っている。敦盛は直実の行為を「讐」と捉えており、延慶本『平家物語』で供養のために名を尋ねたと聞いて「難有ケレ」と感じる様子とは対照的なものとなっている。

『平家物語』には、「存るむねがあれば」と言つて、名乗りを拒む武者が登場する。斎藤実盛である。七十歳を越えた老武者である実盛は、大將軍の装束・若武者の鎧を身につけ、只一騎で戦いをつづける。それを見て「名のらせ給へ」と言う敵に、実盛は「存るむねがあれば名のるまじいぞ」と名乗りを拒むのである。ついに名乗らず首をとられた後、木曾義仲の御前にて、その正体が明らかとなる(寛一本『平家物語』巻第七「真盛」)。この実盛の最期は、『平家物語』諸本に共通して描かれるものである。また、京師本『平家物語』では、直実と敦盛のやりとりのなかに、以下のような箇所がある(8)。

熊谷、「そもそもいかなる人にてましまし候やらん。名のらせ給へ。助けまゐらせん」と申ければ、「かういふわ殿は誰ぞ」と問給へば、熊谷、「物其物にては候はねども、武蔵国の住人、熊谷次郎直実」と名乗申す。「さては汝が為にはよい敵ぞ。存する旨があれば、名乗る事はあるまじ。名乗らずとも、頸をとつて人に問へ。見しらうずるぞ」とぞ直ひける。

(京師本『平家物語』巻第九「敦盛」)

京師本『平家物語』では、敦盛が「存ずる旨があれば」と言つて直実に名乗りを拒んでいるが、『源平盛衰記』では、直実が「存ズル肯有テ」と言つて敦盛に名を尋ねており、反転した構図となっている。

さて、敦盛が「存ズル肯」の意味として解釈した「勲功ノ賞」に関して、『源平盛衰記』には以下のような場面がある。

熊谷次郎直実ハ、敦盛ノ頸ヲバ取タレ共、嬉敷事ヲバ忘テ、只悲ミノ涙ヲ流シ、冑ノ袖ヲ濡ケリ。「情事ノ有様ヲ案ズルニ、愚ナル禽獸鳥類マデモ、子ヲ思道ハ志深シ。焰ノ中ニ身ヲ亡シ、矢サキニ當テ命ヲ失事モ、子ヲ思情ニ有。人倫争憐マザラン。弓矢取身トテ、ナニヤラン子孫ノ後ヲ思ツ、他人ノ命ヲ奪ラン。蜻蛉ノ有力無カノ身ヲ以テ、ナニ思ベキ世ノ末ヲ、是程ニ少ク厳キ上臈ヲ失歎給フラン、父母ノ心中コソ絲惜ケレ。K縦勲功之賞ニハ不預共、此頸遺物返送、今一度替レル兒ヲモ奉見バヤ」ト思ヒケレバ、

(『源平盛衰記』巻第三十八「熊谷送敦盛頸」)

敦盛の首をとつた後、直実は敦盛の父・経盛に首を送ろうと考える。ここで、直実自身が「勲功ノ賞」に言及するのである。だがそれは、「縦勲功ノ賞ニハ不預共」という思いであった(傍線部K)。敦盛は、直実の言う「存ズル肯」を「勲功ノ賞」への執着と理解したが、それはむしろ直実が否定するものだったのである。

「存ズル肯」を「勲功ノ賞ヲ申サン為」と解釈する敦盛は、勲功を立て恩賞を得んとする武者として直実を見ている。だがその武者という立場こそ、敦盛との邂逅によって直実が脱却する立場なのである。ここに、両者の対話の不成立、敦盛と直実の懸隔が露わになる。そしてそれが、「父子の物語」からの逸脱の契機となる。

六、「父子の物語」からの逸脱

『源平盛衰記』は、他本にもまして「父子の物語」を機能させようとする。直実の子への愛に厚い父として強調され、敦盛には「幼さ」「若さ」が刻印されている。ところが、「存ズル肯」の解釈のズレが、この「父子の物語」を軋ませる。「存ズル肯」の解釈のズレは、直実と敦盛が立つ位置のズレでもある。直実が名を尋ねた理由を「存ズル肯」と表現したことで、敦盛はそれを「勲功ノ賞ヲ申サン為」と解釈した。だがのちに明かされるのは、「縦勲功ノ賞ニハ不預共」、敦盛の首を経盛に送ろうという直実の思いである。それは子をもつ父としての思いである。直実は、敦盛の顔を見てその名を尋ねるときから、「誰か」ではなく「誰の子か」と問い、父の位置から敦盛を見ている。その直実に、敦盛は武者として対峙する。敦盛は、「父子の物語」における「父」である直実の「子」として在ることを拒む。『源平盛衰記』では、父の位置から「子」として敦盛を見る直実と、その直実に武者として対峙する敦盛の隔たりが浮き彫りになる。

さらに『源平盛衰記』において、名を尋ねた理由を「存ズル肯」と表現したことで、敦盛はそれを勲功のためと理解し、直実の真意は伝わらなかった。一方、直実の側も、敦盛が「存ズル肯」を「勲功ノ賞ヲ申サン為」と解釈したことには気づいていない。そして敦盛は「讐ヲバ恩テ報也」という思いで名乗っているが、仇を恩で報いるとは、怨むべき人にかえって情けを掛けること、すなわち、敦盛は直実に情けを掛けているということである。しかし、その思いもまた直実には届いていない。『源平盛衰記』では、敦盛と直実が思い合わないのではなく、思いが届かないのである。両者はディスプレイコミュニケーションの状態にある。直実と敦盛の隔たりが浮き彫りになる『源平盛衰記』では、敦盛の視点から直実が相対化されるとともに、受容者に「父子の物語」を対象化させ、「父子の物語」としての敦盛最期譚に再考を促すことになるのであり、『源平盛衰記』というテキストの他本にはない特質と言えよう。

たとえば、直実と敦盛は心が通い合っていたのだという読みがある。覚一本『平家物語』では、「名のらせ給へ、たすけまぬらせん」と言う直実に敦盛が名乗ることはなかったが、そのような両者の姿が以下のように受容される場合がある。

若武者は、ここで「なんぢがためにはよい敵ぞ」と、自分が直実にとって功名・手柄に値する立派な敵であることを強調しておりますが、その言葉の裏には、L荒武者と思われたこの東国のつわものが示してくれたやさしい心根に感じ、潔く討たれて功名をとげさせてやろうとする、若武者の思いがこめられていると見ることが出来ましょう。

この若武者は、招かれてとつて返したその時からすでに死を決意しており、M「助けよう」といわれても、助けられようとする気持ちには毛頭もつていなかったといつてよく、その思いの中で命をこの情けある古つわものに委ねようと心を固めたのでありましょう。

はげしい戦いのさなかではありますが、この二人の問答を読んでもおきますと、N敵対する人間同士とは思えないような心の通いがお互いの間に流れていることが感じられます。そこには、敵・味方の恩讐を越え、お互いを尊重し合う思いがあり、戦場の狂騒の中で、そこだけがしんと静まりかえったような正氣の世界がかたちづくられ、人間的な温かい思いが息づいているような思いがいたします。

梶原正昭氏は、「なんぢがためにはよい敵ぞ」とこたえる敦盛には、直実の「やさしい心根に感

じ、潔く討たれて功名をとげさせてやろうとする、若武者の思いがこめられて「おり(傍線部L)、助けられるつもりもなかった敦盛は、情けある直実を命を委ねたとしている(傍線部M)。名乗りと助命を拒否した敦盛にも、助けたいという直実の思いは通じていたということである。そして両者には、「敵対する人間同士とは思えないような心の通いがお互いの間に流れている」と見る(傍線部N)(9)。また、西郷竹彦氏も、敦盛は直実が「自分に優しい思いやりの心をもっていたということ」で、その直実の心根を感じとって「おり、さらに直実も敦盛の「自分へのある種の思いやり」に心を打たれた」と、直実と敦盛の心の通い合いを読み取っている(10)。このような両者の交感、延慶本『平家物語』で、供養のために名を尋ねたと知った敦盛が「難有ケレ」と感じる様子にも通じるものである。

しかし、覚一本『平家物語』の直実と敦盛に心の通い合いはあるであろうか。覚一本『平家物語』の敦盛最期譚は直実に寄り添った視点で描かれている。そのため、直実のような心理描写は敦盛にはない。この点について、鈴木彰氏は以下のように指摘している(11)。

覚一本では、敦盛は直実に対して名乗りを拒絶し、それ以降は「ただとく／＼頸をとれ」というだけである。何とか助けようとする直実の逡巡や苦悩は敦盛にまったく届いていない。この会話は、直実から一方的に相手の状況を慮るといえるものであつて、じつは必ずしもかみ合っていないのである。

直実の言葉に敦盛が何を感じたか明らかではない。そこに先に挙げたような受容がなされるのは、一貫して直実に寄り添った視点で描かれる場合、受容者もまたその視点から物語を見るためである。すなわち、直実に寄り添って敦盛を見、助けられなくても直実の思いは敦盛に通じていたであろう、直実ならば敦盛は命を委ねたであろうと、子・敦盛を討たなければならない父・直実の苦しみを分かち合うのである。それは、かなしい二人を少しでも救わんとする受容者の願いでもある。しかし、それは敦盛の視点ではなく、必ずしも敦盛の思いに一致するものではない。直実と敦盛の隔たりを浮き彫りにする『源平盛衰記』の敦盛最期譚は、「心通い合う二人」という読みを相対化するものとしても機能する。

七、敦盛最期譚の違和

『平家物語』は、敦盛の最期に先立って、我が子・直家を気づかない、常にその傍にいる直実の姿を描き出している。覚一本『平家物語』で見ると、直家とともに一の谷の木戸口に到着したとき、直実は「武蔵国住人、熊谷次郎直実、子息の小二郎直家、一谷先陣ぞや」と名乗り、つづいて到着した平山季重の前にふたたび名乗るときにも、「武蔵国の住人、熊谷二郎直実、子息の小二郎直家、一谷先陣ぞや」としている(覚一本『平家物語』巻第九「一二之懸」)。

それに加えて、『源平盛衰記』では、父・直実を思いやる子・直家の姿も描かれる。城戸を隔てて高櫓の上から矢を射られると、直実は「小次郎ヲ矢前ニアテジト胄ノ袖ヲカザシテ立隠」すが、直家もまた「父ヲ孚テ、前ニ進テ、箭面ニ立」つ。『源平盛衰記』はこの姿を「武心ノ中ニモ親子ノ情ゾ哀ナル」と語っている(『源平盛衰記』巻第三十七「熊谷父子寄城戸口」)。そして城戸口が開き、敵と戦う直実・直家父子の様子は、「熊谷父子ハ上食シツ、間モスカサズ待懸テ父ニ組マバ直家落合子ニ組バ直實落重ベキ氣色」とされている(『源平盛衰記』巻第三十七「平家開城戸口」)。

また、宇治川を渡るときには、「心ハ猛ク思フ共、サ子ハ未堅マラジ。直實ダニモ平ニ渡付事難カルベシ。汝ハ大勢ノ川ヲ渡サン時、捻ヲ力ニシテ渡ベシ」と言う直実に対して、直家が「若又堅ラザランニ付テモ、父ヲバ争カ奉離ベキ。恐ラクハ父コソ常ニハ風氣トテ、目ノマフ膝ノ振トハ仰ラレ候ヘ。此大河ニ向テ細桁ヲ渡給ハン事危ク覺侍リ。目舞足振給ハ、直家ヲ憑給ヘ、渡申サン」と述べる。そして渡河の間、直実は「我身事ハ去事ニテ子息ノ事ノ心苦シサニ、連クカ小次郎誤スナク」と呼びかけ、直家は「心ユルシ給テ、落入給ナク」と応じるのである(『源平盛衰記』卷第三十五「義経範頼京入」)。覚一本『平家物語』には見られないこのような様子は、互いに思い合う父子の姿を強めるものである。

そして、直実・直家父子の周囲にも、子を思う父、父を思う子の姿がある。梶原景時は、次男・平次景高が敵のなかに駆け入ると、「平次討たすな、つゞけやものども。景高討たすな、つゞけやものども」とつづいて駆け入ってゆく。さらに、長男・源太景季の姿が見えなくなると、「世にあらんとおもふも子共がため、源太討たせて、命いきても何かはせん。かへせや」とふたたび敵のなかへ駆け入ってゆく。大勢のなかに取り籠められた景時は、「まづ我身のうへをば知らずして、源太はいづくにあるやらんとて」景季をさがし、我が子を見つけると、馬から飛び降りて「景時こゝにあり」と声を掛け、抱えるようにして連れ出すのである(覚一本『平家物語』卷第九「二度之懸」)。一方、平知章は、落ち延びる途中で父・知盛をかばって討死している(覚一本『平家物語』卷第九「知章最期」)。「源平盛衰記」も同様である。

一の谷は、「父子の物語」に取り囲まれている。『平家物語』に構築されたこのような環境もまた、敦盛最期譚を「父子の物語」とする受容をもたらす要因となっているのである。しかし、『源平盛衰記』において敦盛はそれを拒む。「存ズル肯」の解釈のズレや、敦盛と直実の間に生じた懸隔は、調和的な読みを裏切るものである。だがそこに立ち上がる違和は、「父子の物語」としての敦盛最期譚に再考を促す。『源平盛衰記』の不調和が読みを見直させるのである。

八、相対化される「物語」

さらに『源平盛衰記』は、敦盛最期譚そのものを相対化する物語をも有している。それは、敦盛の兄・平経正の物語である。『源平盛衰記』では、敦盛最期譚の直後に、経正の最期が描かれている(12)。

但馬守經正ハ、大夫敦盛ノ兄也。赤地錦直垂ニ、鎧ハ態ト不着ケリ。身ヲ軽クシテ落給ハシ料ニヤ、小具足計、長覆輪ノ太刀ヲハキ、黄駱馬ニ乗、侍一人モ具シ給ハズ、大藏谷ヘ向テ落給フ。「是ハ武藏國住人城四郎高家ト云者也。此ニ落給フハ平家ノ公達ト奉見。○返合テ組給ヘヤク」ト申懸テ追テ行。經正キツト見返シテ、P「迹ニハ非、己ヲ嫌也」トテ、馬ヲ早ム。高家腹ヲ立テ、「マサナキ殿ノ詞哉、軍ノ習ハ不嫌上下、向フ敵ニ組ハ法也。其義ナラハ虜ニシテ耻ヲ見セヨ、打ヤ者共く」トテ、主従三騎鞭ヲアテ、追テ懸ル。「今ハ叶ハジ」ト思給ケレバ、馬ヨリ飛下、腹搔切テ臥給ニケリ。高家落合、首ヲ捕テ見レバ、タブサニ物ヲ結付タリ。軍終テ人ニ是ヲ問ケレバ、梵字ノ光明真言也。其真言ノ奥ニ、「縦朝敵ト成テ頸ヲバ被渡トモ、此真言ヲバ必タブサニ可被結付」トゾ被書タル。哀ニゾ覺ケル。頸ヲ被渡ケ

ル時間エケルハ、此経正ハ仁和寺ノ守覺法親王ノ年比ノ御弟子ニテ、都ヲ落シ時彼宮ニ参テ御暇ヲ申ケルニ、宮哀ト思召、御自筆ニアソバシテ給タリケル真言也。哀也トテ結付タリケル定ニシテ頸ヲバ渡サレケル也。獄門ノ木ニ被懸テ後、御室ヨリ被申テ、骨ヲバ高野ニ送ラレテ様々御追善有ケル也。土沙加治ノ功德、ナヲ無間ノ苦ヲ免トイヘリ、況即身ニ受持テラシニ於ヤ。師資ノ契ハ多劫ノ因縁トイヘリ。誠ナルカナコノ事ヲヤ。

〔『源平盛衰記』卷第三十八「經俊敦盛經正師盛已下頸共懸一谷」〕

一人落ち延びていた経正は、敵（13）に追われ、最期には腹を切る。敵が経正の首をとった際、髻に結び付けられていた真言が見つかるが、これは弟・敦盛がたずさえていた笛を髻髻させるものである。直実が敦盛の首をとった際には、鎧の引き合わせから錦の袋に入った笛が見つかっている（14）。敦盛は父・経盛から笛の名手としての性質を受け継いでいるが、経正は琵琶の名手として描かれており、『源平盛衰記』や覚一本『平家物語』では木曾義仲追討の際に経正が竹生島に詣でて弁財天に祈誓し琵琶を弾じる場面が見られるほか、都落ちに際しては経正がかつて賜った琵琶を返すため仁和寺を訪れる場面があり、守覺法親王と別れを惜しんでいる。『源平盛衰記』における経正の最期では、その際に守覺法親王から賜った真言が経正の首の髻から見つかったとされるのである。

注目すべき点は、「返合テ組給ヘヤ」（傍線部〇）と呼びかける敵に対する、経正の応答にある。呼びかけられた経正は、敦盛のように引き返すことはせず、「迹ニハ非、己ヲ嫌也」（傍線部P）と答えて馬を早め、最期は自害している。敦盛と同様に、只一騎落ち延びるなかで敵に声を掛けられた経正であるが、その後の展開は敦盛と対照的なものとなっているのである。平忠度の最期が敦盛と対照的であることはすでに指摘されている（15）が、『源平盛衰記』において敦盛最期譚の直後に描かれる兄・経正の最期は、敦盛の最期と表裏をなし、より鮮明に敦盛最期譚を照らし返す。対置された経正の物語は、直実と敦盛が辿り得たもう一つの物語として浮かび上がるのである。直実とすれ違う敦盛は「父子の物語」を相対化し、経正の物語は敦盛の物語そのものを相対化する。『源平盛衰記』テキストは、ときに『平家物語』諸本の「物語」の枠組みをはみ出し、それを相対化する新たな「物語」を生み出している。

『源平盛衰記』は、本文から記事全体を一字下げる一字下げ記事に、他本にはない異説や多くの故事説話を有している。それが整合性や求心性を欠くとされているが、松尾葦江氏は、異説を注記する方法に「盛衰記独特の文芸的方法」との関連を見、『源平盛衰記』には「相対的な複数の視点」があると述べる（16）。また、山下宏明氏は、『源平盛衰記』の一字下げ記事の語りのなかには、通行の語りを相対化する「相対化の語り」があるとして、「平家の物語を語りながら、これを相対化して語る文学の営み」を見ている（17）。本章が分析の対象としたのは、一字下げではなく本文に該当する箇所であるが、その殆どが『源平盛衰記』のみに見られる場面である。松尾氏は『源平盛衰記』に「相対主義的世界観」があることを指摘している（18）が、そのような志向をもつ『源平盛衰記』の特質を他の箇所においても検証し、『源平盛衰記』というテキストの可能性をさらに明らかにすることが今後の課題である。

【注】

- (1) AERA Book『平家物語』がわかる。』朝日新聞社、一九九七・一一。
 (2) 大津雄一『平家物語』の「愛の物語」『日本文学』第六一巻第一号、二〇一一・一。
 (3) 平藤幸『平家物語』の親子―その関係性の諸相と毀損―『生活と文化の歴史学4『婚姻と教育』高橋秀樹編、竹林舎、二〇一四・九。
 (4) 梶原正昭『鑑賞日本の古典11 平家物語』尚学図書、一九八二・六。
 (5) 本章「七、敦盛最期譚の違和」参照。
 (6) 『源平盛衰記』では、他本にもまして嘆き悲しむ経盛の姿が描き出されている。

修理大夫経盛ハ、此頸遺物ヲ送得テ、夢歟現歟分兼テ物モ覚エズ泣給フ。公達アマ
 タ御座ケレ共、此殿ハ末ノ子ニテ、殊ニ憐給ツ、前ニテ生立テ、ミメモ心モ世ニ有
 難人ニテ、分方ナク思ハレシニ、軍場ニ出テ其後敵ニヤ取ラレケン、深海ニヤ沈ケン、
 遁テ徐ニヤ有ラント、其行末ヲ知給ハネバ、忍ノ涙ヲ拭テ、神ニ祈佛ニ誓テ、存命セ
 ル歟死セル歟、知バヤト被思ケルニ、今ハ不審ハ晴レタレ共、見テハ歎ゾ増ケル。生
 シキ首ヲ膝ノ上ニ舁載テ、「イカニヤく敦盛ヨ、懸兒ヲミスル事コソ悲ケレ」トテ、
 流ル、涙ハ雨ノ如シ。前ニ候ケル女房モ兵モ只夢ノ如クニ思ツ、袖ヲノミコソ絞ケ
 レ。使ノ待モ心元ナシトテ、泣々返事セラレケリ。

（『源平盛衰記』卷第三十八「熊谷送敦盛頸」）

(7) 「肯」は「旨」と考えられる。本章ではすべて底本のママとした。

(8) なお、城方本『平家物語』では、直実に名を尋ねられた敦盛が「態思ふやうあつて」と言っ
 て名乗りを拒んでいる。

「抑いかなる人にて御渡り候ぞ。名乗らせ給へ。扶けまゐらせん」と申たりければ、
 「かういふわ君は何物ぞ。まづなのれ」といはれて、「是は武藏國の住人、熊谷の二郎
 直實と申者にて候なり」「扱ははや汝が為にはよき敵ぞ態思ふやうあつて名乗らぬなり。
 但汝をさくるにはあらず。なのらずといふともはやく頸を取て人にとへ。世には又
 見しりたる者もあらんずるぞ」とて、終に名乗給はず。

（城方本『平家物語』卷第九「敦盛」）

(9) 梶原正昭『平家物語(古典講読シリーズ) 岩波セミナーブックス一〇一』岩波書店、一九九
 二・六。

(10) 西郷竹彦『文芸教育全集第十一巻 文芸の世界』古典文芸』恒文社、一九九七・一。

(11) 鈴木彰「まさなうも敵にうしろをみせさせ給ふものかな」―詐術としての熊谷直実の言
 葉』『歴史と民俗』28、二〇一一・二。

(12) 『源平盛衰記』では、経盛の子である経俊・敦盛・経正の最期がつづけて描かれる。

(13) 「城四郎高家」とあるが、武藏国児玉党の武士で庄四郎を称した、庄高家と考えられる。

(14) なお、延慶本『平家物語』では鎧の引き合わせから錦の袋に入った筆筈が見つかり、覚
 一本『平家物語』では錦の袋に入った笛を腰に差しているのが見つかっている。

(15) 忠度の最期は、『平家物語』諸本によって展開がやや異なっている。覚一本『平家物語』
 では、落ち延びてゆく忠度に岡部忠純が追い付き、「抑いかなる人で在まし候ぞ。名のら

せ給へ」と声を掛ける。忠度は「是はみかたぞ」と答えるが、そのとき振り仰いだ忠度がお齒黒をしているのを見た忠純は「平家の公達でおはするにこそ」と思い、忠度に組む。忠度は「にツくいやつかな。みかたぞと言はば、言はせよかし」と言つて、忠純を三刀突き、首を掻こうとするが、忠純の童に腕を切り落とされ、十念を唱えたところを忠純に首をとられる。箆に結びつけられた文に書かれた歌に「忠教」とあり、名が明らかになつたとされている(覚一本『平家物語』巻第九「忠教最期」)。

延慶本『平家物語』では、忠純が「ココニ只一騎落行ハ誰人ゾ。敵カ、味方カ。名乗給へ」と声を掛けているほか、忠度を組み伏せた忠純が「誰人ゾ。名乗り給ベシ」と問うのに対して、忠度が「己レニ合テ一度モ名乗ルマジキゾ。己ガ見知ラヌコソ人ナラネ。サリナガラモヨキ敵ゾ。定勸賞ニ預ラムズルゾ」と言い、首をとられている。忠純は「是ハタガ頸ゾ」と人に見せ、「あれこそ太政入道の末弟、薩摩守忠度と云し歌人の御首よ」として、忠度と判明したとされる(延慶本『平家物語』第五本「薩摩守忠度被討給事」)。一方、『源平盛衰記』では、以下のように描かれている。

薩摩守忠度ハ生年四十一、色白クシテ鬚黒ク生給ヘリ。赤地錦直垂ニ、黒絲威ノ胄ニ、甲ヲバ著給ハズ、立烏帽子計ニテ、白鶴毛ノ馬ニ、遠雁ノ文ヲ打タル鞍置テゾ乗タリケル。カルモ河、須磨、板宿ヲ打過ツ、渚ニ付テゾ落給フ。武藏國住人、岡部六弥太忠澄、十餘騎ノ勢ニテ鞭ヲ打テ追懸テ、「爰ニ西ヲ指テ過給ハ敵カ御方カ名乗レ」ト云。「是ハ源氏ノ軍兵ゾ」ト答テ、イトゞ駒ヲ早メテ落給フ。御方ニハ立烏帽子ニ金付タル人ハナキ者ヲ、是ハ一定平家ノ大將軍ニコソト思テ、追テ懸ル處ニ、(中略)今ハ忠度一人ニ成給タリケルヲ、忠澄馳並テ引組テ落、六彌太上ニ成。忠度ハ赤木ノ管ニ銀ノ筒金巻タル刀ヲ拔儲テオハシケレバ、六彌太ヲ三刀マデゾ突給フ。馬ノ上ニテ一刀、落ザマニ一刀、落付テ一刀、隙アリ共見エズ。一ニノ刀ハ胄ノ上ヲ突給ヘバ手モ負ズ、三ノ刀ニ胸板ヲ突ハシラカシ、領ノ下片頬加ヘニツト突貫。忠澄既ニト見エケレバ、郎等落合テ、薩摩守ヲミシト切、射鞬ヲ以テ合セ給タリケレバ、妻手ノ腕射鞬加ニ打落サル。忠度今ハ叶ハジト思召ケレバ、上ナル六彌太ヲ持興シテ片手ニ提、「コ、ノケ、念佛申テ死ナン」トテ抛給ヘバ、弓長ニ長バカリ抛ラレテ、忠澄ト、走テ安堵セズ。其間ニ忠度ハ鎧ノ上帯切、物具脱捨テ、端座シテ西ニ向、念佛高聲ニ唱ヘ給フ。其後忠澄太刀ヲ拔寄ケレバ、「今ハ汝ガ手ニ懸テ討レン事子細ナシ。暫相待テ最後念佛申サン」ト宣ヘバ、忠澄畏テ、「抑君ハ誰ニテ渡ラセ給候ゾ」ト問ケレバ、薩摩守、「己ハ不覺仁ヤ、何者ゾ。名乗トイハバ名乗ベキカ、景氣ヲ以テ見モ知レカシ。己ニ會テ名乗マジ。去ナガラ最後ノ暇エサセタルニ、己ハヨキ敵取ツル者ゾ。同ジ勲功ト云ナガラ、必ヨキ勸賞ニ預リナン」トテ、最後ノ十念高聲ニ唱ツ、
「ハヤトク」ト宣ケレバ、六彌太進寄テ頸ヲ取。脱捨給ヘル物具トラセケルニ、一卷ノ巻物アリ。取具シテ頸ヲバ太刀ノ切鋒ニ貫テ指上ツ、陣ニ帰テ、是ハ誰人ノ頸ナラン、名乗ト云ツレ共シカクトテ名乗ザリツレバ、何ナル人共見シラザリケルニ、巻物ヲ披見レバ、歌共多く有ケル中ニ、旅宿花ト云題ニテ一首アリ。

行暮テ木下陰ヲ宿トセバ花ヤ今夜ノアルジナラマシ

忠度ト書レタリケルニコソ薩摩守トハ知タリケレ。

〔『源平盛衰記』卷第三十七「平家公達亡」〕

忠澄が「敵か御方か名乗れ」と声を掛けている点は延慶本『平家物語』に類似しているが、『源平盛衰記』では、念仏を唱えようとする忠度に、忠純が「抑君ハ誰ニテ渡ラセ給候ゾ」と問い、それに対して忠度が「己ハ不覺仁ヤ、何者ゾ。名乗トイハバ名乗ベキカ、景氣ヲ以テ見モ知レカシ。己ニ會テ名乗マジ。去ナガラ最後ノ暇エサセタルニ、己ハヨキ敵取ツル者ゾ。同ジ勲功ト云ナガラ、必ヨキ勸賞ニ預リナン」と述べている。格下の敵には名乗らないという点で直実の「ウキフシモ知ヌ東國ノ夷下藤ニ逢テ、名乗マジト被思召カ」という言葉に、その名が勲功の賞に関わるといふ点で敦盛の考えに通じる発言であるとともに、「名乗トイハバ名乗ベキカ」と、名乗りそのものについて言及している。なお、『源平盛衰記』では、脱ぎ捨てられた物具のなかの巻物に書かれた歌に「忠度」とあり、名が明らかになったとされている。

(16) 松尾葦江「源平盛衰記素描―その意図と方法―」『國語と國文學』第五十四卷五号、一九七七・五。

(17) 山下宏明「源平盛衰記の語り」『國學院雜誌』第一〇三卷第五号、二〇〇二・五。

(18) 松尾葦江「諸本論とのつきあい方―平家物語研究をひらく―」『中世文学』第六十号、二〇一五・六。

第五章 小宰相の入水

一、はじめに

『源平盛衰記』は、『平家物語』諸本の一つに数えられ、延慶本『平家物語』などと同じ読み本系に属するが、他本にはない多くの叙述を有して四十八巻に及び、その冗長さや繁雑さから、語り本系諸本の一つである覚一本『平家物語』などに比べて文学的評価はまだまだ十分になされていない。前々章・前章において、巴の物語および敦盛最期譚の分析を通して、『源平盛衰記』の物語としての特質の一端の解明を試みた(1)。木曾義仲・今井兼平に対する巴、熊谷直実に対する平敦盛を視点とする多元的な物語世界は、『平家物語』の世界に対して『源平盛衰記』がひらく新たな物語世界である。巴の物語では、「木曾殿の乳母子」と名乗る巴とその巴に「女」として離脱を命じる義仲のズレが浮き彫りになり、敦盛最期譚では、「誰の子か」という問いと「存ズル肯」の解釈のズレから直実と敦盛の懸隔が露わになる。いずれも人物間のやりとりから他本にはない新たな物語が生まれてゆく。

本章は、『源平盛衰記』における小宰相の入水の分析を通して、『源平盛衰記』の物語としての特質のさらなる解明を目指すものである。『平家物語』では、入水の思いを語る小宰相とそれを引き留めようとする女房の問答が描かれるが、入水の思いを語る小宰相の言葉のなかで、最後の逢瀬における平通盛との会話が回想され、小宰相を通して通盛の言葉もまた語られている。本章では、小宰相から通盛に送られた歌と、乳母子の女房に応答しない小宰相の姿に着目し、通盛と小宰相、小宰相と乳母子の女房のやりとりのなかで、『源平盛衰記』が小宰相の入水をどのように描き出しているかを論じる。

二、小宰相の歌

小宰相の物語は、通盛と小宰相の馴れ初めと、通盛の討死を知った小宰相の入水という、大きく分けて二つの物語から成っている。『源平盛衰記』や延慶本『平家物語』などでは、二人の馴れ初めを明かした後、小宰相の入水を描く。一方、覚一本『平家物語』などでは、小宰相の入水を描いた後、二人の馴れ初めを明かすが、通盛が小宰相を見そめ、小宰相が仕えていた女院の仲立ちによって結ばれるという馴れ初めの経緯は、『平家物語』諸本において大きな異同はない(2)。

通盛夙見給テ、宿所ニ歸テ忘ントスレ共忘レズ。イカゞセントゾ思ハレケル。又萌出ル春ノ草、主ナキ宿ノ埋火ハ、下ニノミコソ焦レケレ。乳人ノ女房ヲ招テ、「イカゞハセン」ト此物語アリケレバ、「不思議御事也。當時女院ノ御方ニ候ハセ給テ、片時モ御前ヲ立離サセ給ハヌモノヲ」ト申シケレバ、「一筆ノ文マデモ叶フマジキ歟」ト問給ヘバ、「ソレハ何カ苦ク侍ルベキ」ト申ス。「サラバ」トテ御文アリ。

吹送風ノタヨリニ見テシヨリ雲間ノ月ニ物思カナ

ト書テ奉ル。小宰相ハ「人ヤ見ツラン浅間シヤ、不思議」トテ①返事ナシ。此ヲ便トシテ三年力程、書盡ヌ水莖ノ數積レ共、終ニ②返事ナカリケリ。

『源平盛衰記』卷第三十八「小宰相局慎夫人」

『平家物語』諸本に共通して、小宰相を見そめた通盛は文を送り続けるが、小宰相は聞き入れない。『源平盛衰記』では、通盛の文に応じない小宰相の姿が「返事ナシ」「返事ナカリケリ」と同文を繰り返して描き出されている（傍線部①・②）。また、通盛から小宰相に送られた「吹送風ノタヨリニ見テシヨリ雲間ノ月ニ物思カナ」という歌は、『源平盛衰記』のみに見られるものである。

通盛からの文に「返事」したのは、小宰相ではなく小宰相が仕えていた女院であった。小宰相は通盛からの文を女院の御前に落としてしまい、文は女院の手にわたる。

女院此文ヲ取出サセ給ヘバ、妓爐ノ煙ニ薫ツヽ、香モナツカシキ匂アリ。手跡モナベテナラズ巖ク筆ノ立所モメヅラカナリ。

我戀ハ細谷川ノ丸木橋フミ返サレテヌルヽ袖カナ

蹈カヘス谷ノウキ橋浮世ゾト思シヨリモヌルヽ袖カナ

難面御心モ、今ハ中々嬉シクテナンド書タリ。〔『源平盛衰記』卷第三十八「小宰相局慎夫人」〕

通盛の文を見て女院は小宰相を諭し、女院自身が小宰相に代わって通盛に歌を返す。

女院御自ラ御硯引寄御座シテ、

タゞ憑メ細谷川ノ丸木橋フミ返シテハ落ル習ゾ

谷水ノ下ニ流テ丸木橋踏見テ後ゾクヤシカリケル

トアソバシテ、女院御媒ニテ渡ラセ給ヘバ、力及バデ終ニ靡キ給ニケリ。仙宮ノ玉妃、天地ヲ兼テ契ケン、深キ志モ床敷テ、雲上ノ御遊ニモ、今ハスヽマシカラヌ程ノナカラヒ也。

〔『源平盛衰記』卷第三十八「小宰相局慎夫人」〕

通盛から小宰相に送られた歌に返歌がなされるが、これは「女院御自ラ」なされたことであり、小宰相自身の行為ではない。女院の仲立ちによって小宰相と通盛は結ばれるが、『平家物語』諸本に共通して、ここまで小宰相は受動的・消極的であり続けている。だが『源平盛衰記』では、小宰相と通盛の関係に一つの転換点がある。

角馴ソメ給テ、日比ヘケルニ、通盛或女房ニ心ヲ移シテ、カレハヽニ成ケレバ、小宰相局角ゾ怨ヤリ給ヒケル。

呉竹ノ本ハ逢夜モ近カリキ末コソ節ハ遠ザカリケレ

本ヨリ悪カラザリケル中ナレバ、通盛此文ニメデ給、互ニ志浅カラズシテ年比ニモナリ給ヒケレバ、是マデモ具シ下リ給ケリ。〔『源平盛衰記』卷第三十八「小宰相局慎夫人」〕

『源平盛衰記』では、その後、通盛がほかの女房に心を移して、小宰相と通盛が「カレハヽニ」

なり、小宰相から通盛に「呉竹ノ本ハ逢夜モ近カリキ末コソ節ハ遠ザカリケレ」という歌が送られたとされるのである。この逸話は、他本には見られないものである。松尾葦江氏は「ゴシツプ好みが目立つ」『源平盛衰記』の特徴が表れたものと指摘し(3)、榊原千鶴氏は「相思相愛の理想的男女像に水を差し、男をとり戻すために心を尽くす女の姿を描く」、「嫉妬の思いを露にして疎まれるのとは逆に男の心を巧みに攪んだ例話」としている(4)が、小宰相の物語において、この逸話はどのような役割を果たしているであろうか。

「カレハニ」なったことをうらみ、通盛の足が遠のいたことを嘆くこの歌は、受動的・消極的であった小宰相の初めての能動的・積極的行為である。先の返歌は女院によってなされたものであったから、すくなくとも物語上では初めて小宰相から通盛に送られた歌であり、かつて通盛が文を送り続けても「返事ナシ」であった小宰相から送られた文である。通盛は「此文ニメデ給」、通盛の心はふたたび小宰相に向かう。そして小宰相を「是マデモ具シ下リ給ケリ」と、ここから物語は小宰相の現在にまでつながってゆくのである。

さらに『源平盛衰記』では、この逸話に続いて主妾の同坐を諫める故事説話が載り、それを受けて、通盛と同じ舟ではなく別の舟に居る小宰相の姿が描かれる(5)。これは『源平盛衰記』のほか、延慶本『平家物語』にも見られるものであるが、留意すべき点は、『源平盛衰記』と延慶本『平家物語』とでは、その有様の捉え方が異なっている点である。

越前三位此事ヲ思知給タルニヤ、小宰相殿ハ妾ニテオワシケレバ一舟ニハ住給ワズ、別ノ御船ニヲキ奉テ③時々通給テ、三年ガ間波ノ上ニ浮ビ給ケルコソ哀ナレ。

(延慶本『平家物語』第五本「通盛北方ニ合初ル事付同北方ノ身投給事」)

越前三位通盛モ此事ヲ思知給ケルニヤ、大臣殿ノ御娘ハ妻室也、夫婦ノ契ニオハシケレバ、小宰相局ハ假染ノ昵也、妾ニテゾマシノケル。一ツ御舟ニハ住給ハデ、別ノ舩ニ宿シ置奉テ、④三年ノ程波ノ上ニ漂、時々事ヲ問給ヘリ。中々情ゾ深カリケル。

(『源平盛衰記』卷第三十八「小宰相局慎夫人」)

小宰相は通盛とは別の舟に宿し置かれるが、延慶本『平家物語』では、その姿を「哀ナレ」と捉えている(傍線部③)。一方、『源平盛衰記』では、小宰相のもとに足を運び続ける通盛の姿に「中々情ゾ深カリケル」と、あわれな小宰相の姿よりもむしろ二人の情愛の深さが描き出されている(傍線部④)。先述のとおり、『源平盛衰記』では、小宰相の初めての能動的・積極的行為として、通盛の足が遠のいたことを嘆く歌が送られていた。この歌によって通盛の心はふたたび小宰相に向かい、それにたがわず小宰相のもとを訪れ続ける通盛の姿に、波の上までも「カレハニ」なることのない二人のつよい結びつきを捉えるのである。波の上に浮かぶあわれな小宰相の姿を描き出す延慶本『平家物語』について、小宰相のたよりなき身の上が際立ち、そのような境遇のなかで通盛を失い入水に至ることを指摘する論考がある(6)が、『源平盛衰記』においては、ここで描き出されているどこまでも「カレハニ」なることのない二人の有様が、この後、入水へとつながってゆくことになる。

三、女房の言葉（一）

どこまでも通盛と離れることなく下ってきた小宰相のもとに、通盛が討死したという知らせが届き、小宰相と乳母子の女房は涙に沈む。『平家物語』諸本に共通して、ここから小宰相と女房の問答が始まるが、『源平盛衰記』では、まず乳母子の女房が口を開いている。他本では、『源平闘諍録』もまた小宰相ではなく乳母子の女房の言葉から始まる。

一定討たれたまへりと聞きたまひしかば、引き覆きて臥したまふ。哀れなるかな、恋慕の涙は枕の上の露を浮かべ、愁歎の炎は肝の中の朱を焦す。

今度討たれたまへる人々の北の方、何れも歎きは浅からねども、此の北の方は理にも過ぎて深かりけり。日数の経る間に深く思ひ入りたまひて、湯水をだにも聞召し入れず。乳母子の女房只一人付き添ひ奉るも、同じく枕を並べ臥し淪むるが、「右くて渡らせたまはんには、何と懸けてか露の命も永らへたまふべき」と思ひける間、⑤此の女房泣く泣く誘引へ申しけるは、「今は何に思食すとも叶ふまじ。御身子と成らせたまひて後、少き人をも長て奉り、故殿の忘れ形見とも御覽ぜよ。其れ尚恠め無くは、御形勢を替へ、彼の後生をも訪ひ御坐せかし。生死は常の習ひ、今始めて驚き思食すべきに非ず」と恠め申せども、只偏へに泣くより外の事は無し。〔『源平闘諍録』巻第八下「小宰相局、身を投げらるる事」〕

三位ノ侍ニ、宮太瀧口時員ト云者アリ。一谷ノ合戦ニ被討漏タリケルガ、舟ノ中ニ参テ申ケルハ、「三位殿ハ湊川ノ下ニテ、近江國住人、佐々木ノ一黨、木村源三成綱ト云者ガ手ニカゝリテ、討レサセ給ヌ」ト泣々語申ケレバ、北方ハ露物モ仰ラレズ、兼テ思ハヌ外ノ事ノ様ニ引カヅキ臥給テ後ハ、枕モ床モ浮ヌ計ゾ泣給フ。⑥今度討レ給ヘル人々ノ北方イヅレモ歎悲給ヘル有様、踈也共見エザリケレ共、是ハ理ニモ過給ヘリ。乳母子也ケル女房ノ只一人奉付タリケルモ、同枕ニ臥沉タリケルガ、涙ヲ押ヘテ申ケルハ、「今ハイカニ思召共甲斐アルマジ。御身々トナラセ給テ後、サマヲモ替後世ヲモ吊進セサセ給ヘ。懸ル浮世ノ習ナレバ、始テ驚思召ベカラズ。御身一ノ事也共イカゞハセン、⑦人々ノ北ノ御方モ皆角コソ」ナド慰申ケレ共、只泣ヨリ外ノ事ナシ。⑧返事ヲダニモシ給ハズ。

〔『源平盛衰記』巻第三十八「小宰相局慎夫人」〕

『源平闘諍録』では、「日数の経る間に深く思ひ入りたまひて、湯水をだにも聞召し入れず」という小宰相を見た乳母子の女房が「右くて渡らせたまはんには、何と懸けてか露の命も永らへたまふべき」と思い、「誘引へ申しける」言葉として語られている（傍線部⑤）。乳母子の女房は、出産をして子を育て、その子を通盛の「忘れ形見とも御覽ぜよ」と小宰相をなだめ、さらにそれでも慰められなければ「御形勢を替へ、彼の後生をも訪ひ御坐せかし」と重ねて小宰相を導いている。

一方、『源平盛衰記』では、まず乳母子の女房が口を開き、出産した後、出家をもして後世をも弔い申し上げなさいませ、「人々ノ北ノ御方モ皆角コソ」と、小宰相が今後進むべき道をあらかじめ示す形となっている（傍線部⑦）。だがその直前に、「今度討レ給ヘル人々ノ北方イヅレモ

歎悲給ヘル有様、踈也共見エザリケレ共、是ハ理ニモ過給ヘリ」と、ほかの人々の北の方にもま
して「理ニモ過」ぎて嘆き悲しむ小宰相の有様が語られており（傍線部⑥）、乳母子の女房が
「人々ノ北ノ御方モ皆角コソ」と指し示す道から、小宰相が逸脱してゆくことがうかがわれる。
このとき小宰相は「返事ヲダニモシ給ハズ」とされ、乳母子の女房の言葉に応じない（傍線部
⑧）。

四、小宰相の言葉・通盛の言葉

通盛討死の知らせを聞いて伏し沈んでいた小宰相は、入水の思いを語る。ここで語られている
事柄を分析するため、長くなるが小宰相の言葉を以下に引用する。なお、延慶本『平家物語』や
覚一本『平家物語』では、先の乳母子の女房の言葉は見られないため、この小宰相の言葉から女
房との問答が始まる。

乳母子ナリケル女房ノ只一人付タリケルニ、十三日、夜フケ人定テ、北方泣々宣ケルハ、
「アワレ此人ノ、アス打出ムトテハ、世中ノ心細キ事共ヲ終夜云ツゞケテ、涙ヲ流シカバ、
イカニカクハ云ヤラムト、心サワギシテ覚シカドモ、必ズカゝルベシトハ思ハザリシニ、限
ニテ有ケル事ノ悲サヨ。『我イカニナリナム後、イカナル有サマニテ有ムズラムト思モ心苦
シ。世ノ習ヒナレバサテシモアラジ。イカナル人ニ見エムズラムト、ソレモ心ウシ』ナムド
云シ時ニ、タゞナラズナリタル事ヲ、其夜始テシラセタリシカバ、ナノメナラズ悦、『通盛
スデニ卅ニ成ナムズルニ、未ダ子ト云者ノナカリツルニ、初テ子ト云者有ラムズラム事ノウ
レシサヨ。⑨アワレ同ハ男子ニテアレカシ。サルニ付テモ、カクイツトナキ船ノ中、波上ノ
スマヒナレバ、身々トナラム時、通盛イカゞセムズラム』ト、只今有ムズルヤウニ歎給シ物
ヲ。ハカナカリケルカネ事カナ。軍ハイツモノ事ナレバ、ソレヲカギリ最後トハ思ハズ。ア
リシ六日ノ暁ヲ限トシリセバ、後ノ世ニトモ契テマシ。⑩誠ヤラム、女ハ身々トナル時、十
二九ハ死ルナレバ、カクテ恥ガマシキ目ヲ見テ、トモカクナラム事モ口惜シ。⑪若此世ヲ忍
過テナガラヘテモ、有ハ心ニ任セヌ世ノ習ナレバ、不思議ニテ思ワヌ外ノ事モ有ゾカシ。心
ナラズサル事モ有バ、草ノ影ニテ見ム事モハヅカシケレバ、此ノ世ニナガラヘテモナニカハ
セム。マドロメバ夢ニミヘ、サムレバ面影ニタツゾトヨ。サレバ此次ニ底ノミクヅトモ思入
テ、死出山、三途川トカヤヲモ同道ニトノミ思ガ、ソレニヒトリ残留テ歎ムコトモイタハシ
ク、古里ニ聞給テ、悲ミ給ワム事コソ罪深ケレドモ、思ハザル外ノ事モ有ゾカシ。若サモ有
ム時ハ、⑫ワラワガ装束ヲバ何ナラム僧ニモトラセテ、衣ニセサセテ、後生ヲモ問ヒ無人ノ
菩提ヲモ助給ヘ。書置タル文共ヲバ都ヘトヅケ給ヘヨ」ナド、コシカタ向末ノ事共マデカキ
クドキ宣ケレバ、

（延慶本『平家物語』第五本「通盛北方ニ合初ル事付同北方ノ身投給事」）

あくれば十四日、八島へつかんずるよひうち過ぐるまで臥し給ひたりけるが、ふけゆくま
ゝに舟の中もしづまりければ、北の方、めのとの女房にのたまひけるは、「このほどは、

⑬三位うたれぬと聞きつれども、まこととも思はでありつるが、この暮れほどより、さもあ

るらんと思ひ定めてあるぞとよ。人ごとに湊河とかやのしもにて討たれにしとは言へども、そののち生きてあひたりと言ふものは一人もなし。あすうち出でんとての夜、あからさまなるところにてゆきあひたりしかば、いづよりも心ぼそげにうちなげきて、「明日のいくさには、一ちやう討たれなんぞとおぼゆるはとよ。我いかにもなりなんのち、人はいかゞし給べき」など言ひしかども、いくさはいつもの事なれば、一ちやうさるべしと思はざりける事のかやしきよ。それをかぎりとだに思はましかば、などのちの世とちぎらざりけんと思ふさへこそかなしけれ。たゞならずなりたる事をも、日ごろはかくして言はざりしかども、心づよう思はれじとて、言ひい出したりしかば、なめならずうれしげにて、「通盛すでに二十になるまで、子といふものなかりつるに、^⑭あはれなんしにてあれかし。うきよのわすれがたみに思ひおくばかり。さていく月ほどになるやらん。心ちはいかゞあるやらん。いつとなき波の上、舟のうちのすまひなれば、しづかに身くとならん時いかゞはせん」など言ひしは、はかなかりけるかねことかな。^⑮まことやらん、をんなはさやうの時、とをにこゝのつはかならず死ぬるなれば、はぢがましきめを見て、むなしうならんも心憂し。しづかに身ととなつてのち、をさなきものをもそだてて、なき人のかたみにも見ばやとは思へども、をさなきものを見たびごとには、むかしの人のみこひしくて、思ひの数はずもるとも、なぐさむ事はよもあらじ。つひにはのがるまじき道也。^⑯もしふしぎにこのよをしのび過ぐすとも、心にまかせぬ世のならひは、思はぬほかのふしぎもあるぞとよ。それも思へば心憂し。まどろめば夢に見え、さむればおもかげに立つぞかし。いきてゐて、とにかくに人をこひしと思はんより、たゞ水の底へ入らばやと思ひ定めてあるぞとよ。そこにひとりとまつてなげかんずる事こそ心ぐるしけれども、^⑰わらはが装束のあるをば取つて、いかならん僧にもとらせ、なき人の御菩提をもとぶらひ、わらはが後生をもたすけたまへ。かきおきたる文をば都へつたへてたべ」などと、こまかくとのたまへば、

(覺一本『平家物語』巻第九「小宰相身投」)

明日十四日ニ屋嶋ノ磯へ付ベシト聞エケル其夜、人定テ乳母子ノ女房ニ宣ケルハ、^⑱三位ハ討レタリト人毎ニ云ツレ共、餘ノ人々モカナタコナタニ落散給ヌト聞バ、サモヤ有ラント思テ、誠トモ思ハザリツルガ、此暁ヨリハゲニモサモ有ラント思定タル也。其故ハ、アス打出ントテノ夜ハ、終夜イツヨリモ心細事トモヲ云繼テ涙ヲ流ツ、^⑲イカニモ我ハ明日ノ軍ニ討レンズルト覺ユルゾ。去バ後ニイカナル有様ニテカ世ニモオハセンズラント思コソ心苦ケレ。世ノ習ナレバサテハヨモオハセジナ。何ナル人ニカ見エ給ハンズラン。ソモ心憂』ナド云シカバ、イカニ角ハ宣ヤラント心騒シテ覺エシカドモ、必シモ懸ベシトハ思ハザリシニ、ゲニ限ニテ有ケル事ノ悲サヨ。^⑳生テ物ヲ思フモ苦シケレバ、水ノ底ニモ入ナント思也。是マデ付下テ、一人殘居テ思ハン事コソ絲惜ケレ。故郷ニ待聞テ歎給ハンモ罪深ケレドモ、^㉑此世ニナガラヘテ有ナラバ、心ノ外ノ事モ有ゾカシ。ナキ人ノ魂、草ノ陰ニテ見シモウタテカルベシ。何ナル男ナレバ、蓬ガ柚ニモ後レジトハ契ケルゾ。何ナル女ナレバ、ツレナク殘居テ歎ヘキゾ。タゞナラズ成タル事ヲ其夜始テ知セタリシカバ、不斜悦テ、『我三十二成ヌレドモ、未子ノナカリツルニ、^㉒始テ見シ事ハ嬉ケレドモ、角イツトナキ船ノ中波ノ上ノ住

居ナレバ、身々トナラン時モ通盛イカゞハセンズル』ト只今アランズル事ノ様ニ歎シジヤ。

ハカナカリケル兼言哉。②中々何シニ知セケン』トテ、涙モ關敢ズ泣給ケレバ、

〔『源平盛衰記』卷第三十八「小宰相局慎夫人」〕

まず、通盛が生きて帰ってくることもあるかもしれないと待っていた小宰相が、通盛の討死を信じるに至った理由について、どのように語られているであろうか。覚一本『平家物語』では、「三位うたれぬと聞きつれども、まこととも思はでありつるが、この暮れほどより、さもあるらんと思ひ定めてあるぞとよ。人ごとに湊河とかやのしもにて討たれにしとは言へども、そののち生きてあひたりと言ふものは一人もなし」と述べている(傍線部⑬)。通盛について、「湊河とかやのしもにて討たれにし」という話は耳にするが、「生きてあひたり」と言う人は一人もいないことから、通盛の討死を「さもあるらん」と思い定めたとされている。

一方、『源平盛衰記』では、通盛の討死を信じる理由について、「三位ハ討レタリト人毎ニ云ツレ共、餘ノ人々モカナタコナタニ落散給ヌト聞バ、サモヤ有ラント思テ、誠トモ思ハザリツルガ、此暁ヨリハゲニモサモ有ラント思定タル也。其故ハ、アス打出ントテノ夜ハ、終夜イツヨリモ心細事トモ云繼テ涙ヲ流ツ、『イカニモ我ハ明日ノ軍ニ討レンズルト覺ユルゾ。去バ後ニイカナル有様ニテカ世ニモオハセンズラント思コソ心苦ケレ。世ノ習ナレバサテハヨモオハセジナ。何ナル人ニカ見エ給ハンズラン。ソモ心憂』ナド云シカハ、イカニ角ハ宣ヤラント心騒シテ覺エシカドモ、必シモ懸ベシトハ思ハザリシニ、ゲニ限ニテ有ケル事ノ悲サヨ」と述べている(傍線部⑭)。『源平盛衰記』において、小宰相が通盛の討死を「ゲニモサモ有ラン」と思い定めた「其故ハ」、通盛自身が「イカニモ我ハ明日ノ軍ニ討レンズルト覺ユルゾ」と語っていたからとされるのである。最後の逢瀬における通盛との会話の回想は『平家物語』諸本に共通して見られるものであり、明日討たれるだろうという通盛の発言は、『源平盛衰記』のほか、覚一本『平家物語』や鬮諍録などにも見られる(7)。『源平盛衰記』では、この通盛自身の発言を、小宰相が通盛の討死を信じる理由とするのである。覚一本『平家物語』の「生きてあひたりと言ふものは一人もなし」という理由が客観的・外在的なものであるのに対して、『源平盛衰記』の小宰相は通盛の言葉のなかにその理由を見出している。『源平盛衰記』の小宰相はほかのだれでもなく通盛の言葉をその根拠とするのである。

つぎに、入水の思いはどのように語られているであろうか。『源平盛衰記』では、明日討たれるだろうという通盛の言葉に小宰相は心騒ぎしたが、そのときは「必シモ懸ベシトハ思ハ」なかつた。しかし、「ゲニ限ニテ有ケル」、すなわち通盛の言葉どおり、ほんとうにあのときが最後であった悲しさに、小宰相は「生テ物ヲ思フモ苦シケレバ、水ノ底ニモ入ナン」と思うのである(傍線部⑮)。そして小宰相は「此世ニナガラヘテ有ナラバ、心ノ外ノ事モ有ゾカシ。ナキ人ノ魂、草ノ陰ニテ見ンモウタテカルベシ。何ナル男ナレバ、蓬カ袖ニモ後レジトハ契ケルゾ。何ナル女ナレバ、ツレナク残居テ歎ヘキゾ」と語る(傍線部⑯)。「ナキ人ノ魂、草ノ陰ニテ見ンモウタテカルベシ」については、延慶本『平家物語』などにも同様の語句があり、「何ナル人ニカ見え給ハンズラン。ソモ心憂」という通盛の発言に対応したものと指摘されているが、さらに『源平盛衰記』では、先に描き出されていた「カレハニ」なることのない二人の姿がここに思い起

こされる。先述のとおり、『源平盛衰記』では、通盛がほかの女房に心を移し、一度は小宰相と「カレハニ」なつたことがあった。それを嘆く歌が小宰相から送られて、通盛は「此文ニメデ給」、小宰相を「是マデモ具シ下リ給ケリ」と、小宰相の現在にまでつながっていた。そして『源平盛衰記』では、別の船に宿し置かれた小宰相のもとに足を運び続ける通盛の姿に「中々情ゾ深カリケル」と、二人の情愛の深さが描き出され、都を離れ波の上までも二度と「カレハニ」なることのない二人のつよい結びつきが捉えられていた。いま通盛は遠いあの世に旅立ち、小宰相だけが「此世ニナガラヘテ有ナラバ」、ほかの男性と再婚させられることもあるかもしれない、どこまでも通盛に後れまいと、小宰相は入水しようとするのである。

延慶本『平家物語』や覚一本『平家物語』では、心細げに嘆く通盛に対し、小宰相が懐妊を告げる場面が続いている。懐妊を知った通盛は「アワレ同ハ男子ニテアレカシ」と望み(傍線部⑨)、覚一本『平家物語』ではさらに「うきよのわすれがたみに思ひおくばかり。さていく月ほどになるやらん。心ちはいかゞあるやらん」と、母になる小宰相と生まれてくる我が子への思いを述べている(傍線部⑭)。一方で、通盛を失った小宰相は「誠ヤラム、女ハ身々トナル時、十二九ハ死ルナレバ、カクテ恥ガマシキ目ヲ見テ、トモカクナラム事モ口惜シ」と、出産の際に命を落とす不安を口にし(傍線部⑩)、覚一本『平家物語』ではさらに「しづかに身々となつてのち、をさなきものをもそだてて、なき人のかたみにも見ばやとは思へども、をさなきものを見んたびごとには、むかしの人のみこひしくて、思ひの数はつもるとも、なぐさむ事はよもあらじ」と述べている(傍線部⑮)。これは「うきよのわすれがたみに思ひおくばかり」という通盛の言葉に対応したものであるが、小宰相は我が子を見るたびに通盛を恋しく思うばかりで慰められることはないし、出産後の不安を口にしてはいる。そのうえで、「若此世ヲ忍過テナガラヘテモ、有ハ心ニ任セヌ世ノ習ナレバ、不思議ニテ思ワヌ外ノ事モ有ゾカシ。心ナラズサル事モ有バ、草ノ影ニテ見ム事モハヅカシケレバ、此ノ世ニナガラヘテモナニカハセム」と、再婚への不安にも言及し(傍線部⑯・覚一本『平家物語』では傍線部⑰)、入水しようとするのである。

『源平盛衰記』においても、小宰相は最後の逢瀬のときに懐妊を告げたと述べているが、その場面は他本のように死を予感する通盛の発言を受けて続くのではなく、入水しようという小宰相の思いが語られた後に置かれている。そして『源平盛衰記』では、他本と同様に通盛は喜びながらも、その喜びは「始テ見ン事ハ嬉ケレドモ、角イツトナキ船ノ中波ノ上ノ住居ナレバ、身々トナラン時モ通盛イカダハセンズル」とすぐさま自身の不安へと回帰し(傍線部⑱)、小宰相はこのときの通盛の様子を思い返して「中々何シニ知セケン」とさえ述べている(傍線部⑳)。さらに、「アワレ同ハ男子ニテアレカシ」といった子に対する通盛の発言は見られず、小宰相も出産の際の不安や出産後の不安を口にしていない。すなわち『源平盛衰記』では、他本に比べて子の問題は後景に退き、二人のつよい結びつきのみで入水の思いが語られているのである。

さて、先の乳母子の女房の言葉に対し、小宰相は「返事ヲダニモシ給ハズ」とされ、応じなかったが、小宰相の耳に乳母子の女房の言葉は届いていたのであるうか。『源平盛衰記』において、通盛の言葉のなかにその討死を信じる理由を見出す小宰相は、通盛の討死を「ゲニモサモ有ラン」と思い定めるようになった「此暁」に至るまで、最後の逢瀬における通盛との会話を思い返し、自身の内側で通盛の言葉を反芻していたと言えよう。このとき小宰相の耳に聞こえていた

のは、乳母子の女房の言葉ではなく通盛の言葉である。先述のとおり、『源平闘諍録』もまた乳母子の女房の言葉から始まっているが、『源平闘諍録』では、出産をして子を育て、その子を通盛の「忘れ形見とも御覧ぜよ」と小宰相をなだめる乳母子の女房の言葉に対応するように、小宰相は「此の者を人と生えて、見ん境々毎には、昔の人のみ恋しくて、思ひの数は増るとも、忘る事は世も有らじ」(『源平闘諍録』巻第八下「小宰相局、身を投げらるる事」と述べている(8))。しかし、『源平盛衰記』では、小宰相の発言のなかに乳母子の女房の言葉に対応するような部分は見られない。また、延慶本『平家物語』や覚一本『平家物語』では、小宰相が「ワラワガ装束ヲバ何ナラム僧ニモトラセテ、衣ニセサセテ、後生ヲモ問ヒ無人ノ菩提ヲモ助給ヘ。書置タル文共ヲバ都ヘトヅケ給ヘヨ」と述べている(傍線部⑫・覚一本『平家物語』では傍線部⑬)が、『源平盛衰記』においては、このような女房への依頼の言葉も見られない。『源平盛衰記』における小宰相の言葉は、先の乳母子の女房の言葉への対応もなく、乳母子の女房への働きかけもなく、ほとんど独り言のようでもある。さらに『源平盛衰記』では、続く乳母子の女房の発言に對しても、小宰相が言葉を返すことはない。他本では、入水を引き留めようとする女房に對し、我が身の上を嘆くにせよ、妨げられまいと取り繕うにせよ、小宰相はなんらかの言葉を返している。だが『源平盛衰記』では、小宰相の返事は見られず、場面は入水へと続いてゆくのである。

五、女房の言葉(一)

小宰相の言葉を聞いた乳母子の女房は、入水を引き留めようとする。

乳母子ノ女房思ケルハ、「日比ハ泣給ヨリ外ノ事ナクテ、墓々敷物モ宜ハザリツルニ、角細ヤカニ來方行末ノ事マデ口説給コソ恠ケレ。ゲニモ千尋ノ底マデモ思入給ハンズルヤラシ」ト、胸打騒申ケルハ、「水ノ底ニ入ラセ給タリトテモ、戀シキ人ヲ非可奉見。今ハ云ニ甲斐ナキ御事也。其ヨリハ只⑳平カニ身々トナラセ給テ後、ヲサナキ人ヲモ奉生立御形見共御覧ジ、又故郷ニオハシマス人々ニモ奉見御座シ候ベシ。御身ヲナキ者ニナシ給テハ、何ノ詮カハ侍ベキ。㉑我身モ故郷ニ老タル親ヲモ弃テ是マデ下侍シ事ハイカナラン野ノ末山ノ奥マデモ奉離ラジトコソ思シカ。㉒サレバ無人ノ御事ハ、今ハ力ナキ御事ニ侍リ。㉓童モ知ヌ旅ノ空、習ハヌ舟ノ中ニ住居シテ、夜晝心ヲ碎、憂目ヲ見候事モ、御故ニコソ堪ヘ忍テモ過シ侍志ヲ忘サセ給テ、誰ヲ憑何ニ慰トテ左様ノ事思召立ラン悲サヨ。責テハ㉔御兒ヲ替サセ給テ、墨染ノ袖ニ身ヲ窄シ、苔ムス庵ニ籠居テ、閑伽ヲ結び花ヲ採、御菩提ヲコソ訪御座ベキニ、悲ノ餘ニ海ニ入セ給タランハ、中々罪深キ御事ニテコソ候ハメ」ナド、

(『源平盛衰記』巻第三十八「小宰相局慎夫人」)

先述のとおり、『源平盛衰記』では、まず乳母子の女房が口を開き、出産した後、出家をもして後世をも弔うようにと述べていた。そのときと同様に、乳母子の女房は「平カニ身々トナラセ給テ後、ヲサナキ人ヲモ奉生立御形見共御覧ジ」と、出産し、さらに子を育てること(傍線部⑫)、そして「御兒ヲ替サセ給テ、墨染ノ袖ニ身ヲ窄シ、苔ムス庵ニ籠居テ、閑伽ヲ結び花ヲ採、御菩提ヲコソ訪御座ベキ」と、出家して通盛の菩提を弔うことをすべきであると述べている

(傍線部⑳)。『源平鬪諍録』もまた小宰相ではなく乳母子の女房の言葉から始まっていたが、鬪諍録では、入水するという小宰相に乳母子の女房は「見にも思食し立ち候はば、千尋の底へも引き具してこそ入らせたまへ。永くは後れ奉らじ者を」(『源平鬪諍録』卷第八下「小宰相局、身を投げらるる事」と言うのみである。一方、『源平盛衰記』では、先の言葉をより具体的に繰り返して、小宰相が今後進むべき道をあらためて伝えようとする。さらに、このとき乳母子の女房はここまで付き従ってきた自身の存在についても言及している。延慶本『平家物語』や寛一本『平家物語』などにおいても、女房は「ワラワモ老タル親ニモ立離レ、幼キ子モモ振捨テ、只一人付マヒラセタル甲斐モ候ワズ。ウキ目ヲミセムト思食ラムコソ口惜シケレ」(延慶本『平家物語』第五本「通盛北方ニ合初ル事付同北方ノ身投給事」と述べて入水を引き留めようとする(9)が、他本にもまして『源平盛衰記』では女房自身について言葉が費やされ、思いが細かく語られている点に留意しておきたい。

まず乳母子の女房は、「我身モ故郷ニ老タル親ヲモ弃テ是マデ下侍シ事ハイカナラン野ノ末山ノ奥マデモ奉離ラジトコソ思シカ」と、どこまでも小宰相と離れまいという思いで、ここまで下ってきたと語る(傍線部㉑)。「イカナラン野ノ末山ノ奥マデモ奉離ラシ」という思いは主と乳母子の関係にかぎらず見られるもので、たとえば都落ちの際、平維盛は北の方に「維盛ハ一門ノ人々ニ相具シテ都ヲ出ナントスル也。イカナラン野末山ノ奥マデモ具シ奉ベキニコソアレ共、少キ者ハアマタアリ、何國ニ落留ベシ共ナキ旅ノ空ニ出テ、西海ノ波ノ上ニ漂ハン事モ勞シク心ウシ」(『源平盛衰記』卷第三十「維盛兼言」と述べ、北の方もまた「只一人都ニ殘シ留、イカニセヨトテ情ナク振捨テ出給ゾ。野末山ノ奥マデモ相具シテコソ兎モ角モ見ナシ給ハメ。縦習ハヌ旅也共、此ニ奉被捨テ、明暮戀シ悲シト晴又思ニヤマサルベキ」(『源平盛衰記』卷第三十一「維盛惜妻子遺」と述べている。「イカナラン野末山ノ奥マデモ」と思いながらも、維盛は妻子を残し都落ちする。一方、小宰相はどこまでも通盛と離れることなく下ってきた。その小宰相に、乳母子の女房もまた離れまいと付き従ってきたのである。さらに乳母子の女房は、「童モ知ヌ旅ノ空、習ハヌ舟ノ中ニ住居シテ、夜晝心ヲ碎、憂目ヲ見候事モ、御故ニコソ堪ヘ忍テモ過シ侍志ヲ忘サセ給テ、誰ヲ憑何ニ慰トテ左様ノ事思召立ラン悲サヨ」と嘆く(傍線部㉒)。乳母子の女房は小宰相のため、「知ヌ旅ノ空、習ハヌ舟ノ中」を堪え忍んできたと言及するが、この姿はそのまま小宰相にもあてはまるものである。小宰相もまた通盛のため、「知ヌ旅ノ空、習ハヌ舟ノ中」を堪えてきたと言えよう。『源平盛衰記』において乳母子の女房が語る思いは、小宰相の通盛への思いと重なる。男女と主従というちがいはあれ、ひとえに相手を思い離れまいとしてきた小宰相と乳母子の女房の姿がここに重なるのである。そしてそのなかで「サレバ無人ノ御事ハ、今ハ力ナキ御事ニ侍リ」と述べ(傍線部㉓)、通盛を慕い入水へと向かう小宰相を、乳母子の女房は同じ思いで引き戻そうとするのである。そのような乳母子の女房の言葉に、小宰相は応じない。他本では、入水を引き留めようとする女房に対し、小宰相はなんらかの言葉を返している。だが『源平盛衰記』では、小宰相の返事は見られない。

六、小宰相の入水

『源平盛衰記』の小宰相は、先の乳母子の女房の言葉に「返事ヲダニモシ給ハズ」、その言葉

に対応するような発言もなく、乳母子の女房への働きかけもなかった。そして入水を引き留めようとする言葉にも、「反論することも弁解することもない」。

⑳細々ニ慰制シケル程ニ、夜モヤウく深ニケレバ、乳母子ノ女房モマドロミヌ。船ノ中モハヤ定タリケルニ、小宰相局忍テ舩耳ニ立出給ツ、念佛百返バカリ申テ後、「南無西方極樂世界、大慈大悲阿彌陀如来、本願悞給ハズ、㉑別ニシ三位通盛ト、一佛浄土ノ蓮葉ニ導給ヘ」ト忍音ニ祈ツ、漫々タル海上ナレバ、イツクヲ西トハワカネ共、月ノ入サノ山ノ端ヲ、ソナタト計リ伏拜、海ヘゾ飛入給ケル。㉒三位ハ此女房ノ十五ト申ケルヨリ見初給テ、今年ハ十九ニ成給フ。束ノ間モ難離思ハレケレ共、大臣殿ノ御智ニテ御座ケレバ、其方様ノ人ニハ知セジトテ、官兵共ノ舟ニ奉宿置テ、時々見参セラレケリ。

〔源平盛衰記〕卷第三十八「小宰相局慎夫人」

小宰相が女房に言葉を返さないまま入水するのは、『源平盛衰記』のみである。他本では、入水の思いを語る小宰相に対し、女房がそれを引き留めようとし、さらに小宰相の言葉が続いている(10)。たとえば延慶本『平家物語』では、入水を引き留められた小宰相は、出産の際の不安や出産後の不安などを重ねて口にする。それに対して乳母子の女房が「大方ハゲニモサコソハ思食ラメナレバ、イカナラム海川ノ底ヘ入セ給トモヨクレマヒラスマジキゾ」と述べると、小宰相は「此事サトラレテ妨ラレナムズ」と考えて「別ノ道ノ悲サ、大方世ノウラメシサニ身ヲモ投バヤト云事ハ、世ノ常ノ事ゾカシ。サレバトゲニハ争カ思モタツベキ」などと弁解し、それを聞いた乳母子の女房が「ゲニモ思延給ニコソ」と安心して「チトマドロミタリケルヒマニ」、小宰相は入水している(延慶本『平家物語』第五本「通盛北方ニ合初ル事付同北方ノ身投給事」)。また、覚一本『平家物語』では、入水を引き留められた小宰相は、延慶本『平家物語』と同様に「大かたの世のうらめツしきにも、身をなげんなンどいふ事は、常のならひ也」などと弁解し、さらに「夜もふけぬ、いざやねん」と述べる。それに対して女房は「相かまへて思召立つならば、ちいろの底までも、ひきこそ具せさせ給はめ」などと言いながらも「ちツとまどろみたりけるひまに」、小宰相は入水している(覚一本『平家物語』巻第九「小宰相身投」)。

一方、『源平盛衰記』では、乳母子の女房が「細々ニ慰制シケル程ニ」夜がだんだんと更けてゆき、「乳母子ノ女房モマドロミヌ」とされ(傍線部㉔)、静まった船のなか小宰相はひとり船端に立ち、「別ニシ三位通盛ト、一佛浄土ノ蓮葉ニ導給ヘ」と祈って入水する(傍線部㉕)。そして小宰相の入水の直後に、「三位ハ此女房ノ十五ト申ケルヨリ見初給テ、今年ハ十九ニ成給フ。束ノ間モ難離思ハレケレ共、大臣殿ノ御智ニテ御座ケレバ、其方様ノ人ニハ知セジトテ、官兵共ノ舟ニ奉宿置テ、時々見参セラレケリ」と続いている(傍線部㉖)。延慶本『平家物語』などにも同様の語句はあるが、それは入水の直後ではなく、入水した小宰相を引き上げる↓息絶えた小宰相を通盛の鎧に包んで海に沈める↓乳母子の女房も海に飛び込むが止められる↓乳母子の女房が出家すると続き、最後に「三位、此ノ女房ノ十四ノ歳ヨリ見ソメ給ヒテ、今年ハ十九ニゾナラケル。片時モハナレ給ハジトハ思ヒ給ヒケレドモ、大臣殿ノ御智ニテオハシケレバ、其ノ方ザマノ人々ニハ知ラセジトテ、軍兵ノ乗リタル船ニヤドシオキ給ヒテ、時々見参セラレケリ」(延慶

本『平家物語』第五本「通盛北方ニ合初ル事付同北方ノ身投給事」とされる。すなわち延慶本『平家物語』などでは経緯がすべて描かれた後に置かれているが、『源平盛衰記』では、小宰相が通盛との再会を祈って入水した直後に、「束ノ間モ難離」という思い、そして「官兵共ノ舟ニ奉宿置テ、時々見参セラレケリ」というかつての様子が続くのである。先述のとおり、『源平盛衰記』では、別の船に宿し置かれた小宰相のもとに足を運び続ける通盛の姿に「中々情ゾ深カリケル」と、あわれな小宰相の姿よりもむしろ二人の情愛の深さが描き出されていた。「別ニシ三位通盛ト、一佛浄土ノ蓮葉ニ導給へ」と祈って入水する小宰相の姿とともにその様子がふたたび描き出されることで、どこまでも「カレハクニ」なることのない二人の有様がより鮮明に浮かび上がるのである。

乳母子ノ女房ヲメキ叫テ近クヨリ、手ヲ取組テ、「イカニ角心ウキ目ヲバ見セ給フゾヤ。

多人ノ中ニ相具セント候シカバ、老タル親ニモ別レ、小キ子ヲモ振捨テ、是マデ付進テ下タル志ヲモ思召忘サセ給、我身一人ヲ殘置、カク成給ヌル事ノ口惜サヨ。水ノ底ヘモ引具シテコソ入給ハメ。片時離レ奉ラントモ思ハザリツル者ヲヤ。長世ノ恨イカニセヨトテ。③①責テハ今一度モノ被仰テ聞サセ給へ。③②サシモ終夜此事ヲコソ申侍シニ、マドロムヲ待給ケル悲サヨ」トテ、手ニ手ヲ取、顔ニ顔ヲ並テ、口説ケレドモ、③③一言ノ返事モシ給ハズ。

〔『源平盛衰記』卷第三十八「小宰相局慎夫人」〕

入水した小宰相は海から引き上げられ、乳母子の女房は「責テハ今一度モノ被仰テ聞サセ給へ」と語りかける（傍線部③①）が、小宰相は「一言ノ返事モシ給ハズ」とされる（傍線部③③）。この場面は『平家物語』諸本に共通して見られるものであるが、先述のとおり、『源平盛衰記』では、乳母子の女房に応答しない小宰相の姿がここに至るまで繰り返し描き出されてきた。そして乳母子の女房の最後の言葉にも、小宰相が返事をするのではない。このとき乳母子の女房は「サシモ終夜此事ヲコソ申侍シニ」と、自身の言葉が小宰相に届かなかったことを嘆いている（傍線部③②）。『源平盛衰記』において、小宰相は乳母子の女房に言葉を返さず、乳母子の女房の言葉は小宰相に届かない。一方で、小宰相は通盛の言葉を反芻し、通盛自身の言葉のなかに通盛の討死を信じる理由を見出し、ほかのだれでもなく通盛の言葉をその根拠とする。そして小宰相が送った歌にたがわず二度と「カレハクニ」なることのない通盛に、どこまでも後れまいと入水するのである。

七、おわりに

海から引き上げられたものの、小宰相は息絶え、その遺骸は海に沈められる。このとき遺骸が浮き上がらないように用いられたのが、通盛の着背長であった。通盛の着背長に包まれて海に沈んでゆく小宰相に、「通盛の腕に抱かれて永遠の眠りにつ」く姿が読み取られる（11）が、それはどこまでも「カレハクニ」なることのない二人の姿であり、また、通盛の重みによって海に沈んでゆく小宰相の姿であると言えよう。一方、乳母子の女房も後れまいと海に飛び込むが、人々に留められ、小宰相とともに沈んでゆくことはかなわない。この場面は『平家物語』諸本に

共通して見られるものであるが、『源平盛衰記』においては、互いの言葉が通い合う通盛と小宰相と、通い合うことなくひとり残される乳母子の女房の姿が対比され浮かび上がる。

入水を引き留めようとする乳母子の女房に対して小宰相が言葉を返さないのは『源平盛衰記』のみであり、直接話法や心中思惟の多い(12)『源平盛衰記』において乳母子の女房との問答が続いてゆかない点に、『源平盛衰記』が小宰相の入水をどのように描き出しているかを捉えるべきである。また、『源平盛衰記』では、通盛を慕い入水へと向かう小宰相を、乳母子の女房は同じ思いで引き戻そうとする。しかし、そのような乳母子の女房の言葉に小宰相は応じない。人物間のやりとりにおけるこのような齟齬は、義仲と巴、直実と敦盛の間にも見られ(13)、その不調和から新たな物語が生まれてゆく点に、『源平盛衰記』の物語としての特質の一端が捉えられるのである。

第二部では、『源平盛衰記』の物語叙述の方法と物語としての特質を考察してきた。第一章は『源平盛衰記』において他本とは異なる位置づけとなつてゐる清水寺炎上や殿下乗合といった出来事について、西光に着目して読み解いたものである。『源平盛衰記』では、「過分」であるのは清盛の方ではないかという西光の反問から、西光に対する批判は反転して清盛にも向けられるとともに、清水寺炎上や殿下乗合などの他本とは異なる位置づけにつながつてゆく。また、『愚管抄』や『玉葉』など史実に近い描写から、殿下乗合や治承三年政変の他本とは異なる展開が生まれており、史料の取り込みもまた『源平盛衰記』の物語叙述の方法の一つと言える。第二章は『源平盛衰記』における重複記事を分析したものである。叙述の繰り返しは単なる重複ではなく、独自の趣向が施されることによつて物語世界を増幅させている。資料の取り込みが『源平盛衰記』外側からの増補であるのに対して、叙述の繰り返しは『源平盛衰記』内側からの増補と言える。第三章は巴の物語の分析を通して『源平盛衰記』の物語としての特質の解明を試みたものである。故事説話や異説が外部から物語を相対化するのに対して、『源平盛衰記』において「木曾殿の乳母子」と名乗る巴は物語を内部から相対化するものとなつてゐる。第四章は敦盛最期譚の分析を通して『源平盛衰記』の物語としての特質のさらなる解明を目指したものである。『源平盛衰記』において直実とすれ違う敦盛は「父子の物語」を相対化し、兄・経正の物語は敦盛の物語そのものを相対化する。『源平盛衰記』は、『平家物語』諸本の「物語」の枠組みをはみ出し、それを相対化する新たな「物語」を生み出している。第五章は『源平盛衰記』における小宰相の入水を分析したものである。互いの言葉が通い合う通盛と小宰相に対し、乳母子の女房は通い合うことなくひとり残される。巴の物語や敦盛最期譚にも見られた人物間のやりとりにおける齟齬から『源平盛衰記』の新たな物語が生まれてゆく。

第二部では、本系の叙述(14)を対象として『源平盛衰記』の物語叙述の方法と物語としての特質を考察したが、本論第三部では、所謂傍系の叙述を活用することによつて『源平盛衰記』の教材としての可能性を考察する。

【注】

- (1) 本論第二部第三章「巴の物語」、本論第二部第四章「敦盛最期譚の可能性」。
- (2) 『源平闘諍録』では、小宰相の入水を描くものの、二人の馴れ初めについては語られていない。
- (3) 松尾葦江『平家物語論究』明治書院、一九八五・三。
- (4) 榊原千鶴「よみものとしての『源平盛衰記』」『平家物語 研究と批評』山下宏明編、有精堂、一九九六・六。
- (5) 『源平盛衰記』や延慶本『平家物語』などでは、「越前三位通盛ハ大臣殿ノ御聳ニテオハシケレ共、女房未小クマシクケレバ、近付給事ハナシ。小宰相局ト申女房ゾ相具シ給タリケル」(『源平盛衰記』卷第三十八「小宰相局慎夫人」)とされ、宗盛の眼を憚り、小宰相は通盛とは別の舟に宿し置かれる。
- (6) 郭順伊「小宰相身投」追考『広島女学院大学国語国文学誌』第三十五号、二〇〇五・十二など。
- (7) 『源平闘諍録』では、通盛が「明日の軍には討たれんと心細く覚ゆ」(『源平闘諍録』卷第八下「小宰相局、身を投げらるる事」)と語ったとされている。
- (8) なお、覚一本『平家物語』のように通盛自身が「うきよのわすれがたみに思ひおくばかり」と述べる部分は『源平闘諍録』では見られない。
- (9) なお、覚一本『平家物語』では、「いとけなき子をもふり捨て、老たるおやをもとらめおき、是までつきまぬらせてさぶらふ心ざしをば、いかばかりとかおぼしめされさぶらふらむ」(覚一本『平家物語』卷第九「小宰相身投」)と述べている。
- (10) 先述のとおり、『源平闘諍録』では、入水するという小宰相に乳母子の女房は「見にも思食し立ち候はば、千尋の底へも引き具してこそ入らせたまへ。永くは後れ奉らじ者を」と言うのみであるが、それに対して小宰相は「凡そ人の別れの悲しさ、世の恨めしさを思ふには、身を投げんと云ふ事、尋常の習ひぞかし」(『源平闘諍録』卷第八下「小宰相局、身を投げらるる事」)などと弁解する。それを聞いた乳母子の女房が「見もとや思ひけん、少し睡み入りけるに」(『源平闘諍録』卷第八下「小宰相局、身を投げらるる事」)、小宰相は入水している。
- (11) 梶原正昭『鑑賞日本の古典11 平家物語』尚学図書、一九八二・六。
- (12) 松尾葦江「源平盛衰記の方法―その饒舌さをめぐって―」(『東京女学館短期大学紀要』3、一九八一・二)において指摘されている。
- (13) 前掲注(1) 参照。
- (14) 本論第一部『源平盛衰記』研究史」参照。

第三部 『源平盛衰記』教材化論

第一章 「大場早馬」から「勾踐夫差」への展開

一、はじめに

『源平盛衰記』は、他の諸本にはない多くの故事説話を有し、四十八巻に及ぶ膨大な叙述の要因となっている。第三部では、『源平盛衰記』における故事説話を用いることによって、古文の授業から漢文の授業へとつなげてゆく古文・漢文複合教材の可能性を考察する。

高等学校学習指導要領（平成30年告示）の第2章第1節国語において、第2款各科目の第2言語文化の2内容（2）アには、「我が国の言語文化の特質や我が国の文化と外国の文化との関係について理解すること。」とあり、また、古典の教材として国語教科書に掲載されることの多い『平家物語』の異本の一つである『源平盛衰記』という一作品のなかで中国故事説話を捉えることによって、国語の授業において古文とともに漢文を学習する意義について学習者の理解を深めることにも役立つであろう。

二、大場早馬

『源平盛衰記』巻第十七「大場早馬」は、平清盛をはじめとする平氏一門に源頼朝挙兵の知らせが届く場面である。学習者の多くは、頼朝が助命され伊豆に流されていたことを日本史の学習によって把握しているとともに、源平合戦の幕開けとして頼朝挙兵を捉えており、「大場早馬」は正にその瞬間を描く場面として取り上げられよう。国語教科書に使用されることが多いのは覚一本『平家物語』であり、覚一本『平家物語』にもこの場面は見られるが、『源平盛衰記』において「大場早馬」の後に見られる「勾踐夫差」を用いて古文の授業から漢文の授業へとつなげてゆくため、覚一本『平家物語』ではなく『源平盛衰記』を使用する。

治承四年九月二日、相模國住人、大場三郎景親、東國ヨリ早馬ヲタツ。福原新都ニ著テ、上下ヒシメキケリ。「何事ゾ」ト聞バ、「伊豆國流人前右兵衛権佐源頼朝、一院ノ院宣、高倉宮令肯在ト称シ、同國目代平家ノ侍和泉判官平兼隆ガ八牧ノ館ニ押寄テ、兼隆家人等夜討ニシ、館ニ火懸テ焼拂フ。同廿日、北條四郎時政ガ一類ヲ引卒シ、相摸ノ土肥ヘ打越テ、土肥土屋置崎ヲ招キ、三百餘騎ノ兵ヲ相具シ、石橋ト云所ニ引籠。景親武藏相摸ニ平家ニ志アル輩ヲ催集テ、三千餘騎ニテ、同廿三日ニ石橋城ニ押寄。源氏禦戦トイヘ共、大勢ニ打落サレテ、兵衛佐杉山ニ逃籠テ、不知行方。同廿四日ニ相摸國由井小坪ニテ、平家ノ御方ニ武藏國住人畠山庄司重能ガ子息次郎重忠、五百餘騎ニテ、兵衛佐ノ方人相摸國住人三浦大介義明ガ子共、三百餘騎、責戦トイヘドモ、重忠三浦ニ戦負テ、武藏國ヘ引退。同廿六日ニ武藏國住人江戸太郎重長、河越小太郎重頼ヲ大将トシ、黨ニハ金子村山々口篠黨児玉横山野與黨綴喜等ヲ始トシ、二千餘騎、相摸ノ三浦城ヲ責。三浦ノ一族絹笠ノ城ニ籠テ、一日一夜戦テ、矢

種盡テ舩ニ乗、安房國へ渡畢ヌ。又國々ノ兵共内々ハ源氏ニ心ヲ通スト承ル。御用心アルベシ」トゾ申タル。平家ノ一門此事ヲ聞、「コハイカニ」ト騒アヘリ。若者ドモハ興アル事ニ思テ、「アハレ討手ニ向ラレヨカシ」ナド云ケルゾ哀ナル。畠山庄司重能、小山田別当有重兄弟二人ハ、折節平家奉公シテ候ケルガ、申ケルハ、「北條四郎時政ハ親ク成テ侍バ實ニ尻前ニモ立候ラン。其外ハ國々ノ兵共誰カ流人ノ方人シテ朝敵トナラント思侍ベキ。只今聞召直サセ給ベシ」トゾ申ケル。「實ニモ」ト云人モアリ、又「イサく大事ニ及ヌ」ト云人モアリ。是彼ニ寄合々々、「恐シく」ト私語ケリ。太政入道安カラズ被思テ宣ケルハ、「東國ノ奴原ト云ハ六條判官入道為義ガ一門、頼朝ニ不相離侍共ト云モ、皆彼ガ随ヘ仕シ家人也キ。昔ノ好争カ可忘。其二頼朝ヲ東國へ流シ遣シケルハ、ヤ八箇国ノ家人ニ頼朝ヲ守護シテ入道ガ一門ヲ亡セト云ニアリケリ。喩バ盜ニ鑰ヲ預ケ、千里ノ野ニ虎ヲ放タルガ如シ。イカゞスベキ、入道大ニ失錯シテケリ」トテ、座ニモタマラズ躍上々々シ給ケレ共、後悔今ハ叶ハズ。良案ジテ宣ケル。「但頼朝ハ入道ガ恩ヲバ争カ忘ルベキ。縦故池ノ尼公イカニ宥給フトテモ、入道ユルサゞランニハ、頸ヲバ継ベキヤ。其二重恩ヲ顧ズ、淨海ガ子孫ニ向ヒ弓ヲ引矢ヲ放シ事、佛神ヨモ御免アラジ。佛神免シ給ハズバ、天ノ責忽ニ蒙ルベシ。奇シノ鳥獸マデモ恩ヲバ報トコソ聞。其二還テ入道ガ一門ヲ亡サントノ企不思議也。我子孫七代マデハ争カ怨心ヲ挟ベキ」ト、シカリ音ニテクリカヘシく宣ヒケル。〔源平盛衰記〕卷第十七「大場早馬」

頼朝の拳兵は、「相模國住人、大場三郎景親、東國ヨリ早馬」という形で平氏に伝えられており、「上下ヒシメ」いて「何事ゾ」と聞く人々とともに、学習者が「廿日」、「廿三日」、「廿四日」、「廿六日」と日ごとに變化してゆく戦況を捉えることができる構成となっている。そして「平家ノ一門此事ヲ聞、「コハイカニ」ト騒アヘリ」と、福原新都にあつて東國の頼朝拳兵の知らせを聞き騒ぎ立つ平氏一門の様子を捉えることができる。さらに、「太政入道安カラズ被思テ宣ケルハ」に続く清盛の言動では、「頼朝ヲ東國へ流シ遣シ」たことに対する「入道大ニ失錯シテケリ」という後悔や「頼朝ハ入道ガ恩ヲバ争カ忘ルベキ。縦故池ノ尼公イカニ宥給フトテモ、入道ユルサゞランニハ、頸ヲバ継ベキヤ」という思いなどが語られており、先述のとおり、学習者の多くが日本史の学習によって把握している頼朝の助命、伊豆への配流と、その後の平氏滅亡につながる拳兵を、清盛の心情とともに捉えることができる。「大場早馬」は国語教科書に掲載されていない章段であるが、取り上げられている場面、構成、展開の面から見ても、古典の教材として有用なものの一つとなり得よう。

三、勾踐夫差

さて、頼朝拳兵の知らせを聞いた清盛の「頼朝ハ入道ガ恩ヲバ争カ忘ルベキ」「重恩ヲ顧ズ、淨海ガ子孫ニ向ヒ弓ヲ引矢ヲ放シ事、佛神ヨモ御免アラジ。佛神免シ給ハズバ、天ノ責忽ニ蒙ルベシ」という発言に対し、「時ノ才人ドモ」が「入道ノ氣色ニ入シ」として、「仰少モ違ベカラズ。朝憲ヲ嘲リ、王命ヲ背ク者、昔ヨリ今ニ至マデ素懷ヲ遂ル者ナシ」と述べ、その先例を示してゆく〔源平盛衰記〕卷第十七「謀叛不遂素懷」。それは頼朝の「謀叛」が「不遂素懷」であろうことを例証するものである。だが『源平盛衰記』では、さらにその後、「又内々私語ケルハ、恩ヲ忘レ

無勢ナルニハヨラズ、只天運ノシカラシムルニ依ベキ事也。其謂ハ」として、以下のように続いている。

昔唐ニ越王勾踐、吳王夫差トテ、二人ノ國王御座シケリ。互ニ中惡シテ共ニ傾ケントテ、會稽山ト云山ノ麓ニシテ度々戦ケル程ニ、①吳王ハ元ヨリ勢多威スグレタリケレバ、越國ノ軍敗レテ勾踐生捕レヌ。②今ハ力ナクシテ降ヲ請テ歎ケレバ、吳王憐ヲタレテ勾踐ガ命ヲ助ク。臣下諫テ云、「敵ヲ宥テ必後ニ悔アリ。忽ニ越王ノ命ヲ断シニハシカジ」と申ケレ共、勾踐ハ木ヲ樵水ヲ汲マデハナケレ共、二心ナク仕ケレバ、臣下ノ諫ヲモ聞ザリケリ。吳王病シケル時、醫師ヲ請テ、是ヲ見ス。醫師ノ云、「尿ヲ人ニ吞セテ、其味ヲ以テ命ノ存亡ヲ知シ」と申セドモ、宮中ノ男女共ニ、「吳王ノ尿ヲ吞シ」と云者ナシ。勾踐進出テ云、「吾君ノ為ニ命ヲ被助テ其恩尤深シ。尿ヲ吞テ報奉ラン」と申テ、即是ヲ吞。味タガハザリケレバ、吳王ノ病愈ニケリ。吳王後ニ越王ノ志ヲ悦テ本國ニ返シ遣ス。勾踐角仕ヘケル事ハ、再舊里ニ歸テ、吳王ヲ亡シテ本意ヲ遂ントノ計也。③勾踐赦サレテ本國ニ歸ケル。路ニ蛙ノ水ヨリ出テ躍ケレバ、馬ヨリ下テ是ヲ敬フ。奢レル者ヲ賞ズル心ナルベシ。其後數万ノ軍ヲ起シテ終ニ吳王夫差ヲ亡シケリ。④サテこそ會稽ノ耻ヲバ雪メケレ。其ヨリシテゾ、恥ミルヲバ會稽トモ申ケル。〔源平盛衰記〕卷第十七「始皇燕丹勾踐夫差」

『源平盛衰記』では、「恩ヲ忘レ無勢ナルニハヨラズ、只天運ノシカラシムルニ依ベキ事也」として會稽山ノ故事説話が續くのである。その内容は、越王の勾踐と吳王の夫差が戦をするなかで、勾踐が生け捕りとなるが、夫差が憐れみをたれて勾踐は死罪を免れ、捕虜となった勾踐は熱心に奉公し、赦されて本國に帰された後、大軍を率いて夫差を滅ぼしたというものである。頼朝拳兵の成否について、會稽山ノ故事説話を先例として、夫差に助命された勾踐が後に夫差を滅ぼしたように、清盛に助命された頼朝が勝利する可能性を示している。「大場早馬」とそこで描かれた頼朝拳兵の成否の先例としての「勾踐夫差」を取り上げるだけでも、学習者は古典の教材として国語教科書に掲載されることの多い『平家物語』の異本の一つである『源平盛衰記』という一作品のなかで漢文の授業へとつながる中国故事説話を捉えることができよう。さらに、『源平盛衰記』では、巻第二においても會稽山ノ故事説話が見られる。それを巻第十七の會稽山ノ故事説話と比較することによって、学習者は『源平盛衰記』という一作品のなかで同じ故事説話がどのように用いられているかを考えることができ、また、国語の授業において古文と漢文を学習する意義について理解を深めることができよう。

巻第二「會稽山」は、「額打論」とその報復としての「山僧燒清水寺」に続くものである。

新院御葬送ノ夜、延曆興福兩寺ノ大衆、額打論シテ狼藉ニ及ベリ。ソノ故ハ主上御葬送ノ作法ハ、諸寺諸山ノ僧徒等、悉ク供養シテ我寺々ノ額ヲ立次第ヲ守テ御供ヲ仕ル。南都ニハ一番ニハ東大寺ノ行ヲ立テ額ヲ打、二番ニハ興福寺ノ行ヲ立テ額ヲ打、其外末寺々打並ブ。北京ニハ一番ニ延曆寺ノ行ヲ立テ額ヲ打、山々寺々次第ヲ守テ立並ルハ先例也。爰ニ山門ノ衆徒今度ノ御葬送ニイカゞ思ケン、東大寺ノ行ノ次ニ延曆寺ノ額ヲ打タリケレバ、興福寺ノ

大衆ノ中ニ東門院ノ觀音房、勢至房ト云フ惡僧アリ、三枚皮威ノ大荒目ノ鎧、草摺長ニサ、メカシ、三尺五寸ノ太刀前低ニハキ、興福寺ノ額ヲ大長刀ニ取具シテ、高ク指上テ延曆寺ノ額ノ上ニ、我寺ノ額ヲ立副テ、皆紅ノ月出タル扇披仕、山門ノ衆徒ニ向テ申ケルハ、「先規ニ任テ額ヲサゲラレテ、衆徒安堵セラレヨヤ」ト、高聲ニ申ケレ共、山門ノ衆徒良久申旨ナシ。觀音房、勢至房、長刀ニテ延曆寺ノ額ヲ二刀切テ、「衆徒ノ所存其心ヲエズ。我ト思ハン大衆ハ、落合ヤ〜」ト訕テ、馳廻ケレ共、落合者ナシ。二人ノ者共ハ、「ウレシヤ水鳴ハ灌水」ト歌テ、オレコダレ〜、一時計舞タリケル。延曆寺ノ大衆先例ヲ背キ狼藉ヲ出ス程ナラバ、其庭ニシテ手向ヘスベキニ、臆病ノ至リ歟、所存ノアルカ、一言ヲモイハザリケリ。一天ノ君、萬乘ノ主、世ヲ早セサセ給メレバ、心ナキ草木マデモ猶愁ノ色有ベシ、況人倫僧徒ノ法ニ於テヤ。而ヲカ、ル淺猿キ事シ出シテ、式作法散々ト有ケレバ、高モ卑モヲメキ呼ビ東西ニ迷ケルコソ不便ナレ。

〔源平盛衰記〕卷第二「額打論」

同八月九日、山門ノ大衆下洛スト云披露アリ。巷説一二非ズ、或ハ清水寺ヘ押寄テ可焼拂トモ云、或ハ上皇大衆ニ仰テ、事ヲ南都ノ會憤ニヨセテ平相國清盛ヲ可被誅由聞エケリ。兵庫頭頼政、大夫尉信兼、左衛門尉源重貞、同尉為經、康綱等ヲ切堤ヘ差遣テ、被守護。内蔵頭教盛朝臣ハ、立烏帽子ニ冑ヲ著ス。若狹守經盛朝臣ハ、折烏帽子ニ冑ヲ著ス。大夫尉貞能已下、甲冑ヲ著シテ、皇居ノ四面ヲ守護ス。陣ノ口ニハ、雜役ノ車ヲ以逆茂木ニ引、隨兵東西ニ馳迷テ、偏ニ迷惑ノ躰也。檢非違使李光ヲ切堤ヘ遣テ形勢ヲ見セラリ。帰參シテ申ケルハ、「衆徒數百人、山路ヨリ菩提樹院ヲ透テ靈山ニ群集ス。山路ニ於テハ相防ニ無力由ヲ申入ケル。清盛ノ事ト聞エケレバ、右兵衛督重盛卿、修理大夫頼盛朝臣、左馬頭宗盛朝臣已下、一族ノ人々六波羅ニ馳集ル。衆徒ヲ防グ心ナクシテ、堅ク城内ヲ守ル。去程ニ大衆ノ下向ハ、平家ノ事ニハ非ズ、去七日ノ額立論ニ會稽ノ耻ヲ雪ンガ為ニ、興福寺ノ末寺ナレバ、清水寺ヲ焼拂ハントテ下ルト云ケレバ、清水法師老少ヲイハズ騷アヘリ。俄事ニテハアリ、物具ノ有モ無モイハズ、二手二分テ相待ケリ。一手ハ清水清閑兩寺ノ境ヒ堀切テ、逆木引テ、瀧ノ尾ノ不動堂ヨリ木戸口マデ、五百餘騎ニテ固メタリ。一手ハ山井ノ谷ノ懸橋引落シテ、西ノ大門ニ垣楯カキ、食堂廻廊木戸口マデ、一千餘騎ニハ過ザリケリ。京童部ガ申ケルハ、「蟻螂舉手招毒蛇、蜘蛛張網襲飛鳥ト云喩ハ此事ニヤ、山門ノ大勢ニ敵對シテ危々」トゾ申ケル。山門ノ大衆追手搦手二手ニツクル。搦手ハ大關小關四宮川原モ打過テ、九集滅道ヤ清閑寺、歌ノ中山マデ責寄タリ。追手ハ西坂本、下松、新道越ヲ打過テ、清水坂、晴尾ノ觀音寺マデ責付タリ。清水法師モ思切、楯ノ面ニ進出テ、散々ニ戰ケレドモ、大勢雲霞ノ如クナリケル上ニ、時刻ヲ經ズ、ヤガテ坊舎ニ火ヲ懸タリ。折節西ノ風烈ク吹テ、黒煙東ニ覆ヒケレバ、寺僧今ハ防戰フニ無力、本尊ヲ負、坊舎ヲ捨テ、延年寺、赤築地ニノ閑道ヘゾ落行ケル。サテコソ山門ハ會稽ノ耻ヲバ雪ヌト思ケレ。

〔源平盛衰記〕卷第二「山僧燒清水寺」

「額打論」とその報復としての「山僧燒清水寺」を取り上げるだけでも、延曆寺・興福寺・東大寺・清水寺といった学習者に耳馴染みのある寺々や、後白河院や清盛の名前が登場してすでにその対立が示唆されるなどの点から古典の教材として有用なものの一つとなり得るが、古文の授業

から漢文の授業へとつなげてゆくために留意すべき点は、会稽山の故事説話への展開である。

山門の大衆が下向してきたのは、「去七日ノ額立論ニ會稽ノ耻ヲ雪ンガ為ニ、興福寺ノ末寺ナレバ、清水寺ヲ焼拂ハントテ下ル」とされ、対立する興福寺の末寺である清水寺は、山門の大衆によつて焼き払われてしまう。その後、「サテコソ山門ハ會稽ノ耻ヲバ雪ヌト思ケレ」として、会稽山の故事説話が続くのである。

会稽ノ耻ヲ雪トハ、異朝ニ稽ノ山ノ洞ト云所アリ、蚕山トモ名、會稽山トモ申也。吳越ノ境ニ在之トカ。两国境ヲ論ジテ、代々ニ軍絶ズ。此山ニハ桑多生ジテ、蚕繭ヲツクリ、絲ヲ出シ綿ヲ成故也。越國ノ允常王ト吳國ノ闔閭王ト此山ヲ論ジテ、合戦絶ザリケル程ニ、吳王軍ニ誅レテ、越王知之。越王ノ子ニ勾踐ト云王アリ。吳王ノ子ニ夫差ト云王アリ。互ニ親ノ敵也ケレバ、勾踐思ケルハ、夫差ガ父ヲバ我父誅之、サレバ我ヲバ敵ト思テ、定テウタント思フ心有ラントテ、軍ヲ起テ戦フ程ニ、①アヤマチテ勾踐被虜タリ。吳國ニ止誠ラレテ本國ニ帰事ヲエズ。②勾踐木ヲコリ草ヲカラヌ計ニ奉公シケレバ、死刑ヲ被宥召仕ハレケリ。夫差病スル事有キ、療術力ナキニ似タリ。醫師ノ云、「尿ヲ令飲、味ヲ以テ存否ヲシラン」ト云ケレ共、彼ヲ飲マント云臣妾ナシ。囚勾踐ガ云、「我無益ノ謀叛ヲ起シテ誤テ虜レヌ。其咎死刑ニアリト云ヘドモ、君ノ恵ニ依テ命ヲ助ラレタリ。洪恩生々ニ難報須恩ヲ謝セン」ト云テ飲之。夫差其志ノ深事ヲ感ジテ、本國ニ返遣シツ。勾踐後ニ大軍ヲ起テ終ニ吳王ヲ亡シケリ。④會稽山ヲ論ジテ軍ニ負尿ヲ飲ハ耻也、本國ニ還テ敵ヲ誅テ彼山ヲ知ハ耻ヲ雪ル也。故ニ會稽ノ耻ヲ雪トイヘリ。去七日ハ山門額ヲ切レテ恥ニ及、今九日ニハ清水煙ト昇テ面ヲ洗グ。實ニ耻ヲ雪ト云ベキニヤ。〔源平盛衰記〕卷第二〔會稽山〕

卷第二では、「去七日ノ額立論ニ會稽ノ耻ヲ雪ンガ為」として清水寺が焼き払われ、山門はそれを「會稽ノ耻ヲバ雪ヌ」と思ったとされており、その「會稽ノ耻ヲバ雪ヌ」の由来として会稽山の故事説話が示されている。卷第二と卷第十七の会稽山の故事説話に共通する内容を整理すると、以下のようなになる(1)。

- A 勾踐と夫差が戦う中、勾踐が生け捕られる。
- B 捕虜となった勾踐は熱心に奉公する。
- C 勾踐は死罪を免れる。
- D 夫差が病となる。
- E 医師は夫差の尿を飲めばわかるとするが、申し出る臣下はいない。
- F 勾踐は命を助けられた恩に報じるとして、夫差の尿を飲む。
- G 勾踐は赦され、本國に帰される。
- H 勾踐が大軍を率いて、夫差を滅ぼす。

この内容について、卷第二と卷第十七を比較すると、まず、Aの勾踐が生け捕られた理由について、卷第二では「アヤマチテ勾踐被虜タリ」とする(傍線部①)一方、卷第十七では「吳王ハ元

ヨリ勢多威スグレタリケレバ、越國ノ軍敗レテ勾踐生捕レヌ」としている(傍線部①)。すなわち卷第十七では、その理由に軍勢の差が挙げられているのである。これは卷第十七「勾踐夫差」の冒頭に呼応したものである。先述のとおり、「勾踐夫差」の冒頭は、「又内々私語ケルハ、恩ヲ忘レ無勢ナルニハヨラズ、只天運ノシカラシムルニ依ベキ事也。其謂ハ」とされている。卷第十七では、勾踐が生け捕られた理由を「呉王ハ元ヨリ勢多威スグレタリケレバ」、すなわち夫差が「勢多」いためとしながら、「無勢」であり、夫差に助命された「恩ヲ忘レ」た勾踐が後に夫差を滅ぼしたように、清盛に助命された「恩ヲ忘レ」、いま「無勢」ながら挙兵した頼朝が後に平氏一門を滅ぼすであろうという先例として会稽山の故事説話が示されるため、それに呼応する形で勾踐が生け捕られた理由に軍勢の差が挙げられていると言えよう。このように『源平盛衰記』において卷第二と卷第十七に重複して見られる故事説話を比較しながらそれぞれが引かれている。「山僧焼清水寺」と「大場早馬」との対応を考えることによって、学習者は中国故事説話がどのように取り入れられ、用いられているかを捉えることができよう。

同様に卷第二と卷第十七の会稽山の故事説話の内容を比較すると、勾踐が夫差に助命される展開について、卷第二ではB↓Cとする一方、卷第十七ではC↓Bとしている。卷第二では、「勾踐木ヲコリ草ヲカラヌ計ニ奉公シケレバ、死刑ヲ被宥召仕ハレケリ」として(傍線部②)、勾踐が熱心に奉公したため命を助けられたとされているが、卷第十七では、「今ハ力ナクシテ降ヲ請テ歎ケレバ、呉王憐ヲタレテ勾踐ガ命ヲ助ク。臣下諫テ云、「敵ヲ宥テ必後ニ悔アリ。忽ニ越王ノ命ヲ断ンニハシカジ」ト申ケレ共、勾踐ハ木ヲ樵水ヲ汲マデハナケレ共、一心ナク仕ヘケレバ、臣下ノ諫ヲモ聞ザリケリ」として(傍線部②)、夫差が憐れみをたれて命を助け、臣下はそれを諫めたが、勾踐が熱心に奉公したため夫差は臣下の諫めを聞き入れなかったとされている。卷第十七においては、勾踐を助命した夫差を諫め、「敵ヲ宥テ必後ニ悔アリ」と語る臣下は、卷第二には見られないものである。この発言は、「大場早馬」において頼朝挙兵の知らせを聞いた清盛の描写に呼応したものである。このとき清盛は、「座ニモタマラズ躍上々々シ給ケレ共、後悔今ハ叶ハズ」とされている。すなわち頼朝の助命を後悔する清盛に対する「後悔今ハ叶ハズ」に呼応する形で、卷第十七の会稽山の故事説話においては「敵ヲ宥テ必後ニ悔アリ」と語られていると言えよう。また、先述のとおり、清盛は「頼朝ハ入道ガ恩ヲバ争力忘ルベキ。縦故池ノ尼公イカニ宥給フトテモ、入道ユルサダランニハ、頸ヲバ継ベキヤ」と、「恩」を「忘ル」ことに言及している。「勾踐夫差」の冒頭の「恩ヲ忘レ無勢ナル」は第一に頼朝を指すのであり、その先例として勾踐が示されているのである。なお、卷第十七では、「勾踐夫差」に続く「光武天武即位」においても、光武皇帝が落ち延びたときには二十八騎ながら、後に世を取って天下を治めたこと、天武天皇が落ち延びたときには十七騎ながら、後に即位したことが描かれるほか、「毒蟲ノ種子ヲバ忽ニ失フベキニテ有ケルヲ」とされており、軍勢の数にはよらないことや敵を赦すべきでないことの先例が示されている。

つぎに、Gに関連して、卷第十七の会稽山の故事説話では、赦された勾踐がその帰途に蛙を敬う逸話が見られる(傍線部③)。これは卷第二の会稽山の故事説話には見られないものであるが、『韓非子』に類似の内容があり、呉を討つために命を投げ出して奮闘してくれる人民を求めた勾踐が、氣力のある蝦蟇を見て敬礼することによって、勇氣ある人々を得たとされている(2)。「無

勢」であった勾踐が兵を集め、「數萬ノ軍ヲ起シテ終ニ吳王夫差ヲ亡シ」たことが頼朝に通じるため、巻第十七においてはこの逸話が見られるのではないか。

そして、Hの後、それぞれの記事の末尾について、巻第二では「會稽山ヲ論ジテ、軍ニ負尿ヲ飲ハ耻也。本國ニ還テ敵ヲ誅テ、彼山ヲ知ハ耻ヲ雪ル也。故ニ會稽ノ耻ヲ雪ムトイヘリ。去七日ハ山門額ヲ切レテ耻ニ及、今九日ニハ清水煙ト昇テ面ヲ洗グ。實ニ耻ヲ雪ト云ヘキニヤ」とされ（傍線部④）、巻第十七では「サテコソ會稽ノ耻ヲバ雪メケレ。其ヨリシテゾ、耻ヲミルヲバ會稽トモ申ケル」とされている（傍線部④）。先述のとおり、巻第十七の會稽山の記事は、戦に勝つて敵を滅ぼすことが恩や軍勢によるのではないという先例を示し、頼朝の挙兵の成否を示唆するものとなっている。一方、巻第二の記事は、「額打論」とその報復としての「山僧焼清水寺」に続くため、「會稽山ヲ論ジテ軍ニ負尿ヲ飲」と「額ヲ切レ」、「敵ヲ誅テ彼山ヲ知」と「清水煙ト昇」と、「額打論」「山僧焼清水寺」の内容と照らし合わせて結んでいる（3）。

『源平盛衰記』において、會稽山の記事説話は二度掲載されるが、それは単なる重出ではなく、巻第二では「額打論」とその報復としての「山僧焼清水寺」に描かれる清水寺焼き討ちに、第十七では「大場早馬」に描かれる頼朝の挙兵に対応した叙述となっており、それをを用いることによって、学習者は中国故事説話がどのように取り入れられているかを捉えることができる。さらに、この會稽山の記事説話は、国語教科書に漢文の教材として掲載されている「臥薪嘗胆」と密接な関連があり、漢文の授業へとつなげてゆくことができるのである。

四、臥薪嘗胆

国語教科書のなかには、漢文の教材として「臥薪嘗胆」が取り上げられているものがある。たとえば、『国語総合 古典編』東京書籍、平成二十八年三月十日検定済（国総335）では、「臥薪嘗胆」として、前書きに「春秋時代（前七七〇―前四〇三）の末、長江の下流地域にあった吳と越は三十年以上も攻防を繰り返した。前五〇五年、越王允常が吳を攻めたのがその発端であった。允常が前四九六年に亡くなると、今度は吳王闔廬が越を攻めることになる。」とあり、以下の本文が掲載されている。本文は、教科書では漢文訓読文であるが、本章では書き下し文にして表記する。

闔廬伍員を挙げて、国事を謀らしむ。員、字は子胥、楚人伍奢の子なり。奢誅せられて吳に奔る。吳の兵を以て郢に入る。

吳越を伐つ。闔廬傷つきて死す。子の夫差立つ。子胥復た之に事ふ。夫差讎を復せんと志す。朝夕薪中に臥し、出入すること人に人をして呼ばしめて曰はく、「夫差、而越人の而の父を殺ししを忘れたるか。」と。

周の敬王の二十六年、夫差越を夫椒に敗る。越王句踐、余兵を以て會稽山に棲み、臣と為り、妻は妾と為らんと請ふ。子胥言ふ、「不可なり。」と。太宰の伯嚭越の賂ひを受け、夫差に説きて越を赦さしむ。

句踐国に反り、胆を坐臥に懸け、即ち胆を仰ぎ之を嘗めて曰はく、「女會稽の恥を忘れたるか。」と。国政を挙げて大夫の種に属し、而して范蠡と兵を治め、吳を謀るを事とす。

太宰の齋子胥の謀の用ゐられざるを恥ぢて怨望すと譖す。夫差乃ち子胥に属鏤の劍を賜ふ。子胥其の家人に告げて曰はく、「必ず吾が墓に櫛を樹ゑよ。櫛は材とすべきなり。吾が目を抉りて、東門に懸けよ。以つて越兵の呉を滅ぼすを觀ん。」と。乃ち自剄す。

夫差其の尸を取り、盛るに鴟夷を以つてし、之を江に投ず。呉人之を憐れみ、祠を江上に立て、命づけて胥山と曰ふ。

越は十年生聚し、十年教訓す。周の元王の四年、越呉を伐つ。呉三たび北ぐ。夫差姑蘇に上り、亦成を越に請ふ。范蠡可かず。夫差曰はく、「吾以つて子胥を見る無し。」と。頓冒を為りて乃ち死す。
『十八史略』

夫差の父である呉王の「闔廬」は、『源平盛衰記』巻第二の会稽山の故事説話に「闔閭」として登場した人物であり、夫差は父の仇討ちのため「臥薪」したとされている。そして夫差は越を破り、句踐(勾踐)は会稽山で「臣と為り、妻は妾と為らん」と助命を請う。このとき夫差に仕えていた子胥が「不可なり。」と述べる姿が描かれているが、これは『源平盛衰記』巻第十七の会稽山の故事説話において、「敵ヲ宥テ必後二悔アリ」と諫める臣下に通じるものである。

句踐は国に帰り、「嘗胆」して、「会稽の恥」という故事成語の由来となる「女会稽の恥を忘れたるか。」という言葉を自らに語りかけたとされている。なお、本文引用に用いた『国語総合 古典編』東京書籍、平成二十八年三月十日検定済(国総335)では、「語句と表現」として、「次の故事成語は、どのように使われるか。」という問いがあり、「臥薪嘗胆」「会稽の恥」「先ず隗より始めよ」「鷄鳴狗盗」という故事成語が出題されている。

「会稽の恥」から二十年を準備に費やした後、ついに越は呉を攻める。夫差は以前の句踐と同様に講和を越に請うが、参謀である范蠡の進言によって句踐は講和を受け入れず、夫差は自害したとされている。

古文の授業のなかで『源平盛衰記』巻第十七「大場早馬」から「勾踐夫差」、巻第二「額打論」「山僧焼清水寺」から「會稽山」を先に学習している場合には、その中国故事説話を漢文の授業のなかで捉え、置き字や句法、書き下し、現代語訳などの学習につなげるとともに、『源平盛衰記』に取り入れられた会稽山の故事説話との比較、「勾踐夫差」や「會稽山」には見られない夫差の「臥薪」と句踐の「嘗胆」の描写から「臥薪嘗胆」をはじめとした故事成語の学習にもつなげてゆくことができる。また、漢文の授業のなかで「臥薪嘗胆」を先に学習している場合には、その中国故事説話が『源平盛衰記』にどのように取り入れられ、「勾踐夫差」や「會稽山」においてそれぞれどのように用いられているかを古文の授業のなかで学習するとともに、「臥薪嘗胆」には見られないさらに具体的な「会稽の恥」、すなわち捕虜となった勾踐が赦され帰国するまでの間、夫差に熱心に奉公する姿がどのように描かれているかを捉えることができよう。

五、始皇燕丹

『源平盛衰記』巻第十七「大場早馬」から「勾踐夫差」へ、そして国語教科書に漢文の教材として掲載されている「臥薪嘗胆」へと展開し、古文の授業から漢文の授業へとつなげてゆく古文・漢文複合教材の可能性を考察してきたが、さらにほかの漢文の教材にも発展させてゆくことが

きる。先述のとおり、『源平盛衰記』巻第十七「大場早馬」において、頼朝拳兵の知らせを聞いた清盛の「頼朝ハ入道ガ恩ヲバ争カ忘ルベキ」「重恩ヲ顧ズ、浄海ガ子孫ニ向ヒ弓ヲ引矢ヲ放シ、佛神ヨモ御免アラジ。佛神免シ給ハズバ、天ノ責忽ニ蒙ルベシ」という発言に対し、「時ノ才人ドモ」が「入道ノ氣色ニ入シ」として、「仰少モ違ベカラズ。朝憲ヲ嘲リ、王命ヲ背ク者、昔ヨリ今ニ至マデ素懷ヲ遂ル者ナシ」と述べ、その先例を示してゆく、『源平盛衰記』巻第十七「謀叛不遂素懷」。それは頼朝の「謀叛」が「不遂素懷」であろうことを例証するものである。その一つとして、以下のような故事説話がが続いている。

恩ヲ忘テ仇ヲ存ル者、我朝ニモ不限ズ亡ベリ。唐國ニ燕太子丹ト云人、秦始皇ヲ傾ントテ軍ヲ起タリケルガ、燕丹ハ軍ニ負、始皇帝ニ捕ハレテ、深ク誠ヲカレ六箇年ヲ經ニケリ。燕丹ハ我身ノ事ハイカミセン、故郷ニ老タル親ノアリケルヲ今一度イカミシテ見奉ラントゾ悲ミケル。丹始皇ニ歎申ケルハ、「今ハ本國ニ免シ遣シ給へ。六箇年ヲ過テ禁獄例ナシ、又本國ニ老タル父母アリ、イカバカリカハ歎悲給ラン。今一度見エ奉ラバヤ」ト云ケレバ、(中略)燕丹ハノガレ難キ罪科ヲノガレ本國ニ被還テ、再父母ヲ見ケレバ、深ク始皇ノ恩ヲ報ゼントコソ思ベキニ、其情ヲ忘テ秦國ヲ亡サント巧ム心切ニシテ、荊軻大臣召テ被仰含ケレバ、(中略)「燕丹昔ノ恩ヲ忘テ、還テ始皇ヲ傾ント計シカバ、己ガ身空ク亡ヌ。サレバ頼朝モ平家ニ命ヲ被助シ者ニアラズヤ。縦報謝ノ心コソナカラメ、争カ平家ヲ背奉ベキ。イカニ謀叛ヲ起トモ佛天豈ユルシ給ベシヤ。其上指當テ誰カハ流人ニ同意スベキ。無勢ニシテハ又素懷遂ガタシ。強ニ驚思召ベカラズ」ナンド色代申ケレバ、入道モ「左コソ存ズレ」トゾ宣ケル。

〔『源平盛衰記』巻第十七「始皇燕丹勾踐夫差」〕

本文引用に用いた『源平盛衰記慶長古活字版 第三冊』(勉誠社、一九七八・五)で二十一ページに及ぶ長大なものであるため、本章では中略して示したが、「朝憲ヲ嘲リ、王命ヲ背ク者、昔ヨリ今ニ至マデ素懷ヲ遂ル者ナシ」という本朝の先例に続いて、「恩ヲ忘テ仇ヲ存ル者、我朝ニモ不限ズ亡ベリ」として、始皇に敗れて捕虜となった燕丹が、帰国した後、「深ク始皇ノ恩ヲ報ゼントコソ思ベキニ、其情ヲ忘テ秦國ヲ亡サント巧ム心切ニシテ」、荊軻を刺客として遣わすが、荊軻は討たれ、その後、燕丹も始皇によって攻められ、討たれたとされている。そして、「燕丹昔ノ恩ヲ忘テ、還テ始皇ヲ傾ント計シカバ、己ガ身空ク亡ヌ。サレバ頼朝モ平家ニ命ヲ被助シ者ニアラズヤ。縦報謝ノ心コソナカラメ、争カ平家ヲ背奉ベキ。イカニ謀叛ヲ起トモ佛天豈ユルシ給ベシヤ。其上指當テ誰カハ流人ニ同意スベキ。無勢ニシテハ又素懷遂ガタシ。強ニ驚思召ベカラズ」と述べ、昔の恩を忘れて始皇を滅ぼそうとした燕丹が己を滅ぼしたように、清盛に助命された頼朝の謀叛も成功しないであろうと「色代」するのである。覚一本『平家物語』などにも同様の故事説話が見られ、人々が色代しているが、先述のとおり、『源平盛衰記』では、さらにこの後、「又内々私語ケルハ、恩ヲ忘レ無勢ナルニハヨラズ、只天運ノシカラシムルニ依ベキ事也。其謂ハ」として、「勾踐夫差」が続いている。すなわち『源平盛衰記』では、頼朝拳兵が成功しないであろうという先例として本朝の「謀叛不遂素懷」ものや「始皇燕丹」が示される一方、成功するであろうという先例として「勾踐夫差」もまた示されているのである。また、『源平盛衰記』では、色

代する言葉のなかに「燕丹昔ノ恩ヲ忘テ」のほか、「指當テ誰カハ流人ニ同意スベキ。無勢ニシテハ又素懷遂ガタシ」とあり、「勾踐夫差」の冒頭の「恩ヲ忘レ無勢ナルニハヨラズ」は、これを受けた形となっている。

六、荊軻伝

さて、この故事説話は、国語教科書に漢文の教材として掲載されている「荊軻伝」と密接な関連があり、漢文の授業へとつなげてゆくことができる。すなわち『源平盛衰記』では、巻第十七「大場早馬」から「臥薪嘗胆」へと展開するだけでなく、さらに「荊軻伝」へと展開することもできるのである。たとえば、『精選古典B 漢文編』東京書籍、平成二十九年二月二十八日検定済（古B332）では、「荊軻伝」は「風蕭蕭兮易水寒」と「凶窮而匕首見」の二つに分けられており、まず、「風蕭蕭兮易水寒」として、前書きに「戦国の七雄」が、秦により統一されようとする中、燕の太子丹は、かつて人質となって冷遇された秦に一矢報いるため、秦王の暗殺を田光に相談する。田光は自らの老齢を理由に荊軻を推薦、太子丹が他言無用と言ったことに対し、死をもって証を立てる。田光の知遇に感じた荊軻は、太子丹の要請を受け入れ、燕に亡命していた秦の將軍樊於期に、殺された一族の仇は自分が討つと誓いを立てる。荊軻を信じ自刎した樊於期の首と秦に献上する燕の穀倉地帯の地図を持って荊軻は秦へと旅立つ。」とあり、以下の本文が掲載されている。本文は、教科書では漢文訓読文であるが、本章では書き下し文にして表記する。

是に於いて太子予め天下の利匕首を求め、趙人徐夫人の匕首を得、之を百金に取る。工を以て薬を以つて之を焠がしめて、以つて人に試みるに、血濡縷して、人立ちどころに死せざる者無し。乃ち装して、為に荊卿に遣る。

燕国に勇士秦舞陽有り、年十三にして人を殺し、人敢へて忤視せず。乃ち秦舞陽をして副と為さしむ。荊軻待つ所有り、与に俱にせんと欲す。其の人遠きに居り未だ来たらず。而るに行を治むるを為す。之を頃くするも、未だ発せず。太子之を遅しとし、其の改悔を疑ふ。乃ち復た請ひて曰はく、「日已に尽く。荊卿豈に意有りや。丹請ふ先に秦舞陽を遣はすを得ん。」と。荊軻怒り、太子を叱して曰はく、「何ぞ太子の遣はずや。往きて返らざる者は、豎子なり。且つ一匕首を提げて、不測の疆秦に入るに、僕の留まる所以の者は、吾が客を待ちて与に俱にせんとすればなり。今太子之を遅しとす。請ふ辞決せん。」と。遂に発す。

太子及び賓客の其の事を知る者、皆白衣冠して以つて之を送る。易水の上に至り、既に祖して道を取る。高漸離筑を撃ち、荊軻和して歌ひ、変徴の声を為す。士皆涙を垂れて涕泣す。又前みて歌を為りて曰はく、

風蕭蕭として易水寒し

壮士一たび去りて復た還らずと

復た羽声を為して愴慨す。士皆目を瞑らし、髪尽く上がりて冠を指す。是に於いて荊軻車に就きて去る。終に已に顧みず。

〔史記〕「刺客列伝」

「風蕭蕭兮易水寒」では、刺客として旅立った荊軻が、友人である高漸離が演奏する筑の音に

合わせて別れの歌を歌う姿が描かれている。高漸離の筑に合わせて荊軻が歌った「風蕭蕭として易水寒し 壯士一たび去りて復た還らず」という歌は、『源平盛衰記』巻第十七「始皇燕丹」にも見られるものである。

つぎに、「凶窮而匕首見」として、前書きに「秦に到着した荊軻は、秦王の寵臣に賄賂を贈り、燕が秦の臣下となるため、樊於期の首と穀倉地帯の地図を献上したいと申し出る。秦王は大いに喜び、最高の礼で荊軻を迎える。」とあり、以下の本文が掲載されている。本文は、教科書では漢文訓読文であるが、本章では書き下し文にして表記する。

荊軻樊於期の頭函を奉じ、秦舞陽地図の匣を奉じ、次を以つて進む。陛に至り、秦舞陽色変じ振恐す。群臣之を怪しむ。荊軻顧みて舞陽を笑ひ、前みて謝して曰はく、「北蕃蛮夷の鄙人、未だ嘗て天子に見えず。故に振懼す。願はくは大王少く之を仮借し、使ひを前に畢ふるを得しめよ。」と。秦王軻に謂ひて曰はく、「舞陽の持する所の地図を取れ。」と。軻既に函を取りて之を奏す。秦王函を発く。凶窮まりて匕首見る。因りて左手に秦王の袖を把りて、右手に匕首を持ち之を搯す。未だ身に至らず。秦王驚き、自ら引きて起ち、袖絶ゆ。劍を抜くに、劍長く、其の室を操る。時に惶急し、劍堅し。故に立ちどころに抜くべからず。荊軻秦王を逐ふ。秦王柱を環りて走る。群臣皆愕く。卒かに起ること意はざれば、尽く其の度を失ふ。而して秦の法に、群臣の殿上に侍する者は、尺寸の兵を持するを得ず。諸郎中兵を執りて皆殿下に陳なり、詔召有るに非ざれば、上るを得ず。急なる時に方たり、下の兵を召すに及ばず。故を以つて荊軻乃ち秦王を逐ふ。而れども卒かに惶急して、以つて軻を撃つ無くして、手を以つて共に之を搏つ。是の時侍医夏無且、其の奉ずる所の藥囊を以つて荊軻に提つ。秦王方に柱を環りて走る。卒かに惶急して、為す所を知らず。左右乃ち曰はく、「王劍を負へ。」と。劍を負ひ、遂に抜きて以つて荊軻を撃ち、其の左股を断つ。荊軻廃す。乃ち其の匕首を引きて以つて秦王を擣つ。中たらずして、銅柱に中たる。秦王復た軻を撃つ。軻八創を被る。軻自ら事の就らざるを知り、柱に倚りて笑ひ、箕踞して以つて罵りて曰はく、「事の成らざる所以の者は、生きながら之を劫かし、必ず約契を得て、以つて太子に報せんと欲するを以つてなり。」と。是に於いて左右既に前みて軻を殺す。秦王怡ばざる者良久し。

〔史記〕「刺客列伝」

秦王（始皇）に会った荊軻は、燕丹から与えられた短刀で秦王を刺そうとするが届かず、秦王は逃げ、ついに荊軻は殺されてしまったとされている。秦王を暗殺しようとした燕丹の企みは成功しなかったのである。先述のとおり、『源平盛衰記』巻第十七では、これを先例の一つとして、恩を忘れて始皇を滅ぼそうとした燕丹が己を滅ぼしたように、清盛に助命された頼朝の謀叛も成功しないであろうと清盛に色代するのである。なお、『源平盛衰記』巻第十七「始皇燕丹」では、田光が「太子丹が他言無用と言ったことに対し、死をもって証を立てる」場面や、樊於期が「自刎し」てその首を荊軻に託す場面など、教科書において前書きで説明されていた内容がどのように描かれているかを捉えることができる。また、「始皇燕丹」では、高漸離の筑に合わせて荊軻が「風蕭蕭として易水寒し 壯士一たび去りて復た還らず」と歌う場面が末尾に置かれ、さらに

荆軻亡き後の高漸離の物語が続いている。国語教科書に漢文の教材として掲載されている「荆軻伝」には見られない箇所を捉えるとともに、巻第十七「勾踐夫差」や巻第二「會稽山」の場合と同様に、中国故事説話が『源平盛衰記』にどのように取り入れられ、用いられているかを古文の授業のなかで学習することができよう。

七、おわりに

『源平盛衰記』巻第十七「大場早馬」から「勾踐夫差」へ、巻第二「額打論」「山僧焼清水寺」から「會稽山」へ、そして国語教科書に漢文の教材として掲載されている「臥薪嘗胆」への展開、さらに、『源平盛衰記』巻第十七「大場早馬」から「始皇燕丹」へ、そして国語教科書に漢文の教材として掲載されている「荆軻伝」への展開と、古文の授業から漢文の授業へとつなげてゆく古文・漢文複合教材の可能性を考察してきた。古文の授業において『源平盛衰記』の該当章段を先に学習している場合には、その中国故事説話を漢文の授業のなかで捉え、置き字や句法、書き下し、現代語訳などの学習につなげることができ、漢文の授業において「臥薪嘗胆」や「荆軻伝」を先に学習している場合には、その中国故事説話が『源平盛衰記』にどのように取り入れられ、用いられているかを古文の授業のなかで学習することができよう。「臥薪嘗胆」と「荆軻伝」の難易度や分量を考慮した場合、まず、漢文の授業において「臥薪嘗胆」を扱い、つぎに、古文の授業において『源平盛衰記』の該当章段を扱って「勾踐夫差」や「會稽山」と「臥薪嘗胆」との関連を捉え、さらに「始皇燕丹」を学習した後に、漢文の授業において「荆軻伝」を扱うなど、古文の授業と漢文の授業を連動させて大きく展開する方法が有用であろう。ただし実践に際して、授業時間数などを考慮した場合、たとえば第一学年において漢文の授業で「臥薪嘗胆」および古文の授業で「大場早馬」から「勾踐夫差」を扱い、第二学年において古文の授業で「始皇燕丹」および漢文の授業で「荆軻伝」を扱うといった段階的な方法が考えられよう。また、本章では、古文・漢文複合教材の可能性として、『源平盛衰記』巻第十七「大場早馬」から展開し得るすべての範囲を提示したが、学習者の理解度や進度によって、部分的に切り出し組み合わせる展開することもできるものである。

高等学校学習指導要領（平成30年告示）の第2章第1節国語において、第2款各科目の第2言語文化の2内容（2）アには、「我が国の言語文化の特質や我が国の文化と外国の文化との関係について理解すること。」とあり、さらに、学習者自身が国語の授業において古文とともに漢文を学習する意義の理解を深めることに役立つものとして、古文・漢文複合教材の可能性が考えられよう。古典の教材として国語教科書に掲載されることの多い『平家物語』の異本の一つである『源平盛衰記』は、他の諸本にはない多くの故事説話を有しており、その特長を古文・漢文複合教材として用いることによって、古文の授業と漢文の授業を連動させた国語の授業を展開することができよう。

【注】

(1) 卷第二の会稽山の故事説話は、長門本『平家物語』にのみ内容の類似した記事が見られる。

一方、巻第十七の会稽山の故事説話は、延慶本『平家物語』や長門本『平家物語』にも、国語教科書に使用されることが多い覚一本『平家物語』にも見られないものである。巻第二「會稽山」の冒頭は、長門本『平家物語』の叙述と密接に関連していると考えられる。

恥をすゝかんといふは、異朝に稽山の洞といふ所あり。彼山得分あり。それと申は、十七の蚕あり。まゆ一もて糸千両をひく。されは一万七千両のいとなり。かるかゆへに、此山をは蚕山と名つけたり。会稽山とも云。彼山に二人の主あり。会台將軍、稽貞鬼風といふ。二人して一年つゝ此得分をとる。七月七日より合て、かつせんを遂く。

(長門本『平家物語』巻第一「清水寺炎上事」)

このような叙述は巻第十七の会稽山の故事説話には見られず、巻第二の記事と巻第十七の記事との大きな違いとなっている一方、長門本『平家物語』には類似の叙述が見出される。ただし、長門本『平家物語』では、蚕やまゆの値、合戦の日付といった具体的な数字が挙げられているほか、会稽山を争う人物の名前が「会台將軍」と「稽貞鬼風」であるのに対して、『源平盛衰記』では「允常」と「闔閭」とされている。これは『史記』に見られる名前で、『史記』巻四十一「越世家第十一」には越王の允常と呉王の闔閭が戦ったとされ、『新釈漢文大系第86巻 史記 六(世家中)』明治書院、一九七九・十)、その後、それぞれの子息、勾踐・夫差の戦いへと続いている。『源平盛衰記』における会稽山の故事説話は、この二人の戦いが骨格となっている。

(2) 『中国古典文学大系第五巻 韓非子 墨子』平凡社、一九六八・四。

(3) 長門本『平家物語』の記事の末尾は以下のとおりである。

去年かちたるものは今年負、今年かちたるものは来年まけるゆへに、稽山の麓にて、年々うち替々本意を遂るゆへに、先のはちをいまきよむ。仍、「くはいけの恥をきよむ」とはいへり。

去七日は山門たちまちに恥にあひ、今九日は清水寺又はちを見る。これ則、会台鬼風に可違哉。

(長門本『平家物語』巻第一「清水寺炎上事」)

長門本『平家物語』では、双方が交互に戦に勝って恥を雪めるという展開を、「去年」「今年」と「去七日」「今九日」、「会台將軍」「稽貞鬼風」と「山門」「清水寺」と、さらに明確な対応関係で示している。一方が勝ち、つぎには他方が勝つという捉え方や、叙述の類似性が高いことから、巻第二の記事はその末尾においてもまた長門本『平家物語』と密接に関連していると考えられる。すなわち巻第二の記事は、同じ位置に会稽山の故事説話を挙げる長門本『平家物語』の叙述に通じながら、巻第十七にある同じ故事説話にも一致する内容となっている。

第二章 「橋合戦」から「季札劔」への展開

一、はじめに

前章において、古典の教材として国語教科書に掲載されることの多い『平家物語』の異本の一つである『源平盛衰記』が有する故事説話を用いた古文・漢文複合教材の可能性を考察した(1)。高等学校学習指導要領(平成30年告示)の第2章第1節国語において、第2款各科目の第2言語文化の2内容(2)アには、「我が国の言語文化の特質や我が国の文化と外国の文化との関係について理解すること。」とあり、また、学習者自身が国語の授業において古文とともに漢文を学習する意義の理解を深めることに役立つものとして、古文・漢文複合教材の可能性が考えられる。本章においても、他の諸本にはない多くの故事説話を有する『源平盛衰記』の特長を古文・漢文複合教材として用いることによって、古文の授業から漢文の授業へとつなげてゆく国語の授業の展開について考察する。

前章では、国語教科書に掲載されていない章段である「大場早馬」を取り上げ、『源平盛衰記』巻第十七「大場早馬」から「勾踐夫差」へ、「勾踐夫差」から巻第二「會稽山」へ、そして国語教科書に漢文の教材として掲載されている「臥薪嘗胆」へ、さらに、『源平盛衰記』巻第十七「大場早馬」から「始皇燕丹」へ、そして国語教科書に漢文の教材として掲載されている「荊軻伝」へと、古文の授業と漢文の授業を連動させて大きく展開する方法を考察したが、本章では、国語教科書に古文の教材として掲載されることのある『平家物語』『橋合戦』から『源平盛衰記』に見られる中国故事説話を用いて漢文の授業へとつなげてゆく。

二、橋合戦

国語教科書のなかには、古文の教材として「橋合戦」が取り上げられているものがある。たとえば、『新編古典』東京書籍、平成十九年二月二十日検定済(古典026)では、「橋合戦」として、前書きに「平氏の横暴を怒った源三位入道頼政は、高倉宮以仁王を奉じ、平氏追討の令旨を得て、諸国の源氏に挙兵を促した。治承四年(一一八〇)四月のことである。しかし、この計画はわずか一か月後に平氏に探知され、頼政らは園城寺に難を避けた。ここで六波羅夜襲を協議したが、機を失い、南都(奈良)へ逃れようとして宇治にたどり着いた。」とあり、以下の本文が掲載されている。

宮は宇治と寺との間にて、六度まで御落馬ありけり。これはさんぬる夜、御寝のならざりしゆゑなりとて、宇治橋三間引きはづし、平等院に入れ奉て、しばらく御休息ありけり。六波羅には、

「すはや、宮こそ南都へ落ちさせ給ふなれ。追つかけて討ち奉れ。」

とて、大將軍には左兵衛督知盛、頭中将重衡、左馬頭行盛、薩摩守忠度、侍大將には上総守忠清、その子上総太郎判官忠綱、飛騨守景家、その子飛騨太郎判官景高、高橋判官長綱、河内判官秀国、武蔵三郎左衛門有国、越中次郎兵衛尉盛繼、上総五郎兵衛忠光、悪七兵衛景清

を先として、都合その勢二万八千余騎、木幡山うち越えて、宇治橋のつめにぞ押し寄せたる。かたき平等院にと見てんげれば、ときをつくること三箇度、宮の御方にもときの声をぞ合せたる。先陣が、

「橋を引いたぞ、あやまちすな。橋を引いたぞ、あやまちすな。」

と、どよみけれども、後陣はこれを聞きつけず、われさきにと進むほどに、先陣二百余騎押し落とされ、水におぼれて流れけり。

橋の両方のつめにうつ立つて矢合はせず。宮の御方には大矢の俊長、五智院の但馬、渡辺の省、授、統源太が射ける矢ぞ、鎧もかけず、楯もたまらず通りける。源三位入道は長絹の鎧直垂に、科革緘の鎧なり。その日を最後までや思はれけん、わざと甲は着給はず。嫡子伊豆守仲綱は赤地の錦の直垂に、黒糸緘の鎧なり。弓を強う引かんとて、これも甲は着ざりけり。ここに五智院の但馬、大長刀の鞘をはづいて、ただ一人橋の上にぞ進んだる。平家の方にはこれを見て、

「あれ射とれや、者ども。」

とて、究竟の弓の上手どもが矢先をそろへて、差しつめ引きつめさんさんに射る。但馬すこしもさわがず、上がる矢をばついくぐり、下がる矢をばをどり越え、向かつてくるをば長刀で切つて落とす。かたきもみかたも見物す。それよりしてこそ、矢切りの但馬とはいはれられ。

堂衆のなかに、筒井の浄妙明秀は、褐の直垂に黒皮緘の鎧着て、五枚甲の緒をしめ、黒漆の太刀をはき、二十四差いたる黒ぼろの矢負ひ、塗籠籐の弓に、このむ白柄の大長刀とりそへて、橋の上にご進んだる。大音声をあげて名のりけるは、

「日ごろは音にも聞きつらん、今は目にも見給へ。三井寺にはその隠れなし。堂衆のなかに筒井の浄妙明秀といふ一人当千の兵ぞや。われと思はん人々は寄り合へや。見参せん。」

とて、二十四差いたる矢を、差しつめ引きつめさんさんに射る。やにはに十二人射殺して、十一人に手負ほせられたれば、箆の一つぞ残つたる。弓をばからと投げ捨て、箆も解いて捨ててんげり。貫脱いではだしになり、橋のゆきげたを、さらさらさらと走り渡る。人は恐れて渡らねども、浄妙房が心地には、一条、二条の大路とこそふるまうたれ。長刀で向かふかたき五人なぎふせ、六人にあたるかたきに合うて、長刀中よりうち折つて捨ててんげり。その後太刀を抜いて戦ふに、かたきは大勢なり、くもで、かくなわ、十文字、とんぼうがへり、水車、八方すかさず切つたりけり。やにはに八人切りふせ、九人にあたるかたきが甲の鉢に、あまりに強う打ちあてて、目貫のもとよりちやうど折れ、くつと抜けて、川へさんぶと入りにけり。頼むところは腰刀、ひとへに死なんとぞ狂ひける。

ここに乗田房の阿闍梨慶秀が召し使ひける、一来法師といふ大力の早業ありけり。つづいてうしろに戦ふが、ゆきげたは狭し、そば通るべきやうはなし。浄妙房が甲の手先に手をおいて、

「悪しう候ふ、浄妙房。」

とて、肩をづんどをどり越えてぞ戦ひける。一来法師討死してんげり。浄妙房這ふ這ふ帰つて、平等院の門の前なる芝の上に物具脱ぎ捨て、鎧に立つたる矢目を数へたりければ六十三、

裏かく矢五所、されども大事の手ならねば、ところどころに灸治して、頭からげ、淨衣着て、弓うち切り杖につき、平足駄はき、阿弥陀仏申して、奈良の方へぞまかりける。

淨妙房が渡るを手本にして、三井寺の大衆、渡辺党、走りつづき走りつづき、われもわれもとゆきげたをこそ渡りけれ。あるいはぶんどりして帰る者もあり、あるいは痛手負うて腹かき切り、川へ飛び入る者もあり。橋の上のいくさ、火出づるほどぞ戦ひける。 (巻四)

「橋合戦」には、諸国の源氏の挙兵につながる平氏追討の令旨を出した高倉宮以仁王や、以仁王を奉じて平氏追討に立ち上がった源頼政、また、軍記物語の特徴の一つである装束描写や、祇園祭の山鉦の一つである淨妙山のものとなった明秀と一来法師の振舞などが見られるほか、文中には擬音語や擬態語、音便などが多用されており、多角的な展開をすることができる教材である。国語教科書に使用されることが多いのは寛一本『平家物語』である一方、『源平盛衰記』にも「橋合戦」に該当する場面があり、その章段(2)を使用することもできるが、授業の実践を考慮した場合、まず、教科書に掲載されている「橋合戦」を扱い、その発展として、『源平盛衰記』巻第十五「宮中流矢」を取り上げ、「季札劍」へと展開する方法が有用であろう。

三、宮中流矢

国語教科書に掲載されている場面の後、平氏方は川を渡り、源氏方の人々は敗れ、命を落とすてゆく。「橋合戦」の冒頭は、「宮は宇治と寺との間にて、六度まで御落馬ありけり」とされており、これは但馬や明秀、一来法師の戦いぶりと対照的なか弱い以仁王の姿を描き出すとともに、戦に先立って、源氏方が奉じる以仁王が三井寺から宇治までの約十二キロメートルの道のりにおいて六度も落馬するという出来事によって、この戦の結末を示唆するものと言えよう。『源平盛衰記』巻第十五「宮中流矢」は、その以仁王の最期の場面から始まる。

宮ハ平等院ヲ落サセ給ツ、男山八幡大菩薩ヲ伏拝御座シテ、新野ノ池モ過サセ給テ、井出ノ渡ト云所マデ延サセ給ヒケリ。御寝モナラズ喉モ乾セマシノテ水進度思召ケレバ、小河ノ流タリケルヲ汲テ進ケリ。「此所ヲバイヅコト云ゾ、又此河ヲバ何ト云ゾ」ト御尋アリ。此邊ヲバ山城國井出ノ渡ト申、河ヲバ水ナシト申候」ト答申ケレバ、打領許セテ思召ツゞケケルハ、

山城ノ井出ノ渡ニ時雨シテ水ナシ川ニ浪ヤ立ラン

ト御口ズサミ有テ、光明山ヘカ、ラセ給ニ、軍兵後ヨリ追係進セケルガ、何者ガ射タリケル矢ヤラン、鳥居ノ前ニテ流矢來テ、宮ノ御カタ腹ニ立タリケレバ、即御馬ヨリ真逆ニ落サセ給フ。ヤガテ消入セ給テ、御目モ御覽シアケズ。園城寺法師ニ、讃岐阿闍梨覺尊ト云者、長絹ノ衣ニ違袖シテ、下ニ腹巻著テ御伴ニ候ケルガ、馬ヨリ飛デ下リ奉拘。御伴ノ人々ハ未追付進セズ、黒丸ト申舍人計ゾ候ヒケル。覺尊ト二人シテ相構ヘテ御馬ニ搔ノセ進セントスル處ニ、飛驒判官景高奉見之、鞭ヲ揚テ「アレノ」ト云ケレバ、郎等落合テ宮ノ御頸ヲバ取テゲリ。悲ト云モ疎也。寺法師律淨坊ノ日印ノ弟子ニ伊賀坊、乘圓坊ノ慶秀ガ弟子ニ刑部房、残り留テ命モ惜マズ戦ケリ。白刃ヲ拭ニ隙ナシ。爰ニシテ飛驒判官ガ郎等多打レニケリ。律

浄坊日印モ打死シテ失ニケリ。心ハ猛ク思ヘドモ、小勢ハ力及バズシテ、伊賀房、刑部房、奈良ノ方ヘ落ニケル。彼律浄坊ト申ハ、兵衛佐頼朝ノ流人ニテ伊豆ニ御座セシ時、忍テ諸寺諸山ノ僧徒ニ祈ヲ付給ヒケルニ、寺ニハ此律浄坊ヲ以テ師匠ニ憑給ヘリ。日印ハ幡宮ニ参籠スル事千日無言大般若ヲ読ケルニ七百日ニ當ル夜、御寶殿ヨリ金ノ鎧ヲ給ト示現ヲ蒙リタリケレバ、悦ヲナシ夜ヲ以日ニ繼伊豆國ヘ馳下、此由兵衛佐殿ニ語申。聞給テイカ様ニモ末憑モシキ事ニコソト夢合シ給テ、「世ニ候ハバ思知ベシ」ト宣タリケルガ、平家滅亡ノ後ニ兵衛佐殿三井寺ヘ尋給ケルニ、「治承ノ比高倉宮ノ御伴申テ光明山ノ鳥居ノ邊ニテ打死也」ト申タリケレバ、「不便ノ事ニコソ、且ハ祈ノ師也、又夢ノ勸賞モ宛給ハント思シニ、死ケル事ノ無慙サヨ。但其人ナケレバトテ兼テ存ゼシ事争力空カルベキ」トテ、伊賀國山田郷ヲ三井寺ヘ寄ラレテ律浄坊ガ孝養報恩無退轉トゾ聞ユル。 (『源平盛衰記』卷第十五「宮中流矢」)

覚一本『平家物語』にも以仁王の最期の場面が見られるが、『源平盛衰記』において「宮中流矢」の後に見られる「季札劔」を用いて古文の授業から漢文の授業へとつなげてゆくため、覚一本『平家物語』ではなく『源平盛衰記』を使用する。以仁王は落ち延びていたが、射られて落馬し、首をとられてしまう。「橋合戦」の冒頭に呼応した以仁王や頼政など源氏方の結末を取り上げるだけでも古典の教材として有用なものの一つとなり得るが、古文の授業から漢文の授業へとつなげてゆくために留意すべき点は、以仁王が首をとられた後に描かれている「律浄坊日印」に関する逸話である(3)。なお、日印(日胤)の名前は、「橋合戦」に先立って、但馬や明秀、一来とともに登場している(4)。

如意峯ヨリ、師法印乗智ガ弟子共ニ、義法禅永等、五十餘人、乗圓坊ノ慶秀ガ同宿等ニ、加賀刑部光乘一來ヲ始トシテ、六十餘人、律浄坊ノ日胤ガ同宿ニ、伊賀越前上総坊ヲ始メトシテ、五十餘人、其外兒共童部大津ノ在家駄具シテ、千餘人、手々ニ續松支度シテ向ケリ。六波羅ノ討手ニハ、伊豆守仲綱ヲ大將軍トシテ、侍ニハ渡邊黨満馬允、子息省ノ播磨次郎、其子授薩摩兵衛、列源太、與馬允、競瀧口、唱丁七清、濯等也。僧ニハ法輪院荒土佐、圓滿院太輔、平等院因播堅者、荒大夫松井肥後、角六郎坊、嶋阿闍梨北院ノ金光院六天狗ニ、太輔、式部、能登、加賀、佐渡、肥後等也。常喜院ニハ鬼土佐、筒井法師ニ、卿阿闍梨惡少納言、我耶筑前、南勝院ニ肥後房、日尾定雲四郎坊、後中院ニ但馬坊、大矢修定、此等ハ皆弓矢ヲ取テモ打物以テモ一人當千ノ兵也。堂衆ニハ筒井淨妙明秀、小藏ニハ尊月、尊永、慈慶、樂住、金拳、賢永等コソ伴ケレ。僧俗勢都合七百餘騎、皆長刀ヲ持タリケリ。

(『源平盛衰記』卷第十四「三井寺僉議」)

これは国語教科書に掲載されていない章段であるが、この箇所を取り上げることによって、学習者は日印(日胤)を「橋合戦」においてその戦いぶりが描かれた但馬や明秀、一来法師に近い人物として捉えることができよう。

さて、「飛騨判官景高」の郎等によって以仁王が首をとられた後、「寺法師律浄坊ノ日印ノ弟子ニ伊賀坊、乗圓坊ノ慶秀ガ弟子ニ刑部房、残り留テ命モ惜マズ戦ケリ。白刃ヲ拭ニ隙ナシ。爰ニ

シテ飛驒判官ガ郎等多打レニケリ。律浄坊日印モ打死シテ失ニケリ。心ハ猛ク思ヘドモ、小勢ハ力及バズシテ、伊賀房、刑部房、奈良ノ方ヘ落ニケル」として、以仁王の首をとった景高方の武士との戦いが描かれるが、日印は討死したとされる。その日印について、「彼律浄坊ト申ハ」とあり、源頼朝との逸話が續いている。頼朝が流人として伊豆にいたときに「忍テ諸寺諸山ノ僧徒ニ祈ヲ付給ヒケルニ、寺ニハ此律浄坊ヲ以テ師匠ニ憑給ヘリ」とされ、日印は八幡宮に参籠して無言大般若を読み七百日に当たる夜に示現を蒙り、伊豆に馳せ下つて頼朝に伝える。頼朝は「イカ様ニモ末憑モシキ事ニコソト夢合シ」て、日印に「世ニ候ハバ思知ベシ」と述べるが、平氏滅亡の後、「治承ノ比高倉宮ノ御伴申テ光明山ノ鳥居ノ邊ニテ打死也」と聞いて日印の死を知った頼朝は、「不便ノ事ニコソ、且ハ祈ノ師也、又夢ノ勸賞モ宛給ハント思シニ、死ケル事ノ無慙サヨ。但其人ナケレバト兼テ存ゼシ事争カ空カルベキ」として、三井寺に伊賀国山田郷を寄進したとされている。日印は「祈の師」であり、また、「夢の勸賞」として、日印亡き後であっても約束を違えなかつたとされるのである。そして『源平盛衰記』では、その先例として、「季札劍」の故事説話が續くのである。

四、季札劍

この故事説話は、他の諸本には見られないものである。『源平盛衰記』では、日印と頼朝の逸話の後、以下のように續いている。

昔異國ニ季札ト云シ兵アリ。呉王ノ使トシテ魯國ヘ行ケルニ、徐君ト云フ知人ノ有ケルニ一夜ノ宿ヲ借タリケリ。家主徐君、季札ガ帶タル劍ニ目ヲ係テ、口ニハ乞事ナカリケレ共、是モガナト思ヘル氣色見エタリケリ。季札心ニ思様、吾呉王ノ使トシテ他國ヘ行、ホシガル貌タテ如何セン、先与ン事難叶。魯國ヨリ帰ラン時ハ必与ント思テ去ニケリ。季札不久シテ吳國ヘ帰ケルニ、又徐君ガ家ニ行テ角ト云ケレバ、「世ヲ早シテ今ハナシ」ト答。季札泣悲テ、「墓ハイヅクゾ」ト問バ、家僕相具シテ行。塚ニ松ウヘタリ。「是徐君ノ墓」ト云ケレバ、心ニユルシタリシ劍ナリ。死タリトテ争カ其心ヲ違ヘント思テ、劍ヲ解、松ノ枝ニ懸テ、徐君ガ靈ヲ祭テ去、其タメシニゾ似タリケル。彼ハ劍ヲ解テ松ニ懸テ舊友ヲ祭、是ハ庄ヲ寄テ奉佛師匠ヲ吊フ。心ノ中ノ約束ヲ違ザルコソ哀ナレ。（『源平盛衰記』卷第十五「季札劍」）

季札が呉王の使として魯へ行く際、知人である徐君に一夜の宿を借りる。そのとき徐君は口には出さないが、季札の劍を欲しい様子であった。季札は魯から帰る際に劍を徐君に贈ろうと思ひ、旅立つ。そして呉に帰る際、季札は徐君のもとに立ち寄るが、「世ヲ早シテ今ハナシ」と知らされる。季札は徐君の墓に行き、「心ニユルシタリシ劍ナリ。死タリトテ争カ其心ヲ違ヘン」として、塚に植えられた松の枝に劍を掛けたとされている。日印と頼朝の逸話は「其タメシニゾ似タリケル」とされ、「彼ハ劍ヲ解テ松ニ懸テ舊友ヲ祭、是ハ庄ヲ寄テ奉佛師匠ヲ吊フ。心ノ中ノ約束ヲ違ザルコソ哀ナレ」と、徐君亡き後であっても劍を贈った季札と日印亡き後であっても庄を寄進した頼朝が比較して評されるのである。そしてこの故事説話は、国語教科書に漢文の教材として掲載されている「季札挂劍」と密接に関連するものである。たとえば、『精選古典B 漢文編』教育

出版、平成二十九年二月二十八日検定済（古B337）では、「季札挂剣」として、以下の本文が掲載されている。本文は、教科書では漢文訓読文であるが、本章では書き下し文にして表記する。

季札の初め使ひするや、北のかた徐君に過る。徐君季札の剣を好むも、口敢へて言はず。季札心に之を知るも、上国に使ひするが為に、未だ献ぜず。

還りて徐に至る。徐君已に死す。是に於いて、乃ち其の宝剑を解き、之を徐君の冢の樹に繋げて去る。従者曰はく、「徐君已に死す。尚ほ誰に予ふるか」と。季子曰はく、「然らず。始め吾が心已に之を許す。豈に死を以て吾が心に倍かんや」と述べたとされている。学習者は「豈に——んや（どうして——か、いや——ない）」という反語の句法の学習とともに、徐君亡き後であっても剣を贈ろうとする季札の思いを捉えることができる。また、本文引用に用いた『精選古典B 漢文編』教育出版、平成二十九年二月二十八日検定済（古B337）では、「道標」として、「季札は、なぜ死者に宝剑を贈ったのか。」「季札はどのような人物か。」という問いがあり、季札の行動の理由や人物像を考えることから『源平盛衰記』巻第十五「宮中流矢」に見られる日印と頼朝の逸話はどのように捉えられるかという問いへとつなげてゆくことができる。

五、おわりに

本章では、多くの故事説話を有する『源平盛衰記』の特長を古文・漢文複合教材として用いることよって、古文の授業から漢文の授業へとつなげてゆく国語の授業の展開について考察してきた。高等学校学習指導要領（平成30年告示）の第2章第1節国語において、第2款各科目の第2言語文化の2内容（2）アには、「我が国の言語文化の特質や我が国の文化と外国の文化との関係について理解すること。」とあり、さらに、学習者自身が国語の授業において古文とともに漢文を学習する意義の理解を深めることにも役立つものである。前章では、国語教科書に掲載されている章段である「大場早馬」を取り上げ、『源平盛衰記』に見られる中国故事説話を用いて大きく展開する方法を考察したが、本章では、国語教科書に古文の教材として掲載されることのある『平家物語』『橋合戦』を扱い、その発展として、『源平盛衰記』巻第十五「宮中流矢」を取り上げ、国語教科書に漢文の教材として掲載されている「季札挂剣」へとつなげてゆく方法であり、実践に際して、授業時間数などを考慮した場合にも、一つの学年、たとえば第二学年における古文の授業と漢文の授業を連動させた国語の授業を展開することが可能であろう。

本論第二部は本系の叙述（5）を対象として『源平盛衰記』の物語叙述の方法と物語としての特質を考察したが、第三部は所謂傍系の叙述を活用することよって『源平盛衰記』の教材としての可能性を考察したものである。さらに、本論第二部第二章では『源平盛衰記』における重複記事を分析したが、第三部第一章では『源平盛衰記』において重複して見られる故事説話を比較することよって学習者が一作品のなかで同じ故事説話がどのように取り入れられ、用いられて

いるかを考えることができる展開となっている。

『平家物語』諸本において、膨大な叙述によって四十八巻に及ぶ『源平盛衰記』は、和歌や漢籍、史料や文書、伝承、異説、故事説話といったさまざまな資料を取り込み、また、能をはじめとした芸能との関係（6）も指摘されるなど、相互に影響し合い、多彩な回路を持つものとなっている。その特長を用いることによって、古文の授業から多岐にわたって展開することができる教材として、『源平盛衰記』の可能性の一つがあると言えよう。

【注】

(1) 本論第三章第一章「大場早馬」から「勾踐夫差」への展開」。

(2) 『源平盛衰記』における「橋合戦」に該当する場面は以下のとおりである。

宇治ト寺トノ間、行程纔ニ三里計也。六箇度マデ御落馬アリ。御馬ニ合期セサセ給ハヌ故ニヤ、又此程打解御寝ナラヌ故ニヤ、是モ然ベキ御運ノ際トハ申ナガラ、加程ノ御大事ノ中ニ、睡落サセ給ケル御事云カヒナシ。加様二度々御落馬在ケレバ、暫ク休メ進セントテ宇治ノ平等院ニ入進テ御寝アリ。其間ニ宇治橋三間引テ、衆徒モ武士モ宮ヲゾ奉守護。平家ハ宮南都ヘ入セ給由聞テ、追討使ヲ被差遣ニ、左兵衛督知盛卿、藏人頭重衡朝臣、中宮亮通盛朝臣、薩摩守忠度朝臣、左馬頭行盛朝臣、淡路守清房朝臣、侍ニハ上総忠清、上総大夫判官忠綱、攝津判官盛澄、高橋判官長綱、河内判官季國、飛騨守景家、飛騨判官景高、都合ニ萬餘騎、宇治路ヨリ南都ヲ差テ追テ懸。平等院ニ敵アリト見ケレバ、平家ノ兵共雲霞ノ如クニ馳集テ、河ノ東ノ端ニ引ヘテ、時ヲ造ル事三箇度、夥シトモ不斜。宮ノ兵共モ時ノ音ヲ合テ、橋爪ニ打立テ禦矢射ケリ。其中ニ寺法師ニ大矢ノ秀定、渡邊清、究竟ノ手ダリ也ケルガ、矢面ニ進ンデ、差詰々々射ケルニゾ楯モ鎧モ不叶シテ多ノ者モ討レケル。平家ノ先陣モ始ハ橋ヲ隔テ射合ケルガ、後ニハ橋上ニ進上テ散々ニ射。其中ニ信濃國住人、吉田安藤馬允、笠原平五、常葉江三郎ヲ始トシテ、二百餘騎進出テ戦ケルニ、常葉江三郎内甲射サセテ引退ク。宮ノ兵ハ橋ノ西爪ニテ、差詰々々射ケレバ、面ヲ向ガタシ。平家ノ軍兵ハ、東ノ爪ニ轡ヲ並テ如雲霞。橋ハ狭シ人ハ多、我劣ラジノト上ガ上ニ籠入ケリ。未暁ノ事ナルニ、上川霧立テ、暗サハ闇シ、橋ヲサヘ引タリケレバ、先陣ニ進者、「橋ヲ引タルゾノ」ト、口々ニヨバハリケレ共、指モドゞメク中ナレバ、唯我先ニト馳コミケル程ニ、先陣二百餘騎ヲバ川ノ中ヘゾ推落ス。夜モホノノト明ケレバ、寺法師ハ筒井ノ淨妙明春ト云者アリ、自門他門ニ被免タル惡僧也、橋ノ手ニゾ向ケル。明春今日ハ事ヲ好テゾ装束シタル、シカマノ褐ノ胄直垂ニ、紺ノ頭巾ニ黒糸威ノ大荒目ノ胄ノ一枚交ナルヲ、草摺長ニユリ下シ、三枚甲ノ緒ヲ強クシメテ、黒ヌリノ太刀ノ三尺五寸アルニ、練ツバ入テ熊皮ノ尻鞆ヲサス。同毛色ノツラヌキヲゾ帶タリケル。黒塗ノ箆ニ、塗篋ニ黒ツ羽ヲ以テハギタル矢ヲ、廿四差タルヲ頭ダカニ負ナシツ、七モチリナルマユミノシメ塗ニヌリタルニ、塗ヅル懸テ真中ヲ取、烏黒ノ馬ノ七寸ニハヅミタル黒鞍置

テ、熊皮泥障指テゾ乗タリケル。同宿廿人、同毛色ニ真黒ニゾ出立タル。三尺五寸ノ長刀童ニ持セテ具足セリ。明春云ケルハ、「殿原暫軍止メ給ヘ。其故ハ、敵ノ楯ニ我箭ヲ射立テ、我楯ニ敵ノ箭ヲノミ射立ラレテ、勝負有ベキトモ不見。橋ノ上ノ軍ハ、明春命ヲ捨テゾ事行ベキ。續カント思人ハ連ヤ」ト云儘ニ、馬ヨリ飛下テツラヌキ拔捨、橋桁ノ上ニ舉リテ申ケルハ、「者ソノ者ニアラザレバ、音ニハヨモ聞給ハジ。園城寺ニハ隠レナシ。筒井淨妙明春トテ一人當千ノ兵ナリ。手ナミ見給ヘ」トテ、散々ニ射ケレバ、敵十二騎射殺シテ十一人ニ手負テ、一ハ残シテ箆ニアリ。箭種盡ケレバ、弓ヲバカシコニ投捨ヌ。彼ハイカニト見處ニ、箆モ解テ打ステ、童ニ持セタル長刀取、左ノ脇ニカイ挟ミテ、射向ノ袖ヲユリ合セ、シコロヲ傾、橋桁ノ上ヲ走渡ル。橋桁ハ僅ニ七八寸ノ廣サ也。川深シテ底見エザレバ、普通ノ者ハ渡ベキニアラザレ共、走渡リケル有様、淨妙ガ心ニハ、一條二條ノ大路トコソ振舞ケレ。廿人ノ堂衆等モ續ザリケル。其中ニ、十七ニナル一來法師計コソ少シモ劣ラズ連ケレ。明春元ヨリ好所也ケレバ、今日ヲ限ト四方四角振舞テ飛廻リケレバ、面ヲ向ル者ナカリケリ。電光ノ如ニヒラメケケリ。立ニ敵九騎討捕テ十人ト申ケルニ甲ノ鉢ニシタ、カニ打當テ長刀コラヘズシテ折ケレバ、河ヘカラト投入テ、太刀拔テ戰ケリ。太刀ニテ七騎討捕テ、六騎ニ手負テ休居タリ。平家ノ方ヨリ、「惡キ法師ノ振舞哉。サノミ一人ニ多者討レタルコソ安カラネ」トテ、シコロヲ傾ケテナガエヲ指出タル兵アリ。明春是ヲ見テ、「面白シ。東門五色ノ熟瓜ゾヤ」トテ、甲ノ鉢ヲ打破テ、喉笛マデ打サカント打タリケルニ、太刀モコラヘズシテ、目貫穴ノモトヨリ折ニケリ。太刀ハ折タレ共、甲モ頭モ打破レテ、真逆ニ川中ヘゾ落ニケル。憑處ハ腰刀計也。腰刀ヲ拔持テハネテ係リテ戰ケリ。死狂トゾ見エタリケル。見之、「淨妙討スナ者共」トテ、後中院但馬、金剛院六天狗、鬼土佐、佐渡、備中、備後、能登、加賀、小藏尊月、尊養、慈行、樂住、金拳、玄永等命ヲ不惜戰タリ。橋桁ハセバシ、ソバヨリ通ニモ非ズ。明春ニ並タリケル一來、「今ハ暫ク休給ヘ淨妙房、一來進テ合戰セン」ト云ケレバ、「尤然ベシ」トテ、行桁ノ上ニチト平ミタル處ヲ、「無礼ニ候」トテ、一來法師兔バネニゾ越タリケル。敵モ御方モ是ヲ見テ、「ハネタリノアツハネタリ、越タリノヨツ越タリ」ト、美ヌ者コソナカリケレ。此一來法師ハ、普通ノ人ヨリ長ヒキク、勢チイサシ。肝神ノ太キ事、萬人ニ勝レタリ。サレバコソ甲冑ヲヨロヒ、弓矢兵仗ヲ帶シナガラ、身ノ惜事ヲモ顧ミズ、アレ程狭キ行桁ヲ走渡、大ノ法師ヲカケズハネ越タリケメ。太刀ノカゲ天ニモ在地ニモアリ、雷ナドノヒラメクガ如シ。切落シ切伏ラル、者、其數ヲ不知、上下萬人目ヲ澄テゾ侍ケル。明春一來師弟子二人ニ討ル、モノ八十三人也。誠ニ一人當千ノ兵也。「アタラ者共討スナ、荒手ノ軍兵入替ヨヤノ」ト、源三位入道下知シケレバ、渡邊黨ニ省、連、至、覺、授、與、競、唱、列、配、早、清、進ナンドヲ始トシテ、各一文字聲々名乗テ、三十餘騎馬ヨリ飛下ノ、橋桁渡テ戰ケリ。明春ハ此等ヲ後陣ニ從ヘテ弥力付テ、忠清ガ三百餘騎ノ勢ニ向テ死生不知ニゾ戰ケル。三百餘騎ト見シカドモ、明春一來ガ手ニ懸リ、渡邊黨ニ討レテ、百騎計ニ成テ引退ク。平家ノ大將是ヲ見テ、「橋ノ手コソシラミテ見レ、返合ヨノ」ト下知シケレバ、我モノト橋ノ上ニゾ走重。橋ハ二間引

レタリ、後ヨリ御方ニ推レテ、心ナラズ七十餘騎川へ落テ流ケリ。三位入道見之テ、世ヲ宇治川ノ橋下サへ落入ヌレバ難堪況冥途ノ三途川コソ思ヤラルレトテ、

思ヤレクラキ暗路ノミツセ川瀬々ノ白浪拂アヘジヲ

筒井淨妙俄ニ彌陀願力ノ舟ニ心ヲ係テ、

宇治川ニ沉ムヲ見レバ彌陀佛誓ノ舟ゾイトゞ戀キ

明春心ハ猛ク思ヘドモ、手負ケレバ引退テ、平等院ノ門外、芝ノ上ニテ物具ヌギ置。胄甲ニ立所ノ矢六十三、大事ノ手ハ五所也。閑所ニ立寄テ、彼是灸治シ、頭ハカラゲ弓打切杖ニツキ、平足駄著テ、獨言シテ云ケルハ、「法師等ガ外ハ軍心ニ入タル者ハミエズ。イカニモ始終臺々シカラジ」トテ、阿彌陀佛申テ奈良ノ方ヘゾ落行ケル。

圓満院太輔慶秀、矢切但馬明禪ト云者アリ。是又武勇ノ道人ニユルサレタル兵也。慶秀ハ白帷ノ脇カキタルニ、黄大口著テ、萌黄ノ腹卷ニ袖付タリ。明禪ハ脇カキタリケル褐ノ帷ニ、白大口ニ、洗革ノ腹卷ニ、射向ノ袖ヲゾ付タリケル。各長刀脇ニ挾テ、シコロヲ傾テ又行桁ヲ渡ケルヲ、平家ノ軍兵矢龕ヲ作テ射ケレバ、射スクメラレテ渡エザリケルニ、長刀ヲ振上テ水車ヲ廻ケレバ、雨ノ降如クニ射ケレドモ、長刀ニタ、カレテ箭四方ニチル。春ノ野ニ蜻蛉ノ飛散ガ如クナリ。敵モ御方モ皆興ニ入テホメヌ者コソナカリケレ。中ニモ後中院ノ但馬房ヲ箭切ト申ケルハ、左ノ脇ニ長刀ヲ挾、右手ニハ三尺二寸ノ太刀抜持テ、敵ノ射箭ヲ切落ス。下ル矢ヲバ踊越エ、上矢ヲバツイクバリ、向矢ヲバ伐落ス。懸ケレバ、身ニ立矢コソナカリケレ。其間ニ敵人討捕テ引退。サテコソ矢切ノ但馬トモ申ケレ。『源平盛衰記』卷第十五「宇治合戦」

以仁王が六度落馬する様子や、祇園祭の山鉾の一つである浄妙山のもととなった明春（明秀）と一來法師の振舞などが見られるが、「矢切ノ但馬」の戦いが明春（明秀）と一來法師の振舞の後に描かれるなど、国語教科書に掲載されている「橋合戦」とは異なる箇所がある。

(3) 日印と頼朝の逸話は延慶本『平家物語』や長門本『平家物語』にも見られるが、それに続く「季札劔」の故事説話は『源平盛衰記』のみに見られるものである。

(4) 国語教科書に使用されることが多い覚一本『平家物語』においても、日印（日胤）の名前が但馬や明秀、一來法師とともに登場している。

搦手に向ふ老僧ども、大將軍には源三位入道頼政・乗田房阿闍梨慶秀・律成房阿闍梨日胤・帥法印禅智・禅智が弟子義宝・禅房をはじめとして、都合其勢一千人、手とにたい松もツて、如意が峰へぞ向ひける。大手の大將軍には嫡子伊豆守仲綱・次男源大夫判官兼綱・六条藏人仲家・其子藏人太郎仲光、大衆には、円満院の大輔源覚・成喜院の荒土佐・律成房伊賀公・法輪院の鬼佐渡、これらはちからのつよさ、うち物もツては、鬼にも神にもあはうどいふ一人当千のつはもの也。平等院には、因幡豎者荒大夫・角六郎房・島の阿闍梨・筒井法師に卿阿闍梨・悪少納言、北院には、金光院の六天狗、式部・大輔・能登・加賀・佐渡・備後等也。松井の肥後・証南院の筑後・賀屋の筑前・大矢の俊長・五智院の但馬・乗田房の阿闍梨慶秀が房人六十人の内、加賀光兼・刑部春秀、法師ばらには、一來法師にしかざりけり。堂衆には、筒井の浄妙明秀・小蔵尊

月・尊永・慈慶・樂住・かなこぶしの玄永、武士には、渡辺省播磨次郎・授薩摩兵衛・長七唱・競瀧口・与の右馬允・続源太・清・勦を先として、都合其勢一千五百余人、三井寺をこそうッたちけれ。 (寛一本『平家物語』巻第四「大衆揃」)

(5) 本論第一部『源平盛衰記』研究史」参照。

(6) 本論第二部第三章「巴の物語」参照。

おわりに

本論では、第一部において『源平盛衰記』がどのように論じられてきたかを概観し、第二部において『源平盛衰記』における物語叙述の方法と物語としての特質について論じ、第三部において『源平盛衰記』の教材としての可能性を考察してきた。

まず、第一部「『源平盛衰記』研究史」では、明治時代に文学となった『源平盛衰記』がそれ以降どのように論じられてきたかについて、戦前編と戦後編としてそれぞれ成立論と作品論に大別して捉えた。『源平盛衰記』は、『平家物語』とともに、近世史書においては史料として用いられていたが、明治二十三年、星野恒氏は『平家物語』を「正面ノ史料ニ充ツベキ者ニ非ズ」と指摘し、『源平盛衰記』を『平家物語』の「重修」として(1)、その史料的価値に疑問が呈された。同年、芳賀矢一氏は『源平盛衰記』は「一の史料たらんよりは寧ろ一の文學たるべき性質のもの」であると述べ(2)、史料ではなく文学としてその意義を見出そうとし、『源平盛衰記』は明治時代の半ば頃から文学として扱われることとなった。戦前における成立論については、広く『平家物語』諸本を研究し、そのなかで『源平盛衰記』を捉えた山田孝雄氏『平家物語考』(3)が大きな影響力を持つものであった。戦前における作品論については、文学となった『平家物語』はやがて叙事詩として評価を受けるが、『源平盛衰記』はそれに比べて文学的価値が低いものとされる傾向にある。昭和十四年には第二次世界大戦が開始され、戦時下においては武士道精神が強調されて、軍記物語はこれと結びつけて論じられ、『源平盛衰記』もまた、武士道の観点から評価されることとなる。一方で、諸本や諸記録の集大成で、知識的・術学的、あるいは注釈的・辞典的な性質があり、また、殺伐・卑俗な面があるといった今日的な『源平盛衰記』評がすでに見受けられた。

戦後には、『源平盛衰記』についてさまざまな角度から幅広い研究が進められる。『源平盛衰記』は、延慶本『平家物語』および長門本『平家物語』と併せて論じられることが多いが、本論では『源平盛衰記』を主とする論考を中心に取上げた。戦後における成立論については、『源平盛衰記』の成立時期や背景について、他作品との関係や、成立圏などから考察されるとともに、さまざまな資料を取り込んでいる『源平盛衰記』の典故に関する論考が多く見受けられた。戦後における作品論については、『平家物語』とは異なるありようの説明が進められ、『源平盛衰記』の「異常で(きたなき)世界、(物狂ひ)の世界」(4)や、「事象を“合理的に”解釈し、享受者の理解や感動もまた“正しく”行われる」よう制約する『源平盛衰記』の「饒舌さ」(5)、「人間理解のための教訓をなさんとする姿勢」(6)などが指摘される。

このように文学となった後も『源平盛衰記』の研究は深められてきたが、『源平盛衰記』は知識豊富ではあるものの繁雑・冗長であり、散漫で、ときに逸脱し、整合性や求心性を欠くといった評言が散見され、また、和歌や漢籍、史料や文書、故事説話といったさまざまな資料を取り込む『源平盛衰記』は、所謂傍系の叙述に注目してその成立や特徴が論じられることも多い。しかし、多くの資料を取り込みながら、『源平盛衰記』は本系の叙述をどのように描き出しているかということこそ最も考察されなければいけない課題ではないか。ここで言う本系の叙述とは、平家一門

の栄枯盛衰や源平の争乱およびそれに関連した出来事、すなわち『平家物語』諸本の多くに描かれている物語的現在の出来事である。敢えて言うならば、『源平盛衰記』は『平家物語』をどう描くのかということである。このような問題意識から、第二部『源平盛衰記』における物語叙述の方法¹⁾では、本系の叙述を対象として『源平盛衰記』の物語叙述の方法と物語としての特質を考察した。

第二部第一章「西光の機能」では、『源平盛衰記』において他本とは異なる位置づけとなっている清水寺炎上や殿下乗合さらには治承三年政変といった出来事について、西光に着目して読み解いた。『源平盛衰記』では、源行綱による鹿ヶ谷謀議の密告において西光の言動が強く押し出され、平清盛と西光の対決の場を導くものとなっている。その清盛と西光の対決において、「過分」であるのは清盛の方ではないかという西光の反問から、西光に対する批判は反転して清盛にも向けられるとともに、清水寺炎上や殿下乗合などの他本とは異なる位置づけにつながってゆく。さらに、後白河院に讒言する西光と後白河院に諫言する静憲は、いずれも清盛と対峙する人物として対照性が見出され、これまでの出来事が結びつく形で治承三年政変が描かれている。また、『源平盛衰記』では、『愚管抄』や『玉葉』など史実に近い描写が用いられているが、そこから殿下乗合や治承三年政変の他本とは異なる展開が生まれており、その点において、史料の取り込みもまた『源平盛衰記』の物語叙述の方法の一つと言える。

第二部第二章「重複記事の分析」では、『源平盛衰記』における行綱の密告、大場景親の早馬、一の谷の城戸口へ向かう平山季重の動向に見られる叙述の繰り返しに着目し、『源平盛衰記』の物語叙述の方法を考察した。これらの叙述の繰り返しは、一見、『源平盛衰記』の冗長さを示すものとも捉えられるが、そこに描き出される内容は単なる重複にとどまらず、独自の趣向が施されることによって物語世界を増幅させている。『源平盛衰記』は多くの資料を取り込んでいるが、それがいわば『源平盛衰記』外側からの増補であるのに対して、叙述の繰り返しは『源平盛衰記』内側からの増補と言える。

第二部第三章「巴の物語」では、「木曾最期」における巴の物語の分析を通して、『源平盛衰記』の物語としての特質の解明を試みた。『源平盛衰記』では、巴が木曾義仲の「乳母子」で「妾」とされている。巴は「木曾殿の乳母子」と名乗って見事な戦いをし、「乳母子」として義仲と「一所の死」を望む。だが巴に討たれた敵の首を見た義仲は、「女」として巴に離脱を命じ、乳母子である今井兼平と「一所の死」を望む。『源平盛衰記』の巴の物語は、覚一本『平家物語』を中心とした「木曾最期」を相対化するものとなっている。また、故事説話や異説が外部から物語を相対化するのに対して、「木曾殿の乳母子」と名乗る巴は物語を内部から相対化するものと言える。

第二部第四章「敦盛最期譚の可能性」では、敦盛最期譚の分析を通して、『源平盛衰記』の物語としての特質のさらなる解明を目指した。『平家物語』には「父子の物語」という一面があり、敦盛最期譚はいわばその変奏として、擬似的な「父子の物語」に数えられる。だが『源平盛衰記』では、「誰の子か」という問いと「存ズル肯」の解釈のズレから、父の位置から平敦盛を見る熊谷直実とその直実に武者として対峙する敦盛の隔たりが浮き彫りになる。さらに、『源平盛衰記』では、敦盛最期譚の直後に描かれる敦盛の兄・平経正の最期が敦盛最期譚そのものを相対化するものとなっている。直実とすれ違う敦盛は「父子の物語」を相対化し、経正の物語は敦盛の物語そのもの

のを相対化する。『源平盛衰記』は、ときに『平家物語』諸本の「物語」の枠組みをはみ出し、それを相対化する新たな「物語」を生み出している。そして義仲・兼平に対する巴、直実に対する敦盛を視点とする多元的な物語世界は、『平家物語』の世界に対して『源平盛衰記』がひらく新たな物語世界である。

第二部第五章「小宰相の入水」では、『源平盛衰記』における小宰相の入水の分析を通して、『源平盛衰記』の物語としての特徴のさらなる解明を目指した。『源平盛衰記』では、平通盛を慕い入水へと向かう小宰相を、乳母子の女房は同じ思いで引き戻そうとする。しかし、そのような乳母子の女房の言葉に小宰相は応じない。入水を引き留めようとする乳母子の女房に対して小宰相が言葉を返さないのは『源平盛衰記』のみである。人物間のやりとりにおける齟齬は、義仲と巴、直実と敦盛の間にも見られ、その不調和から新たな物語が生まれてゆく点に、『源平盛衰記』の物語としての特徴の一端が捉えられる。

第二部では、本系の叙述を対象として『源平盛衰記』の物語叙述の方法と物語としての特徴を考察したが、第三部『源平盛衰記』教材化論』では、所謂傍系の叙述を活用することによって『源平盛衰記』の教材としての可能性を考察した。さまざまな資料を取り込んで『源平盛衰記』は、他の諸本にはない多くの故事説話を有しており、それを用いることによって古文の授業から漢文の授業へとつなげてゆく。

第三部第一章「大場早馬」から「勾踐夫差」への展開』では、『源平盛衰記』における会稽山の話説話を用いて古文・漢文複合教材の可能性を考察した。『源平盛衰記』では、「大場早馬」の後に頼朝拳兵の成否の先例として会稽山の話説話「勾踐夫差」が見られる。また、『源平盛衰記』では、巻第二「額打論」とその報復としての「山僧焼清水寺」の他にも会稽山の話説話「會稽山」が見られ、それらを比較することによって、学習者は『源平盛衰記』という一作品のなかで同じ故事説話がどのように用いられているかを考えることができる。そしてこの会稽山の話説話は、国語教科書に漢文の教材として掲載されている「臥薪嘗胆」と密接な関連があり、古文の授業から漢文の授業へとつなげてゆくことができるものとなっている。古文の授業のなかで『源平盛衰記』巻第十七「大場早馬」から「勾踐夫差」、巻第二「額打論」「山僧焼清水寺」から「會稽山」を先に学習している場合には、その中国故事説話を漢文の授業のなかで捉えることができ、漢文の授業のなかで「臥薪嘗胆」を先に学習している場合には、その中国故事説話が『源平盛衰記』にどのように取り入れられ、用いられているかを古文の授業のなかで捉えることができる。さらに、「大場早馬」から国語教科書に漢文の教材として掲載されている「荊軻伝」へと展開することもできることを論じた。

第三部第二章「橋合戦」から「季札劔」への展開』では、国語教科書に古文の教材として掲載されることのある『平家物語』『橋合戦』から『源平盛衰記』に見られる中国故事説話「季札劔」を用いて漢文の授業へとつなげてゆく国語の授業の展開について考察した。国語教科書に使用されることが多いのは覚一本『平家物語』である。『源平盛衰記』にも「橋合戦」に該当する場面があるが、授業の実践を考慮した場合、まず、教科書に掲載されている「橋合戦」を扱い、その発展として、『源平盛衰記』巻第十五「宮中流矢」を取り上げ、「季札劔」へと展開する方法が有用であろう。国語教科書に掲載されている「橋合戦」の冒頭は、「宮は宇治と寺との間に、六度まで御

落馬ありけり」とされており、『源平盛衰記』巻第十五「宮中流矢」は、その以仁王の最期の場面から始まる。それに続く「季札劔」の故事説話は『源平盛衰記』のみに見られるものである。そしてこの故事説話は、国語教科書に漢文の教材として掲載されている「季札挂劔」と密接な関連があり、古文の授業から漢文の授業へとつなげてゆくことができるものとなっている。実践に際して、授業時間数などを考慮した場合にも、一つの学年における古文の授業と漢文の授業を連動させた国語の授業を展開することが可能であろう。

高等学校学習指導要領（平成30年告示）の第2章第1節国語において、第2款各科目の第2言語文化の2内容（2）アには、「我が国の言語文化の特質や我が国の文化と外国の文化との関係について理解すること。」とあり、また、古典の教材として国語教科書に掲載されることの多い『平家物語』の異本の一つである『源平盛衰記』という一作品のなかで中国故事説話を捉えることによって、国語の授業において古文とともに漢文を学習する意義について学習者の理解を深めることにも役立つであろう。『源平盛衰記』は、さまざまな資料を取り込み、また、能をはじめとした芸能との関係も指摘されるなど、相互に影響し合い、多彩な回路を持つものとなっている。その特長を用いることによって、古文の授業から多岐にわたって展開することができる教材として、『源平盛衰記』の可能性の一つがあると言える。

本論の中心となる第二部『源平盛衰記』における物語叙述の方法」では、すべての章において人物間のやりとりが鍵となっている。第二部は『源平盛衰記』において物語がどのように展開してゆくかを分析したものであるが、それは『源平盛衰記』が人物にどのように語らせ、どのように物語を動かしてゆくかということである。先述のとおり、第二部では本系の叙述を対象としたが、本論において取り上げることができたのはその一部であり、読み解くべき箇所はいまだ多く残されている。今後の課題としたい。

【注】

- (1) 星野恒 「平家物語源平盛衰記考」『史學會雜誌』第五号、一八九〇・四。
- (2) 芳賀矢一 「源平盛衰記と太平記と」『國文學』第二十七、一八九〇・一〇。
- (3) 山田孝雄 『平家物語考』、国語調査委員会編、一九一一・一二。
- (4) 山下宏明 「源平盛衰記と平家物語―平家物語研究史を展望しつつ―」『文學』第四十一巻第五号、一九七三・五。
- (5) 松尾葦江 「源平盛衰記の方法―その饒舌さをめぐって―」『東京女学館短期大学紀要』3、一九八一・二。
- (6) 榊原千鶴 『源平盛衰記』の一視点』『南山国文論集』第九号、一九八五・三。

初出一覧

第一部 『源平盛衰記』研究史

戦前編 『源平盛衰記』研究史概観「『古典遺産』第六十二号、二〇一三・一。

戦後編 書き下ろし。

第二部 『源平盛衰記』における物語叙述の方法

第一章 書き下ろし。

第二章 『源平盛衰記』の方法―繰り返し返しの技法について―

『早稲田大学院教育学研究科紀要別冊』第十九号―二、二〇一二・三。

第三章 『源平盛衰記』の巴の物語

『早稲田大学院教育学研究科紀要別冊』第二十六号―二、二〇一九・三。

第四章 『源平盛衰記』の敦盛最期譚の可能性「『日本文学』第六六卷第九号、二〇一七・九。

第五章 『源平盛衰記』の小宰相の入水

『早稲田大学高等学院研究年誌』第六十三号、二〇一九・三。

第三部 『源平盛衰記』教材化論

第一章 書き下ろし。

第二章 書き下ろし。